

子狐幻想記

d. c. 2隊長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは外の世界から人間が紛れ込んだり、一度死んだ人間が別の存在となって幻想郷に転生する……などという話ではない。

これは、とある一匹の子狐の妖怪が幻想郷に住む者たちと時に和やかに、時に慌ただしく日々を過ごす。

ただ……それだけのお話。

この小説は、主にwikiの情報を頼りに書いていくため、独自解釈、キャラ崩壊、原作崩壊、捏造設定などの要素が多分に含まれる可能性があります。

上記について苦手な方、不快に思う方は見ないほうがいいと思います。

感想、評価、批評をいただけると作者が喜びます。

目次

プロローグ

博麗 霊夢 起

博麗 霊夢 承

博麗 霊夢 転

博麗 霊夢 結

霧雨 魔理沙 起

霧雨 魔理沙 承

霧雨 魔理沙 転

霧雨 魔理沙 結

紅魔館 起

紅魔館 承

紅魔館 転

1

3

17

31

46

61

71

87

106

118

130

144

紅魔館 結

八雲 紫 起

八雲 紫 承

八雲 紫 転

八雲 紫 結

藤原 妹紅 起

藤原 妹紅 承

藤原 妹紅 転

藤原 妹紅 結

風見 幽香 起

風見 幽香 承

風見 幽香 転

風見 幽香 結

159

176

185

200

222

237

247

258

280

297

307

323

342

子狐青年記	356
保護者激闘記	374
子狐絶望記	388
子狐多恋記	411
射命丸 文 起	436
射命丸 文 承	448
射命丸 文 転	467
射命丸 文 結	491
子狐幻想記 起	509
子狐幻想記 承	521
子狐幻想記 転	533
子狐幻想記 結	557
閻魔奮闘記	574

子狐話集記	592
子狐放送記	617
子狐日常記	634

プロローグ

【幻想郷《げんそうきょう》】

それは、人と人外が暮らす場所。

その場所は現代で言うファンタジーが集まる場所でもある。

有り得ない存在の“妖怪”“妖精”“魔法”などが当たり前存在し、飛行機などに頼ることもなく空を飛び、妖怪に人が喰われ、人が妖怪を退治するなんてこともある。

かつては同じ世界に存在し、古き時代では“東の国にある人里離れた辺境の地”という認識だった幻想郷だが、現代では見ることはない。

【博麗大結界《はくれいだいけつかい》】

そう呼ばれる結界によって幻想郷は現代の世から隔離され、いつしか現代の人間達もその名を忘れた。

だが、隔離された後も幻想郷は外の世界とは異なる精神・魔法中心の独自の文明を築き上げていった。

その中で、いつからかある決闘方ができていた。

【スペルカードルール】

決闘そのものは安全とは言い切れないが、問題が後に尾を引かない恨みつこなしの問題解決方法。

決められたルールの下に行われる勝負によって人間と妖怪のバランスが良くなり、昔に比べれば妖怪が人間を喰う頻度は目に見えて低くなり、今では妖怪が人里に遊びに来たり、人間が妖怪の家にお呼ばれするようになった。

それでも、妖怪が人間を襲い、人間が妖怪を退治するといった関係が未だに残り続けているのは両種族の悲しいところだろう。

さて、長々と話してしまっただが、これは外の世界から人間が紛れ込んだり、一度死んだ人間が別の存在となって幻想郷に転生する……などという話ではない。

これは、とある一匹の子狐の妖怪が幻想郷に住む者たちと時に和やかに、時に慌ただしく日々を過ごす。

ただ……それだけのお話。

博麗 靈夢 起

【博麗《はくれい》 靈夢《れいむ》】

彼女は幻想郷と外の世界の境に位置する博麗神社の巫女である。『博麗の巫女』を務めている。

博麗の巫女は代々妖怪退治や『異変』の解決を生業としており、彼女自身もその高い実力を持ってそれらを行っている。

また、博麗の巫女は幻想郷にとつても重要な存在であり、どれくらい重要かというところ、こちらが妖怪退治をしようとも妖怪は巫女を襲うことはおろか、博麗神社の境内《けいだい》に來た人間に手出しすることも禁じられているほどである。

巫女なので当然ながら紅色を基調とした巫女装束を普段着にしている。

しかしこの巫女装束……肩と腋の部分が露出しており、袖は別途で腕に括りつけられ、下は袴ではなくスカートになっている。一般の巫女装束にしては、いささか意匠が現代っぽい。

彼女は『スペルカードルール』という決闘法にも関係しており、この決闘法を制定したのも彼女である。

そんな彼女の性格は、単純だが裏表がなく、喜怒哀楽が激しい。

誰に対しても平等に接し、同時に誰に対しても仲間と見ていない。

しかし孤独というわけではなく、彼女の周りには人、妖怪問わずに集まる。主に個性的な存在を引き付け、変なのに懐かれる。

どれくらい集まるかと言うと、宴会が開けるくらい集まる。しかもその種族は人間と妖怪にとどまらず、吸血鬼や鬼、天狗や亡霊、半人半霊や蓬莱人といったよくわからないものまで集まるほどである。

そして、彼女には特殊な能力があった。

【空を飛ぶ程度の能力】

この「程度の能力」というものは、幻想郷に住む一部の存在が持つ能力であり、霊夢の場合は如何なる重圧や力による脅し、強大な存在にも怯まない。

「空を飛ぶ」というよりも「あらゆるものから浮く」というのが正しいのかも知れない……つまり、マイペースなのだ。

時は紅霧異変解決後……今回のお話は、そんな彼女がとある一匹の子狐の妖怪と出会うお話。

ザツザツという音を立てながら箒で神社の前を掃除しているのは、私こと博麗 靈夢。

この掃除は私の日課……かなあ。普段は縁側でお茶でも啜って、たまに来る白黒魔法使いを適当に扱って、ご飯を食べて……至って普通の生活を送っている。

そんな私にも悩みがある。それが……。

「……今日もお賽銭はなし……つと」

賽銭箱を確認してみれば、そこには木の葉しかない。入っているときには入っているのだけど、普段は大体こんな感じ。

それに参杯客もない……巫女としては、この状況は全然喜ばしくはない。とは言っても、妖怪退治や異変解決をめんどくさいけどやってるおかげ日々の暮らしは問題ない。

「どうすれば増えるかしら……」

などと顎を箒の上に乗せながら1週間に1度くらい考えてはみるけれど、そんなに簡単に浮かぶはずもなく。

「……まいつか」

という感じでいつも思考を終える。生活にはそれほど困っているわけでもないし、ただ神社としてこの状況はどうなのか？ と思ったから考えるだけなのでそれほど真剣

ではないのだ。

さて、今日の朝ごはんはどうしようかしら。

「……………ん？」

ふと、近くに妖気を感じて辺りを見回す。

この神社に近づく妖怪なんて滅多にいない。これが強力な妖力を持つ妖怪なら話は別だけど、感じた妖気は小さなものだ。

不意に、ガサガサと目の前の草むらが揺れた。こんな朝早くから妖怪と会うなんて……退治してやろうかしら、なんてことを考えていると、草むらの向こうから小さな影が出てきた。

その正体は……。

「うっ」

私の胸辺りまでの小さな背に透き通るような青い瞳、サラサラとしたうなじが見える短髪の青い髪……それだけを見れば、人里の子供と映っただろう。

しかし、頭には青い毛並みの三角の獣の耳に、お尻からは同色の大きなふさふさとした尻尾が生えている。それらを踏まえた上での私の見解は……。

「……狐？」

「うー♪」

どうやら当たったらしく、狐の妖怪は嬉しそうに首を縦に振った。無邪気……そんな言葉が頭に浮かぶ。

感じた妖気の主はこの狐の妖怪で間違いないみたいだし……無害っぽいけど退治しておこうかしら。

「うー」

「何よ……？」

不意に、狐の妖怪が私に向かって手を伸ばした。

その手にあるのは……森で取れる山菜や果物、そして……お金。

「くれるの？」

「うー♪」

狐の妖怪はまた笑って頷いた。そして、私の手にはこの妖怪が持っていたものが手渡される。なぜ妖怪が……という考えは当然あるけれど、もらえるものはもらっておくでしょう。

丁度朝ごはんの献立を考えていたことだし、この山菜を使って天ぷらやおひたしなんかを作ってもいいかもしれない。そんなことを考えながら神社の中に戻ろうとして、足

を止めて振り返る。

「うっ？」

狐の妖怪と目が合い、妖怪が不思議そうに首をかしげる。見た目や言動も相俟って、その仕草はとて可愛らしい。

そんな妖怪に向かって、私はこう問いかけた。

「あんたも食べていく？」

「……………うーっ」

妖怪は、また嬉しそうに頷いた。

あの白黒魔法使い以外と朝ごはんを……それも妖怪と一緒に食べるなんていつ振りになるかしら。

隣を歩く狐の妖怪を見ながら、思わぬ収穫が入ったことに対して私は笑みを浮かべていた。

あれから数日が経つけど、あの妖怪は度々神社に訪れている。その都度何かを持っていたり、時には持っていなかったりするけれどほぼ毎日来るようになった。

そしてこの妖怪、言葉を喋らない……少なくとも、私は“あー”や“うー”、“ひー”しか聞いていない。なぜか私にはそれだけである程度伝わるのだけど……なぜか？
勘よ。

少し前に気まぐれで名前を聞いてみた。

『あんた、名前なんて言うの？』

『ひー』

『ふうん、“ひこ”っていのね』

『うー♪』

『よくわかったなお前!?!』

名前を聞いたときにいた白黒魔法使いがうるさかった。

何はともあれ、妖怪の名前はひこ……“氷の狐”と書いて“氷狐《ひこ》”というらしい。

その氷狐だが、山に住む妖怪かと思えばよく人里で姿を見かける。それも驚くことに、人間の手伝いをしていた。

何気なく観察してみれば、山で採ってきたのであろう果物や山菜をお店に持ってい

き、お店の人に頭を撫でられながらお金や果物を貰っている。

そのお金で甘味処《かんみどころ》で団子を頼み、美味しそうに頬張る……本当に美味しそうね。

しかし不思議なのは、店員の人氷狐の言葉を理解していることだった。よく、うーだけで団子を持ってこれたわね。

因みに、今は朝のかなり早い時間。感覚的には、もうすぐ氷狐が神社に来る時間帯になる。

「うー」

「はい、団子を包むのね。いくつ？」

「あーうー」

「まあ6つも？ そんなに食べきれる？」

「うー」

「なるほど、巫女様と食べるのね。ちよつと待っててね」

「うー♪」

いや、本当になんてわかるのよ!? しかもそんなにはつきりと！ 私よりも分かっているんじゃないかしら……ってなんでこんなにイラついているのかしら。

気がつけば氷狐の姿がなかった……きつと神社に向かったのだろう。お団子を持つ

てきてくれるみたいだし……お茶でも入れて待っていていようかな。

私は久々に口にする甘味を楽しみにしながら、少し速めの速度で神社へと戻った。もちろん飛んで。

その後、縁側でお団子を氷狐と一緒に美味しくいただいた。途中で魔理沙……白黒魔法使いがやってきて氷狐の分のお団子を食べてしまい、氷狐が泣き出してしまったので少し強めにお灸を据えておいた。

「な……なんかいつもより（弾幕の）威力高くなかったか？」

「気のせいじゃない？ あと、氷狐の盗るな。今みたいに泣くから」

「悪かったよ。それに氷狐が泣いたら霊夢が怖いしな。まるで鬼のような……」

「……」

「ちよつと霊夢さん？ その妙に数の多い弾幕は一体誰に向けて撃つつもりで……うぎゃああああ!!」

ぴちゅーん、つてね。

最近、私の日課が増えた。というのも、朝方に氷狐の観察をすることなのだけど。

思えば、私がこんなに一人……一匹？ に集中するのは珍しい。

向こうからやってくるならともかく、私は基本的に神社の中で一日を終えることが多い。にもかかわらず、最近の私は毎朝早起きして神社の掃除をし、氷狐の観察のために人里に飛んで空から観察、氷狐が神社に向かうのを見計らって神社に帰り、氷狐と共に朝ごはんを食べて……魔理沙にも変わったと言われ、割と本気で心配された。イラつときたので殴つといた。

まあ変わったのは朝の日課が増えたくらいで昼以降はいつもと変わりなく、お茶を飲んでポーつとしてることが多いし、妖怪退治も頼まれればするし異変が起きれば解決も……一応しようかな。

今日も今日とて人里にやってきた……といっても、今回は食材が底を尽きかけていたので買いに来ただけ。

何気なく人里の入口に目を向ければ、そこにはもう見慣れてしまった青い毛並みの狐耳を生やした妖怪の姿。

「うっ？ うー♪」

妖怪は私を見つけた途端に嬉しそうな顔をして私に抱きついてきた。私の何がそんなにいいのかしら？

とは考えても別に嫌なわけではないし、少し嬉しく思っている私がいるのも事実……私が抱きつかれるだけで少しでも嬉しいと思うなんてね。

さてと、そろそろ食材を買いに行かないと。そう思つて氷狐の方に手を置き、私から離れるように促す。すると、氷狐は直ぐに離れてくれる……ちゃんとした言葉を話さない割に、頭の方は悪いわけではないらしい。

私は目的のお店へと向かう……後ろから氷狐が付いてくる気配がするけど、別に気にする必要もないだろう。

「すみませーん」

「あら、巫女様いらつしやい……あら？　小狐ちゃんも一緒なのね」

「うー♪」

ああ、そう言えばここは氷狐が山で採つてきたものを売っていたお店だっけ。人里の人は妖怪を敬遠しがちなのが普通なんだけど、どうにも氷狐に対しては警戒心が薄れるみたい。それだけ慣れ親しんでいるということかしら。だとすれば、氷狐は一体いつからこの人里に現れているのかしら。

「……ま、どうでもいいわね」

「はい？」

「なんでもないわ。それとあれとこれを頂戴」

「まいどありがとうございます」

頼んだものを持つてきたカゴの仲に入れてもらい、お金を払う……つて。

「これ、頼んでないんだけど」

カゴの上には頼んでいないリンゴが一つ。もしかして、このリンゴ一つ分多くお金を取られているのだろうか？ だったら、ちよつと許せない。

「おまけですよ。小狐ちゃんにあげて下さい」

「うっ？」

店員さんの言葉を聞いた氷狐が顔を私の方へと向ける。その目は何か期待しているように見える……ていうか期待しているのね。まっすぐリンゴを見てるし。

ひとまず店員さんにお礼を言ってからお店から離れる。さて、買う物は買ったし、そろそろ神社に戻ろうかしら……そんなことを考えながら、少し小腹がすいたので貰ったリンゴを手にして食べようとする。

「……」

「……」

見られている。それも後ろからしつかりと私とリンゴを視界に入れているのが分かるほどに。

当然ながら見ているのは氷狐。後ろを振り返ってみれば、案の定私の持つリンゴを見ている……いつもなら、そんな視線なんて気にしないのだけど……。

「……………あー」

「…………ぐすつ」

試しに、氷狐の様子を見ながら口を開けてリンゴを近くに持つていく。すると氷狐の目には涙が溜まり始め……流石の私も、これはちくちくと来るものがある。

「…………ほら」

「…………うー♪」

仕方ない、とため息を吐きながらリンゴを手渡すと、今の今まで泣きそうだったのが嘘のように氷狐は笑った。

渡したからには食べる訳にもいかないし、神社に戻るまで我慢ね。

「うー」

「何よ、もうないわよ?」

まだ欲しいのか、と思って再び振り返つてみる。そこにあつたのは、リンゴを綺麗に半分にして片方を私に差し出している氷狐の姿。

……半分こ、ね。私には思いつかなかつたことを、この妖怪はあつさりで行つた。なんでこんな事も思いつかなかつたのか……そう思いながらしゃくり、と半分になつたりリンゴをかじる。

「…………美味しいわね」

「はぐはぐ♪」

視線を下に向ければ、氷狐が美味しそうにリンゴを食べている。

……本当に……。

「誰かと一つのを半分こするなんて……いつぶりかしら」
流れる雲を見上げながら、私はそんな事をつぶやいていた。

「ところで、どうやってリンゴを半分にしたの？　こんなに綺麗に」

「あー」

「なるほど、分からん」

博麗 靈夢 承

あの子狐の妖怪と出会った日から数カ月が経った。

季節は冬に入り、寒い日が続いている。

私は寒い中境内の掃除をし、寒い中たまに妖怪退治をし、寒い中やってくる魔理沙の相手をする日々を過ごしている。

え？ 妖怪はどこにいったのか？ まず、私は毎朝人里へ向かう。前にも言ったと思うけど、その妖怪を観察するためにね。

今日も今日とて掃除を終えてから人里へと飛び、目的の妖怪を探す。

しかし、今日はなかなかみつからない。いつもならすぐに見つかるのだけど。

「おかしいわね……どこにいるのかしら」

普段見ているものが見つからないというのは、思ったよりもイライラする。

でもま、見つからないものは仕方ないし……今日は戻るうかしら。

「あー！ うー！」

「悪かったって。そんなに怒らないでくれよ」

「やー！」

「や、てなあ……ハア……」

帰ろうとした矢先に甘味処から聞こえてきた二人分の聞き覚えのある声。

そこに下りてみると、予想通りの人間と妖怪の姿があった。

一人と一匹は私に気づくとすぐに近寄ってきた。

「霊夢ちようどいいところに！　なあ助けてくれよ」

「うー。あーうーあー」

「同時にしゃべるな。何があつたのよ……ていうか氷狐に何したのよ魔理沙。素直に吐け」

「あれ？　私が悪者だと断定されてる？」

まあ、氷狐が何かするとは思えないし、怒ってるのは氷狐だしね。

どうでもいいけど、氷狐が「あーうーひー」以外しゃべったの初めて聞いたわね。

で、話を聞くと案の定悪いのは魔理沙だった。

いつもより早くお店に山で採ってきたものを売ってお金をもらった氷狐は甘味処でお団子を食べていた。

そこに偶然通りかかった魔理沙が一つだけ氷狐のお団子を無許可で食べてしまったのだとか。ていうかまた氷狐の盗ったのか。

「あんたが悪い」

「だって団子だぜ？ 私だって女の子だし、甘味はほしいぜ」

「だからって人のを盗るな」

「妖怪のだから大丈夫！」

「あー!! うー!!」

「痛い痛い！ 悪かった！ 悪かったって！」

いい顔で親指を立てた魔理沙に怒った氷狐が文字通り牙をむいた。狐だし、そりゃ牙ぐらいあるわよね。

この白黒魔法使い、とにかく手癖が悪い。なので、借りた本は返さないし氷狐の食べ物は盗る。そのたびにこんな感じで氷狐を怒らせ、時に泣かせる。

で、私か氷狐がお置きするのがいつもの流れだ。

しかし不思議なことに氷狐と魔理沙の仲は悪くはない。むしろいいくらいだろう。

というか、氷狐は誰とでも仲がいい。少なくとも、この人里ではこいつを嫌っている存在はいないと思う。

だからこそ、氷狐はこの人里で物売ってお金を得たり、甘味を食べたり、店員さんと思いの疎通ができるんだと思う。

「で、なんで氷狐のお団子盗ったのよ」

「実は財布を家に忘れて……」

「はあ……ドジねえ」

「それで氷狐があまりにも美味しそうに頬張ってたからつい……」

「ああ……わかる気がするわ。でも盗るな」

その後、魔理沙に財布を取りに行かせ、氷狐にお団子をおごらせた。ついでに私もおごってもらった。

「なんで霊夢の分までおごらなきやいけないんだよ!？」

「うー」

「氷狐が私の分も頼んだから。ゴチでーす」

「納得いかねえ!」

突然だけど、ここで「スペルカードルール」について簡単に説明しておこうと思う。名前にもある「スペルカード」とは、名前と名前を体現する技を契約書形式で記した札のこと。

名前を宣言しながら使用することであらかじめ設定した技を使える……わざわざ名

前を宣言する必要はなくて、カードを使用するという意思が相手に伝わればいい。

戦う前にこのスペルカードの使用回数を決め、体力が尽きる、もしくはカードの技をすべて攻略されたら敗北となる。

技の美しさにも気をくばられており、精神的な勝負である場合もある。

さて、なぜ私が今この「スペルカードルール」のめんどくさいな説明をしたかと言うと……。

「とうわけ。わかった？」

「うー」

「よろしい」

今まさに氷狐に説明をしていたから。

氷狐はスペルカードを持っていなかった上に、このスペルカードルールを知らなかった。

その事実を知ったきっかけは、*“紅魔館”* という場所に向かう途中の湖を通りかかった時。

なんたらというバカの妖精が氷狐に向かって弾幕を飛ばしているのに対し、氷狐は逃げるだけだった。

なぜ反撃しないのか……そう思っていた時に聞こえてきた会話が。

『なんで反撃しないのよ!』 あ、わかった! あたいがあんまりにも強いからできないのね? あたいつたらサイキョーね!』

『うー!』

『え? いきなりなにするんだって?』 // 弾幕ごっこ “よ。知らないの?”

『あー』

『あー……悪かったわね』

意外にも謝ったバカにも驚いたけど、スペルカードルールを知らない氷狐に驚いた。とりあえず氷狐を攻撃していたバカをびちゆらせ、その翌日の今日にこうやって説明しているわけ。因みに、// 弾幕ごっこ “はスペルカードルールの別名ね。

……まあ、なんであの湖にいたのかとか、あのバカが氷狐の言葉を理解しているのかとか気になることはあるけど。

そんなことはどうでもいいので、今は氷狐のスペルカードを作るのが優先ね。

あれからさらに数カ月ほど経った。

氷狐のスペルカードも完成し、最近はよくあの湖でバカとほかの妖精、たまに魔理沙

と弾幕ごっこをしているみたい。

それでも毎日欠かさず人里でものを売り、神社へとやってくる……私よりも働き者じゃない？

……まいつか。と思考を終え、今日も私は人里へと飛ぶ。全く、あいつと出会ってからよく動くようになってしまった。

ま、悪い気分じゃない。と少し笑みを浮かべたことを自覚しながら里の中に降り立ち、いつも通り氷狐の影を探す。

最近では観察じゃなくて接触になっているけれど、氷狐と一緒に歩くのは楽しいのでよしとする。

周りをキョロキョロと探してみるけど、氷狐の姿はない。こんな時はあいつがいつも向かうお店に行くとお出会う可能性が高い。

というわけでいつものお店へと向かい、着いたので店員さんに声をかける。

「すみませーん」

「はいーい！ あら、巫女様じゃないですか。今日は子狐ちゃんと一緒にじゃないんですか？」

「ええ。まだ来てないの？」

「今日はまだ見てないですね」

珍しいこともあるものね……そう思いながら店員さんにお礼を言い、甘味処へと足を向ける。

そこで同じ質問をしてみたけど、店員さんは首を横に振った。

仕方ない……と空に上がり、人里の中をよく探してみる。が、氷狐の姿はない。

もしかしたら、もう神社にいるのだろうかと思ひ、神社に戻ってみる。

しかし予想通りというか、氷狐はいなかった。その日は、氷狐に会うことは一度もなかった。

次の日も、その次の日も、人里にも神社にも氷狐が姿を現すことはなかった。

さすがに三日も見なければ心配になる。里の人も心配そうにしていたし……何よりも、私自身が心配していた。

全く、いつから私はこんなに心配性になってしまったのか……。

それ以外にも厄介なことがあった。

今年の冬は長い……そう思っていたけど、あまりにも長すぎる。

もう五月……にもかかわらず、幻想郷に春が訪れる気配はない。

つまり、これは「異変」。それもかなり迷惑な。

氷狐のことで頭がいっぱいだったので気づくのが遅れてしまった。そして気づいたなら、解決しないといけない。

「……そうだ、氷狐を探すついでに異変を解決すればいいじゃない」

炬燵に下半身をつっ込みながらぼむ、と握った右手を広げた左手に乗せ、名案だとつぶやく。

その時、閉めていた障子が開いて冷たい風が居間の中に入り込んだ。

「普通は異変解決が優先じゃないのか？」

「私は巫女だもの」

「意味がわかんないよ。ていうか巫女ならなおさら異変解決優先なんじゃ？」

「解決はするわ。めんどくさいけど」

「あ、そう……まあいいや。早く行こうぜ」

どこに、なんて聞かなくても分かる。どうせ原因なんて分かってないんだから、また何かを頼りに動くのでしょうかね。

私は自分で自分の勘の通りに動くだけだし。それに……。

（氷狐がその原因の場所にいる気がするのよね……勘だけど）

「あゝさむい」

「ほんとにな」

神社を文字通り飛び出し、魔理沙と並んで空を飛ぶ。

いつもなら既に春、曆的には夏の準備が入る頃。

全く、こんな異変を起こした奴にはお礼に夢想封印をお見舞いしてやろう。

「だいたいねえ、こんなに吹雪いてちゃあ氷狐が見つからないでしょうが!!」

「あ、やっぱり氷狐が優先なのか」

うがー、と怒鳴ってみるけど吹雪きは止まないし寒い。

本当に異変の犯人には感謝してもしたりないので見つけたら私の気が済むまでび

ちゆらせてあげよう。

「あら、こんなところに人間が」

「あら、こんなところに一人ぼっちの妖怪が」

「大きなお世話よ!!」

突然目の前に現れた妖怪。

妖怪は一人とか気にしない奴が多いけど、こいつは気にするらしい。

「まあいいわ。あんた、子狐の妖怪を見なかった？」

「子狐の妖怪？ 見てないわね」

「あつそ。じゃ」

「まてまてまてまて!!」

飛び去ろうとした私を止めたのは妖怪と魔理沙。正直、氷狐のことを知らない妖怪と話す時間なんて1秒たりともないんだけれど。

「なによ」

「もしかしたらこいつが異変のことを知ってるかもしれないぜ？ 知らないかもしれないけど」

「こいつとか異変とかどうでもいいからあんたが聞いて」

「えー私が？ こいつ寒いからイヤだ。あと、こいつはどうでもいいけど異変はどうでもよくないからな？」

「あんたらよく初対面でそこまで言えるわね!？」

なぜか妖怪が涙目だけど、どうでもいいので無視する。

……まあ名前くらいは聞いてあげてもいいけど。

「で、あんた誰よ」

「ぐすつ……レティ・ホワイトロック」

「ふうん。じゃ、さようなら」

「聞いたってそれだけ!? きゃああああああ!!」

名前だけ聞いて弾幕を飛ばして即撃墜、はいぴちゅーん。全く、無駄な二分だったわ。

「……お前、容赦ないな」

「なにそれおいしいの?」

あれから化け猫に会ったり、七色魔法莫迦と会ったり、演奏騒霊三姉妹と会ったりしたけれど……氷狐の情報は何一つ手に入らなかったので省略。

その代わり、異変の原因がどこにいるのかは分かった。

「冥界……ねえ」

冥界。死者が訪れる生のない世界。

私と魔理沙は今、その冥界とこの世の間にある結界の前にいる。

生者である私たちが入っていないような場所ではないことは分かっている……けれど。

(氷狐がここにいる)

もちろん、根拠なんてないただの勘。

いなかっただら、それでもいい……いや、よくはないけど。もしもいるなら……なぜ冥界なんて場所にいるのだろう。

「嫌な予感しかないわね……」

「なんだ？ 怖いのか？」

「さあね。魔理沙はどうなのよ」

「怖い」

「素直でよろしい」

「さあ、行きましようか。」

「この冥界に氷狐がいるのか……をね。」

「ところで魔理沙。その手の魔導書はどうしたのよ」

「さっきの人形だらけの家から借りてきた」

「ちゃんと返しなさいよ？」

「返すぜ？ 私が死んだらな」

「それは借りたじゃなくて盗ったっていうのよ」

博麗 霊夢 転

结界の上を通り越し、冥界に入った私たちを待っていたのは……長い長い階段。

その階段の上からひらひらと落ちてくる桜の花びらを見て、間違いなくこの場所に異変の原因がいる。もしくはある。

「ここに入った瞬間一気に暖かくなったな」

「そうね……早く氷狐を見つけて縁側でお昼寝でもしたいわ」

「……霊夢、本当に変わったよな。お前がそんなに同じ奴の名前を言うことなんてあつたっけ？」

「さあね」

魔理沙の言葉に適当に返し、歩いて階段を上るのも面倒なので飛んで頂上を目指す。

後ろから魔理沙が何か叫んでる気がするけど、聞く気もないので無視する。

長い階段を飛びきった私たちの目に映ったのは、石造りの道に綺麗に左右対称に置かれた灯籠、冥界らしく飛び回る人魂、美しく桃色に彩る花を咲かせている桜並木。

そして……。

「生きた人間がこの冥界に何の用ですか？」

「幽霊がずいぶんと物騒なモン持つてるのね」

「私は半分は幽霊じゃない!!」

「そつちを訂正するのかわ？」

腰に二本の刀を差した、周りにおまんじゅうみたいなのが浮いている女の子の幽霊……半分は違うらしいけど。

「まああんたのことはどうでもいいのよ。あんた、ここで狐の妖怪を見なかった？」

「どうでもって……狐の妖怪なら見たわ。幽々子様がずいぶんと気に入ってたみたいだけども」

「そう、ここに居るのね」

そうと分かればこんなところで半分は幽霊と喋っている場合じゃないわね。

そう思っただけが半分は幽霊の横を通り過ぎようとした時、私の目の前には抜かれた刀があった。

「悪いけど、ここは通せません。あなたたちからなければ、春を奪えば、きつと西行妖《さいぎょうあやかし》は満開になる……あなたたちの春、頂いていきます」

「その西行妖ってのが何かは知らないけど、春を渡すわけにはいかないわね。相手をしてあげるわ……魔理沙が」

「私!? まあ霊夢に言われなくても私が相手するつもりだったけどな!」

「なんびとたりとも通しません！ 妖怪が鍛えたこの楼観剣」

半分は幽霊が抜いた刀を握りしめ、わたしたちに切っ先を向けてくる。

そして目を瞑っ……。

「斬れぬものなどあんま……きゃあああああ?!?!」

た瞬間に私の方から弾幕を飛ばしてやった。

まあ目くらまし程度にしか飛ばしてないから無傷でしょ。多分。

「……決め台詞くらい言わせてやろうぜ」

「急いでるんだからそんなもの聞いている時間はないわ。じゃ、後よろしく」

お、おい！ なんて叫びが後ろから聞こえてきたけど無視。

私は氷狐を指して勘を頼りに先へと進むのだった。

「ぐすっ……どの作品でも最後まで言わせてくれたのにいっくうくん」

「あくほら、メタ発言しながら泣くなって……はあ……」

飛び続ける私の前に見えてきたのは、大きな屋敷。そして、きれいな天の川のような光。

光の先を見てみれば、そこには巨大な桜の木と思わしき大木……桃色の花を咲かせているあたり、桜で合ってるでしょ。

恐らく、あの光がさっきの半分は幽霊が言っていた春。あの桜に春が集まっているところを見る限り、春を集める理由はその桜を満開にするためね。

「どうでもいい……ってわけにもいかなさそうね」

あの桜からは嫌な感じがする。

あれは満開にしてはいけない。そう私の勘が囁く。なら、私はその勘に従うだけ。

屋敷を超えてあの桜へと飛ぶ……その時、私の視界に入った屋敷の縁側に見慣れた青が映った。

あわてて見つけた青を指し、私は屋敷の縁側へと降り立つ。そこで見たのは、三日も会えなかった妖怪が眠っている姿と、薄い青色の寝巻のような服を着て、妖怪を膝枕している女……否、亡霊。

「勝手に人の庭に入ってくるなんて……何のようかしら、博麗の巫女さん？」

「あなたに用事はないわ。集めた春と、その妖怪を返してくれればね」

「春はダメだけど、この子なら別にいいわよ？」

「そっちはいいのね」

「ええ、いいわよ。この子は突然私の前に現れてね？　かわいいし、気に入ってたんだ」

けど……」

「そう言って亡霊は氷狐の頭を優しく撫でる。撫でられている氷狐はピクリともしないけれど。」

「……ピクリとも……しない。呼吸による体のわずかな上下もない。まさか……と嫌な考えが頭に浮かぶけど、首を振って否定する。」

「だけど……亡霊の言葉は、無情にも私の考えを言い当ててしまった。」

「私の能力か、あの西行妖のせいかは知らないけれど……もう、死んじやったしね」

無意識に、私は亡霊に向かって弾幕を放っていた。

亡霊は氷狐を置いて避け、空を飛んだ。

「あの桜、西行妖で待ってるわ、博麗の巫女さん？」

そんな声が聞こえたけれど、私は氷狐のことで頭がいっぱいだった。

いきなり過ぎる死亡宣告……そんなもの、信じられるわけがない。

でも、私の勘が言っているのだ……あの言葉に嘘はないと。

「氷狐……」

猫のような体勢で眠っている氷狐を抱き上げる。

その体からは、名前の通りの氷のような冷たさしか感じられない。

「氷狐……」

うーあーの言葉だけで何が言いたいかを理解し始めたのはいつからだっただっけ。持つてきてくれた山菜や果物は、美味しくないものなんてなかったっけ。

そんな思い出が頭をよぎる……違う、そんなことを思い出すな。

これじゃ、まるで……。

「氷狐、起きなさい。あんたしばらくお店に顔だしてないんだから。それに、あんたの持つてきてくれるお団子、三日前から楽しみにしてるんだからね？」

頭を撫でながら話しかけても、返事はなくて。

「お賽銭もあんたが便利なんだからね？　最近はある以外に神社に来る奴なんて、魔理沙とかくらいしかいないんだし」

頬を引っ張つても、微動だにしなくて。

「あんたが隣にいないと、お茶を飲むときも寂しいんだから……」

なんで氷狐が冥界（こんな場所）において、どうして亡霊と一緒にいて、どうして私がこんなに悲しい思いをして。

どうして、どうして、どうして。

「どうして！　あんたがこんなところで死んでるのよ!!　意味が分からない!!　私は

こんな展開も！ こんな気持ちも!! 望んでなんかいないのに!!!」

強く、氷狐の亡骸を強く抱きしめる。どうしようもなく冷たくて、意味が分からなくて。

ただただ、私は泣きながら抱きしめながら啼いていた。

「ようやく来たのね。待ちくたびれたわ」

西行妖とかいう桜の前にいる亡霊は、私の姿を見て扇子を取り出しながらそう言った。

「この西行妖は、もう少しで満開になる。その時、この桜の下に封印されている何者かが復活するらしわ」

「あっそ」

「……それだけ？ もっとこう、な、なんだってー!? みたいな反応はないの」

「悪いけど、私にそんな反応を期待されても困るわ」

つまらないと言いたげな亡霊の表情を見ながら、私はため息を一つ吐く。

こっちは別にあんたを楽しませるために来たわけではないのよ。

「奪った春を返してもらおうわ。花見は神社って決めてるのよ」

「冥界の花見もなかなか乙なものよ？ 暗いけど、それもまた幻想的で。幻想郷だけに」

「上手くもないし、花見は明るいほうが好きなのよ。こんなところでしたって気が滅入るわ」

「ごんねんねえ、こんなにも夜桜はきれいなのに」

「夜でもない暗いだけの世界の桜を夜桜とは言わないわ」

「失礼ね、冥界にも夜月くらいあるわよ」

別段楽しいわけでもない無駄な会話。

時間稼ぎなのかはわからないけど、あまりぐずぐずしていると本当に桜が満開になってしまいかねない。

「冗談はここまで。幻想郷の春を返してもらおうわ」

「最初からそう言えばいいのに」

「言ったわ、10行前に」

「細か……まあいいわ。春は返さないけど」

亡霊が扇子を広げ、その背後からはおびただしい数の弾幕が現れる。

力は大妖怪と呼ばれる存在と同等かそれ以上……私には関係ないけど。

「西行寺 幽々子《さいぎようじ ゆゆこ》……冥界の管理をしている亡霊よ」

「博麗 霊夢……博麗の巫女をしてる人間。ああそうだ、あんたに聞きたいことがあつたんだつた」

「あら、なにかしら？」

亡霊は余裕の笑みというのを浮かべていると思う……私は俯いているから見えないけど、勘で分かる。

私は札を指に挟んで取り出し、亡霊の顔を見るために顔を上げた。その時、亡霊の顔が一瞬恐怖に染まった気がした。

「亡霊つてもう一度死んだら……どうなるのかしらね？」

「スペルカードブレイク……残り二枚ね」

おかしい。

博麗の巫女は今のところ、一度も私を攻撃していない。

そして、一度も私の弾幕は当たらない。というよりも、あの巫女に弾幕が当たる気がしない。

いまこの瞬間も私は弾幕を打ち続けているというのに、巫女は最小限の無駄のない動きで避けている。私に攻撃することなく……。

「……………」

ゾクリと、悪寒が背筋をよぎった。

さつき見た巫女の顔は、一切の感情を感じられなかった。紫からは、
「喜怒哀楽がはつきりしてる」と聞いていたのに。

実際、屋敷で会った時には感情は感じられた。では、なぜ？

「…………あの子狐…………ね」

3日前に突然現れた子狐の妖怪。

そして、つい先日にも眠るように死んだ……否、私が「殺した」あの子狐を見たときから、巫女の様子は変わった。

ここから予想できることは、あの子狐は巫女にとって特別な何かだったということ。だとすれば、あの感情が抜けたような顔は……それほどまでの怒りの表情だったのではないか？

「幽曲「リポジットリ・オブ・ヒロカワ —神霊—」っ！」

蝶の形をした、巫女を狙う大量の弾幕。

十秒、二十秒と時間が過ぎていき、あつという間に制限時間がきて弾幕の終了を告げ

た。

「あら、もう終わり?」

変わらず、巫女の体には外傷もなく、汗ひとつかいていない。それどころか、余裕の
声が返ってくる始末。

勝てない。そう思ってしまった。

だけど、私にも矜持というものがある!

「桜符「完全なる墨染の桜——開花——!!」

これは、時間が経つことに弾幕の数が増えていき、次第に避けることが困難になって
いくスペルカード。

余裕のあるうちに私を倒さないと、いくらあの巫女でも避けきけることはできない。

…そう、思っていた。

「スペルカードブレイク……五枚目ね」

嗚呼、これも避けられてしまったのか。一度も攻撃を受けず、ボムの一つすら使われ
ることもなく。

そして……かすり傷ひとつつけることもなく。

だけど、避け続けてくれたおかげで西行妖は満開に近い。

戦いには負けても、異変を起こした側として勝負には勝ったということだろう。

「さて、そろそろ桜が咲きそうだし……終わらせるわよ」

「えっ？」

今この瞬間で？

そう思っただけで呆ける私を余所に、巫女はいくつもの札を取り出し、私に向かって投げつけた。

そして……そのカードの名を告げた。

「氷狐と一緒に作ったカード……受けなさい」

狐霊符「夢想封印・絶」

私のカードに引けを取らない数のおびただしい弾幕がきれいな円を描く。

その円が二つ、三つと増え、私を囲んでいく。

やがて円は十に達し、もはや逃げることは叶わない。

「……私の……負けね」

その眩きを最後に、私はすべての弾幕を同時にその身に受けた。

あの妖怪桜が散ったことを確認した私は、氷狐を抱きかかえながら冥界から出ようとしていた。

その途中で、寝ている半分は幽霊とそいつに膝枕をしている魔理沙を見つけた。魔理沙も私を見つけたのか、勢いよく立ちあがって近寄ってくる……後ろで半分は幽霊が頭を抑えて痛がっているけど、いいのかしら？

「やったな霊夢！ 春が幻想郷に戻っていくぜ！ お、氷狐も見つかったんだな」
嬉しそうな表情を浮かべた魔理沙が氷狐の頭を撫でる。すると、不思議そうに首をか上げた。

「なんだ氷狐、寝てるのか？ こんなに体を冷やしたら風邪引くぜ？ あ、妖怪って風邪引くのかな」

「さあね。少なくとも、氷狐は風邪を引くことはないわ。……起きることも、しゃべることも……ね」

「霊夢……どういう意味だよ」

私は言葉を返さず、冥界に入るときに使った結界を目指す。

長い長い階段を降りるのは面倒だけど……今は、少しでも長く氷狐といたかった。

「霊夢！」

「冷たくて動かない体……これで察しなさいよ」

「わかんないよ！ 分かりたくない！」

泣いてるかのような魔理沙の声。

それにわずかな苛立ちを感じながら、私は長い長い階段を降りていった。

どうせ、数日後には異変解決のお祝いとかいつて妖怪たちが神社で宴会を開くんだ。

その宴会のために、私はお酒やら何やらを用意しないとイケない。

「……わかりたくない……かあ」

私も……わかりたくなかった。

どうしてこんなにも悲しいのかしらね。

誰に対してもそんなに関心がいかなかったせに。

大切なのはお賽銭と……口には出さないけど幻想郷くらいだったのに。

いつの間にか心に入ってきて、いつの間にか一緒に過ごすのが当たり前で、いない時は寂しいと感じるようになって。

「……なんでよ」

「腕の中《ここ》にいるのに、存在を感じ《ここにはい》ない。

こうして抱いていても、感じるのは寂しきばかりで。

「なんで死んじやったのよ。私と生きるのは嫌だつての?」

視界がぼやけて、足が止まった。

なのに、舞い散る桜の花弁はやけにはつきりと私の眼に映っていて。

「起きないと怒るから。あんたの大好きなお団子も私が食べてやるから」

子供のわがままみたいな言葉を震える声でつぶやく。

「だけど……それは、私の心からの願いで。」

「だから……おきてよお……ひこお……」

心の底から…… “生きてほしい” と想った。

博麗 霊夢 結

異変解決から数日が経った今日、博麗神社では異変解決のお祝いに妖怪や吸血鬼が集まって宴会を開いている。

異変解決のお祝い、なんて言ってるけど本当は何かと理由をつけて飲んで騒ぎたいだけなんですよ。ね。

最後には私だけで飲み散らかした酒瓶やら皿やら何やら全部を片付けることになるんだと思うと、今から憂鬱だわ……。

……いえ、憂鬱の理由はそれだけじゃないわね。

騒いでる妖怪たちに背を向けて、神社の中にある居間に向かう。

居間に着けば、そこには一枚の布団が敷いてあり、その上にあるのは……氷狐の遺体。

「……何をバカなことをしてるのかしらね」

眠っているようにしか見えない氷狐の頬を撫でる。

以前のお日様のような暖かな体温は、その面影を感じないほどに冷たい。

死体を大事に布団に寝かせているなんて、周りから見れば異常者か狂人に映るだろう。

でも……冥界から出る直前に勘が囁いたんだ。
絶対に氷狐は……。

「……私の勘も鈍ったのかしらね」

ありえない……そう考えて、思考を止めた。

楽しくない宴会も、参加してお酒を飲めば少しはこの心を晴らせる気がする。

何より、私がお用意したものを私が飲まなくてどうするのか。

「じゃあね、氷狐」

立ち上がり、眠っているような氷狐に声をかける。もちろん、それに返ってくる言葉はない。

こぼれそうになる涙を唇を噛み締めることでガマンし、私は居間を後にした。

「……本当に……」

あんたが生きていれば……きつと宴会も楽しかったに違いないのに。

心の底から……そう想った。

「今日は随分と元気がないのね」

「……なんか用？ レミリア」

桜の木にもたれかかりながら座ってお酒を飲んでいる私に声をかけてきたのはレミリア・スカー……。レミリアでいいわね。

今回の異変の前起きた紅霧異変の時の犯人の吸血鬼。見た目は私よりも年下に見えるけどその実500年を生きるb b a。偉そうにしてるけど精神年齢は見た目相応の子供精神。つまり合法（21）。

「……なぜかバカにされた気がするわ」

「よくわかったわね」

「普通否定しないかしら!？」

「普通じゃない相手に普通の対応なんてしないわ。それとも自分が普通だとしても？」

ボケたの？ ああ、ボケたんじゃなくてわからなかったのね、子供だし。ごめんなさいね、子供なんだからもつとわかりやすく言えばよかったですかしら？ まあこの幻想郷に普通な存在なんて数えるほどしかないわけだけど。そう考えると普通じゃない対応のほうが普通なのかしらね。というわけで……。安心しなさいレミリア、あんたのことをバカになんかしてないから。気のせいよ気のせい。これでいいかしら、吸血鬼さん？」

「う……。うう。さくやく！」

「ああ……。泣いてるお嬢様も可愛いですね……」

泣きながら走り去るレミリアを優しく抱き留めた後に危ない発言をしているメイド長を見て、私は思った。

ダメだあのメイド長、早く何とかしないと。

とは言え、私も言い過ぎた気がしないでもない……謝らないけど。

「……はあ」

つまらない。

周りの妖怪や魔理沙は楽しそうに騒いで、飲んで、笑っている。実際、宴会を楽しんでいるのでしょね。

だからといって、私が楽しくなるわけでもない。何よりも……あの亡霊が参加しているのが気に入らない。

「……そんなに睨まないでくれないかしら？ お酒が飲みづらくてしかたないわ」

「食べ物を取る手かとまらないのは流石ね」

「だっておいしいんだもの♪」

その笑顔が私を苛立たせる。私の視界に入ることすら、今は不快で仕方がない。

なんでこいつはいるのに、氷狐は……。

そう思うだけで、あの時の激情が湧き上がってくる。

「宴会の席で怒りは無粋よ」

「誰のせいだと思ってるの？」

「私。だからあなたに一つ、いい情報よ」

「いい情報……？」

なんだろうか。この亡霊がわざわざ私にそんなものを持ってくるなんて。ただ、私の勘が囁いている。

「あの子のことだけどね」

今すぐ立ち上がれと。

「死んだはずなんだけど、その魂は冥界にも、彼岸にもないのよ」
今すぐ走れと。

「まるで……」

―生きているかのように―

―氷狐が生きていると―

「氷狐!!」

乱れた息を整えることもなく、私は勢いよく居間の障子を開ける。

そこにあるのは……あつたものがない布団のみ。

「氷狐！……どこ!?」

誰かが動かしたのか。それとも……自分で動いたのか。神社の中を隈なく探す……だけど、氷狐の姿はなくて。

気が付いたら、私は境内の隅にいた。

「はあっ……はあっ……」

なぜここにいるのか、自分でもわからない。

だけど、この場所には覚えがあつた。

この場所は、私が氷狐と初めて会つた場所。

目の前の草むらがガサガサと音を鳴らして……妖気を感じたから出てきた瞬間に退治しようと思つたんだっけ。

ーガサガサ……ー

「そう、そんな風に……え？」

目の前の草むらがガサガサと揺れた。

そこから感じたのは、小さな妖気。

そこから現れたのは……。

「うっ？」

「あ……」

私の胸辺りまでの小さな背に透き通るような青い瞳、サラサラとしたうなじが見える短髪の青い髪。

「ああ……」

頭には青い毛並みの三角の獣の耳に、お尻からは同色の大きなふさふさとした尻尾が生えている。

私の視界がぼやけていく……それでも、見慣れた青はしっかりと私の目に焼き付いていて。

へたりこんだ私の顔を、心配そうに見上げる姿が愛おしくて。

「れーむ……っ？」

初めて私の名前を呼んでくれたことが嬉しくて。

私は、人に聞かれることも考えずに大声で泣いた。

「まさか、本当に生き返るなんてね」

「なによ、私の言葉が信じられなかったって言うの?」

「自分のうさくささを自覚してから言いなさい」

「酷いわ幽々子……」

大声で泣く巫女と不思議そうにしている子狐を影から見ながら、友人と言葉をかわす。

私が今回の異変を起こしたのは半分は私の意思だけど、もう半分はこの友人……八雲紫《やくも ゆかり》からの頼みだった。

西行妖を満開にして封印を解くこと……これが私の意思。もう半分は……あの子狐の妖怪を私の能力で仮死状態にすることだった。

もしもあの子が生き返らなかつたならば、私がちゃんと能力を使って生き返らせるつもりだった。

「……で、なんであの子を仮死状態にする必要があつたのか教えてくれない?」

「それはね、彼の能力を確かめるためよ。能力自体はある程度目処はついていたんだ

けど……今回のことで彼の能力がわかったわ。彼を危険な目に遭わせてしまったけど」
能力……あの子は、本当に突然私の目の前に現れた。

飛ばない限り、飛べてもなかなか入ることができないような冥界に突然。

だから私は、移動系の能力かと思っていたけど……それでは生き返ったことの説明ができない。

「で、その能力は？」

そう問いかけてみると、紫は取り出した扇子で口元を隠し、ふふっとうさんくさい笑い声をあげた。

「おしえてあげない♪ あ、待って！ ウソよウソ！ 冗談！ 冗談だから!!」

「ひどいわ幽々子……」

「紫が悪いのよ」

「あんたら、こんなところで何してるのよ」

「うー」

紫にお仕置きをしていると、いつのまにか巫女とあの子がいた。

まあ、あれだけ大きな音を立てたらそりゃあ気づかれるわよねえ。

「あら、もう大丈夫なの？ たくさん泣いたみたいだけど」

「な！ いつから見てた!？」

「最初から♪」

「うーあーうー」

楽しそうな紫を見て溜息を吐き、真っ赤になる巫女を見て苦笑し、意味もなく声を上げるあの子を見て笑みを浮かべる。

さて、そろそろ紫にこの子の能力を教えてもらおうかしら。

「それで紫、この子の能力はなんなのかしら？」

「え？ あんた氷狐の能力を知ってるの？」

「ええ。そうね、そろそろ教えてあげましょうか。彼の能力……それは」

—思考《オモイ》を現実《カタチ》にする程度の能力—

「思考《オモイ》を現実《カタチ》にする程度の能力……ねえ」

氷狐を抱きかかえながら、宴会が開かれている場所に向かいながらつぶやく。

あのうさんくさい妖怪と亡霊は先に向かったので、今この場にいるのは私と氷狐だけだ。

さて、この氷狐の能力はかなり強力な能力だと、あの妖怪は言っていた。

リングを真つ二つになったのは、私と「半分こしたい」という氷狐の気持ち《オモイ》が現実《カタチ》になったから。

氷狐が冥界にいたのは、「異変の元にいきたい」という氷狐の好奇心《オモイ》が「元凶の元に現れる」という現実《カタチ》になったから。

そして生き返ったのは、私の「生きてほしい」という想いが現実《カタチ》になったから。

オモイさえあれば、事実上どんなことでも出来る能力……他人のオモイさえカタチに出来る上、生死の事実さえ捻じ曲げるほどに強力な能力。

だけど、これにはいろいろと制約があるらしい。

まず、オモイが一切の混り気がない純粋な思考であること。思考できる存在はえていろいろなと考えてしまうものなので、余計なことや様々なことを同時に考えてしまつてはこの制約を満たせない。純粋な氷狐は、これを簡単に満たしてしまうようだけだ。

次に、他人のオモイをカタチにするには上の制約に加えて密着するほどに近付いてい
る必要がある。偶然にも、私はこれらを満たしていた。

最後に、この能力は「結果」にするだけで「過程」はカタチにできない。つまり、
リングゴを半分にする」というオモイでリングゴが真つ二つになつても、「どうやって」
真つ二つにしたかがわからない状態になる。

過程をすつ飛ばして結果を得る……それなんてキングクリ○ゾン？

弱点は、生物をどうにかすることはできないことくらい……これは、予想。

以上がうさんくさい妖怪から聞いた氷狐の能力の詳細……どうやってここまで調べ
たのかしら。

「あんたって、もしかして凄いやつ？」

「うー？」

「問いかけてみても、返ってくるのはうーあーのみ。

……まあどうでもいいけどね。能力があろうとなかろうと、私が氷狐をどうこうする
ことはない。

一緒に人里を歩いて、一緒にお団子を食べて、一緒にお昼寝して……そんなほのぼの
とした生活さえできれば、私はそれでいい。

「うー♪ あーうー♪」

不意に、氷狐が舞い散る桜の花びらを見て嬉しそうな声をあげた。パタパタと尻尾を振り、両手は花卉を取ろうと動いている……なにこのかわいい生き物。

落ちないように抱き直すと、温かな体温を両腕に感じた。

つい最近まで冷たかった体温が、今ではおひさまのように温かい。

生きている……改めてそう感じた。

「ほら、あんまり暴れると落ちるわよ」

「うー」

氷狐の動きがピタリと止まった。

本当に、言動の割にかしこい。

「そろそろつくわね……あんた、お酒飲める？」

「うー？」

不思議そうに首をかしげる氷狐……お酒を知らないらしい。

飲ませたらどんな反応をするのか楽しみだけど、無理に飲ませて二日酔いになったりしたら大変だ。

まずは、試しに甘酒でも……。

「れーむ」

「なに？」

「うー」

氷狐が私の手から飛び出し、隣に立って私を見上げる……飛び出した時にちよつとだけさみしく思ったのは秘密。

氷狐は左手で私の右手を握り……にっこりと嬉しそうに笑った。

じんわりと温かいものが心に沁みわたり、また目頭が熱くなってくる。

二度と感じられないと想っていた温もりが、確かにここにある。

それがこんなにも嬉しくて。

それがこんなにも愛しくて。

二度と手放したくないと……泣きながら私は心の底から想った。

これは、博麗の巫女が一匹の子狐の妖怪と出会うお話。

この出会いを期に、妖怪は幻想郷に住む様々な存在と時に和やかに、時に慌ただしく日々を過ごすことになるだろう。

しかしそれは……また別のお話。

「氷狐！ よかつた……生きてたんだな！」

「うー？ れーむ？」

「あーほら、離れなさい魔理沙。っーか離れろ」

「なんだよ霊夢、お前だけ氷狐と手を繋いで、しかも名前も呼んでもらうなんてズルイぜ!? なあ氷狐。私も名前で呼んでくれよ」

「まーさー！」

「誰が桃太郎侍の娘か」

霧雨 魔理沙 起

【霧雨 魔理沙《きりさめ まりさ》】

彼女は「魔法の森」と呼ばれる場所に住む、自称「普通の魔法使い」である。

「魔法を使う程度の能力」を有しており、その能力は名前の通りなので説明は省略させてもらおう。

種族は人間。人間の中では魔法を扱う能力が非常に高いらしい。が、それはあくまでも人間の中での話であり、その魔法の最大威力は物を破壊する程度しかなく、多様な魔法が使えるというわけではない。

蒐集癖と泥棒癖があり、物を捨てられず物を奪っていく悪癖を持つ。その癖のせいか、それとも人間性のせいかは分からないがどこへいっても迷惑がられ、上記の癖もあるので実際に迷惑な行為も多い。

魔法を使えるため、魔法を使う妖怪とは相性が良いらしいがその妖怪にはあまり好かれていないらしい。反面、変な者には好かれる。主にバカな妖精とか。

尚、幻想郷では魔法使いは「魔法使い」という種族の妖怪という認識のため、魔理沙が言う「普通の」というのは自身が人間であることを指していると思われる。

語尾に「くだぜ」「くか？」という男口調が着く特徴的な口調をしており、ウエーブのかかった、金髪のロングヘアが特徴である。

服装は黒いドレスのような服に白いエプロンを着けただけであり、黒色の先がかった帽子（魔法使いの帽子）をかぶっている。まさに魔法使い。

魔法使いらしく箒にまたがって空を飛ぶ。

主に魔法実験をしたりいろんなところに行ったりして日々を過ごしており、異変の際には霊夢よりも早く首を突っ込んでいる。が、今のところ霊夢よりも早く解決できた試しはない。

今回のお話は、この普通の魔法使いが子狐の妖怪、氷狐と面白おかしく日々を過ごしていく……ただそれだけのお話。

春雪異変から数日が経ち、幻想郷には遅い春が訪れていた。

私は薄暗い自宅の中で目を覚まし、ご飯を食べて着替える。ちなみに私は和食派だ。パンは今までに13枚しか食べたことがない。

着替えたら自宅を出て箒にまたがり、人里を目指して飛ぶ。

「うーん、今日も暖かくていい天気だぜ！」

ぼかぼかとした春の暖かさをその身に浴びて上機嫌になった私はスピードを上げる。向かうは人里、目標は……もう来ているであろう子狐の妖怪。

「今日もいるといいな」

私は向かう……甘味処を目指して。

……あ、財布忘れた。

「はぐはぐ」

私が甘味処に着いたとき、妖怪は既にそこにいた。

美味しそうに団子を頬張って頬を膨らませている姿は、見る者を癒すに違いない。

まあ、私の目的は……。

「もーらい」

「う？ あーうー!!」

この妖怪……氷狐が買った団子だ。

私はよく氷狐から団子を貰（盗）っている。食べてる氷狐があまりにも美味しそうに食べてるからついつい貰ってしまうのだ。

「ごじちゃんひつひつ」

「やー！ うー！」

「ちゃんと今度返すつて」

「食べた物をどうやって返すつもりかしら？」

口へと団子を運ぼうとした右手が止まる。

私が恐る恐る後ろを見てみると、そこにいたのは……腕を組んでいかにも怒ってますという態度をしている赤い悪魔の姿。

「ほ……宝石ならないぜ!？」

「だれがうつかり魔術師か。その手のお団子を早く氷狐に返しなさい。ていうか氷狐の取るなつて何回言えば分かるのかしら？」

今の赤い悪魔……じゃなくて霊夢はめちやくちやおつかないので素直に団子を返す。うう……財布さえ忘れなければなあ。

返した団子を美味しそうに頬張る氷狐……無性に団子が食べたくなる。しばらくして団子を食べ終えた氷狐は私と霊夢の顔を見た後……。

「うー」

「はいはい、どうしたの子狐ちゃん」

「あーうー、うー」

「はい、巫女様ともう一人分のお団子追加ね。ちよつと待っててね？」

「あー♪」

「だからなぜ分かる!？」

店の中から店員が出てきたかと思えば、氷狐の言葉を理解したように……多分実際に理解してるんだろう。注文を聞いて店の中に入っていった。

霊夢ですら何が言いたいのかを勘でわかる程度なのに、なぜ今の店員ははつきりと理解しているのか……謎だ。

それに、氷狐は私と霊夢の分の団子を頼んでくれたらしい。

「……魔理沙」

「なんだ？」

「私、すごく情けない気分なんだけど」

「奇遇だな、私もだけ。しかも私の場合、罪悪感もプラス」

決して大人とは言えない私たちだけど、やっぱり自分たちよりも年下に見える氷狐に奢ってもらう形になったのはこう……クルものがあるな。

……次は、私が氷狐に奢ってやろう。

「でも霊夢がお金をだしても賽銭を入れてるのは氷狐だから、結局は氷狐の金になるんじゃない……」

「失礼な、ちゃんと妖怪退治とかで稼いだお金を使うわよ」

「じゃあ氷狐の入れた賽銭は何に使ってるんだ？」

「……生活費」

「お前、氷狐に足を向けて眠れないな」

「向けないわ!! むしろ抱きしめて寝る」

駄目だコイツ早くなんとかしないと。

そんな会話をしていると団子が運ばれてきたので3人……2人と1匹? で長椅子に座って団子を食べる。

私と霊夢は氷狐を挟むようにして座り、氷狐はにこにこしながらまた団子を頬張っていた。

人間と妖怪が人里でこうして仲良く、笑いあって甘味を食べるなんてなかなかない。ただ氷狐と霊夢を見ていると、それが自然なことのように思えるんだよなあ。

そんなことを考えながら、私は氷狐の頭を撫でていた。

「う!?! う……………う!?!?」

「ちよ……………氷狐!?! 大丈夫か!?!」

「店員さん! お茶!! お茶持ってきてー!!」

「はいー!」

甘味処でちよつとした出来事が起きたが、まあそれはさておいて。

私たちはいつも通り、博麗神社の縁側で寝ころんでいた。

隣を見てみれば、同じように寝ころんでいる霊夢と霊夢に腕枕されて私の帽子を抱きしめて寝ている氷狐の姿がある。

「……なあ霊夢」

「なによ」

「なんで氷狐は飛ばないんだ？」

ずつと気になっていたことだ。この神社に来るとき、氷狐は空を飛ばずに地上から来る。

この神社に飛ばずに来るには、見通しが悪く、妖怪が襲ってくる獣道を通る必要がある。

氷狐も妖怪だけど、知能が低い妖怪は人間も妖怪も問わずに襲うやつもいるから氷狐も決して安全なわけじゃない。

「ああ……氷狐って飛ばないみたいなのよ」

「へえ、飛ばないのか……ん？　じゃあどうやって冥界に行ったんだ？」

飛ばない奴が冥界にいたのはおかしい。なぜ飛ばない氷狐が冥界で……んん、冥界にいたのか。

もしかして、氷狐には何か能力があるのか？

「……さあね」

「なあ、ひよつとして氷狐って能力持ちなのか？」

「……さあね」

この反応は間違いない。氷狐は能力持ちで、霊夢はその能力がなんなのか知ってる。なんで私には教えてくれないのかな。

「なあ、氷狐の能力って」

「知らないわ」

「……いいじゃん教えてくれても」

「じゃあ氷狐に聞きなさいよ」

「無茶言うなって」

私は霊夢みたいに勘が鋭いわけでもないし、店員さんみたいに氷狐の言ってることを理解できるわけじゃない。

うーはうーとしか聞こえないし、あーはあーとしか聞こえない。表情と行動で喜怒哀楽が分かる程度だ。

そんな私が氷狐に聞いたところで、氷狐の言ったことを1割も理解できるはずがない。

「なんで教えてくれないんだ？」

「……それだけの能力ってことよ」

余計に分からない。

危険なのか、強力なのか、弱小なのか、気にするほどでもないのか。

でも霊夢が言った限り、強力か危険な可能性が高い。……余計に知りたくなつた。

「どうしても教えてくれないんだな？」

「……」

「分かった。なら、私は自分で解き明かすぜ！」

私は起き上がり、箒にまたがって空を飛ぶ。

霊夢は変わらず寝ころんでいるみたいだけど、今は放っておく。

「氷狐の能力……絶対知ってやるからな！」

そう意気込んで、私は特に当てもなく空を進んでいくのだった。

「なんで戻ってきたのよ」

「いや、帽子忘れてて」

「すー……くー……」

霧雨 魔理沙 承

氷狐の能力を解き明かすと意気込んだ私は、早速つまづいていた。

どうすれば氷狐の能力を調べられるのか……それを考えていなかった。

本人に聞いてみる……私が氷狐の言葉を理解できないから無駄に終わるな。霊夢に聞いても教えてくれなかったし。

他に氷狐の能力を知っていそうな奴と言えば……スキマ妖怪の八雲 紫かこないだの亡霊くらいか。

「まずは……冥界だな」

「というわけで氷狐の能力を知っていたら教えてくれ」

「いきなり来て要件はそれだけ？」

「おう」

冥界に飛んできた私は、亡霊に早速聞いてみた。妖夢？　なんか普通に通してくれ

た。

その時の妖夢の私を見る目がなんかおかしかったけど、気のせいだと思うことにした。

「ハア……確かに、私はあの子の能力を知っているわ」

「教えてくれ」

なんでこいつは知っているのに私は知らないんだろう……もしかして、霊夢が教えたのか？ 私には教えなかったのに。

「……残念だけど、教えられないわね。あの子の能力は、人に知られてはいけなから」

「じゃあなんでお前は知ってるんだ？」

「そこにいたから、としか言えないわね。私以外に知っているのは……紫と巫女くらいね」

やっぱりスキマ妖怪も知っていたらしい。というか、多分スキマ妖怪が教えたんだろうな。

亡霊の言葉通りなら、スキマ妖怪も教えてはくれないだろうし……やっぱり、自力で解明するしかないらしい。

「邪魔したな」

「あら、もう帰るの?」

「ああ。私は氷狐の能力を解明するのに忙しくなる予定だからな」

「つまり今は暇なのね。ごはんでも食べていけば? 妖夢も喜ぶし」

「んじや、遠慮なくいただいていくぜ」

この後食べたごはんは美味かった。聞けば、妖夢の奴が作ったらしい。

美味しいと私が言うたびに妖夢の顔が赤くなっていたけど……うん、気のせいだと思ふことにしよう。

翌日の朝、私はどうすれば能力を解明できるか考えていた。

そして思いついたんだ。どうせわからないんだから片っ端から試していこうと。ついでに氷狐の

ことをもつとよく知ろうと。

というわけで。

「氷狐。私と競争しようぜ!」

「う? うー♪」

私が考えたのは競争。飛べない氷狐が地上から冥界に移動していたことを考えると、移動系の能力の可能性が高い。

競争のルールは里の入り口から博麗神社まで。能力の使用は当然あり。

飛べる私と飛べない氷狐じゃ、能力を使わない限り氷狐が勝つことは不可能だ。

「それじゃ、よーい……どんー！」

「うー！」

そして、戦いの火ぶたは切って落とされた。

「ぜー……ぜー……」

「あー……お疲れ様氷狐」

結果は私の圧勝だった。

能力を使わなかったのか、それとも私の予想が違ったのか……少なくとも、氷狐の能力は移動系の能力じゃないらしい。

獣道を全速力で走ったのだろう、氷狐は息は絶え絶え、服はドロドロ、負けたことが悔しいのか涙目……なんだろう、ものすごい罪悪感が……。

「ちよつと、なんで氷狐がこんなに泥だらけなのよ」

しかも霊夢に見つかってしまった。

その後、競争のこととした理由を話した私は霊夢からありがたい弾幕を受けた。

「あんたもドロドロになっちゃったし、氷狐とお風呂に入っちゃいなさい」
そう言われた私は今、お風呂に入っていた。

私をドロドロにしたのは霊夢だろうに……そう思っても口に出さなかった私はマジで偉いと思う。

『やー！』

『やーじゃないの。こんなに汚れてるんだからお風呂に入りなさい』

『やー！』

『どれだけお風呂嫌いなものよ。いいから入れ！』

脱衣場からはどたどたと慌ただしい音と声が聞こえてくる。なるほど、氷狐はお風呂が嫌いなものか……新しい発見だ。

やがて外は静かになり……ガラツと引き戸が開いたかと思えば、霊夢が氷狐を振りかぶっていた……なんてことはなくて、裸の氷狐がムスツとしながら入ってきた。湯気で全身が見えないけれど、女同士とはいえ手ぬぐいで前くらい隠せばいいのに。

「そんなに嫌かお風呂」

「や」

初めて会話が成立した気がした。

私は湯船から出て風呂桶に湯を汲み、氷狐に頭からかけた。

氷狐は耳にお湯が入らないようにちやんと耳をたたんでいた。ちなみに氷狐の耳は頭の狐耳だけで顔の横に人間の耳はない。

私は椅子に座る氷狐の体をを手拭いで洗ってたんだけど……。

「ひゃう!?!」

「え?」

下半身を洗ったあたりで氷狐が甲高い声を上げ、手になにやらくにゆつとした感触がした。

私はいったい何を触ったんだろうか……と恐る恐る感触がしたところを覗き込んでみると……。

小さなキノコ……いや、タケノコ? がありました。

「——むー!れーいむー!!」

「なにようるさいわね……って魔理沙!? なんで裸なのよ!？」

「氷狐にキノコっていうかタケノコみたいなのが生えてた!!」

「は？」

衝撃の事実を知ってしまった。

氷狐は実は……。

「氷狐はオスだったんだ!!」

「いや、最初から知ってたけど」

「なん……だと……?」

私にとって衝撃の事実を知った日の翌日、私はリンゴと油揚げを持って人里に来ていた。

目的はもちろん氷狐。もうこの際能力とかじゃなくて氷狐がどんな奴かを調べることにしたのだ。

歩くこと数分、山菜やら何やらを売っている氷狐を見つけたので早速近づいて声をかけてみる。

「ひーん」

「う？ まーさー！」

誰が桃太郎侍の娘か、つてこれは前にやったな。

氷狐はどうも人の名前を呼ぶ時は真ん中を伸ばすクセがあるらしい。

こないだ慧音と会話しているのを見たが、こんな感じだった。

『おはよう氷狐』

『う？ けーねー！』

『ああ、慧音だ。今日も売りに来たのか？ いつも偉いな』

『うー♪』

という感じだった。霊夢とか慧音とかは伸ばして呼ばれてもあんまり違和感がないからなあ……そう考えると、妖夢もか。名前が二文字の奴はどうなるんだ？ そのまま呼ぶのか？ それとも伸ばすのか？ つて今はそんなことはどうでもいい。

「氷狐、ここにリングと油揚げがある」

「う？！」

右手にリング、左手に油揚げが入った袋を持って氷狐の目の前に持っていく。

「どっちか一つだけお前にあげるけど、どっちかはダメだ。どっちが欲しい?」

これは単純に氷狐の好みを知りたかっただけ。

氷狐はよくリンゴを食べているけど、子狐の妖怪なんだからきつと油揚げも好きはず。

かくして氷狐が取ったのは……リンゴだった。

「リンゴが! そんなに好きかああああああ!!」

「あー♪」

コクリとはつきり頷く氷狐。しかも氷狐は取ったリンゴを真つ二つにして半分を私に差し出した。

この子いい子だ……私は受け取ったリンゴと氷狐を交互に見ながら改めてそう思った。

……それにしても。

「どうやってこんなにきれいに真つ二つにしたんだ?」

「うー」

「なるほど、わからん」

また氷狐の能力の謎が増えてしまった。

「ああ、氷狐は油揚げが嫌いみたいよ？ 味噌汁の油揚げいつも残すし」

「本当に狐か？」

「うーあー」

その後寄った神社で霊夢にそう教えられた。本当に私は氷狐のことを何も知らないようだ。

私たちは今、いつものように縁側で氷狐が持ってきた団子を食べながら霊夢の入れたお茶を飲んでのんびりとしている。

「で、氷狐の能力はわかったかしら？」

「全っ然。冥界にいたから移動系かとおもったけど違うみたいだし、リングは真つ二つにするしでもうわけがわかんないぜ」

風を操る能力なら空も飛べそうだしリングも切れそうだけど、だったら風が起きなきやおかしいし音もするはずだからこれは違う。そもそも氷狐は飛べない。

霊夢と同じ空を飛ぶ能力？ だったらリングのことが説明できない。

もしかして複数の能力をもってるのか？

「ま、そう簡単にはわからないわよね。氷狐の能力は、ある意味誰もが思いついて、誰

も思いつかないから」

「うー?」

氷狐の頭をなでながら、霊夢はそうつぶやいた。

誰もが思いついて誰も思いつかない……? どういう意味だ?

「優しいじゃないか、ヒントをくれるなんて」

「当てられるものなら当ててみなさい。だけど、これだけは言っておくわ」

魔理沙が氷狐の能力を知った時、氷狐への接し方を変えるようなら……私はあんたを全力で氷狐から引き離す。

霊夢にそう宣言された日からしばらく経った。

あれからずっと能力を考えていたけど、まったくわからない状況が続いている。それに、最近は考える暇もなくなってきた。

なぜなら私は今。

「ほら、飲めよ霊夢」

「言われなくとも飲むわよ」

神社で開かれている宴会の幹事をしているからだ。

しかも、なぜか三日に一度というペースで。

桜の花は散って既に葉桜になっているのに、私を含めたみんなは花見だと言って宴会を楽しんでいた。

里の人やレミリア達、アリスに妖夢達も参加している宴会は始まったばかり。

だけど、私はあることに気づいていた。

宴会を行うたびに、幻想郷に得体の知れない不穏な妖気が高まっていることに。

これは間違いなく異変。だけど、まだなにも起きていない。

犯人も目的も一切わからない……わかつているのは、なぜか三日に一度宴会が起きるといふことだけ。

「あーうー……」

「あれ？ 氷狐ってお酒飲めたのか？」

いつのまにか、私の隣には氷狐がいた。

手にはお酒の入った器があり、くびくびと可愛らしく喉を鳴らして飲んでいる。

その顔は赤い……間違いなく酔っている。

「くー……すびー……」

しかも寝てしまった……私の膝を枕にして。

「……まあいいか」

たまには、こんな風にのんびりするの。

私はそう考えながら氷狐の頭を撫で、こちらに向かってくるアリスと妖夢を見ながらお酒を口にした。

その時の私は、氷狐の右手が何かを握っていることに気づかなかった。

私は、こいつのことをよく知っていた。魔理沙は宴会でもそうでなくとも賑やかだが、一人のときは静かであり、宴会の幹事に適役だ、と。

なのに、こいつは今日もこんなにも静かに飲んでいる。膝に妖怪、右隣に金髪の魔法使い、左隣に半人半霊がいるにもかかわらず。……いや、たまにはこういうこともあるだろう。

だが、私はこいつをよく知らなかった。魔理沙の膝を枕にして眠る、この妖怪のことは。

知っているのは、名前は氷狐、性別はオス、リンゴが好きで油揚げは嫌い、風呂も嫌い、酒に弱い。

そして、能力は『思考《オモイ》を現実《カタチ》にする程度の能力』。

更には霧状になっていく私の手を握っているということ。霧状のはずなのに、なぜこ
うもがっしりと私の手を握れるのか……恐らくは、能力。

……そうだ、こいつの能力《チカラ》を借りれば……きつと、仲間たちが戻ってくる。
人間に失望し、絶望し、見限った私の仲間たちが。

「氷狐……あなたのチカラ……貸してくれ」

——私の願い《オモイ》を……叶え《カタチにし》てくれ……—

「……んあ……？」

いつの間にか眠ってたみたいだ。隣にいるアリスと妖夢も、なぜか私の肩にもたれか
かりながら眠っている……私たちにかかっている毛布は、多分レミリアのところのメイ
ド長がかけてくれたんだろう。

空はオレンジ色に染まり、夕暮れ時だと教えてくれている。

不意に、氷狐がいないことに気づいた。

「……霊夢のところかな？」

と考えた時、私の目にこちらに向かって歩いてくる霊夢の姿が見えた。

「魔理沙。氷狐知らない？ あんたと一緒に寝てたんだと思っただけど」

「いや、私が起きた時にはいなかったぜ？」

「そう……なんか嫌な予感がするわね」

「やめろよ、霊夢が言うところじゃレにならないぜ？ きつと帰ったんだよ」

「そうよね……」

私たちが氷狐が再びいなくなったことに気づき、探すために動き始めるのは……翌日の昼のことだった。

「ン……魔理沙あ……」

「魔理沙……さん……すー……」

「……どうやって帰ろうかな……」

「……」

「パ……パチエ？ 顔が怖いわよ？」

「レミイは黙ってて」

「はい！」

霧雨 魔理沙 転

「ああもう！　またいなくなるなんて！」

「霊夢、落ち着けて」

「前科があるのに落ち着けるわけないでしょうが!!」

宴会の次の日、氷狐は神社に現れなかった。

私は二日酔いなんじゃないか？　と思っていたけど、霊夢曰く氷狐は異変に巻き込まれたらしい。根拠は当然勘。

普通の奴なら勘なんか……となるが、その勘を發揮したのが霊夢なら話は別だ。なぜかは知らないが、霊夢の勘は未来予知の確率で当たる。

つまり、大なり小なり氷狐は異変に巻き込まれているということになる……ただ、その異変っていうのがなあ……。

「巻き込まれたって言ったって異変は昨日の三日置きの宴会だろ？　氷狐がほかの奴らに飲まされる図しか浮かばないんだけど」

「それならいいけどね……そんなことじゃすまないと思うわ」

「なんで？」

「勘」

「どうやら霊夢に落ち着きが戻ってきたらしく、口調に強みがなくなってきた。本当に……氷狐のことになると自制が効かなくなるな。」

「そんなじゃ、氷狐が大変なことになる前に助けますか。な？ お母さん」
「誰が誰のお母さんか」

「近いところから見ていこう、ということでは私たちがやってきたのは魔法の森。しばらく飛んでいると、昨日ぶりに見る金髪が見えた。」

「おーいアリスー」

「あら魔理沙……と霊夢じゃない」

「ちよつと、なんで私がついでみたいな言い方なのよ」

「サブタイトルを見てみれば？」

「魔理沙が転ぶって書いてあるわね」

「ちよつと黙ろうかあなたたち。メタなこと言うんじゃありません」

「まさか私がツツコミをさせられるとは思わなかった。」

とりあえず二人をいったん黙らせ、まずはアリスから物理的な意味で話を聞こうと思っただけど……。

「アリスはあんまり関係なさそうだな」

「いきなりご挨拶ね。二人して何を企んでいるのよ」

「子狐探し。お母さんが心配しちやってねえ」

「子狐？ ……ああ、昨日魔理沙の膝枕で寝ていたあの羨ま……じゃなくて妬ま……でもなくて妖怪ね。で、お母さんっていうのは……ああ、なんとなくわかったわ」

「だから誰がお母さんか」

アリスの口からこぼれた怪しい言葉はスルーするとして……考えてみれば、あの時私と一緒に寝ていたアリス、それから妖夢は氷狐を誘拐した犯人ではないよな。

……ただし、異変の犯人かはまだわからないけど。

「ところでアリス」

「何かしら？」

「異変の犯人と氷狐探しのために近いところから潰していこうと思ってるんだけどさ」

「あんたも犯人だから潰させてもらうわね」

「そこは普通容疑者じゃないの!？」

「私は普通の魔法使いだけど、霊夢は普通じゃないぜ？」

「よし、あんたもそいつの隣に並べ」

「いてて……本当に私まで撃つなよ」

「撃ちたくないのに撃たせたあんたが悪い」

「星は好きだけどそっちの保志はあんまり好きじゃないぜ。異変の犯人《ホシ》なら、喜んで追っかけるけど」

冗談を言い合いながら、私たちは空を飛んでいた。

アリスは犠牲となったのだ……無茶しやがって。いや、トドメは私がマスパで刺したけどね。

「この調子だとあと何人潰せばいいのか……だいたいわかるわね」

「わかるのかよ」

「そうね、あと四人くらいじゃない？ 勘だけど」

「楽しい四天王戦になりそうだな。チャンピオンは誰だよ」

「さあね。そこまではわからないわ」

そんな会話をしながら飛んでいると、たどり着いたのは博麗神社。

その境内の中に、見知った銀髪があった。

「あれ？ 紅魔館のメイドじゃないか」

「あら、魔理沙に霊夢じゃない」

銀髪のメイド服を着たこの女は紅魔館というところでメイド長をしている十六夜咲夜。

レミリアとかパチュリーとかには礼儀正しいけど、私たちにはこうやってフランクに話す。

「相変わらず公私を使い分けるやつだぜ」

「お嬢様のメイドたるもの、このくらいは朝飯前でしてよ」

「今は夜よ。で、あんたはなんで夜の留守の神社にいるわけ？」

「あら、犯人は現場に戻るものでしょう？ だから手がかりがあるかと」

「なるほど……つまり、お前が犯人ってわけだ」

「は？」

私はミニ八卦炉を取出し、霊夢はお祓い棒をとりだしてメイド長に向ける。

メイド長はジリ……と一歩後ろに下がり……どこからかナイフを取り出した。

「さあ……観念しなさい！ この誘拐犯!!」

「はあ!? え、ちよ、何の話!」

「問答無用!!」

霊符 「夢想封印」

恋符 「マスタースパーク」

「あーあ、結局時間の無駄だったわ」

「それ、メイド長のセリフだけだな。へへっ、この魔道書欲しかったんだ」

「また盗ってきたの?」

「盗ってない。私が死ぬまで借りてるだけだ」

「それを盗ったと言わずになんと言うのか」

メイド長を冤罪で倒し、どうせだから紅魔館メンバーを倒して……もとい、調べてみようという霊夢の暴論で紅魔館の図書館に行った私たちはそこにいたパチュリーを倒

した。

パチュリーは私が入ってきた瞬間に目を一瞬輝かせたような気がする……倒した後はどこか悲しそうだったな。また来るぜ、と言ったらむきゆうとうなつてそっぽ向いたけど。

「さて、そろそろ本命の登場か？」

「いえ、時間をかけ過ぎてるわ。どうせレミリアは犯人じゃないし、さつさと神社に戻るわよ」

「理由は？」

「勘」

「勘なら安心だな。行くか」

「ええ」

「つてちよつと待ちなさい!!」

いざ神社へ、と思っていたら私が本の数秒前まで犯人だと思っていた吸血鬼が現れた。

何をそんなに慌てているのか、必死に両手を広げて紅魔館の入り口を塞いでいる……まったく塞げてないけど。

「どうした？ レミリア」

「ちよつとそこどいてくれない？ 邪魔なんだけど」

「私が出るたびに扱い酷くないかしら!? ここに本命がいるでしょ!? 弾幕ごっこしたり戦ったりしないの!?!」

「じゃああんた犯人なの?」

「違うわよ!」

「んじゃさよなら」

「うー! うーっ!!」

とうとうレミリアがボロボロと涙をこぼし始めた。

見た目は12歳くらいの子供がこちらを睨みつけて泣いている姿は、こう胸にクルものが……。

「じゃ」

「れいむのばかああああああ!!」

それだけ言い残して、霊夢はレミリアがカバーできていない入り口から出て行った。

……私はこの瞬間だけ霊夢が血も涙もない人間に見えた。さすが霊夢、私たちにできないことをやってのける。状況次第ではしびれるし憧れるんだけど、この場ではむしろ軽蔑の念しか浮かばないな。

「あーほら泣くなつて」

「うーっ……うーっ……」

私は、しばらくの間カリスマブレイクしたレミリアをあやしていた。

レミリアをなんとか泣き止ませた私は、霊夢が言っていた神社に向かっていた。気が付けば夜の暗さの代わりに空は白んでおり、朝日が差し込み始めている。

「まったく、睡眠不足はお肌の大敵なんだけぞ？」

「あら、それは妖怪にも当てはまるのかしら」

なんとなく呟いたことに声が返ってきた。

辺りを見回してみるけど、誰もいない。けれど確かに声は聞こえた……ということ
は。

「八雲 紫か」

「当たり前」

その名前を言った瞬間、私の目の前の空間が横に裂けた。裂けた先には気持ちの悪い目が見え、裂けた部分に寄り掛かるようにしている上半身だけが見えている女性の姿があった。

八雲 紫……一人一種族のスキマ妖怪にして幻想郷の賢者だ。

「私に何か用か？」

「氷狐の能力と異変の犯人の居場所、知りたくない？」

ピクリと反応してしまったのが自分でもわかった。

やっぱりこいつは氷狐の能力を知っていた……しかも、この異変の犯人の居場所まで知っているという。

前の私なら、教えてくれとすぐに言っただろうな。

「ああ、ぜひとも教えて欲しいね……犯人の居場所だけ」

「あら、能力の方はいいのかしら？」

「いい。私はさ、少しずつ氷狐のことを知っていくのが楽しくて仕方ないんだ。だから能力は教えなくていい。それは……私が自分で気づいてこそ意味があるからな」

最初はなんで教えてくれないんだと思っていた。なんであの亡霊や八雲 紫は知っているのに、友達の前は知らないんだと思っていた。

でも、知らないからこそ知った時に嬉しいと感じられるんだ。知ることを楽しいと感じるんだ。

それに……。

「氷狐といると楽しいしな。能力なんか知らなくたって、楽しけりやそれでいいじゃ

ん？」

「……ええ、そうね。犯人はもう霊夢と戦っているわ。私のスキマで送ってあげる」

「賢者のタクシーは高そうだな」

「料金は払えるかしら？」

「出世払いで」

すっかり青くなってしまうた葉桜の並木道の上で、私はこの子狐の妖怪を抱えながら巫女と戦っていた。

妖怪の能力を発動させる条件は知っている。一切の混じり気のない純粹な思考《オモイ》……簡単だと思っていた。でも……今こうして発動していないところを見る限り、私は純粹な思考とやらができていなかったのだろう。

それは、私が叶え《カタチにし》たい願い《オモイ》が複数あったからだろう。もつと宴会を楽しみたい。もつと花見をしたい。

また……昔みたいに仲間たちと……。

「氷狐を……はなせえええええ!!」

巫女から飛んでくる符や光弾に針。それらを避けるが……それだけだった。

こちらから反撃することができない……なにより、巫女の気迫がそうさせてくれな
い。

この私が、*“鬼”*である伊吹 萃香《いぶき すいか》がだ。

「舐めるなよ人間!」

「えっ!?!」

霧状になる私の体を見て、巫女の顔が驚愕の色に染まった。

私の能力は*“密と疎を操る程度の能力”*……あらゆるものの密度を自在に操る能力だ。

自分の密度を下げれば、こんな風に体を霧状にしたりすることができる。この状態の私は、ほとんどの攻撃を無効化することができる。

「でも、私からは攻撃できる!!」

「くっ!」

腕の密度を上げて再び物質化し、巫女の後ろから殴りかかる。しかし、巫女はまるで来る場所がわかっていたかのように避けた。

殴りかかった腕をまた霧状にし、巫女からの攻撃を無効にする。

「なかなかずつこいわね……」

「なら元に戻ってやろうか？ 私は鬼だ……いきなり始めてしまったけど、今から真剣勝負をするのもやぶさかじゃないよ」

「いやよめんどくさい。でも氷狐は返せ」

「私を退治できたら返してやるよ人間」

氷狐は私の霧の中ですやすやと眠っており、私は自分自身でもある霧を操って氷狐を巫女に渡さないようにしている。

人間じゃないのが残念だけどね……鬼は人間を攫って、人間は取り返すために鬼を退治して、それで退治した鬼から攫った人間と財宝を奪う。それが昔の鬼と人間の関係だった。それでも、昔は鬼と人間が酒を飲み交わすこともあったんだ。

なのに、人間はその関係を裏切った。鬼は人間よりも圧倒的に強い。人間はそんなたちに恐怖し……私たちに嘘をつき、騙して仲間を殺していった。私の仲間はそんな人間に絶望して、見限って地底へと去っていった。私がまだ地上に残っているのは……私は、それでも人間が好きだから。

だから、今はすごく楽しいんだよ巫女。まるで昔に戻れたみたいだから。

「さあ巫女、私を退治して氷狐を取り返してみな！」

「その必要はないわね」

「…なんだと？ 氷狐を返してほしくないのか？」

「取り返すわよ。…私じゃないけどね」

「何を言ってる…」

「ブレイジングスター!!」

その言葉が聞こえた時に私が見たのは…一つの巨大な流星。

私は、そいつをよく知っていた。星の名を持つスペルカードを使い、普通の魔法使いを自称するあの人間を。

そして流星が通り過ぎ…流星の主の手には、氷狐が抱きかかえられていた。

「氷狐は返してもらったぜ？」

「ほら、私じゃなかった」

「あ……あはははは！ 確かに巫女じゃなかったね」

思わず大声で笑ってしまった。

鬼である私がこうも簡単に攫った存在を取り返されるとはね。やっぱり……人間は

楽しいよ。

「だけど、あんた達は返さないよ？ 私は退治されてないんだからね！」

「はあ……本当にめんどくさいわね」

「霊夢、あいつは何の妖怪だ？」

「鬼らしいわよ」

魔理沙が鬼イ？ といぶかしんでいる……失礼な、鬼は嘘をつかないんだぞ。まあ少しはつくかもしれないけど。

「鬼だったら退治しなきゃな」

「だからそう言ってるだろ？ やってみな人間」

「人間だけど魔法使いと巫女だぜ」

「知ってるよ」

私は……霧になっただけでずつとあんた達を見ていたんだからね。

「恋符「マスタースパーク」!!」

「当たらないよ」

私が放ったスペルカードのビームは、霧状になった鬼には当たらずに終わった。あの

鬼は粒子化と物質化を使い分けて私と霊夢の攻撃をかわして私たちに一方的に攻撃を仕掛けてくる。

私が未だに被弾しないのは、霊夢のおかげだ。

「後ろ！」

「つと」

「こんどは左！」

「はいつと」

こんな感じで霊夢が教えてくれるのでまだ被弾はしていない。

だけど、氷狐を抱えたままの私じやいつ被弾するかわかつたもんじやない。

霊夢一人なら……きつと苦戦も何もしないんだろうな。

「ちつ……粒子化なんてずるいぜ」

「だったらやめてあげてもいいよ？」

「優しい言葉だ、泣けてくるぜ。でもいい……手加減は嫌いなんだ」

「言うね人間！ 私たち鬼が手加減しないと一殴りで死んじまうくらい脆弱なくせに

！」

「人間舐めると痛い目みるぜ？」

とは言ったものの、生憎この鬼に一撃を与える術は私にはない。霊夢の方は知らない

けど、今のところやってはいないし……。

そういえば、氷狐の能力ならどうなのだろうか。私にとつての未知の能力なら、もしかしたらあいつの能力をどうにかできるんじゃないか？

考えろ、氷狐の能力を。

「どうした!?! 攻撃の手が止まってるぞ?!」

「ちよつと魔理沙! 何考えこんでんのよ!?! 上から来るわ、気をつけて!」

霊夢の言葉通りに上から来た弾幕を避けながら考える。氷狐の能力は移動系ではない。ならなぜ冥界にいた?

それに、氷狐はリングを綺麗に真つ二つにした。これはどうやって?

何より氷狐は……認めたくはないけど、一度死んで、生き返った。なんで?

霊夢のヒントは「ある意味誰もが思いついて、誰も思いつかない」……誰もが思いつく……ん? つまり、誰もが「考える」ということか?

考える……思う……。

「魔理沙右!」

「うえあつとあ!!」

危ない危ない、考えすぎて弾幕に被弾するところだった。霊夢の勘が私にもあれば、簡単に避けられるのにな……私にもあれば?

それは「あつたらいいのに」ってことだよな……つまりは「願い」だ。

願い……願い事？ それはきつと、一度は誰もが思ったことだろう。でもそれは所詮は願い事……本気の人もいれば、叶うと思わない人もいるだろう。

「……まさか、な。でも……私は私が思ったことを信じるぜ!!」

「ちよ、魔理沙どこいくの!?!」

「なんだなんだ、逃亡か?」

私は垂直に上昇し、ある程度上ったところで止まる。そして手にミニ八卦炉を持ち……体ごと下へと向けた。

余計なことは考えるな。今はこの考えだけに集中しろ。この考えに殉じるくらいの気持ちを持って。

そして、私はありったけの魔力を込めてスペルを宣言した。

魔砲「ファイナルマスタースパーク」

迫りくる巨大としか言い表せられない閃光。

スペルカードというルールの中にいる私は、その巨大な閃光を受ければ体を動かすことはできなくなるだろう。

だが、それは当たればの話。霧状の私にこんなものをぶち込むだけ無駄だ。

そう、思っていた。

「な、あ?！」

いつの間にか、私の体は元に戻っていた。なぜか能力は使えず、今からでは逃げることも防ぐことも、迎撃することすらできない。そんな覆すことはできない絶望的な状況で……私は笑っていた。

たった二人の人間に、私は一度も攻撃を当てられなかった。

この二人の人間は、本当に強かった。なによりも……嘘をつかずに真つ向から戦ってくれた。

「嗚呼………楽しい喧嘩だった」

満足に笑ったことを自覚し……私は巨大な光に包まれた。

霧雨 魔理沙 結

伊吹 萃香とかいう鬼を倒した日から二日が経った。

今日は丁度三日置きの宴会の日だったんだけど、異変は解決したから宴会はしないと
思っていたら……。

「そうだよなあ、異変を解決したら宴会するよなあ」

「まさか続いているんじゃないでしょうね……」

異変解決のお祝いということで、宴会が行われていた。

もつとも、鬼の妖力は感じないから普通の宴会なんだろうけど。

「(く)く……ふはっ」

「お、いい飲みっぷりじゃないか」

「うー♪」

「ちよつとまって！」

なんとなく辺りを見回してみたら、あまりに馴染み過ぎて今まで気づかなかったがあ
の鬼がいた。

しかも氷狐に酒を飲ましていた。

「なんであんたがここにいるのよ!? 氷狐、こっちにいらっしやい!」

「うー?」

「冷たいこと言うなよ。今日は宴会だよ? 浮かない顔の君もいつも陽気なあの人も

! ひとたびここに来れば誰もが騒ぎ出す! そういう場だよ?」

「まあそうだよな」

思わずなんでここにいいのか聞いちやったけど、別に死んだわけじゃないんだからそりや来るよな。

霊夢は納得していないのか、氷狐を抱きしめながら鬼をジト目で見てるけど。

ま、誘拐犯が目の前にいたら敵意も持つか。

「そんなに邪険にするなよお母さん」

「そうだぜお母さん。過ぎたことは水に流せよ」

「誰が誰のお母さんか!」

「霊夢が氷狐の」

「うー? あー♪」

ちがーう! と氷狐を優しく地面に置いてから両手を振り上げて鬼を追いかける霊夢と楽しそうな顔で逃げる鬼……いや、萃香。

氷狐はよく分かっているのか首を傾げ、何を思ったのか霊夢の後を追い始めた。

「あらあら、萃香とすつかり仲良くなったみたいね」

「うおあ!？」

いつの間にか、八雲 紫が私の隣に立っていた。気配も何もなかったから全く気付かなかったぞ。

八雲 紫の顔を見てみれば、私の顔を見ながらイタズラが成功した時の子供のような顔をしていた……胡散臭くない八雲 紫を初めて見た気がする。

「心臓に悪いぜ八雲 紫」

「紫でいいわよ魔理沙。タクシーの料金をチャラにしてあげるから許してくれない?」

「それで手を打つぜ。ついでにその手に持った大吟醸もくれ」

「ダメ。これは萃香と飲むためのものだから」

「ちえっ」

いかにも不満ですという顔を試してみるけど、さほど残念とは思っていない。それは笑っている紫も分かっているんだろう。

紫と話したことは少ないけど、こうして話してみればなかなか楽しい。

「ところで魔理沙……氷狐の能力はわかったかしら?」

「多分な。答え合わせをしてくれるか?」

「いいわよ。言っただけならなさい」

紫の了承も得たので一昨日考えた思考をもう一度整理する。

そして、私が出した答えは……。

「氷狐の能力は…願いを叶える程度の能力だ」

「……概ね正解ね。正確には、〃思考《オモイ》を現実《カタチ》にする程度の能力〃。事実上、氷狐は純粋な願い、思考、想い、そういったものがあれば何でも現実にすることができるわ」

生物は別みただけ……と紫は言っただけど、氷狐の能力は生物にも作用する。

そうでなければ、私の〃鬼の能力を一時的に使えなくする〃という願い《オモイ》は現実《カタチ》にはならなかっただろう。

それとも一つ……氷狐の能力は、恐らく無から有を生み出せない。

もしも無から有を生み出せるなら林檎を真っ二つにする必要はないし、わざわざ山から山菜を採ってきて売ったりしないだろう。

「あら、紫いたの」

「いった〜……あ、紫」

「はぐはぐ♪ う？ あーうー♪」

「こんなにちわ霊夢、萃香、氷狐」

そんなことを考えていると、走っていた霊夢たちが戻ってきた。

萃香の頭にはたんこぶができており、氷狐は林檎を食べている…かと思いきや、氷狐は紫を見るなりいきなり抱きついた。

「ちよつと氷狐!? そいつから離れなさい！ 性格が胡散臭くなるわよ！」

「そうだよ氷狐。そいつは氷狐が近付いちゃいけない奴なんだ」

「紫……氷狐に何を吹き込んだんだ？」

「あなたたちは私をなんだと思っているのよ……」

「「幻想郷で最も胡散臭い妖怪」」

「さすがに酷くないかしら!？」

よよよ……と泣き崩れる紫……普段から胡散臭そうな笑みを浮かべているからそういう目で見られても仕方ないと思うんだけど。

そんな紫を心配してか、氷狐が紫の頭をなで始めた……あ、霊夢が羨ましそうに睨んでる。

「くすん……私に優しくしてくれるのは氷狐だけよ……藍は橙の相手ばかりしてかまってくれないし」

「ゆーり。いいこいいこ♪」

「うわああああん！」

あ、感極まつて紫が泣き出した。ていうか氷狐が単語を発した……だと？

にしてもこれは……小さな子がいいこいいこ言つて頭を撫でるといのは……。

「なんか危険な香りがするね」

「激しく同意だぜ」

「……いいな……私も氷狐にしてみようかしら……むしろされてもいいかも。ていう

かされたい」

「ちよつと自重しようかお母さん」

「ねえ魔理沙」

「んー？」

あれからしばらくして日も暮れ始めた頃、眠ってしまった氷狐に膝枕をしながら霊夢が声をかけてきた。

紫と萃香は、今頃違う場所で飲んでいるころかな。

「氷狐の能力……分かったんでしょ？」

「ああ」

「そう……それで、魔理沙は氷狐をどうしたいの？」

氷狐の能力を知った今なら、霊夢の言葉の意味が分かる。

氷狐はほとんどの願いを叶えることができる……それを知って、私利私欲に利用しようとする奴も出るだろう。

しかも必要なのは氷狐の意志ではなく体。後は自分の純粋なオモイさえあればいいのだから。

霊夢は、私がそういう存在になるかも知れないと危惧しているんだろうな。

だけど、私は……。

「当然、どうもしないさ。簡単に願いが叶ったらつまらないじゃないか」

願いは、簡単に叶わないから願いなんだ。

自分で長い時間をかけてでも叶えるからこそ、それは自分のものになるんだ。

私は普通の魔法使い……だからこそ人一倍努力をして、強くなって、知らないことを知るのが楽しいのさ。

「氷狐とも霊夢とも、私はずっと親友だと思ってるぜ？　利用することなんか思いつかないくらいには」

「……………そう」

霊夢から帰ってきた言葉はたったの一言。それでも、私は霊夢が私を信用してくれたのだと思うと嬉しかった。

何よりも……………霊夢は私たちが“親友”だということを否定しなかった。それが、本当に嬉しかったんだ。

「……………へへっ」

「つと……………どうしたのよ、急に抱きついてきて」

「いいじゃんいいじゃん♪」

今はただ……………赤いであろう顔を霊夢に見られなくなかったから。

「ちよつと紫、どこに行くんだよ。どんどん宴会場から離れていつてるぞ?」

「いいからいいから♪」

「語尾におんぷなんてつけるなって。歳を考え」

「今なんて言おうとしたのかしら? 返答次第では……………シバくわよ」

「なんでもないです!!」

紫に手を引かれながら歩いてしばらくが経った。

私たちは宴会場からどんどん離れていき、人がない森の中を進んでいる。……紫がスキマを使わないなんて珍しいこともあるもんだ。

更に歩くこと半時（約三十分）、私たちは開けた場所にいた。そしてその場所には、多くの影もあつた。

「……………え？」

その影の正体を見たとき、私は信じられない気持になつた。だつて目の前の奴らは……地上にはいるはずがない奴らだつたから。

「お？ 萃香じゃないか」

影の内の一人に名を呼ばれ、肩がびくりと跳ねた。

聞き覚えのある、それでもしばらく聞いてなかつた声。

「どうしたんだい？ そんなところに突つ立つてないで、早くこつちに来なよ」

「あ、ああ……………」

一步、また一步と近付くたびに心臓が鼓動を早める。

そうして影の姿をはつきりと認識した時……私は、そいつの名前を口にしていた。

「……………勇儀？」

「おう。どうした？ そんなアホみたいな面して」

「アホ言うな。なんで地上《ここ》に？」

「あん？ 今日ば宴会らしいじゃないか。妖怪の賢者の奴が、今日だけは地上で飲んで行けばいいって酒と料理と場所をくれたんだよ。正直胡散臭いが、こうまでしてくれちやあ邪険にも扱えないしな」

紫が？ 地底と地上の接触を好まないあいつが？ そういえば、いつの間にか紫の奴がいないことに気づいた。あいつは、どうして急にこいつらを地上に招待したんだろうか。

それに、勇儀やこの場にいる他の鬼たちも地上に来るのは嫌がってたのに……。

そこまで考えて、私は一つの可能性に気がついた。

氷狐だ。でも、私は能力を発動させることはできなかったはず……。

「なにぼーっとしてんだい！ ほらほら飲めや歌えー！」

「わわっ!？」

考えてる途中に勇儀に首に腕を回され、無理やり隣に座らされる。

周りの鬼はみんな楽しそうに飲んで、歌って、踊って……まるで……。

昔に戻ったみたいで。

「……ははっ」

「ん？ どうしたよ急に泣きながら笑いだして」

「うるさいよ馬鹿勇儀。私は泣いてない」

「誰が馬鹿だつてえ？ 久々にやるか!？」

「やらいでか!!」

すつごく楽しいんだ。それこそ涙が出るくらいに。

すつごく嬉しいんだ。それこそ笑みがこぼれるくらいに。

きつと今日という日が終われば、こいつらはもう地上にはいないだろう。

だから私は、今のこの時間を噛み締める。殴って、殴られて。そのあとは酒を飲んで、

笑いあつて。

私が戦った人間の話をしたら、こいつらはどんな顔をするだろうか？そんなことを考

えるだけで、時間は過ぎていく。

嗚呼、私は今、すつごく幸せだ。だって、願いが叶ったんだから。

花見ができないのは残念だけど、一番叶えたいことを叶えてくれた。

ありがとう……小さな小さな子狐の妖怪。

ありがとう……氷狐。

「すー……くー」

「いつになったら離れるのかしら？」

「まだいいだろ？ 親友」

「いいけどね（ちよつと殺気を感じるけど）」

「……」

「咲夜ー！ パチエが……パチエがー！」

（嗚呼……うろたえるお嬢様も……イイ）

紅魔館 起

〔紅魔館《こうまかん》〕

吸血鬼 “レミリア・スカーレット” を当主とする、霧の湖の畔に建つ内外ともに紅い館の名前である。

その紅魔館の主要なメンバーは以下の五名。

当主、レミリア・スカーレット。彼女は “運命を操る程度の能力” を持ち、多少の未来予知や “そうなる運命” を捻じ曲げることができ、吸血鬼としての高い身体能力もあり、高いカリスマ性も持つ。ただ悲しきかな、見た目は子供、中身も子供のため、カリスマはよく破壊され、霊夢によく泣かされる。

紅魔館のメイド長 “十六夜 咲夜《いざよい さくや》”

紅魔館唯一の人間にして紅魔館を支える完全で瀟洒なメイド。その能力は “時間を操る程度の能力”。彼女は文字通り、時間を操ることができなのだ。しかし、時間を止めたり進めたりすることはできても戻すことはできないらしい。紅魔館で働くメイド

妖精をちゃんと仕事させるすごい人。でもレミリアを少々危険な目で見ている時があるのは気のせいだろうか？

紅魔館にある大図書館に住む魔法使い。パチュリー・ノーレッジ”

彼女は魔理沙とは違い、歴とした魔法使いという名の妖怪である。能力に関してはさまざまな魔法が使えるとしか言えないため、省略させていただく。レミリアからパチエと呼ばれ、自身もレミリアのことをレミイと呼ぶ親友というべき間柄。大図書館で本を読み耽り、たまに来る魔理沙に本を借り(盗)られていくのが日常。喘息持ちであり、小悪魔という従者がいる。

紅魔館の門番。紅 美鈴《ホン メイリン》”

中国風の名前と服装に身を包む紅魔館の門番。妖怪。”気を使う程度の能力”を持つっており、用途は身体能力の強化。妖怪にしては人間に対して非常にフレンドリーの様子。門番という役職だがよく居眠りをしており、咲夜に見つかるたびに頭にナイフを投げつけられている。でも妖怪だから死なない。庭の整備もしており、それはそれは美しいという。でも居眠りする。

悪魔の妹 “ブランドール・スカーレット”

レミアアの実の妹。その能力は “ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”。手に “目” と呼ばれるものを出現させ、それを握りつぶすことで対象を爆破するという能力である。この危険な能力故にフランは495年もの間地下に封印され、今もそれは続いているという。そのせいか気が触れており、常に情緒不安定になっているらしい。

これは、紅魔館メンバーと氷狐が出会い、時に楽しく、時に危険に過ごす…そんなお話。

よく晴れた昼下がり、紅魔館の門番である美鈴はいつものように居眠りを…：：：していませんでした。

「…：：：楽しそうですねえ」

そう呟く彼女の眼に映ったのは、霧の湖の向こうで弾幕ごっこをしている二人の青い妖精と妖怪。

美鈴は妖精のほうとは面識があった。妖精の名は “チルノ” …：：霧の湖を縄張りに

している、普通の妖精よりも強い力を持った妖精である。そして少々おつむが足りないことでも有名である。

だが美鈴は妖怪の方は知らなかった……いや、姿だけは何度も見たことがあった。よく今いる場所でチルノとともに弾幕ごっこをしている姿を見るし、たまに人里に買い出しに行けば、よく甘味処で団子を頬張っている姿を見た……勿論、魔理沙が団子を盗った姿も、魔理沙が霊夢に怒られる姿も見たことがある。

しかし、直接的な面識は一切なかった。わかっているのは、霊夢や魔理沙、チルノといった面子と仲がいいということくらいである。

「あ、そこはあぶない！ そう、そこです！ あ、あつ！ あー……おいしい」

「何がおしいのかしら？」

「うきやう!? さ……咲夜さんですか。今、あの子たちの弾幕ごっこを見ていました」
「あの子たち？」

弾幕ごっこを見るのに夢中になっていたときに急に声をかけられてびっくりした美鈴だったが、相手が咲夜だとわかるとほつ、と一度息をつく。

そして見ていた方角を指差し、咲夜もその方角を見る。そこには、勝ち誇るチルノと悔しそうな妖怪の姿があった。

「あら、氷狐じゃない」

「咲夜さん知っているんですか?」

「直接面識はないけど、霊夢がそう言っているのを聞いたわ。まさかチルノと弹幕ごっこをしているなんてね」

意外そうに、咲夜は呟く。それは氷狐が弹幕ごっこをしているからなのか、それとも霊夢から離れていることなのか……。

二人は少しの間氷狐とチルノの二人を見ていたが、チルノはなぜか紅魔館を指差し……なぜか二人がこちらに向かってきた。氷狐は飛べないのでチルノに抱えられているが。

「……………こつちに来てますね」

「……………こつちに来てるわね」

二人して不思議そうに呟く。やがてチルノと氷狐がやってきた。そして、チルノがいきなり美鈴に指を指した。

「あたいと氷狐と弹幕ごっこをしなさい中国!!」

「いきなりなんですか!?! それから私は中国ではなく美鈴です!!」

「うー」

「はいこんにちは。私は十六夜 咲夜っていうの」

「さーや?」

「うーん……それでいいわ」

突然のチルノの発言に再び驚く中国……もとい美鈴。

その隣では氷狐が咲夜にお辞儀をしながら挨拶(?)をしていた。

名前に関しては氷狐の霊夢や魔理沙への呼び方を知っていたため、咲夜は仕方ないかと苦笑を浮かべて了承した。

「あたいと氷狐のこんぶろーしよんで今日こそ倒してやるんだから！」

「コンビネーションの間違いでは？」

「なんだか体に良さそうね」

「うー？」

「ん？ 氷狐も戦うのかって？ 自分は親分の言うことを聞いてればいいの！」

「今の通じるんだ……」

2対1の変則ルールの弾幕ごっここの結果は、美鈴の勝利に終わった。

次の日の、魔理沙が氷狐を連れて紅魔館に侵入してきた。もちろん、美鈴は寝ていたので素通りである。

「ようパチュリー、魔道書借りに来たぜ」

「盗りに、の間違いでしょう。で、なんでその妖怪を連れてきたのかしら？」

「暇だろうから連れてきた！」

悪気の全くない魔理沙のセリフと笑顔に辟易しながら、パチュリーは魔理沙に担がれた不満げな表情の子狐の妖怪を見ながら問いかける。

すると、魔理沙はかなりイイ笑顔で左手の親指を立てた。

「あーうー!!」

「怒ってるようだけど」

「うーん、やっぱり団子を食べてる最中は駄目だったか……今度からは普通についててて！ ちょ、氷狐痛い！ 髪引つ張るのやめてくれ！」

「誰だつて怒るわよそれは……」

担がれた体制で魔理沙の髪を力の限り引つ張る氷狐と本気で痛いのか涙目の魔理沙。そんな二人を見て呆れた表情で頭を押さえるパチュリー。

しかし、パチュリーがどこか嬉しそうに見えたのはなぜだろうか？

「氷狐………だったかしら？ 今お菓子を持ってきてもらおうからそれくらいにしてあげなさい」

「うー………」

「あー痛かった……助かったぜパチュリー。ついでに私ももらっていいか?」

「駄目といつてももらうくせに……小悪魔、お菓子と紅茶をお願い」

「はい、少々お待ちくださいね」

パチュリーが紅い髪の女性、小悪魔に頼むとすぐ近くにいたのかすぐに返事が返ってきた。

その小悪魔が持ってきたお菓子と紅茶に舌鼓を打ちながら、魔理沙とパチュリーは日常会話に花を咲かせる。

「でさ、霊夢の奴どうしたと思う? 氷狐を抱き上げて一緒に風呂入ったんだぜ」

「ふうん……」

「はぐはぐ♪」

「美味しいですか?」

「うー♪」

「それは良かったです」

その話の話題がほとんど霊夢のものと氷狐のものだったためか、パチュリーはどんどん不機嫌になっていく。

その隣では氷狐と小悪魔が平和な時間を堪能していた。

この日、魔理沙たちが帰った大図書館では静かに霊夢に嫉妬するパチュリーの姿が

あつたそうな。

日差しが強いある朝、レミリアは咲夜に日傘を持たせながらゆつくりと博麗神社に向けて飛んでいた。

そして神社に着き、レミリアは挨拶もなくいきなり居間へと入り込み、いるであろう人物に声をかける。

「霊夢いる……っっていないわね」

「そうですね……ああ、そういえば」

しかし、目当ての人物はいなかったようで返事は返ってこず、レミリアは小さな肩を小さく落とす。

その姿を見た従者が気づかれなくらい小さく肩を震わせながら思い出したように声をあげた。

「なにかしら？　咲夜」

「霊夢はここのごとく朝は人里に行っているそうです」

「そうなの……」

自身の誇るべき従者の言葉に一切の疑問を持たず、それが真実だと受け入れるレミリア。
ア。

内心ではぐうたら巫女の霊夢が……などと失礼なことを思っているのだが。

「ただいまー」

「うー」

「あら、おかえりなさい」

「レミリアに咲夜じゃない。なんで居間にいるのよ」

そんなことを考えていると、待ち人である霊夢とおまけに氷狐が帰ってきた。

なぜかいるレミリアたちに霊夢は特に驚きもせず、この場のいる理由を問いかける。

「それは……」

「さーやー!」

「久しぶりね氷狐」

「あら、咲夜はいつから氷狐と名前を呼ぶ間柄になったのかしら」

「ついこの間よ。そんなに怒らないでくれないかしら」

「ねえ、ちよつときいてよ!」

言葉を遮られ、声を荒げるレミリア。さつそくカリスマブレイクしてくれた。

霊夢は氷狐に名前を呼ばれた咲夜を睨んでおり、咲夜は冷や汗をかきながら目をそら

している。

「……で、用事は？」

「……明日、紅魔館でパーティーをするの。霊夢にも是非きてほしいんだけど」

「レミリア直々に誘われるなんて……明日は土砂降りにレミリアがうたれるのね」

「それ遠まわしに私に死ねっていつてるのかしら!？」

少し不機嫌になりながらも用事を伝えるレミリアに、霊夢は驚いた表情を浮かべながらざらりと毒を吐く。

吸血鬼にとって流水は弱点……雨などにうたれてはレミリアは大変なことになってしまう。

あんまりな言葉にレミリアは泣きそうになるがそこは吸血鬼である紅魔館当主、なんとか涙目で済んだ。

「……そうね、参加させてもらうわ。氷狐も連れていくけどいいわよね？」

「ええ。美味しいお団子を用意しておきます」

「うー♪」

「ねえ、なんで咲夜が了承してるの？ねえってば」

自分で良いと言おうと思っていたレミリアの意思を余所に淡々と進んでいくレミリア以外の会話。

今日もレミリアのカリスマ性は粉々になっていた。
交わりだす氷狐と紅魔館組の運命。

それが今後どうなるのか……それは、レミリアにすら見えていなかった。

「どうせ私なんて……グスツ」

「れーあ、いいこいいこ」

「うわああああん!!」

「くっ、紫に続きレミリアまで……羨ましい……」

「はあ……頭をなでられながら泣くお嬢様……イイ」

紅魔館 承

「なあ霊夢」

「何よ魔理沙」

「氷狐の服装……どう思う？」

「すごく……見覚えがあります」

「うー？」

紅魔間でのパーティー当日の昼の博麗神社の境内に、霊夢と魔理沙、氷狐はいた。

ここで待ち合わせ、3人で一緒に行こうと計画してのこと……なんてことはあるはずもなく、魔理沙は特に理由もなく今来たばかりである。

そんな中、霊夢と魔理沙は氷狐の服装を見て固まっていた。

あまり、というか全く触れてはいなかったが、氷狐の普段着は人里の子供と同じような何の変哲もないごく普通の着物である。そんな氷狐の今の服装は、白の動きやすそうな長袖と長ズボンに紫色の対極図が描かれた前掛けのようなもの。つまり……。

「出てきなさい紫……」

「……」

「うおあつ?! どっからでてくるんだお前は!」

「ゆーりー!」

霊夢に名を呼ばれて押入れからぬっと冷や汗をかきながら現れた女性、八雲 紫とよく似た服装をしているのだ。

因みに、氷狐は紫がでるなりすぐに抱きついた。

「氷狐! そいつから離れなさい! そしてすぐにその服も脱ぎなさい!」

「霊夢……お前、そういう趣味か?」

「違う! 氷狐が紫のようになるのを防ぐためよ! それに今から紫みたいなのと一緒にいたらあの子の将来に関わりかねないわ!」

「なんとという息子の将来を真剣に心配するお母さん発言!」

「私みたいなのって……しかも服もだめなの? 私どれだけ危険人物なのよ……!」

「く〜♪」

博麗神社は今日も元気に混沌としている。

霊夢が落ち着いてきたところで4人は一度居間に移って机を囲んだ。囲んだとは

言ったが、氷狐は紫の膝の上である。うらやましい人にはうらやましいことだろう。

「で、なんで氷狐は紫と似た服を着ているの？ ついでに、なんでそこまで懐かれているのかも教えろ」

「思いつきり命令ね。服装は、氷狐から今日はパーティーがあると聞いたからきつちりとした服を、と思つたからよ。懐かれている理由は……」

「ちよつと待った。氷狐から聞いた？」

聞き流せない言葉が出たのか、魔理沙が紫の語りを止める。

霊夢はいやな予感を感じたのか、たらりと汗を流して紫をにらんでいる。

「ええ。その顔はどこで聞いたのかって顔ね。それも教えてあげましょう」

二人の顔を見て、紫は氷狐の頭を撫でながら勝ち誇つたような笑みを浮かべた。そしてその口から出た言葉は……一匹の般若を降臨させた。

「だつて氷狐……私の家に住んでるんですもの♪」

「死ねえ!! 夢想封印・瞬!!」

「きゃああああああ!!」

ぴちゅーん。

母の怒りは何よりも強いものである、とはこの惨劇を見た魔理沙が惨状を見せないように氷狐の目を隠しながら思ったことである。

時間は夜。人間にとつては遅い時間だが、妖怪にとつては今は動き時である。

特に吸血鬼であるレミリアにとつては、夜こそが朝と言っても過言ではない。そんなレミリアは、空に浮かぶ月を外で眺めながら招待した待ち人を待っていた。

レミリアが誘ったのは霊夢とおまけに氷狐。だが、恐らくは魔理沙も来るだろうと予知していた。

「あの魔法使いが来るなら、パチエが喜ぶわね。それに……」

チラツと、レミリアは自身の下にある紅い館……その遥か下に目を向ける。その目は、どこか憂いを感じさせるものだった。

「あの子も……ね」

あの子というのは誰を指しているのか。

その幼き紅い瞳は、誰を想い、何を思うのだろうか。

もしもその想いが現実《カタチ》となるのなら、彼女はいったい何を想う《ねがう》のだろうか。

「……フラ」

「お嬢様、霊夢たちが到着しましたよ」

「さくや。いま。わたしのしりあすぱーと。せりふも。とちゆう。だった」

「それは申し訳ありませんでした。ですが、招待したお客様を待たせるのは当主としてはどうか？　と思いましたが」

「……うん」

レミリア・スカーレット、今日も元気にカリスマブレイク。涙ながら頷く彼女を見て、従者は危険な目を向けた。

紅魔館の主従、今日も平常運転である。

レミリアが霊夢たちを迎えるためにロビーに降りてみると、そこには予想を超えた大人数がいた。

霊夢と魔理沙と氷狐は誘ったor予想通りなので良しとするが、問題はそれ以外のメ

ンバー。

幻想郷の賢者の八雲 紫、鬼の伊吹 萃香、人形使いのアリス・マーガトロイド、冥界に住む亡霊の西行寺 幽々子にその従者、魂魄 妖夢。このメンバーはレミリア自身は誘った覚えも誘う気も一切なかったメンバーである。

「よく来てくれたわね霊夢に氷狐。ところで、この大所帯はなにかしら？」

「いざこざに向かおうとしたら次から次へと現れてね……」

呆れたような口調のレミリアに、霊夢はため息を吐きながら答え、後ろのメンバーを見やる。

すると、口々に理由を話し始めた。

「氷狐にとつて初めてのパーティーだもの。保護者がついてくるのは当然でしょ？」

「ばあていつて要するに宴だろ？ 酒も出るだろ？ 私が出ないわけにはいかないな」

「私は魔理沙がいたから……じゃなくて、えつと……」

「美味しいもの沢山食べられるんでしょう？ それに、妖夢にも楽しい思いをさせてあげないとね」

「わ、私は……その……幽々子様の付き添いです」

次々出てくる理由に、レミリアは内心で大きいため息を吐く。というか、内心でツツ

コミまわっていた。

まず、賢者と氷狐はどういう関係なのか？ 保護者は霊夢だと思っていたのだが。次に、鬼はどこから情報を得たのか。間違つてはいないが酒……主にワインだが、その全てを飲み干されそうなので帰ってほしい。

人形使いは魔理沙を見ながら頬を染めて理由を考えるな、もう言ってるから。亡霊は真面目に帰れ。食料が根こそぎ食われかねない。それから従者、お前も目線が魔理沙にいつてるぞ。それでいいのか冥界組。

しかし思っても口にも表情にも出さないのが紅魔館当主のレミリア・スカーレット。500年の時を生きた吸血鬼のカリスマは伊達ではないのだ。

「まあ……みんなよく来てくれたわね。今宵は紅魔館の当主、レミリア・スカーレットが精一杯持て成させてもらおうわ」

両手を広げ、レミリアは自らの視界に今いるメンバー全てを入れながら話す。そして、楽しそうに笑みを浮かべた。

「こんなにも月がきれいだから……楽しいパーティーになりそうね」

そして始まった紅魔館主催のパーティー。料理は全て咲夜と妖精メイドたちによる

ものであり、ワインは全て上等なものだ。

ゆつくりと味わえば、それはそれは煌びやかなパーティーとなったことだろう……しかし、実際は。

「氷狐、紫の家なんかよりも私の神社に住まない？」

「あら、貧乏神社よりは確実にいい暮らしのはずだけど」

「言うわね紫ババア。お揃いの服を氷狐に着せるとか正直引くんだけど」

「白昼堂々 “脱げ” と言ったあなたには負けるわ小娘」

「うー？」

霊夢と紫が氷狐の親権（？）をかけて醜い言い争いを繰り広げていたり。よく分かっている氷狐に癒されたり。

「うーん甘いなあ……もつときついのないの？」

「あ、これ美味しいわね」

鬼と亡霊が物凄い勢いと速度でワインと料理を胃の中に消していったり。

「ねえ魔理沙、これ美味しいわよ？ 食べてみなさいよ」

「あら、これもなかなかよ。魔理沙もどう？」

「ま……魔理沙さん……これ、どうぞ」

「いや、私は自分のペースで食べるからな？」

魔法使い3人と半人半霊がゆりゆらららゆるゆりしていたりと慌しいことこの上ない。

もはやパーティーなどという上等なものではなく、完全に宴会と化していた。

「……まあ分かってたことだけどね」

「楽しいからいいじゃないですか」

「……まあね」

隣で笑う門番の美鈴の言葉を聞いて、レミリアは小さく笑う。

咲夜と小悪魔は料理の追加やワインの追加で忙しいので今はこの場にはいない。それでも、きつとこの宴を楽しんでくれていることだろう、とレミリアは思う。

「後はフラン様がいれば……」

「……そうね」

美鈴の顔が暗いもの変わる。それはレミリアも同じだった。

本当なら、今回のパーティーには妹であるフランも参加しているはずなのだ。

しかし、フランはいつ暴走するか分からない状態……とてもではないが、参加させることは難しかった。

「れーあ」

「氷狐？ どうしたのかしら？」

「うー……あーうー……」

不意に、氷狐がレミリアの腕を引つ張った。

レミリアがそちらを見てみれば、なにやらもじもじと両足をこすり合わせている氷狐の姿。

「……トイレ、かしら？」

「うー」

レミリアの言葉に、氷狐は恥ずかしそうに頷いた。

こんな騒がしい、もはやパーティーともいえない宴の中でも癒しはある……吸血鬼と門番はそう実感した。

「美鈴、お願いね」

「はい。いきましようか」

「うー……」

美鈴は氷狐を抱き上げ、すぐさまトイレへと向かうのだった。

あれからしばらくの時間が過ぎた。

流石に大騒ぎからは騒ぐ程度に落ち着いており、料理やワインの減る量も少なくなってきたので今は咲夜に小悪魔、メイド妖精たちも参加している。

不意に、霊夢がレミリアに問いかけた。

「ねえレミリア」

「なに？ 霊夢」

「氷狐はどこにいるのかしら？」

レミリアには霊夢がなぜ冷や汗を流しているのかわからなかった。

だから、普通に答えるのは仕方のないことだった。

「氷狐なら、さつき紅魔館の中を探検したいって言ったから許可したわよ？」

深く、地下深くに伸びる階段を氷狐は下りていた。その顔は実に楽しそうだ……子供ゆえの好奇心が、さらに深く氷狐の歩みを進ませる。

やがてたどり着いた、とある部屋の大きな扉。氷狐が触れるとバチツと音が鳴り、何か不思議な力で封印されていることが分かる。

そして氷狐は自身の好奇心に任せ……思ってしまった。

“このおへやにはいつてみたい”

「っ!? レミィ! 封印が!」

「え!?!」

「まさか!!」

ギィ……と重い音を立てながら開く扉。その奥に動く人影に、氷狐はゆつくりと近づいていく。

人影もゆつくりと近づいてきており……やがて氷狐と人影はお互いを確認できるところまでできた。

氷狐よりもわずかに大きな背に金髪の髪、枯れ枝に7色の宝石がついたような羽。

それらの特徴を持つこの少女こそ、地下のこの部屋に封印されていたレミリアの実妹。

「あなたはだあれ？」

「うー？ ひー♪」

「そう、氷狐って言うんだ。私はね……」

フランドールっていうんだ。

悪魔の妹は無邪気に笑う。子狐の妖怪も無邪気に笑う。

不意に、フランの視線が氷狐の右手に向いた。

「大丈夫？ 血……出てるよ？」

「うー？」

氷狐が自分で右手を見ると、人差し指から血が滴っている。

どうやら扉に触った時の封印のせいで切ったような状態になったらしい。

「……アハ♪ 赤い……あかあい♪」

おもむろに、フランが氷狐の指をくわえた。

流れる血を舐めとり、小さな口からは時折ちゅぷ……とどこか艶めかしい音が漏れる。

「うひゃ……あ……うー……」

「甘い……あまあい♪ ふふっ……うふふ……あははははー！」

熱っぽく声を漏らす氷狐の反応を見ながら熱に浮かされたような表情で指から口を

離すフラン。

そして…狂ったように笑いながら赤い眼を氷狐にむけながら言い放った。

「壊《ころ》してあげる!!」

狂気が、室内に充満した。

「咲夜！ 咲夜はどこ!?!」

「メイド長なら追加の料理を作りに行ったぜ。霊夢はどこに行ったんだ?」

「ああもう肝心な時に！ 霊夢なら地下に行ったわ!!」

「は？ フランのどこ？ なんで」

「氷狐がフランの所に行った可能性があるからよ!!」

紅魔館 転

「あーあ……壊しちゃった」

紅に染まる部屋の中でフランがつまらなそうに眩く。が、その表情は喜びの色に染まっていた。

目の前に広がる真紅の水溜り……そこに体を浸す小さな妖怪。

青かった髪はすっかりフラン好みの紅に染め上げられ、右側の手足がない歪な体は壊れたぬいぐるみのよう。

「あ……うう……」

でも、死んでない。妖怪はこの程度では死なない……死ねないのだ。

涙を流し、光を灯さない青く濁った瞳はフランをしつかりと見つめている。しかし、そこに不安も恐怖もなかった。

「ふふ……氷狐は優しいんだね……私を見ても怖がらない。こんなことをしたのに、私を嫌わない」

優しく、フランは横たわる氷狐の髪を撫でる。そこに先ほどまでの狂気はない。

あるのは狂喜……そして、僅かな恐怖。

「でも氷狐はすぐにどこかへ行っちゃう。霊夢みたいに、魔理沙みたいに、私を閉じ込めたお姉さまみたいにすぐに私の前からいなくなる。ずっと遊びたいのに、ずっと一緒にいたいのに、私の隣にはだあれもいてくれない。この気持ちを氷狐は分かってくれる？ どうしたら、みんな分かってくれる？」

狂喜と恐怖に寂しさが加わり、更にそこに悲しみが加わる。

生まれて495年……フランは自身の能力の危険性を考慮したレミリアによってこの地下の部屋に封印された。

そこからは実の姉と会話した回数は両手の指で足り、部屋から出た回数は片手の指で足りる。

一番会話した数が多いのは咲夜だが、それも向こうから食事を持ってきた、下げに来たという一方的な会話とも言えないもの。

そこまで思い浮かべたフランは、何かを思いついたように氷狐を抱きしめた。

「そうだ氷狐、いいこと思いついちゃった！ 分かってくれないなら、分かってうとしてくれないなら！」

氷狐を抱きかかえながら、フランは再び狂ったように笑いながらクルクルと回る。

そしてその口から放たれたのは……心からの狂気《ネガイ》だった。

「私とおんなじになればいいんだ!!」

「っ!?!」

もうすぐフランの部屋にたどり着くといった距離で、飛んでいた霊夢の体が止まる。その霊夢の隣に、魔理沙とレミリアが不思議そうに止まった。

「どうしたの霊夢、フランの部屋はすぐそこよ?」

「そうだぜ? それにどうしたんだよ、そんなに震えて……」

「遅かった……」

「……………は?」

不思議そうに、心配そうに首を傾げる二人の言葉が聞こえていないかのように一言だけ呟き、霊夢は再び飛び始めた。

その行動を不思議に思う間もなく二人もその背を追い、フランの部屋の前で止まった。霊夢の後ろから部屋の中を覗き見る。

暗く、紅く、そしてなぜか血なまぐさい部屋。床の乾くどころか未だに広がり続ける血が、流れてそう時間は経っていないことを示している。

これは誰の血なのか？ 部屋の中を見ている3人が、同じ思考をする。何よりも不可解なのは……。

「あははは！ すごくすごい！ どうやったの氷狐!? どうやって『私』になったの!?」

「何言ってるの？ 氷狐はそっちでしょ？」

「ちがうよー私が本物のフランだよ？」

「ちがうよー私が本物のフランだよ」

「わーたーし！」

「私だつてば！」

「むー！」

フランドールが2人いて、互いに互いが本物だと言い張っていることだ。

フランは『フォーオブアカインド』という4人に分身するスペルカードを所持している。だが、それは4人以上にも以下にもならない。

二人のフランの会話から察するに、どちらかが氷狐で、氷狐がフランに変身しているのだろう。

しかし、その答えにたどり着いたのは氷狐の能力を知る霊夢と魔理沙のみ。レミリアは信じられないといった表情で口喧嘩する2人のフランを眺めていた。

「な、なに？　なんでフランが2人いるの？」

「片方は氷狐よ。にしても……氷狐の能力はこんなことまでできるのね……」

「どっちもフランにしか見えないぜ……」

呆然と口喧嘩を見守る3人。

やがてそんな3人に気づいたらしく、2人のフランは部屋の扉の方を見た。

そこにいる霊夢達を視界に入れた瞬間、フラン達は壊れたような笑みを浮かべた。

「お姉さまだ」

「霊夢もいるね」

「魔理沙もいるよ」

「お姉さまは意地悪だ、ずっと私をここから出してくれない」

「霊夢はヒドイ巫女だ。私と遊んでくれたのにそれから一度も遊びに来てくれない」

「魔理沙はうそつきだ。また来てくれるっていったのに結局一度も来てくれない」

フラン達は交互に霊夢達に向かって言葉を投げつける。

どちらかは氷狐……それは分かっているはずなのに、姿が、言葉が、感情が、全てがフランにしか見えない。

意地悪と、ヒドイと、うそつきだと言われた3人は心苦しうに顔を歪ませる。それでも、フラン達は言葉を投げつけるのをやめない。

「お姉さまが最後に私に言った言葉は、 “もうここから出たらだめよ” だった」
それは紅霧異変のとき、この部屋に戻るフランに言った言葉だった。

「霊夢があの時言った言葉は、 “また遊んであげるわよ” だった」

それは紅霧異変のとき、きまぐれに吐いた霊夢の言葉だった。

「魔理沙が私に言った言葉は、 “また会いに来るさ” だった」

それは紅霧異変のとき、霊夢の言葉を聞いて少し寂しそうにしていたフランに向けた慰めの言葉だった。

意地悪のつもりではなかった。地下の部屋に閉じ込めることがフランの能力を暴走させない苦肉で最良の方法だと思っていたから。

ヒドイと言われたのは心外だった。確かにまた遊ぶとは言ったが別に日程を決めていたわけではないし、気さえ向けば本当にまた遊んでやるつもりだったから。

うそをついたわけではないし、魔理沙は結構な頻度で紅魔館に来るしフランに会いに行こうとした……ただ、パチュリーと話しているうちに帰らなければならない時間が来てしまうから結局会いにいけないかったのだ。

しかし、自分達を見て涙を流すフラン達を見て、その考えや行動がどれだけ彼女の心を傷つけたのか知ってしまった。

「お姉さまなんか大嫌い。全然私とお話してくれない」

「霊夢も大嫌い。ほかのやつとは遊ぶくせに私とは遊んでくれない」

「魔理沙も大嫌い。いつもパチュリーとばかり会って私とは会ってくれない」

「みんな」

「みんな」

「大っ嫌い…!!」

そこから始まったのは二つの狂気の嵐が吹き荒れる殺し合い。

スペルカードルールを無視した、完全に殺すための弾幕を撒き散らすフラン達、心苦しきから反撃の手に移れないレミリアと魔理沙。

唯一、能力の恩恵でプレッシャーやら重力やらを無視できる霊夢だけが弾幕を放っていた。

「あはははは!!」

涙を流し、狂気に身を任せるフラン達の猛威は人間である魔理沙には敵しすぎる。

そのことを察してか、レミリアは魔理沙を抱えながら飛び、当たりそうな弾幕は、そ

うなる運命”を捻じ曲げて当たらなくしていた。本来ならルール違反だが、これは全うな弾幕ごっこではないので大丈夫だろう。

「いいなあ魔理沙」

「私はお姉さまに守ってもらったことなんてないんだよ？」

「一緒に飛んだこともない……妹なのに、家族なのに！」

「どうして私にできないことをみんなが簡単にできるの!!」

泣きじゃくりながら弾幕を放ち、その全てが魔理沙を抱えたレミリアへと向けられる。

弾幕自体は直線的な軌道であり、その速度は人間にはつらくとも吸血鬼たるレミリアには当たらない。

「普通の弾幕じゃ当たらない……なら」

「これはどうかしら？」

禁忌「レーヴァテイン」×2

フラン達が同時に同じスペルカードを掲げ、その手に巨大な炎の魔剣が現れる。

それを振るうと当然3人は避けるが、その振った奇跡から更に弾幕が襲い掛かってき

た。

それは部屋の中を埋め尽くしていき、段々と逃げ場がなくなってくる。

「つ……やめなさいフラン!! これ以上は部屋が崩れるわ! 生き埋めになるわよ!」

「いつ!? それは流石に勘弁してほしいな……」

特別頑丈なのか、それともなんらかの魔法的要因なのか、暴れている割にはまだ部屋は健在だ。

しかしこれ以上するならば間違いないで部屋は崩落し、フラン達も自分達もただではすまない。

それを危惧したレミリアの声は、フラン達には届かなかった。

「いやだ」

「やつと霊夢が遊びに来てくれたんだ」

「やつと魔理沙が会いに来てくれたんだ」

「やつと……お姉さまと会話ができたんだ」

「……フラン？」

気がつけば、フランから飛んでくる弾幕が止んでいた。

炎の剣はすでにその手になく、ただ泣きながらレミリアを見るフランと、そのフランをもう1人のフランが見つめている。

いつの間にか扉のところには紅魔館のメンバーと紫の姿もあり、みんながみんなフランを見ている。

「こんなところで食べるお菓子も料理も美味しくない。私はずっとお姉さまと話しながら食べたかった。こんなところで眠っても寝た気にならない。本当はお姉さまと一緒に眠りたかった。こんなところにいてもつまらない。私はずっとお姉さまと一緒に一日を過ごしたかった」

狂気の色はなりを潜め、ポツリポツリと自身の願い《オモイ》を呟いていく。

そんなフランを、もう1人のフランが優しく抱きしめた。

495年に渡り持ち続けてきた姉への想い……ただただ純粋に、妹は姉を想い続けた。

それでもそんなネガイは叶わない……フランが狂気を身に宿す限り。

「もう……独りは嫌だよ。でも……私は……」

疲れたような、あきらめたような声。その声を聞いた紅魔館のメンバーは、もう何も言えなかった。

ただ、紫が楽しそうに笑い、魔理沙が苦笑し、霊夢とレミリアがフランの前に飛んだ。

「言いたいことはそれだけ（かしら）？」

「……えっ……？」

「その程度のオモイでよく私に向かってヒドイとか言えたわね？ あんた、この部屋を見る限り氷狐を半殺しにしたでしょ。どっちがヒドイことしてるのよ。封印どころか滅するぞ」

「ひっ！」

「でも……私は……なに？ その続きは？ 笑えないことだったら許さないわよ？」

「ひうー！」

今まで感じたことがない圧倒的な怒気に、フランは震えてもう一人のフランにしがみつく。もう一人のフランはそんなフランを見て苦笑している。

なんで今自分は……霊夢はともかくとして姉に怒られているのだろうか……フランは涙目になりながら不思議に思った。

「……でもま、確かに私はあんたをないがしろにしてたし、氷狐から目を放した責任もあるからそこまでとやかくは言わないわ」

「私もあなたにしてきたことが最善だと疑わず、あなたの声に耳を傾けなかった……そんなにも想われていて、姉として嬉しいわ」

「でもこれだけは言っておくわ……自分から何かを諦めたやつに、願いが叶えられるわけがないのよ？」

それは厳しい一言だった。フランからしてみれば、理不尽にも思える言葉だった。

狂気はフランの強力な能力から来る言わば代償であり、自分ではどうすることもできない。

それが分かっているのに、495年も願って叶わないのに、これ以上どうしろというのか。

そんな心境を悟ったかのように、レミリアはフランの手をとった。

「あ……」

「……今まで気づいてあげられなくてごめんなさい。でも、気づいた今なら言える。私達一人一人が願ってもダメなら……今度はみんなで願いましょう?」

「お姉さま……それって……」

ずつと、フランは一人で狂気がなくなり、姉と共に過ごす日常を願っていた。

だが今のレミリアの言葉は……まるで。

不意に、フランの体を沢山の温もりが覆った。それは、紅魔館メンバー……咲夜、美鈴、パチュリーだった。

「え……?」

「みんな、あなたが狂気をなくして日々を過ごすことを願っていたのよ?この紅魔館に住む家族だもの……いつも願っていたわ」

咲夜はいつも食事を運ぶたびに願っていた。いつか、姉妹が笑いながら自分の作ったお菓子や料理を美味しいと言ってくれる日々を。

美鈴は門を守りながら願っていた。いつか、姉妹が自分に向かって「いってきます」と笑顔を向けてくれることを。

パチュリーはいつも探していた。フランの狂気を押さえ、姉妹が日々を共にできる術を。

そしてレミリアはいつだって願っていた。

「こうやってあなたの手をとってあなたと……フランと一緒にいられる日常を」
「あ……」

強く握られた手……最後にこうして手を握られたのはいつだったのだろうか。

もはやすっかり消えてしまった記憶……いや、もしかしたらなかったのかもしれない。
い。

それでも、この手は紛れもなく本物で。

この温もりは、間違いなく本物で。

みんなの願いは……確固たる真実だった。

「だから……もう一度、今度は一緒に願いましょう？」

「うん……うん！」

フランを抱きしめ、抱きしめられたフランが涙を流す。

そんな姉妹を少し羨ましそうに見つめ……もう1人のフランはその姿は五体満足の氷狐へと変わった。

フランはそんな氷狐に気づき、レミリアと共に抱きしめた。

「ありがとう氷狐……私のオモイを分かってくれて」

「うー。あーうー」

「うん……頑張る。狂気なんかにはもう負けないよ。私には……素敵な家族がいるか

ら

だから……もう一度心から願う。

この想い《ネガイ》は絶対叶う……不思議と、フランはそんな気がした。

そして5人は願う《オモウ》……それは、家族ゆえに。

フランの狂気がなくなり……姉妹がこれからの未来を共に歩めますように。

紅魔館 結

紅魔館の宴会……もとい、パーティーから一月の月日が流れた。

あのちよつとした騒動が終わった後は特に何もなく、幻想郷の住人達は平和な日々を送っていた。

勿論それはここ、紅魔館の住人達も含まれる。

「ん……」

窓ひとつない真紅の部屋の中で小さな人影がムクリと起き上がる。その人影とは、この部屋と紅魔館の主であるレミリア・スカーレットだった。

レミリアはごしごしと目を擦り、ぼーつとしながら現状を理解するために回らない頭で思考する。

上半身だけ起こしている自分の隣には妹のフランドールがすやすやと可愛らしい寝息を立てて眠っており、その姿を見るだけで自然と頬が緩んでいくことを自覚し、レミリアは優しくフランの頭を撫でた。それだけのことなのに、彼女はどうしようもなく幸せを感じていた。

こんな幸せな起床が始まったのは、20と5日前だったかとレミリアは回り始めた頭

で思う。

パーティーが終わった次の日、今まで閉じ込めていた妹に改めて謝罪をするべく地下室に行つた時、フランを含めた紅魔館の住人は酷く驚いた。

昨日まで狂気に振り回されていたフランから、狂気の色が全く感じられなかったのだ。もしやと思い、フランに数日だけ地下にいてもらつて美鈴とパチュリーに調べてもらったが、結果は二人とも“もう狂気を感じられない”だった。

能力があるにもかかわらず、狂気はフランの中から完全にその姿を消していたのだ。そうならば、もうフランを地下に閉じ込めておく必要はない。

願つた日々を、姉妹はようやく手に入れた。

「おねえさま……っ？」

長い回想を終え、レミリアは自分を呼ぶ妹へと顔を向ける。寝起き故にまだ眠そうに目を擦る姿はなんと可愛らしいことか。

いつの間にか握られている左手をしっかりと握り返し……その温もりが偽りなき現実だと改めて理解する。

「いっふ……おはようフラン」

「うん……おはよおねえさま」

甘えるような声で、フランは挨拶を返してくれる。そのまま寝ぼけたようにフランはレミリアの腰あたりに抱きつき、猫のように頭をこすり付けてくる。

これからもこんな日々が続く……運命を見るまでもなく、レミリアはそう確信していた。

身だしなみを整えた姉妹は食事処にて朝食をとっていた。時間帯は昼なので、形式的には昼食になるのだが。

「美味しいねお姉さま！」

「ふふ、紅魔館自慢のメイドが作ったもの……美味しいくないはずがないわ」
「ありがとうございます」

無邪気に美味しい美味しいと言って食べるフランを優しく見つめるレミリア……そんな姉妹を見ながら、咲夜は心に溢れる幸福感に浸る。

いつも願っていた、姉妹が共に食事をして自分の料理を美味しいと言ってくれる光景。それが今日の前にあり、これからはこれが日常となる。

従者として、何よりも紅魔館の家族として、こんなに嬉しい事はないと咲夜は紅茶のおかわりをねだるフランのカップに紅茶を注ぐ。

「ありがとう咲夜！」

日の光が入らない紅魔館にも太陽は存在する……咲夜はそう思った。

「本当によろしいのですか？」

「ええ。咲夜には悪いけれど、今回はフランとの初めてのお出かけですもの……姉妹だけで行きたいの」

「分かりました。お嬢様、妹様、ハンカチは持ちましたか？ ティツシユは？ 水筒に血を入れて持っていかなくて大丈夫ですか？ 日傘は絶対に手放してはいけませんよ？ あとそれから……」

「お前は私達の母親か」

心配性な従者の言葉に苦笑し、レミリアはうずうずとしているフランの隣に行く。

二人しておそろいの日傘を持ち、日に当たらないようにしながら飛ばずに歩いてゆつくりと門をくぐる。

フランにとつては初めてのお出かけになる……今日この日を記念日にしようと姉が考えていた時、不意にフランが日傘を持つレミリアの手に抱きついてきた。

「……うーら、日傘が落ちちゃうでしょ？」

「ごめんなさーい」

ペロツと小さな下を出しながら笑顔で謝罪の言葉を口にするフランに苦笑し、その頭を撫でる。

こんなありふれたことも、つい先日まではできなかった……そう考えると、姉妹の胸に暖かいものがこみ上げてくる。

そんな姉妹の姿を後ろから眺めている門番、美鈴もかなり心にきているらしく若干泣きそうになっていた。

ふと思いついたように、姉妹が後ろを向いて美鈴を見つめ、美鈴も姉妹を見つめる。

「言ってくるわ美鈴……門の守り、お願いね？」

「いつてきまーす♪」

「っ……はい……いつてらっしやいませお嬢様、フラン様」

長い間抱き続けていた願いが叶った瞬間、美鈴は泣きそうになった。なんとか我慢したが、声は震えてしまったから姉妹には自分が泣きそうになったことに気づいたかも知れない。

けれども姉妹はそれに触れることなく、フランは手を振りながらその場から飛び去っていった。

きつとこれが日常になるのだ……なら、いちいち泣きそうになってしまっていたら姉妹に心配されてしまうかもしれない。

なら、今日で涙を流しきってしまえばいい。そうすれば、今のような震えた声ではなく、しつかりと笑顔で送り迎えできるはずだから。

「いつてらっしやいませ」

もう一度、もうすつかり小さくなってしまった姉妹の影に送る言葉を呟く。

涙が頬を伝っているが、その声に震えはなかった。

「パチュリー様、レミリア様とフラン様がお出かけになられたようですよ」

「そう」

自身の従者である小悪魔の言葉に短く返し、パチュリーはゆっくりとした動作で見ている本のページをめくる。

そっけない、と言葉だけ聞けばそう思うだろうが、主の顔に微笑が浮かんでいたのを小悪魔は見逃さない。

「そんなことよりこあ、頼んでいた本は見つかったかしら？」

「は、こあ、ハハハ」

“こあ”というのは小悪魔の愛称である。こあはパチュリーの目の前の机にドサッと分厚い本を10冊ほど置く。見た目は華奢な女性なのだが流石は悪魔というべきか、かなり力持ちのようだ。

置かれた本は魔力や妖力の扱い方、一般常識などの本ばかり。それは、パチュリーがフランに学ばせようとしているものだった。

「これを全部学ぶのは大変そうですね」

「私に数百年他の事を学ぶ時間を奪った罰よ。泣いても怒っても全部をフランの頭に叩き込むまでは許してやらないわ」

苦笑いを浮かべるこあに怒ったような、少々きついことを言っているパチュリー……だが、それは建前であるところあは知っている。

何分引きこもりがちな主だ、コミュニケーション能力などあるはずもない。この本の山は、パチュリーなりのフランとの接し方を考えた末のこと。

不器用な主に、こあは自然と笑みを浮かべていた。

「……何笑っているのよ」

「いえいえ、何もありませんよ。パチュリー様は可愛いなあって思っただけです」

「バカなこと言つてないで、他にも本があるか探してきなさい」

「はいはい♪」

主に背を向け、こあは新たに本を探すべく図書館の中を飛ぶ。

可愛いと言つた時に顔を紅くした、愛しい主を脳裏に思い浮かべながら。

「うー」

「うー？」

「うー」

「うー」

「うー☆」

「うー☆」

博麗神社の縁側にて、レミリアがそこにいた氷狐となにやらうーうー言い合っていた。

やだ、なにこれ楽しい……そう思ってしまったレミリアには、もう吸血鬼とかカリスマとかそんなものはどこにも存在しなかった。

「何を氷狐で遊んどるかお前は」

「きゃん！」

そんなレミリアが氷狐で遊んでいるように見えたのか、いつの間にか背後にいた霊夢が彼女の頭をたたく。

その隣には、霊夢を呼びに行っていたらしいフランの姿もあった。

「氷狐ー♪」

「うー？ ふらん！」

「なん……だと?」

氷狐がフランの名前を「すっかりと」呼んだことに霊夢とレミリアは驚愕し、氷狐とフランは互いに抱きしめあっている。

子供同士の抱擁に一瞬和んだのもつかの間、霊夢とレミリアは二人に詰め寄った。

「ひ、氷狐、私は?」

「れーむ」

「私は?」

「れーあ」

「この子は?」

「ふらん!」

「なぜ!」

霊夢は自分の名前はちゃんと呼んでもらっていないのにフランの名前はちゃんと呼んでいるというショックから。レミリアも自分の名前はちゃんと呼んでくれないのに妹の名前はちゃんと呼んでいるショックから、2人は頭を抱える。

突然頭を抱えた2人を氷狐は不思議そうに見るが、フランはなんとなくわかったのか苦笑した。

二人が落ち着いた頃合を見計らって4人は居間へと向かい、そこでテーブルを挟んで対面する。

そして、レミリアが頭を下げた。

「二月前のパーティーで妹が迷惑をかけたわ……紅魔館の主として、何よりもフランの姉として、あなた達に謝罪します……ごめんなさい」

「ご……ごめんなさい」

2人して頭を下げ、謝罪の言葉を口にする。誇り高い吸血鬼が……とも思うが、それが謝らない、頭を下げないという理由にはならない。

本当に悪いと思っている……が、許してもらえるかどうかは分からない。

霊夢が氷狐を大事に、大切に思っているのはこの幻想郷中に知れ渡っているといつても過言ではない。

その氷狐を、フランはあろうことか半殺しの目に合わせてしまった……何よりも、フラン自身が氷狐を傷つけてしまったことを激しく後悔していたのだ。

びくびくと、先ほどまで楽しかった空気が嘘のように静まり返っていることに姉妹は怯える。

もしかしたら、もうこの間までの関係がなくなってしまうのではないかという不安があった。

そんな2人に返ってきた言葉は。

「あーうー」

「ん、許す」

そんなあつさりとした言葉だった。

あまりにもあつけなく許されてしまった姉妹はもしや聞き間違いかと思い、今なんと言ったのかを聞いてみるが、返ってきた言葉は許すの一言。

先ほどまでの自分達の不安はなんだったのかというほど、姉妹はあつさりと許されてしまった。

今はこの神社で霊夢が作った昼食をご馳走になり、仲良くパクパクと食べている。

「まさか霊夢の手料理を食べられるなんて……というか正直、他の人にご馳走できるだけの食料がこの神社にあったことにビックリだわ」

「……しばらくは氷狐がお賽銭入れてくれるし、流石に私もヒモは嫌だから人里で妖怪退治の依頼とかしてるしね。最近では氷狐が賽銭箱みたいな扱いで人里の人からお金を預かってくるのよ。だから今は余裕を持って生活できているわ」

「でもそれって氷狐がいなくなったらまた貧乏神社に戻るってことよね？ それに今

の話聞いてると氷狐が霊夢にいい様に扱われている気がするのだけど……」

「ちよつと表に出なさいレミリア。日傘なしで弾幕ごっこをするから」

「私死ぬじゃない!!」

「おいしーねー♪」

「うー♪」

怒る霊夢と慌てるレミリアを放置し、フランと氷狐は昼食に舌鼓を打つ。

騒がしくも楽しい昼食だったが、霊夢とレミリアは半分も口にする事ができなかった。

夜、それは本来は妖怪、吸血鬼にとっては朝とも呼べる時間帯。

普段ならレミリアとフランも起床する時間なのだが、今日は朝に起きたので眠たくて眠たくてしようがなかった。

とはいえ夕飯は口にしたし体も清めたしパジャマにも着替えたので後は寝るだけ。姉妹はレミリアの部屋で同じベッドに入り、掛け布団の下で手を繋ぐ。

こうしなければ、フランは悪夢を見てしまうのだ。狂気こそ消えたが、495年に渡る孤独は根深く、今もフランはこれは幸せすぎる夢ではないのかと思うこともある。

そんなときはこうして誰かに触れるのだ。ぎゅつと握り返される手は紛れもなく現

実であると。感じる温もりは真実であると。

目の前にいる、自分の頭を優しく撫でてくれる姉は妄想なんかではないと。そこまで確認して、フランはようやく安心して眠ることができる。

「おやすみお姉さま」

「ええ……おやすみフラン」

額に口付けられ、安心しきったようにフランは目を閉じる。今日もとてもいい夢が見られそうだ。

どんな夢が見られるだろうか。姉と外を散歩する夢でもいいし、メイドの手伝いをする夢でもいい。図書館の魔法使いと木陰で読書をしたり、門番に庭を案内してもらうのもいい。

それとも巫女と弾幕ごっこをする夢を見れるだろうか？ 普通の魔法使いと競争するのも楽しそうだ。

(……そうだ)

自分を狂気から救ってくれた、酷いことをしたのに自分を嫌わなideくれた子狐の妖怪の夢を見よう。

自分の気持ちを知って分かってくれた……純粋で可愛らしい、自分が大好きな妖怪の夢を。

それはきつと……楽しくて、素敵な夢になるに違いないのだから。

「出てきなさい紫」

夜、神社の縁側にいた霊夢がそう呟くと突然彼女の隣の空間が裂けた。

裂けた先には目がギョロギョロと蠢く気持ちの悪い空間が広がっており：その中から紫が現れ、完全に外に出るとその裂け目：スキマがまるでそこになかったかのように閉じた。

「相変わらず凄い勘ね」

「それはいいけど、氷狐は？」

「ぐっすりと寝てるわよ。勿論我が家でね」

にやりと笑う紫に霊夢は殺意を覚えたが、今はその話は関係ないので心の奥へと追いやる。

「……あの日、氷狐は完全にフランになっていたわ。まあオモイさえあればほぼなんでもできる能力なんだから、全く同じ姿になるくらいは簡単なんでしょう」

そこで一度区切り、霊夢は息を吐く。パーティーの日、氷狐は完全にフランの姿となっていた。

まあ今までも死の淵から蘇ったり鬼の能力を封じたりしたんだから今更変身できるとしても差ほど驚きはしない。

「でも『アレ』は流石に予想外よ。力も、妖力も、話し方や雰囲気に至るまで全て一緒。しかもスペルカードまで使ってきた上にそれも全くの同威力。もしかしたらフランクの能力すらも持っていたかもしれない」

霊夢が知る氷狐の妖力は精々小妖怪程度。何度も妖精であるチルノに弾幕ごっこで負けているようだし、空も少しの距離しか飛ばない。

しかし、フランに変身した氷狐の力はフランのそれと全く変わらないものだった。それはつまり、オモイさえあれば氷狐は自分の力量や在り方といったものまで自由ということに他ならない。

「答えなさい紫……氷狐をあんたの家に住ませたのは『なぜ』？」

霊夢の問いに、紫は答えない。胡散臭い笑みを浮かべたまま、ただ夜月を眺めている。その姿が癪に障ったのか、霊夢が怒鳴り声を上げようとする……その前に、紫は口を開いた。

「霊夢……あなたは氷狐のことをどう思ってるのかしら？」

「……はっ」

「私は気に入ってるわ。私だけじゃなく、藍も橙もね。橙が氷狐と仲良くしているのを見ると藍が嫉妬しちやっつてね、そんな藍を2人は不思議そうに見るものだから藍もしどろもどろになって……最後には3人でお昼寝したりする時もあるのよ？」

いきなりこいつは何を言っているのかと霊夢は思うが、話をしている紫は今言ったことを思い出しているのか随分と優しい笑みを浮かべている。

そんな話を聞きたいわけではないのだが、なぜか口を挟む気にはなれなかった。

「そんな時間が、私はとても愛おしい。だから安心しなさい霊夢。少なくとも、今は私が氷狐をどうこうするつもりはないわ。私だって、藍と同じ狐の妖怪である彼を息子みたいに思っているんですもの」

今は。そう言って笑う彼女には嘘偽りはないのだろうし、霊夢の勘も嘘ではないと言っている。

それでも、霊夢は不安に思ってしまうのだ。

また、氷狐が自分の知らぬところで口も聞けぬ姿になってしまうのではないかと。

「……それならいいけどね」

「過保護は嫌われるわよ？お母さん♪」

「黙れ年増。あんたはお母さんじゃなくておばあさんでしょうが」

「言うじゃない小娘」

バチバチと2人の間で火花が散り、次の瞬間には夜空に弾幕の火花が散った。

人里では花火だ祭りだという声が上がリ、どこぞの鬼が弾幕花火を肴に酒を飲む。種族は違えど笑顔は同じ……それはきつと、*“そこ”*に友がいるからこそ。

「ええ!?!昨日お祭りがあつたの!?!」

「お祭りかどうかは分かりませんが、人里の方が随分と騒がしかったですよ?一日中門の前にいましたが、花火がとてもキレイでした」

「うう、いいなあいいなあ、私も見たかったなあ」

「また見れるわよ、あきらめなさい」

「そんなこと言つて、話しを聞いたとき一番残念そうにしてたのお姉さまじゃない」

「ベベベ、別にぎ、残念なんておもつてないわよ!?!」

(ああ、凶星で焦るお嬢様も……イイ)

八雲 紫 起

〔八雲 紫《やくも ゆかり》〕

容姿こそ幼さの残る少女寄りの女性だが、その実1000を越える時を生きる大妖怪であり、「賢者」の異名を持つ。

「境界を操る程度の能力」を持ち、その使い方は様々。

「スキマ」と呼ばれる異空間への入り口を作り出して全く別の場所へと移動したり、境界などの物理的境界を操るだけに留まらず、夢と現実・物語の中と外といった概念的な境界や、物体が個として存在するための「自分とそれ以外を分ける境界」にまで及び、万物の創造と破壊を司る、神にも匹敵する能力と評されている。

胡散臭い雰囲気で他人からは近寄りがたい、よく分からない、心のうちが読めないと言われ、あまり良い感情を持たれない。本人は結構寂しがり屋だったりするのだが。

「幻想郷」を作った存在であり、幻想郷の母と呼べる存在で心から幻想郷を愛している。

どこに住んでいるかは一部の存在を除いて知られておらず、冬の間は冬眠している。

〃八雲 藍《やくも らん》〃

紫が使役する式神にして九尾の狐。非常に美しい容姿を持ち、普段は八雲家の家事全般と幻想郷に異常がないかの見回り、結界の調整などを行っている。

冬になると主が冬眠するため、その間の仕事は全て彼女が引き受けることとなる。

能力は〃式神を使う程度の能力〃であり、その能力は名前のとおりなので省略させていただく。

橙という式神を持ち、親バカと呼ぶべき溺愛っぷりを発揮しては紫に呆れられ、寂しい思いをさせている。

〃橙《ちえん》〃

二尾の尻尾を持つ化け猫の妖怪で藍の式神でもある。

容姿は幼い少女に二尾と猫耳が生えたそれで、式としても猫としても水が大の苦手。

藍のことを〃藍様《らんしやま》〃と言って慕い、よく後ろをついていく姿を紫に目撃される。

今回はこの八雲家とともに暮らす氷狐が紫をメインに、いつも通り妖怪や人間達とほのぼの、時に慌しく過ごしていく……そんなお話。

「……………ふ……………あ……………」

障子越しに入ってくる朝日を浴びながら、私は気持ちよく目覚める。

寝起きで頭が回らない状態でボーっとすること数秒、眠気を覚ますために水を浴びに井戸へと向かう。幻想郷と外の世界の境にあるこの家は、服や食器といったものこそ外の時代に合わせたものだが、根本的には人里のものと変わらない。

水を汲むのは井戸だし、火を起こさないとお風呂も沸かない。電気なんてものも当然なく、夜はランプや提灯を使わないと暗いまま。

井戸についた私は桶一杯分の水をくみ上げ、両手で水掬って顔を洗う。ひんやりとした地下水は気持ちよく、寝ぼけた頭を覚ますには最適だ。

「ああ、ここにいましたか。もう朝食の準備はできていますよ、紫様」
「ありがとうございます。すぐに行くわ」

私を起こしにきたのだろう、廊下を歩いていた藍は私を見つけるとそう言って去っていった。恐らく居間に向かったんだろう。

私は一度先ほどまで寝ていた自室へと向かい、寝巻きから普段着へと着替える。その

際、ふと敷いたままの布団にある二つの枕に目がいった。

「水狐は早起きねえ」

そんなこと呟いてクスリと笑みを零し、今でこそ共に暮らしている子狐の妖怪のことを思い浮かべる。

水狐の存在を知ったのは、彼が霊夢と出会うかなり前。偶然人里の様子を見ていた時に、偶然その姿を見た。

最初こそ取るに足らないと思っていたが、次の瞬間にはそんな考えは吹き飛んだ。山で採ったのであろう、山菜や果物を人里の店に売り、得たお金で甘味を頬張るその姿を見てしまったから。

人里の人間は妖怪という種族を敬遠し、悪く言えば恐怖の対象として嫌悪している。私が幻想郷を作った目的は“人間と妖怪の共存”。しかし、それは喰う側喰われる側の関係故に不可能に近かった。だから最初は、目の前の光景が嬉しく思う反面信じられなかった。

妖怪が人間と笑顔を交わし、笑いあいながら甘味を頬張るなど……私には到底信じられなかった。

次の日も、私は人里をスキマ越しに見ていた。あの妖怪が、もう一度現れることを願って。

その願いは叶い、妖怪は姿を現した。両手に昨日と同じく果物と山菜を抱え、売り、得たお金で甘味を頬張る。そこまでは一緒だった。

しかし、妖怪は今日は寺小屋へと向かい……休み時間だったのだろう外にいた人間の子供達と、驚くことに遊び始めたのだ。

楽しそうな人間と妖怪の笑顔を見て、私は涙が止まらなかった。目の前に、私が求めたモノがあるのだから当然だと思う。

次の日も、その次の日も私は妖怪を観察し……時間を追うことに、少しずつ妖怪のことが分かってきた。

名前、性格、口調、寝床、一日の基本的な行動……そして、能力。

私が知った当初の水狐は、特定の住処を持つていなかった。寝る場所は大抵木の根元や草の上。他の妖怪に襲われたらどうするんだ、冬はどうするんだと心配になったことを、いまでも覚えている。

結果から言えば、私の杞憂で済んだ。能力が分かった今でなら、あの時はきつと「朝まで無事に眠れるように」とか「邪魔されずに眠れるように」といったことをオモウことで無事だったんだと言えるけど、まだ能力の詳細を知らなかった当初は本当に不思議でしやうがなかった。

冬は意外にも、里の半獣のところへ厄介になっていた。里の近くで凍え死にそうな彼

を見つけたのが半獣……上白沢 慧音《かみしらさわ けいね》であり、その日から冬は彼女が氷狐を家に住まわせるようになったのが経緯らしい。

里の人間から妖怪と一緒に住むことに反感を買わなかったのかとも思ったが、普段の氷狐を知っている里の人間からすれば別に構わなかったようだ。

あの春雪異変の時も、慧音の家に住んでいたのだから……今から楽しみではある。過ごすと知つたら、彼女はどんな表情をするのか……

因みになんで冬の間だけでずっと一緒に住まなかったのかと言うと、氷狐が冬の間しかその留まらなかったからだろう。子供なので、一ヶ所に留まるのは苦手なのだろうか……それとも狐の本能が森を求めのだろうか。

そうになると、氷狐はいずれここを出て行くかもしれない……と思うけどそれは恐ろしくない。

同じ狐の妖怪である藍もいるし、そもそもここはそう簡単に出入りできる場所ではない。氷狐がこの家を出入りする際は、私か私の力の一部を使える藍がここと里近くの森を繋ぐスキマを開いてそこを通らせるのだ。それに、私か藍が確実に迎えに行くから出て行くことは……あ、能力を使われたらどうしようもないわね。

まあ自惚れかも知れないけれど、氷狐は私にもよく懐いてくれている……私と一緒に眠るくらいには。枕が二つあったのはそのため。

霊夢に言つたら間違いなく攻撃されるわね……これは内緒にしておかないと。

「つくしゆん」

どうやら着替えの最中で考え込んでいたらしく、すっかり体が冷えてしまっている。

あとでお風呂に入ろうと思いつつ、いつもの洋服に着替え、居間を目指す。着いた居間には、既に私以外の3人が座って待っていた。

「遅いですよ紫様」

「おはようございませす紫様ー」

「ゆーりー」

少し怒った表情の藍に元気な挨拶をしてくれる橙、立ち上がって私に抱きついてくる氷狐。

三者三様に私を迎えてくれる姿に、私は嬉しさから笑みを浮かべる。

「ふふ、ごめんなさいね藍。少し考え事をしたのよ。橙、おはよう。氷狐もおはよう。さ、早く座って食べましょう」

「うーん」

氷狐が私から離れて座っていた場所に座り、私もいつもの上座に座る。

目の前には藍が作ったのであろう焼魚やお味噌汁といった純和風の朝食。私は洋食の方が好みなのだけれど、美味しいからそこは気にしない。

「それでは、いただきます」

「いただきます」

「うー」

ここしばらく続いている、氷狐を加えた4人での朝食。昼食は基本的にそれぞれが自由に自由な場所で食べるが、夜はまたここに集まって4人で食べる。

永い時を生きる私にとって、この何気ない時間が何にも替え難い大切な時間。

「あら藍、お味噌変えた？」

「ああ、今日の味噌汁は橙と氷狐が作ったんですよ」

「本当？ とても美味しいわ」

「やったー♪」

「うー♪」

「こら、食事中はじつとしなさい」

私の感想を聞いて、子供2人が食卓の上でハイタッチを交わす。

そんな微笑ましい光景に苦笑を浮かべながら藍が注意し、2人は慌てて座りなおす。

こんな何気ない時間が、私は何よりも好きだった。

「最近2人は家事の腕が少しずつ上がってきています……もう2人が一緒になって料理を手伝ってくれたり掃除を手伝ってくれたりする姿が本当に可愛くてですね……」

「あなた、氷狐が橙と一緒にいることに嫉妬していなかった？」

「そんな過去のことは忘れしました。今では2人が私と一緒に家事をしてくれることが何よりの喜びです。全く家事をしない紫様と比べて2人のなんと愛らしく微笑ましく健気なことでしょう。それに比べて紫様は一番遅くまで寝て家事の一つもできずふらふらとどこかへ行つては時に朝帰り、時に酔っ払い、果ては脱衣麻雀だと言つて半裸で帰ってくる始末。いいですか？ あなたは私達の主であり、家主であるという自覚を持つてですね……」

（昔はあんなに紫様紫様と言つて私の後ろをついてきてくれたのに……あんなに可愛かった藍はどこへ行ったのかしら……）

「美味しいねー氷狐♪」

「あーうー♪」

八雲 紫 承

『あーうー!!』

『いてっ！ いててっ！ ごめんって氷狐！ 返す！ 返すから!』

『あんたも懲りないわねえ……氷狐のを盗るなって何回言わせるのよ』

「……………ふふっ」

朝食を食べた後、氷狐をスキマを使って彼が住んでいた森に送るのは私の日課となっている。

今日も彼は送った先の森で山菜と果物を採り、人里でそれらを売って資金を得、甘味処で好物の団子を頬張り…魔理沙に一つ奪われた。

それに怒った氷狐は文字通り牙を剥いて彼女の腕に噛み付き、いつものように氷狐を探していた霊夢に見つかって呆れられている。

スキマ越しから見える週に4度は繰り返られる喜劇に、私は思わず笑みを零してしまふ。相変わらず仲がいいことだ。

いつもなら魔理沙がある程度噛まれた後で渋々食べた分の団子を追加するのだけど……今日はそこに上白沢 慧音が加わった。

『ん？ 巫女に魔理沙、氷狐じゃないか。なぜ魔理沙は氷狐に嘯まれているんだ？』
『慧音！ 助けてくれ！』

『けーね！ あーうー、うーあーうー！』

『助けても何も……氷狐がこんな怒った姿は見たことないぞ？ 魔理沙、お前は何をしたんだ？』

『あれ？ 私が悪者だと断定されてる？ つていうか前にもこんなことあったような……』

もうこの時点ではオチが読めてしまった。上白沢 慧音……彼女は教育者、つまり教師であるため、道徳的に問題のある行為は見過ごせない真面目な性格をしている。とは言っても、お酒を嗜み、時にはハメをはずしてリフレッシュすることも出来る人物なので融通が利かないというわけではない。

何が言いたいかと言うと……。

『魔理沙が氷狐の団子を盗ったのよ』

『あーうー』

『なに？』

『い、一本だけだぜ！ それに盗った分はちゃんと返し……』

『盗る』という行為そのものがいけないのだ！ ふんっ!!』

『がふう!!』

慧音は魔理沙の頭を両手でがっしりと掴み……勢いよく自分の頭を彼女の頭にぶつけた。つまり頭突きね。

ゴツン、ではなくガゴン!! というおおよそ人間の頭から出るような音ではない音を出し、魔理沙は目を回して地に伏した……悪の栄えたためしなし……ってことね。なぜかぶつかる瞬間に“決着!” という文字が浮かんだ気がしたけど、気のせいでしょう。

その後は慧音の誘いで彼女の家で朝食を食べることになったみたいだけど、既に我が家でそれを終えている氷狐が彼女の家で出された朝食を食べることはなかった。団子は食後のデザートってところね。因みに、魔理沙は霊夢が足を掴んで引きずっていったわ。

『どうした氷狐、食べないのか?』

『うー』

『お腹が一杯なんですって』

『ふむ、そうか……なら仕方ないな』

本当に残念そうに、彼女は苦笑しながら氷狐の分を下げる。きつと、久々に彼と一緒に食べたかったのね。

だけど私は謝らない。だって妖怪だもの。

『……紫……いつかクロス』

聞こえてきた霊夢の怨嗟の声に、思わず竦みあがってしまった。氷狐に聞こえないように呟いたのか、彼は可愛らしく首を傾げているけれど。

少しして魔理沙が復活し、氷狐を除いた3人で朝食を取る姿を氷狐と、スキマ越しに私が見るといふ奇妙な空間が出来上がった。

氷狐は暇そうにしている……なんてことはなく、何が楽しいのか3人の食事風景を見てニコニコとしている。きっと誰かと一緒にいるだけで楽しいのだろう。

食事が終われば慧音は寺小屋に、霊夢達は神社へと向かう。その際、氷狐は飛べないので霊夢が抱きかかえて飛んでいる……私も今度やってみようかしら。氷狐が震えながら霊夢にしがみついていたのが少し気になったけど。

神社に着けば、食後の運動とばかりに魔理沙が氷狐を弾幕ごっこに誘い、彼もそれを受けた。

結果は当然魔理沙の圧勝……妖力も少なく空も飛べない氷狐が魔理沙に勝てるはずもなかった。しかしそこに悔しきはあっても恨みや憎しみなんて無粋な感情はない。

魔理沙も氷狐も笑って、楽しんでやっていた。妖怪と人間が共に笑いあうこの光景が、もつと広がればいいのに……私はそう願わずにはいられなかった。

『ほら魔理沙、次は私とよ。氷狐の敵を取らせてもらおうわ』

『は!? ちょっとは休ませてくれよ!』

『嫌よ。だってそのほうが楽じゃない……主に私が』

『ひでえ!!』

その後のことは、幻想郷の結界の調整やお昼ご飯、外の世界からの“食料”の補給をしていたので見ていなかったからよく知らない。けれど、いつも通り楽しんでいたのだと思う。

今は夕方……私は藍も持っている通信用の札を取り出し、その札に向かって話しかける。

「藍、今いいかしら?」

『はい、なんででしょう紫様』

これは同じ札を持っている人物とお互いに遠く離れていても会話が出来るというものの。

この札を持っているのは、私と藍の2人だけ……いつでも居場所がわかるように橙と氷狐にも渡しておこうかしら。

「もう氷狐は迎えに行つたかしら？」

『いえ、橙もまだ帰つていないので、今から2人とも迎えに行こうかと思つていたところですよ』

「そう。ならあなたは橙を迎えに行きなさい。氷狐には私が行くわ」

『分かりました』

会話を終え、札をしまう。橙は藍の式神……私が藍の存在を感じられるように、藍にも橙の存在が感じられるはずなのですぐに家に戻ることでしよう。

私も早く迎えに行こうと神社の前にスキマを開き、そこから出る。すると、目の前には霊夢と氷狐の姿があつた。

「来ると思つたわ」

「相変わらず凄いの中率の勤ね。氷狐を迎えに来たわ」

「永遠に来なくていいわよ」

「そういうわけにもいかないわ。だって保護者だもの♪」

取り出した扇子を広げて口元を隠し、余裕の笑みで霊夢に言つてみる。

案の定霊夢は額に青筋を浮かべたけれど、氷狐がいるためか声を荒げるようなことはしなかつた。

「……今度、閻魔に氷狐の親権を賭けて裁判をしてもらおうかしら」

「精神的にも肉体的にも死にたければどうぞ？」

「それは嫌ね、地獄での長つたらしい説教は勘弁してほしいわ」

幻想郷の巫女である霊夢は、幻想郷のあらゆることを知っておく必要がある。今までは霊夢は勉強《そんなこと》なんてしなかつたけれど、どういう心境の変化なのか、彼女が夜にちゃんと勉強をしていることを、私は知っている。

と言つても、精々がある程度の歴史や異変、主要人物くらいでしょうけれど。私の心境としては、娘の成長を喜ぶ母親のような感じね。

「ふふっ……それじゃあ帰るわよ氷狐」

「うー♪ れーむ。あーうー」

「ええ、またね氷狐。紫は二度と来るな」

「酷いわねえ……」

霊夢の吐いた毒に苦笑し、氷狐と手を繋ぎながらスキマの中を通つて我が家の庭に出入る。

どうやら藍はもう帰っているらしく、家の中からは美味しそうないい香りが漂つていた。

「今日の晩御飯は何かしらねー？」

「うー♪」

妖怪である私が、まるで人間の親子のような行動をしていることがなぜか楽しくてつい笑ってしまう。

氷狐は晩御飯が楽しみなのか、青い毛並みの尻尾をパタパタと振って笑みを浮かべている。

本当に、今日の晩御飯はなんだろうか？ 一つだけ分かることは、今日も藍の美味しい晩御飯が食べられるということだった。

氷狐には、一つの癖があった。それは、夜になると必ず一度は月を眺めること。

雨や曇りで月が見えなくても、彼は必ず月があるであろう空を見上げる。その時の表情は、どこか寂しそうに思えた。

今日も今日とて、彼は縁側で月を見上げている。私は、そんな彼の隣に座った。

「どうしたの？ 氷狐」

「う？ ゆーり」

「ええ、紫よ。あなたはいつも月を眺めているのね。月に何かあるのかしら？」

氷狐からの返答はない。もしかしたら、彼は本当に向こう《つき》に何かあるのかを

知っているのかもしれない。

月……そこには、外の世界すら遙かに凌駕するほどの科学力を持った“月人”という存在が住んでいる。

かつて私は、多くの妖怪と共に月に戦争を仕掛けたことがあった……その理由は魔法や妖怪にと取って重要な存在である月に人間が住んでいるという噂をどこからか聞きつけ、それが気に入らないからという単純で自分勝手な理由からだった。

当時の私は、本当は乗り気ではなかった。人間と妖怪の共存を目指していた私が、どうして戦争なんて吹っかけようとしたのか……それは、大勢の妖怪達のあまりの勢いに流されてしまったから。

後に冷静になり、やはり気分が乗らなかつたけれどもう引き返せる段階ではなく……仕方なく月への道……スキマを開いて月へと降り立った。この時の私は、また人間との共存が遠くなる……そんなことを考えており、私達妖怪側の勝利を疑わなかつた。

そして戦争の結果は……圧倒的なまでの大敗。月人の持つ武器は当時の地球の科学力など歯牙にもかけぬほどの技術を詰め込まれており、筒のようなものから放たれる光に貫かれた妖怪は瞬間に消し飛び、剣や槍の刃に切り裂かれた妖怪はその傷が癒えることなく苦しんで死んだ。

能力故に私がそれらに当たることはなく、月人も相手ではなかつた……けれども数、

質、士氣、技術、その全てにおいて負けていた私達には、もう逃げることしか出来なかった。

月人そのものに、恐怖はない。必ず雪辱を晴らす。そんな気持ちがあつたのも今は昔のこと。

この幻想郷にも、「月人」が存在することを私は知っている。その月人が、あのときの月人達とは違うということも。なぜなら、その月人達はこの幻想郷の人妖問わずに治療を行い、人里の家に置き薬を置いていたりしているのだから。

そこまで考えて、私は再び氷狐の方を見やる。彼は変わらず月を見上げていたが、その横顔はやはり、どこか寂しそうだつた。

本当に、彼は月に何があるのか知っているのかもしれない……もしかしたら、月に知り合いでもいるのだろうか？

まさかね……と苦笑していると、不意に氷狐が月を見上げたまま立ち上がり、そのまま庭へと進んだ。

「……ら、お風呂に入ったのにまた汚れちゃうでしょう？」

その声をかけてみたけれど、返事も反応も何もない。何か、様子がおかしい。

「氷狐？」

庭に立つ氷狐に近寄り、彼の前に行つて両肩を掴む。が、彼は私の方を向かずに月を

見続けている。

その瞳は、まるで血のよう紅く染まっていた……氷狐の瞳は、確か綺麗な蒼だったはず。何よりもその瞳からは、狂気の色が見て取れた。

「氷狐？ 一体どうしたの？」

「……×ー×」

「え？」

よく聞き取れない……いや、聞いたことのない発音の……恐らくは誰かの名前。

それを呟いた氷狐は、次の瞬間には私の目の前から姿を消していた。

一体どうしたというのか……意味が分からず、私は空を仰いだ。目に映るのは、綺麗な満月一つ……その時になって、私はようやく気づいた。気づけた。

「満月じゃない……少し欠けている？」

先ほど、月は妖怪にとって重要だと考えたことを思い出す。この月の光が降り注ぎ続けば、その狂気の魔力によって弱小妖怪や妖精達は好戦的になり、人里や他の妖怪にも被害が出る可能性が高い。

それにいずれは中級妖怪、果ては大妖怪すらも狂ってしまう。勿論これは、ずっとあ

のまま月が動かなかつたら話……だけど、恐らくは力を持った何者かによる創られた月、それが本当に終わりを告げて朝になるのかはわからない。

言うなれば……「不完全な満月」。それが今回の異変。

私はどこかへと消えた氷狐の搜索と異変解決のため、すぐに博麗神社へとスキマを開くのだった。

私の懸念が、当たることがないようにと願って。

「偽者の月……ねえ」

「はい。偽物の月が昇るようになれば、満月になっても月の使者は幻影の地上に着くため、地上に来ることができなくなります。もう姫様が……私達が、月の使者に怯える必要がなくなりませう」

「でも永琳。空を弄って偽の夜空にすり替え、偽りの月を空に映す……そんなことをして、あなたは大丈夫なのかしら」

私の隣で月を見上げる少女……蓬莱山 輝夜《ほうらいさん かぐや》が心配そうに私の手を握る。

とても美しく、実はめんどくさがりでも口調も結構きつくて、それでいて芯のしつかりとした心と優しきを持つ…私の大事な大事な姫様。

もう怖い思いはさせせない、怯える日々も過ぎさせない。この偽者の月に気づかれれば、いずれは異変とされて博麗の巫女が、果ては妖怪の賢者が来るかも知れないけれど…それらは、私が全て追い払ってみせる。

何よりも……。

「っ?!? なに? 妖怪?!?」

「姫様、この子は大丈夫。私達の味方です」

私達の目の前に突然現れた、蒼い毛並みの狐耳と尻尾を持ったこの子の能力《チカラ》があれば、私は巫女にも、賢者にも、誰にも負けない。

私は現れた妖怪に近づき、その小さな体を見下ろす。

最後に見た記憶の、どれもが一致するその姿……こうして肉眼で見るのは、実に22億15万0748年、月にして約2億6950万0767ヶ月、週で11億5500万3288週間、日にして80億8502万3020日、時間で表すとそれぞれ1940億4055万2480時間、11兆6424億3314万8800分、698兆5459億8892万8000秒ぶりになるかしら。

彼は、ちゃんと私の思考《オモイ》を現実《カタチ》にしてくれていた。いつか私が

彼の成長した姿を見て戸惑わないように…… ずっとそのままの姿で成長せずについて欲しい” という私のオモイを。

「……×ー×」

「私のこと……覚えてくれていたのね……でも、私は今は永琳と名乗っているの」

「……えーり？」

「そう、えーり」

約2000万もの間離れていた私のことを覚えていてくれたことに泣きそうになり、相変わらぬの名前の呼び方に思わず笑みが零れる。姫様が私達の姿を不思議そうに見ている視線を感じるけれど、今は再開の余韻に浸らせて欲しい。

私の……地上にいた頃の最初の友達。私に、月一番の頭脳と言わせしめる頭脳をくれた恩人。

「久しぶり……氷狐」

あなたの能力《チカラ》……私達に貸して頂戴？

「霊夢。異変が起きたわ」

「は？ 別に何も起きてないじゃない」

「人間のあなたには分からないかもしれないけど、異変は確実に起きているわ……満月が少し欠けているという異変がね」

「別にそれくらいいいんじゃない……」

「そして氷狐がどこかへ消えたわ」

「大異変じゃない!! 早く行くわよ紫!!」

(この氷狐への気持ちを、もう少し幻想郷にむけてくれないかしら……)

八雲 紫 転

私の膝の上に頭を置いて眠る子狐の妖怪を、姫様が物珍しそうに見つめる。それが私がかうして誰かを膝枕することが珍しい……というよりもないからか、それともただ単にこの妖怪に興味を抱いたからなのか。

私が考えるに、理由は両方。それと、もう一つくらいはあるだろうと思う。

「ねえ永琳」

「なんですか？ 姫様」

「この妖怪はいくつなのかしら？」

ぷにぷにと妖怪……氷狐の頬を突く姫様の質問に、私は頭を働かせる。

私が彼と出会ったのは、後に月人と呼ばれる私達がまだ地上にいたころ……私が、本当に生まれて僅か3年くらいの時。その頃から、私が住んでいた場所は村ではなく街と呼べる場所であり、既に幻想郷の人里以上の科学力も持っていた。町の外にも妖怪はうようよとしていたけれど。

あの頃の私は、親から「八意家の恥さらし」とまで言われるほどに頭が悪かった……というか3才児の平均的な知能しか持ち合わせていなかった。

当然、まだまだ遊び盛りだった私は家や家庭教師から受ける英才教育が楽しく感じるハズもなく、毎日家と両親に対して不満を抱いていた。

その不満が爆発し、家から飛び出した先の公園で出会ったのが……氷狐。

当時の私は彼を妖怪だとは認識できず、変わった耳をしているな〜ということくらいしか思い浮かばなかった。好奇心から話しかけてみても彼からは“うー”や“あー”しか返って来ず……それでもなぜかそれが楽しくて、暫く2人でうーあー言い合っていたのを覚えている。

そこからは2人で滑り台やブランコなどで遊んでいた。楽しくもない勉強ばかりで遊びたかった私はこれでもかと遊んだものだ……しかし日も暮れば家が恋しくなり、お腹も空いてきた。けど怒られるのは嫌なので帰ることはしなかった。

徐々に辺りは暗くなり、気温も少しずつ下がってくる……だけど怒られたくないから帰らない。そんな私の隣に、彼はいてくれた。寒さと夜の恐怖に震える私を、彼はずつと握っていてくれた。だからだろうか……私は彼に自分の不満を話していた。

『わたしのおうちはね？　ずーつとわたしにべんきようしろべんきようしろっていうの。べんきようなんてつまんないのにね』

『うー？』

『うー？、じゃないよ。おとーさんもおかーさんもずつとおこって、おまえははじ

さらしだー” っっておこるの。いみはわかんないけど、なんだかかなしくなるの』

『あーう』

『……あなたがなにをいつてるのかわかんない。どうすれば、あなたとちゃんとおはなしできるのかな?』

そう自分で言った時に、私の頭の中に電球が光るイメージが浮かび上がったことを覚えていた。

その時に初めて、私は勉強をしようと思った……同時に、その必要はなくなってしまう。

『そうだ！ わたしのあたまがよくなれば……このまちのみんなよりも、だれよりもあたまがよくなれば!』

きつとこの子と楽しくお喋りができるよね……そんな単純な思考《オモイ》は、3才とは思えない頭脳を持つという形で現実《カタチ》となった。

「永琳? どうかした?」

ハツとして、回想から現実へと意識を向ける。私の前には不思議そうな顔で私を見上げる姫様の姿があり……そういえば質問の答えを返していないな、と振り返る。

「いえ、なんでもありませんよ。彼の年齢について……でしたね。正確な年齢は、私にもわかりません。ただ一つ言えるとすれば……」

「すれば？」

少なくとも、私と同じ年かそれ以上ですね。

そういった時の姫様の表情は、思わず笑ってしまうほどに可愛らしかった。

「あーもう!! さっきのゴキブリに鳥の妖怪!! 本つ当に邪魔してくれたわね!!」

「邪魔してって……あなた秒殺してたじゃない」

「氷狐が異変にまた巻き込まれたのよ!! 一分一秒どころか一瞬すら無駄に出来ないわ!!」

私達が氷狐の搜索と異変解決に乗り出してからもう一時間くらい経ったかしら。その道中でホタル（ゴキブリ）の妖怪と夜雀（鳥）の妖怪に遭遇したけれど、さっき言った通り霊夢が秒殺し、今飛んでる地点は人里の近く。

霊夢がここまで焦っているのは……氷狐が異変や事件に巻き込まれて無事で済んだことがないからでしょうね。全く、人妖問わず平等に接していた霊夢はどこへいったの

かしら。

「その奴ら、止まれ！」

突然出てきた人影に、私も霊夢も思わず動きを止める。止まったことと、現れた人影に対して霊夢が怒りの視線を向けていることが、後ろにいる私にも理解できるほどの怒気が彼女の体から溢れ出しているけれど。

その様子に少し引いている人影……その正体は、教師である上白沢 慧音だった。

「お前達だな？　里を襲おうとしている妖怪は……つて巫女に賢者じゃないか」

「そうよ、里の守護者さん。悪いけど、私達はあなたにも里にも構っている時間はないのよ」

取り出した扇子で口元を隠しながら、遠まわしに敵意はないと告げる。こんなところでこうして止まっている時間は、本当にならないのだから。

それが通じたのか、それとも今の霊夢が怖いのか、彼女は戦う姿勢を解いてくれた。

因みに、私が彼女のことを守護者と呼んだのは、彼女がただの教師……人間ではないから。

ハクタク……彼女の体には、その聖獣の血が半分流れている……つまり、上白沢 慧音は半人半獣なのだ。今はそんなことはどうでもいいので、詳しく説明はしない。

「なぜそんなに慌てているんだ？」

「氷狐が異変に巻き込まれたからよ!! ああもう、こんなところでくつちやべってる時間はないの!!」

「ところで……あなた、里から離れて大丈夫なの?」

「なに、氷狐が? ……私も探しに行きたいが、賢者の言うとおりにこれ以上里から離れているわけにも行かない。異変というのは、今夜の異常な月のことだろう。原因を作った奴ならあっちだ」

慧音が指を指しながら言うやいなや、霊夢がその方向にすつとんでいってしまった。今の子の速度なら、魔理沙や烏天狗に匹敵するかもしれない。

私も急いで彼女の背を追いかけ、慧音も人里の近くへと降り立っていくのだった。

「……そういえば、2人は私が『隠した』人里については何も触れなかったな。よほど慌てていたのか、それとも私の能力が利かなかったのか……」

「動くとき撃つ!」

慧音が指差した方、迷いの竹林と呼ばれる場所に着いた私達を迎えたのは、そんな物騒な言葉だった。

私がかかしらと、霊夢がまた邪魔か……と呟きながら声が出た方を見れば、今日の朝

振りになる白と黒の魔法使いの姿が映った。

「間違えた、撃つと動くだ。今すぐう」

「じゃあ永遠に撃たないでそこで止まっておきなさい」

「……なるほど、これがあの時の妖夢の気持ちか。私は二度と人の台詞を遮らないことを誓うぜ」

霊夢から放たれた毒に、魔理沙がどこか遠い目をしながら何か呟く。少し涙目なのは気のせいね。

それはともかく、なぜここに魔理沙がいるのか……そう聞いてみたところ、どうやら今回の異変を解決するために犯人を倒すつもりらしい。

「なるほど……あんたも異変に気づいていたのね」

「意外ねえ」

「気づくもなにも、一発で分かるだろ」

「ええ、そうね。今回の異変……」

まさか人間の魔理沙が異変に気づくなんて思いもしなかったわ。これは人外にしか分からないハズなのに。

私は、彼女を過小評価していたのかもしれないわね。

「氷狐が巻き込まれたことに」「本来の満月が隠されていることに」「ずっと満月の位置が動かないことに」

「「……………」」

私達の間の時間が完全に止まった。というか霊夢、氷狐が異変に巻き込まれたのであつて、巻き込まれたことが異変じゃないのよ？

どうやら魔理沙は満月のことを異変として見ていたのではなく、動かない不完全な満月のことを異変として見ているのね。

つまり、今回は同時に二つの異変が起きていることになるわね。

「氷狐が巻き込まれたって……………またか？」

「ええ、またよ。私達は異変には無関係。そんなことしている暇も、こうして話している時間もないの」

「霊夢の言うとおりよ。私達は異変の犯人ではないわ。今回は異変が二つ同時に起きている……………私達は氷狐の搜索と不完全な満月の異変の解決をするから、あなたは夜を止めた犯人を捜して頂戴」

「分かったぜ」

魔理沙の了承を確認し、私と霊夢は竹林の奥を目指して飛行を再開した。

しばらくして背後の竹林を光が包んだ気がしたけれど、気のせいだと思うことにした。

「遅かったですね、もう全ての扉は封印しましたよ」

「あ、昼間のウサ耳」

「知り合い？」

「昼間に氷狐を連れて里に買い物をしに行った時にね……そうか、ここにあんたがいるってことは……」

昼間なら、私はその場面を見ていないから何があったのか分からないわね。分っているのは、目の前のウサ耳を生やして外の世界のブレザーという服に身を包んだ彼女が、幻想郷に住む月人の仲間ということ。

そして……彼女の目からは嫌な感じがするということね。目は合わさないようにしましょう。

「私は鈴仙《れいせん》・優曇華院《うどんげいん》・イナバ。昼間にあの子にちよつとした暗示をかけたのも私」

「彼女は私の助手よ。そして……私が今回の異変、本物の満月を隠す術を使った犯人」
いつのまにか、鈴仙と名乗った少女の隣には青と赤に分かれた奇抜な服装をした銀髪
の女性が立っていた。

自分でも言ったように、今回の犯人は彼女であることは間違いないわね……それに、
あの女性からは氷狐の妖気を感じる。

「氷狐を返しなさい。今なら半殺しで済ませてあげることから」

「え!? スペルカードルールじゃなくて!？」

「黙れ誘拐犯。お望み道理そつちで死なない程度にびちゆらせてあげましょうか……
?」

「ひっー!」

睨み付ける霊夢に泣きそうになるウサ耳少女……まあ罪悪感なんて微塵も感じない
のだけど。

問題は……この女性。ウサ耳少女よりも遥かに強いわね。それに、巫女の霊夢と賢者
と呼ばれる私を前にしてこの余裕……必ず何かある。

「ウドンゲ、ここは任せたわ。私は……最後の仕上げをするから」

「は、はい!」

まるで背景に溶け込むように彼女はそこから消えた。そして、ウサ耳少女は霊夢の

怒りに怯えながらも右手を拳銃のように構える。

恐らくはアレが彼女の戦闘の構え。霊夢も札を指に挟み、いつでも投げられるようにしている。

そして、弾幕ごっこが始まった。

巫女と賢者をウドンゲに任せた私は、この永遠亭の中にある薬品庫に来ていた。理由は勿論、ウドンゲに言った最後の仕上げのため。

偽の満月で本物の満月を隠すことで月の使者がこの場所に来ることを出来なくさせ、私達の怯えながら逃げ続ける日々を終わらせるのが今回の異変の目的。偽の月と言ってもちゃんと朝昼晩の時間はあるからずっと夜になるわけではない。

最後の仕上げとは……氷狐の能力を借りて私が誰よりも強くなり、何者からも姫様を守り通せるようになること。

今回巫女と賢者を撃退できたとしても、次も撃退できるかわからない。私だって疲れはするし、薬の数にも限界がある。

だからこそ、私は誰よりも強くなる。巫女も賢者も一撃で倒せるような力があれば、

疲労が回復する時間も少なくてすむから。月人を滅ぼす、なんてことも考えたがそれは私たちも消えてしまいかねない。

何よりも……氷狐に殺しというのをさせたくないから。

さて、そろそろこの思考を数秒間単純化する薬を飲んでしまおう。氷狐のおかげで月の頭脳と呼ばれるほどの頭脳を得た私では、今のよういろいろと考えてしまい、混じり気の一切ない思考なんてできないから。

「力を貸してね……氷狐」

「それは借りるじゃなくて利用するっていうのよ」

「っ!？」

突然聞こえた声に驚いて危うく手に持った薬を落としそうになりながら、声がした方角……薬品庫の入り口を見る。

そこには、扇子で口元を隠しながら私に軽蔑の視線を向ける幻想郷の賢者の姿があった。

早い……あまりにも早すぎる。ここに彼女がいるということは、即ちウドンゲがやられてしまったことを意味する。ここに巫女がいないということは、姫様のいる場所にいった可能性もある。

早く姫様の下に行かねば……そう考えながらも、私は先の賢者の言葉を聞き流せな

かった。

「……聞き捨てならないわね。私が彼を……氷狐を利用してはいますか？」

「ええ。何をする気なのか、なぜ異変を起こしたかは分からないけれど……あの子の能力を使って何かをしようとしているのは明白。あなたがどうやって氷狐のことを知り、氷狐の能力を知ったかは知れないけれど、利用させるわけにはいかないわ」

違う、この幻想郷の中で一番最初に氷狐のことを知ったのも、一番氷狐のことを知っているのも私。

2000万という途方もない月日を生きた彼も、私のことを覚えてくれていた……だから。

「利用なんかしていないわ。氷狐に友人として私に力を貸してもらっただけよ」

「暗示をかけたくせに」

「っ！ それは私がいることを……この迷いの竹林にすることを知らせるためよ。そうしないとないと、彼は私がこの場所にいることも、私がいることも知らなかったでしょうからね」

「だったら尚更ね。自分がいることを知らない“友人”の氷狐に、なぜ今の今まで会いに行かず、なぜ暗示をかけてまで会おうとしたのかしら？」

何も……何も知らないくせに。私が幻想郷に来たとき、彼はまだ幻想郷にはいなかった

た。私が彼を見つけたのは、ほんの数ヶ月前のことなのだ……それも、置き薬の集金に行つたウドンゲの口から聞いただけ。

すぐに私は人里へ行つたし、遠巻きにだけ彼の姿も確認できた。その時に私がどれほどの歓喜に包まれたことか。

けれども、私は彼の前に出ることが出来なかつた。彼が私のことを覚えていて保証なんてなかつたし……なによりも……氷狐は巫女や魔法使い達と仲良く笑いあつていたから。

遠巻きに見ている私と、私がいなくても他の存在と笑いあつている彼……住んでいる世界が違うような、私と彼の間には壁があるかのような錯覚も起こした。

それが私にとってどれだけ悲しくて。どれだけ空しくて……どれだけ寂しかったか。

子供の頃の最初の友人で、大人になつた後に唯一の家族となつて、月に移住する際に離れ離れになつた彼。ずっと後悔して、ようやく再会できて……なのに。

「あなたに何が分かるの!? 離れ離れになつて、その手を離れたことをずっと後悔してきた! もう会えないと思つていた家族が目の前にいるのに! やつと会えた大事な人がそこにいるのに! 私がいなくても他の誰か笑つている……それがどれだけ寂しかったか!」

今でも覚えている。月へと飛ぶ寸前のシャトルの中で妖怪である彼が見つかり、他の

乗組員の手によって機体の外へと投げ出されたことを。その手を掴んでも発進の反動で手を離してしまい、私の名前を呼びながら小さくなつていく彼の姿を。

シャトルの噴射口の熱に晒され、生きていることが絶望的でもう会えないと思つていた。仮に会えたとしても、もしかしたら手を離れた私のことを怨んでいるかもしれないかと思うと怖かつた。

「認めるわよ！ 暗示で氷狐の意識を奪い、その能力を利用しようと思つたことを！ だつてしょうがないじゃない！ 月の使者にいつ見つかるとも知れず、偽の月で本当の月を隠してもあなた達が来る！ 仮に撃退したとしても次も、その次も撃退できるか分からない！ だつたらどんなことをしてでも強く、あなた達なんか歯牙にもかけないほどに強くなるしかないじゃない！」

偽の月を見たら私の下に来るように仕向け、私の言うことを聞くようにする暗示。この暗示が解けるまでは、氷狐は最低限の意識を残して私の言うことを聞くようになる。そうして私のオモイを聞かせ、彼の能力の恩恵を受ける。そうすれば……そうすれば。

「そうすれば！ もう誰にも怯えることも、また氷狐と離れ離れになることもない！ ずっと、ずっと一緒にいられ……」

「人形同然にしてまであなたは一緒にいたいよね」

「違う！ 私は人形になんか」

「してるわよ。自分で言ったじゃない……最低限の意識を残して私の言うことを聞くようになる”って”」

「っ!？」

そんな……なぜ私の考えを……思ったことを知っているの？

口になんか出していないし、暗示の内容まではいくら賢者でもわからないはず……調べたなら話は別だけど氷狐はこの永遠亭にいるし、そんな時間はない……ならなぜ。

「口に出していない？ いいえ、さつきからずっと口に出していたわ」

「何を言ってる……」

「私の能力は『境界を操る程度の能力』。その気になれば外と幻想郷の境界をいじることも、現実と空想の境界をいじることも」

意識と無意識の境界を操って心の内を無意識に話させることなど……簡単ですわ。

「……一体いつから……」

「声をかけた時からよ。あなたの過去も、氷狐との関係も、なぜこんな異変を起こしたのかも……全部喋っていたわ。……もう必要な情報は聞けたから操った境界は元に戻し

たけどね」

「そんな……」

手から薬が滑り落ち、その中身が床にばら撒かれていくのが分かる。声をかけた時からと彼女は言ったが、もしかしたらもつと前から私に無意識に喋らせていたのかもしれない。

元に戻したと言ったけれど、本当はそのまま、今も無意識に喋っているのかもしれない。悪い方向に考えが進んでしまえば、その思考は止まることはなくどんどん悪いほうへと考えてしまう。

頭がいいというのは、何も良いことばかりじゃない。こうして考え続けてしまえば負のループに陥り、中々抜け出せなくなる。今この場にいるのは私と賢者のみ……彼女では私をこのループから助けてくれることはないだろう。

姫様は無事だろうか、氷狐の暗示は解けただろうか、また逃げる日々が続くのだろうか。

また……氷狐と離れ離れになってしまうのだろうか。

「それは……それだけは絶対にいや!!」

「っ!？」

隠し持っていた弓を取り出し、矢を番えて賢者に向ける。何千何万何億と繰り返してきた動きだ、その速度は月にいる教え子の剣速を越えると自負している。

撃退できるかわからないなら、刺し違えてでもここで……殺す!!

強く意思と霊力を矢に込め……私は矢尻から指を離……。

「えーりー!」

した瞬間に賢者の後ろに氷狐の姿を見てしまった。

なぜそこにいるの、とか。どうして私の名前を笑みを浮かべて呼んでくれるの、とか。そんなことを思う暇なんてなかった。

賢者は矢を避け、矢はまっすぐ氷狐へと向かう。彼は、多分避けられないだろう。

また失うの? 今度も自分の手で?

「氷……」

手を伸ばすことも、たった二文字の名前を呼ぶことも叶わない。

ただ……矢が彼に当たる姿が見え……。

「全く……あなたらしくないわよ永琳」

私が彼女の矢を避けたことを後悔した時に、その声は聞こえた。

私の後ろにいた氷狐に向かっていた矢の先に彼の姿はなく、あるのは矢に貫かれて破壊された壁のみ。あんな小さな矢のどこにそんな破壊力があつたのか。

そんなことを思う間もなく、“彼女”は氷狐を抱いてそこにいた。

長い艶のある髪に“絶世の”と頭につくほどの美貌を持つ少女……恐らくは、彼女が先ほど話に出た姫。

姿自体は知っていたけど、ここまで近くで見ると確かに、姫と呼ぶのも分かる。普段はだらだらと過ごしているみたいだけど。

「ひ、姫様……」

「私たちの負けよ永琳。私は巫女に負けたし、あなたはルールを侵してしまった……不意打ちで相手を殺そうとするなんて美しくないし、何よりも永琳がそんなズルをするのは、私が許さないわ」

「……申し訳……ありません」

がつくりと項垂れる彼女……永琳の顔の下にポタポタと水滴が落ちる。その涙の味が、話を聞いた私には分かってしまう。

突然泣き出した永琳に先ほどの凜とした雰囲気はどこへやら、少女がえっ？ えっ！と慌てている。

そんな二人の間に挟まれていた氷狐は……永琳の前に正座した。なぜ正座。

「えーり」

「ごめんなさい……ごめんなさい氷狐……あなたに暗示なんかかけさせて……利用……しようとして……」

謝罪の言葉を述べる永琳を見ながら、氷狐は何をオモツているのか。

怒っているのか、悲しんでいるのか、それは私には分からない。

ただ一つ言えるとするならば……氷狐は、怒ったり悲しんだりしていないだろうということだ。

「えーり」

「っ!?! ……ひ……んっ」

ギユツと、氷狐は永琳を抱きしめた。その声には、団子を盗ったときの魔理沙に向けるような怒りはない。

悲しみ、というのでもない。あるのは穏やかな……私たちの名前を呼ぶときと同じよ

うな、嬉しそうな想い。

「うー。あーうー。うーあーうー」

言葉だけを聞けば、意味が分かる存在は少ないと思う。けれど、この言葉は違った。言葉に詰まった想いが、心に直接響いてくる。理解できる。

怒っていない。謝らなくてもいい。ずっと覚えていた。寂しかった。会いたかった。

「私を……赦してくれるの？ 私を……嫌ったりしないの？」

「うーあーうー」

怒ってない。大丈夫。嫌いにならない。ずっと友達。ずっと家族。

大好き。

「あ……ああ……あああああ!!」

子供のように泣き出し、永琳が氷狐の体を抱き返す。体格の違いで氷狐が後ろに倒れてしまったけど、氷狐は嬉しそうに笑っている。

少女は大声で泣き出した永琳に更に慌て、いつの間にかこの部屋に来ていた霊夢は現状を理解できないのかキョトンとしている。

そんな二人を見て笑い、私は氷狐を抱きしめて泣き続ける永琳の姿を見る。

2000万。それは私にすら想像できない永き時。それほどまでの時間を後悔し続けていた彼女は、今この瞬間にどれだけ救われたのだろう。

嫌われていた、それどころか覚えてすらいなかもしれないなかつた相手から大好きと言われた彼女の心は、どれだけ救われたのだろう。

永い夜は終わり、破壊された壁の向こうからは朝日が差し込む。

それは、彼女の苦悩の日々も、彼女達が本当の意味で逃げる日々からも終わったことを祝福しているかのようで。

「……………これにて一件落着……………つてどこかしら？」

私は、少しおちやらけてそう呟いた。

八雲 紫 結

「うー」

「にゃー」

「うー!!」

「にゃー!!」

「うー♪」

「にゃーん♪」

晴れ渡る青空の下で両腕を曲げたり伸ばしたりして戯れる妖怪が2匹……子狐の妖怪の氷狐と、化け猫の妖怪の橙。酔っているらしく、その顔は赤い。

今日は「不完全な月」と「止まった夜」、この二つの異変の解決祝いの宴会の日。霊夢に魔理沙、紅魔館組、白玉楼組、私たち八雲家に鬼の萃香、人形使い、慧音といういつものメンバー……その中に、今回の異変を起こした者達……永遠亭の3人が参加していた。永遠亭にはもう1匹ウサギの妖怪がいるらしいが、その妖怪は仕事をサボった罰として今日一日永遠亭の掃除をさせられているのだとか。

夜を止めた犯人は、紅魔館のレミリア・スカーレットとそのメイドだったらしい。彼

女達も私と同じように不完全な月の異変に気づき、その犯人を叩きのめしに行ったのだが竹林の中で迷ってしまい、このままでは今日中に解決できないと思つてメイドに命令して夜の時間を止めたのだとか。結局解決できず、挙句に魔理沙と弾幕ごっこをして負けたらしい。強くなつてるのね、彼女。

……なぜ竹林の上を飛ばなかつたのかしら。

「紫様見てくださいあの2人の愛らしさ。普段の元気な姿もいいですが、酔いで顔を赤くし、おぼつかない足取りで無邪気に戯れるあの姿。妙な背徳感と愛しさと危ないから止めないといけないのにそうするとこのすばらしい時間が終わるといふ心苦しさを感じさせます。最高の肴です。目の保養です。この光景とあの子達が炊いてくれたご飯があるなら、私はあと10年は(嫌々やつている紫様の仕事をやるという意味で)戦えます」

「ねえ藍? 酔っているのよね? 酔っているのでしょうか?」

私の隣でお酒を飲んでいる藍の周りには大きめのお酒が入っていた瓶が1本空になつて転がつている。これしきで彼女が酔うとは思えないけど、もう酔っているに違いない。ていうか酔つていると思いたい。それに妖怪の生で10年は短すぎる。

橙を式にした頃から少し暴走気味だったけれど、氷狐を橙と同じように扱うようになってから更に暴走している気がする。もう私が知っている藍はどこにもいないのね

…。

自分の式の現状を少し悲しく思いながら、私は氷狐と橙の方……2人よりも向こう側にいる永琳の姿を見る。

彼女の姫は霊夢達とお酒を飲んでいるし、ウサミミ少女……鈴仙は魔理沙のいる場所で魔法使い達とお酒を飲んでいる。どうやら私たちに弾幕ごっこで負けた彼女は魔理沙に介抱され、そこから仲良くなったようだ。なぜか魔理沙以外の魔法使い2人と妖夢、鈴仙の4人が睨み合っているけど……ね。

そして永琳……彼女は静かにグラスに入ったワインらしき紅い液体を少しずつ口へと運び……その視線は、ずっと氷狐の方を向いている。その表情は凄く穏やかで……とても嬉しそう。

「らんさま〜♪ ら〜ん〜しゃ〜ま〜♪」

「んん、どうしたんだ？ 橙」

「えへへ〜♪」

気づけば、いつの間にか子狐と子猫の戯れは終わっていた。橙は藍の膝の上に向かい合うように座り、ゴロゴロと喉を鳴らしてじゃれつく。藍が嬉しさでだらしない顔をしているけれど、面白いから言わない。

氷狐は……永琳のところへ居た。その手には彼女からもらったのか小さなグラスを

持つており、永琳はそこに綺麗な薄い緑色の液体を注いでいる。こう言うと悪く聞こえるかもしれないけれど、あんな色は見たことがないから仕方ない。

好奇心もあり、私の足は自然と2人の元へと進む。私に気づいた2人は、方や嬉しそうに、方や少し邪魔そうに表情を変えた。どっちがどつちかなんてすぐに分かるでしょう？

「お邪魔だったかしら？」

「ええ。この上なく嫌な時に来てくれたわ」

「はつきり言うのね」

「分かってたくせに聞くからよ」

不満そうな顔と口の割りに私をどこかへ行かせようとはしないところを見る限り、別にここにおいても問題はないらしい。

その不満そうな顔も、美味しそうに薄い緑の液体を飲む氷狐の顔を見れば笑顔に変わったけれど。

「彼に何を飲ませているのかしら？」

「ただのリングオの果実酒よ。……いつかまた、出会えた時に一緒に飲もうと思っ
た……ね」

そう言った彼女のグラスには、氷狐と同じ緑の液体……果実酒が注がれていた。リン

ゴの甘い香りが私のもとにまで漂ってきており、氷狐のような子供には飲みやすいことは想像に難くない。

永琳は果実酒を一口飲み、数秒口に含んだ後にコクリと飲み込んだ。満足そうな表情を見るに、味もいいのだろう。

「あげないわよ。これは私と氷狐のだから」

「いいじゃない一杯くらい。あなたが用意した果実酒……興味あるもの」

「ダメ。これは絶対に氷狐以外には姫様も含めて飲ませないわ」

彼女が姫と口に出してまで言うなら、その意思は相当に硬い。

ならば、彼女以外がいいと言えば、問題ないわよね。

「ねえ氷狐。その果実酒……一口頂戴？」

「や」

即答だった。それはもう私が言い切った直後に言われたくらい。

氷狐ならくれると思っていた私にとって拒否というのは完全に想定外であり……心へのダメージが大きかった。だって氷狐も永琳も本当に美味しそうに飲んだもの、欲しくなるのが妖怪の性でしょう。

「ひ、一口もだめ？」

「め」

「くどいわよ賢者。諦めなさい」
私は、久しぶりに膝をついた。

地面に膝と両手をついてどんよりとした雰囲気を感じ、私は内心でほくそ笑む。

打ちひしがれている賢者から横に視線を動かせば、そこには果実酒を美味しそうに飲んでくれている氷狐の姿。

実はこの果実酒、私の手作りなのだ。本当は……月に着いたお祝いに氷狐と2人で飲むつもりだった。

彼が大好きなリンゴを使った果実酒。これを飲んで喜ぶ顔が見たくて……けれどもその思いが叶うことはなかった。

それが今日、ようやく叶った。この笑顔が見たかった。少し邪魔なものが視界に入るけれど、2人で飲むことが出来た。

そして何よりも……。

「氷狐……美味しい？」

「うー♪」

美味しい。

「そう……よかった」

彼と……こうして同じ時間を歩むことが出来た。もう二度と離れたくない。遠い過去、大人になった私を置いて両親が他界した時、私と家族になつてくれた彼と……もう二度と。

だけど彼は今、賢者達の家に住んでいるらしい……巫女ですら知らない彼女の家を探し出すのは難しいだろうし、いきなり住む環境を変えらるというのも氷狐にストレスなどの悪影響を及ぼすかもしれない。

だけど……叶うのならば。

「氷狐」

「うー？」

「もう一度……私と一緒に」

暮らさない？ という言葉が続くことはなかった。それを口に出す前に私は口を閉じた……いえ、閉じざるをえなかった。

私の下と姫様のいる神社、そして鬼と一緒に飲んでる人間から視線を感じたから。

そして次の瞬間には、私と氷狐の周りには巫女、復活した賢者、鬼と飲んでいたはず

の人間がいた。

「新参者と氷狐が一緒に暮らすなんて許す訳がないでしょ。氷狐はこんな胡散臭い奴のところじゃなくて私の神社で暮らすのよ」

「何を言うのかしらこの小娘は。こんな貧乏神社なんかより家の方がいい暮らしが出来るわよ」

「どつちの家にもいたら氷狐が常識に疎くなってしまう。氷狐は私が引き取り、健全に育つてもらわねば」

「冬以外には家に近寄られることもなかったくせに」

「がっはあ!!」

賢者と巫女の言葉を受けた人間は幻想の血を吐いて倒れた。彼女は教師だと聞いているが、氷狐は書類やインク、墨といった臭いが嫌いなので彼女の家に行かないのはそのせいだろう。そうになると、氷狐が彼女の家に行く可能性はおろか、住む可能性なんて0に等しい。

そう考えると永遠亭も怪しいけれど、書類やインクは資料室にしかないので他の部屋なら大丈夫だろう。

とういか最も彼と永く暮らしていたのは私なのだから、私に言わせてみれば彼女達の方が後に氷狐と出会ったのだ。ならば、昔と同じように私と暮らすことに何の違和感も

ないだろう。

「いいえ、氷狐とは私が住むわ。私のほうが彼の好みや嫌いなものを熟知しているし、何よりも彼は2000万もの間私を覚えてくれていたのよ？　ようやく再会できた私たちをまた離れ離れにするつもりかしら？」

こうして私の優位性や良心に訴える言い方をすれば、彼女達もきつと首を縦に振ってくれるはず。

そう思つて彼女達を見て見たんだけど……。

「そんなこと知つたこつちやないわ」

「これは氷狐の済む環境や未来に関わることなの。あなたの意思も過去も無関係よ」
彼女達に『良心』があると思つた私がバカだったわ。

この幻想郷住民は我侷で自分勝手な存在が多いというのは知つてたけれど、まさか筆頭がこの有様とは。

しかし、私も幻想郷の住人……2人がそういう態度なら……今回ばかりは、私も我侷にいきましょう。

「だったら、シンプルにスペルカードルールで勝つた人が氷狐と一緒に住む、というのはどうかしら？」

「いいわね、その方が分かりやすいわ」

「あら、私に勝てると思っているのかしら？　まあいいわ、力の差を教えてあげましょう」

「な、なら私も参加させてもらおうぞ！」

復活した人間を含め、私たち4人は空へと上がる。それぞれスペルカードを一枚取り出し、この四つ巴のバトルロワイアルの準備が整った。

下からは冷やかすような声や声援が聞こえる。その中に、楽しそうな氷狐の声も混じっていた。

みんな頑張れ。この勝負の意味を分かっているだろう楽しげな声に籠もった思いを聞き、私の口元が釣りあがる。

そういえば……私が頭がよくなりたいたいと思っただきっかけは……。

「あなたと会話がしたいから……だったわね」

その呟きを合図に、空に弾幕の花火が咲いた。

宴会と同日の夜、私は縁側で月見酒を楽しんでいた。

あの弾幕ごっこの勝者は当然この私、八雲 紫。ただか未熟な巫女に人里の守護者

に蓬萊人なんかに負けてたまるもんですか。と言っても、今回は変則的な四つ巴だったのでそのおかげで勝てたというのは否めない。自信は持っても過信はしないのだ。

私の後ろにある自室の中には、すでに氷狐が寝入っている。あの異変以降、彼が月を見上げることはなくなった。

今なら分かる……彼が悲しそうに月を見上げていたのは、そこにいる永琳のことを思っていたからだ。

お酒を飲みながら、あの異変の夜の永琳の話を思い出す。

2000万……それほどの昔から氷狐はいた。しかも彼女が一緒にいたときから今の今まで、氷狐は今の姿から成長していない。精神的にも、肉体的にも。

妖怪とは、年を重ねることに妖力が高くなり、また、その体もゆつくりと、だが確実に成長する。それは年を重ねることで知識を増やし、より強く、より使いやすく、より効率的な体へと変わろうとするから。

私のように精神が発達しているならまだしも、氷狐は精神がまだ子供……そういう体になつていくのが普通なのだ。当然、中には子供の姿で完成する妖怪もいるが、そういう妖怪は伊吹 萃香しかり、永遠亭のウサギ妖怪しかり、精神が発達しているもの。

しかし、氷狐はそれらが見受けられない……永琳に何かそういつたものを思考しなかったかと聞けば、
“月に居た頃に、そのままの姿で成長しないでほしい”と思っ

た”と言っていた。

しかし、それでは氷狐の能力の条件…… 他人の思考を現実にするには密着するほど近くなければならない”という条件に当てはまらない。

それに、永琳は月に行つた時に思い、そして現実になつたと言っていた……それはつまり、”彼女と出会つた日から氷狐は成長していない”ことを意味する。

「……生まれたときから成長しない妖怪……か」

つまり、今の氷狐こそ氷狐という妖怪の完成形ということだろうか。もしかしたら、意図的に止めている……あるいは封印されているとも言えるのか。

だとしたら誰が何のために、どうやって。

もし封印がかけられていたとして、もしそれで2000万以上という月日が育てた妖力が解放されたとすれば、どれほど強大なものになるのか。

「……なんてね。封印の術式なんて見当たらなく、そんなことをしても利益がない」
そんな空想を考えるよりも、私にはやるべきことが沢山ある。

幻想郷のこともそうだけど……私は、懸念が実現してしまわないようにしなければならぬ。

私が抱いていた懸念、氷狐をここで一緒に暮らしている理由……それは、氷狐の能力を利用してしまい、それが幻想郷に悪影響を及ぼすかもしれないということと、それ

を未然に防ぐということ。

彼の能力は強大だ。無から有は生み出せないらしいけれど、その力は生物にすら作用するらしい。

仮に、彼が目の前の存在に“死ぬ”と思考する。それが純粹な思考ならば、対象は確実に死ぬだろう。もしこれが“幻想郷の崩壊”や“妖怪の消滅”というような行き過ぎたものだとしたなら……想像するのも怖い。

もしその幼い心がそちらに向いたら……そう思うだけで体が震える。

そうだったら……私は……。

「ゆーり……?」

「っ!? ……起こしちゃったかしら?」

「うー……」

眠そうに目を擦りながら起きてきた氷狐は、私の膝に頭を置いて眠ってしまった。こうなつてしまったら、思考と月見酒を終えて私も寝たほうがいいでしょう。

そう思いながら私はサラサラとした青い髪を撫で、ぴくぴくと動く狐耳を見てくすりと笑みを浮かべる。

何を恐れているのか。私はスキマ妖怪の八雲 紫。幻想郷の賢者にして最強の一角を担う者。

利用しようとするものは叩き潰す。悪夢もねじ伏せ、暗い未来も明るく変えてみせる。

私も、彼も、独りではないのだから。

「お休みなさい氷狐」

私の鼓動《メロディ》に、その身を委ねて。

「今日は橙と氷狐が全部作ってくれました」

「はいー！」

「うー！」

「もうここまで料理が出来るのね……私も出来たほうがいいかしら」

「そうですね、巫女も守護者も医者も料理は出来るそうですし……といますか紫様、家事は本気で役立たずですからいい加減覚える努力をしてください。はつきり言つて2人より家事が出来ないのは情けなさ過ぎます。そんなんだから感想でまるでダメな

お婆ちゃん、略してマダオとか言われ

「藍、メタなこと言うのやめなさい」

藤原 妹紅 起

【藤原 妹紅《ふじわらの もいろう》】

竹取物語に出てくる“車持皇子”という人物の娘であり、“蓬萊の薬”を服用して不老不死となった少女。そのせいか黒かった長髪は真つ白になり、瞳の色も赤くなくなった。

見た目こそ少女ではあるが1300年以上もの時を生きており、長い年月を生きただけにか妖力に目覚め、妖怪退治の経験もあつてかその實力は高い。

竹取物語に出てくるかぐや姫と幻想郷にいる蓬莱山 輝夜は同一人物であり、父を振った形となった輝夜を目の敵にしており、幻想郷で彼女を見つけてからはお互いに不老不死の体で終わらない殺し合いをしていた。が、幻想郷で輝夜と殺しあうこと以外に別の生きがいを見つけ、“不完全な満月”の異変以降は“迷いの竹林”に住むようになり、迷った人間を里に送り届けたり、医者である永琳の元へ行く里の人間の護衛を務めるようになる。

慧音とは古くからの付き合いであり、お互いに慧音、妹紅と呼び合う仲。

焼き鳥屋を経営しており、夜雀の妖怪に度々襲撃をかけられるのが悩み。

今回のお話は、いつものように子狐の妖怪、水狐と妹紅を含めた幻想郷の住人たちが

ほのぼのと、時にあわただしく、ちよつと勘違いしながら過ごす……そんなお話。

「うう〜も〜!!」

草木も眠る丑の刻……ではなくまだ日を跨いだばかりの真夜中に私の焼き鳥屋の屋台で酒を飲む客が1人。

上白沢 慧音……私の良き理解者であり、大事な友人。人里で教師をしており、警護にも参加するので里の人間からの信頼も厚い。

そんな彼女だが、なぜか今日は泣きながら飲んでいた。普段は静かに飲むのに。

「珍しいね、慧音が泣き上戸なんて」

「私は……私はダメな奴なんだ……おかしいと思ったんだ、冬と一緒にいる間は朝早く出かけて夜遅くまで帰ってこないし。冬が過ぎればすぐに出て行って全く家に寄り付かないし。寺小屋に来ても外で遊ぶだけでなかなか教室には入ってこないし……私は嫌われているんだ……」

一体なんの話だろうかと思った。しかし話を聞いていれば、なんとなく予測はできる。

ズバリこれは……男の話だ。しかも内容によれば、冬には一緒に住んでいたのにそれ

が過ぎれば出ていく。更に冬以外には慧音の家に一切近づかず、勉強を教えている慧音が見えるところで他の女と遊んでいるという……なんて最低な奴なんだ。

そんな最低な男を、慧音は自分を「ダメな奴」と卑下してまで好いている……いや、愛しているというのか。なんて健気な。

真面目で色恋沙汰とは無縁そうな彼女だけど、まさか青春真つ盛りとは……友人の恋だ、応援したいのが本音ではあるが……今回は相手が悪い。これは諦めさせ、新しい恋を見つけさせる方がいいだろう。というか、そいつは私が直々に天誅を下してやる。

「慧音、そいつの名前は？」

「グスツ……ひこお……」

慧音は既に眠ってしまったが、寝言で名前らしきものをつぶやいていた。『ひこ……それが男の名前らしい。泣きながら寝言で呟くほどに好きなのか……慧音の純情を弄ぶ悪漢のことを。安心しろ慧音、私が必ず天誅を下してやるからな。焼き尽くして灰にして彼岸の先で慧音に土下座させてやる。』

ひこ……お前は私を怒らせた。

寝てしまった慧音を彼女の自宅へと運んだのは夜が明けてからのこと。私も家に上

がつて仮眠を取り、起きたのは太陽が真上に来る時間帯だった。

「昨夜はすまなかつた……」

「いいって。たまには吐き出さないといけないし、私でよかつたら付き合うさ」

起きていた慧音が作った朝食……時間的には昼食をご馳走になる。今日は寺小屋は休みなので慧音はのんびりと過ごすそうだ。

普段なら私も……となるのだが、今日はやる必要があるため、昼食を終えた後になんかにお暇した。

やること、というのは当然「ひこ」という奴に天誅を下すこと。すぐにでも焼き尽くしてやりたいが、元々里の人間との交流が多くない私の情報は名前のみであり、見つけることは困難。

人づきあいは苦手だけれど、これも慧音のためだ。それに、最近では永遠亭まで護衛するようになったし、焼き鳥屋の客も増えた。顔見知りも何人かいるし、情報はすぐに集まるだろう。

もつと言えば、人里は決して広くはない。信頼している慧音を弄ぶような悪漢なら、里の人間も協力してくれるだろうしな。

「さてと……まずは慧音の近所の人に聞いてみるか」

「な……なんですか」

情報を得るために歩いては聞き歩いては聞きを繰り返すこと2刻（4時間）。集まった情報は私の予想とは全くの正反対のものだった。

曰く、働き者。毎朝早くから山に入り、山菜や果物などの山の幸を採ってきては八百屋に売りに行っているらしい。資金を得た後は甘味処で団子を頬張るのが日課なんだとか。大の男が団子を頬張るて。

曰く、友人が多い。巫女や魔法使い、賢者、鬼、半人半霊、式紙、吸血鬼やメイドなどと一緒にいる姿が何度も目撃されているとか。つて全員女じゃないか。同姓の友達はいないのか？

曰く、面倒見がいい。寺小屋の子供たちと遊ぶ姿が目撃されており、妖精が里に入ってきた場合は悪戯しないように見張るために一緒に行動するのだとか。慧音が言っていた。寺小屋の外で遊ぶ。つていうのは、もしかしたらこのことかもしれない……いやいや待って待って、相手は慧音を泣かせた奴だ、そんなことはないはずだ。

他にもいくつかあるが、後は可愛いだの孫みたいだのたまに店番をしてくれるのだの……あれ？ 超いい奴じゃん。ていうか可愛いとか孫みたいってなに？

もしかして、私はとんでもない勘違いをしているんじゃないだろうか。それにひこつ

て奴は慧音と同じくらい里の人間に信頼されてるみたいだし、燃やしたりなんかしたら私が里の人間の怒りを買いたいそうだな……。

かと言って慧音を泣かせた奴は許せない。ここは、もう少し情報を集めてみるとしよう。

「……あ。焼き鳥屋の仕込み忘れてた」

「ひこ」の情報収集二日目。昨日得た情報では朝早くから山に山菜などを採りに行き、里に持ってきて売っているらしい。

ならばこうして入口の前に居れば、ひこと出会えるはずだ。

「藤原殿。今日はこんな朝早くからどうしたんですか？」

「ああ、気にしないでください。今日は夕方まで暇だったので、それまで門番の真似事でもしようかと思っただけです」

「それはありがたい！ 藤原殿がいれば安心です！」

見た目は私より年上の門番とそんな会話をしながらひこを待つ。年齢を考えれば私の方が圧倒的に年上だけど、この人は人の身でありながら恐怖に負けず20年もの間門

番をしている人物だ。大人には敬語を使えという慧音の言葉もあるので、基本的に私は見た目年上の人間には敬語で話すようにしている。

それにこの人は私の焼き鳥屋の常連でもある。屋台はこうした人間関係が大事……というのも慧音の言葉だ。この言葉を実践しているおかげで人づきあいも昔に比べればかなりマシになった。

他愛のない話をしながらひこを待つこと大体3刻（6時間）……結局ひこと思われる人間は現れなかった。両手一杯にリングゴを持った小さな狐耳を生やした青い髪の妖怪が来た時は退治しようかと思っただけ、門番の人が笑って手を振っていたので無害だと分かり、里に通したくらいで他は誰も門を通らなかつた。

「藤原殿、もうすぐ申の刻（午後3時〜午後5時）になります。屋台の仕込みなどは大丈夫なんですか？」

「うえ、もうそんな時間ですか……仕方ない。では、私はこれで」

「はい、ありがとうございます。後ほど屋台の方に寄らせていただきますね」

「待ってますよ」

酒を飲むように腕を動かす門番の人に苦笑しながら、私は彼に背を向けて仕込みの為に自宅へと向かう。

今日は会えなかつたし情報も手に入らなかつたけれど……次こそは、必ず。

次の日も、その次の日も私は門番の真似事と称して里を守りながらひこを待っていた。

けれどもひこと思わしき男性が現れることはなく、時に里の人間の護衛をし、時に青い髪の妖怪からリングを貰い、時に襲い掛かってくる妖怪から里を守り、時に寺小屋の子供たちと青い髪の妖怪を交えて遊んだ。

なんだか、ここ最近私の生活が充実している気がする。輝夜の奴と殺しあうこともなくなり、今ではたまに屋台に従者を連れて飲みに来る始末。時々仕向けていた刺客も来なくなり、口にするのは癩だが「友人」と呼べる関係だと思う。

切っ掛けは慧音……ではなく、ひこという男。最低な奴かと思えば里での評判は良く、慧音に好きなのかを聞けば好きだと返ってくる。もはや天誅を下すなんてことは思わず、純粹に会いたいという気持ちに変わっていた。

慧音を泣かせたけど、良い奴。里の人間のくせに、その姿を見たことはない。

一体どんな奴なんだろうか。慧音が惚れるくらいなんだ、きつと器量はいいんだろ。わざわざ山に入って採ってくるんだ、身体能力も高いんだろうし体も引き締まって

いるに違いない。妖精を悪戯させずに里の外に出すと聞いたし、頭もいいんだと思う。面倒見もいらしいし、里の信頼も厚いから人間性も問題ないだろう……あれ？ 完璧じゃないか。

一体どんな奴なんだろうか、その想像はどんどん膨らんでいく。なんでみんな知っているのに、私だけは知らないんだろうか。

いつその事、慧音に聞くのもいいか……いや、もうこれは私の意地だ。ここまで来たら、私の力だけでその正体を暴いてやる。

「待ってろよひこ」

絶対にお前を見つけ出してやるからな。

「うー」

「お、またリングゴ持ってきてくれたのか。ありがとうな」

「うー♪」

「よしよし。それにしても……ひこ、見つからないなあ」

「う?」

（藤原殿は何を言っているのだろうか……今頭を撫でているのがその「ひこ」だとい
うのに……面白いから黙っておこう）

藤原 妹紅 承

「ひこ」という人物を探し初めてもう一週間が経ってしまった。

人里は隅から隅まで探したし、ひこが行っているという山にも入った。門番の真似事はこの一週間続けていたけど結局ひこと出会うことはなかった。

にも関わらず、毎日ひこは八百屋に顔を出し、甘味処で団子を頬張っているという。そこで私は考えた。ならば今度は八百屋と甘味処で待つていようと。

「おはようございます」

「あら、妹紅ちゃんじゃない。おはよう。今日は何か買っていくのかい？」

「いえ、今日は日頃からお世話になっているこちらでお手伝いでも……と思ひまして」「本当に？ 助かるわ。じゃあお願いしようかしら」

この八百屋には本当にお世話になっている。なぜかは分からないが、他の八百屋よりも山菜、特に果物がとても美味しいのだ。更にこのおばちゃんは私を娘のように扱ってくれるため、よくおまけしてもらっている。

ひこを待つためとは思ったが、ここで日頃のお礼をするのもいいだろう。因みに、私が敬語なのは門番の人と同じ理由である。

さあ来いひこ。今日こそお前の顔を拝んでやる。

「ありがとうございます」

「お疲れ様妹紅ちゃん。今日はこれで店じまいにするから……よかつたら、晩御飯食べてくかい？」

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

「はいはい、ちよつと待っててね」

朝から手伝っていたけれど、いつの間にか空は茜色に染まっていた。焼き鳥屋をしてからそれなりに接客には自身があつたけれど……玄人というのか、おばちゃんの接客は凄かった。

というか売れ行きが凄かった。おかげで昼食を食い損ねてしまつたくらいだ……途中であの青い髪の妖怪が果物をくれなければ、途中で倒れていたかもしれない。空腹で。因みに貰つたのは柿だった……もうすっかり秋だね。

……ん？ 何か忘れているような……。

「……あ!? ひこのこと忘れてた！」

しまった……おばちゃんとする八百屋の仕事が楽しかったからすっかり失念してた。もしかしたら、今日来た客の中にいたかもしれないのに。

でも、私が想像するような人間はいなかったし……もしかして、今日は来てないのか？

「妹紅ちゃん。晩御飯はちよつと時間がかかるから、それまで梨《なし》でも食べててくれないかい？」

「あ、はい」

「これは子狐ちゃんが採ってきてくれた梨でね、あの子の採ってくるものはみんな美味いから、きつと美味しいよ」

そんなことを考えていると、おばちゃんが皿の上に剥いて6つに切り分けた梨を持って来てくれた。

その梨はあの青い髪の妖怪が採ってきたものらしく、爪楊枝が刺さっているものを取って食べて見る。

シャリシャリとした梨特有の食感と秋にしか味わえない甘味。瑞々しく程よく熟れている果実は、正しく秋の味覚。

「うまい!!」

「それはよかった」

本当に美味かった。そういえば、あの妖怪が持ってきたリングも美味かった。今まで食べてきたものはなんだったのか言うほどの味の差。妖怪恐るべし。

それはさておき、私の問題はひこだ。毎日顔を出していると聞いたのに、今日は来なかった。それはなぜだろうか。もしかして、こことは違う八百屋に売りに行っているのか？ でも他の八百屋はどちらかといえば万屋《よろずや》に近いため、人里で「八百屋」と聞けばこの店が出てくる。ならば普通に考えて売りに来る店はここしかないはず。

いや、売るだけならどこでも売れるけど……でも甘味処が一番近い店もここだしなあ。

「ねえおばちゃん」

「はい。なあに？ 妹紅ちゃん」

すっかり敬語となくなつた私だけど、もともと敬語で話すような人間……蓬菜人じゃないし、おばちゃんも受け入れてるみたいだから大丈夫だろ。

おばちゃんは今は台所で料理をしているので必然少し大声になる。近所迷惑を少し考慮しつつ、梨を食べながら私はおばちゃんに確認してみた。

「今日つてさ、ひこ来なかつたよね。なんでかな」

「うーん？ 〃ひこ〃なら来てたよー？」

「そっかー……つてええ!! 来てたの!？」

「来てたよー。妹紅ちゃん、すっかりと相手してたじゃないか」

え? 来てたの? 私相手してたの!？」

つてことは今日来た人間のうち誰かが「ひこ」なのか……私の想像してたような人物はいなかったけど所詮は想像でしかなかったってことか。

こんなことなら慧音に姿形を聞いておけば良かったな……しかし今日見た人間のうちの誰かだとすれば、容姿は想像できる。

今日見た人物は……黒髪黒目がほとんどだったな。服はみんな和服で、髪型は短髪だったり坊主だったり白髪だったり……最後のはおじいさんだから除外。

つまり、ひこの容姿は黒髪短髪黒目の和服を着た男性……つてんな奴多すぎて絞れるかああああ!!

いや、よく考えるんだ私。今日来た男性は確かにそんな奴ばっかりだったけど、何も来た客全員が男性だったわけじゃあない。中にはさつき言ったようにおじいさんもいたし、女の人も当然居た。ならば、まだある程度は絞れる。

今日来た若い男性は……そう、大体10人ちよい。これなら一日、いや半日もあれば誰が「ひこ」かを特定できる。見えた、見えたぞ。ひこへと続く光の道が!

ひこ! もう少して私はお前に手が届くぞ!

「妹紅ちゃん、ご飯できたよー」

「はーいー！」

まあそれは明日にすると……今日は久々に慧音以外の人の家で食べる晩御飯だ。しつかりと味わって食べよう。

久しぶりに食べた誰かの手料理は、とても暖かかった。

「な……なぜだ」

翌日、私は昨日来た男性客を捜し歩き、1人1人にひこかどうかを訪ね歩いた。

結果は……全て空振り。まさかおぼちゃんが嘘をついていた？ いや、そんなことはないはず。

誰かを見逃している？ いや、記憶にあつた男性客は全員回つたはず……。

「いや……もしかして、それが間違いだつたのか？」

もしかしたら、私はとんでもない思い違いをしていたのかもしれない。そう、ひこは実は……。

若い男性ではなかった！

私が慧音から聞いたのは「ひこ」という名前だけ……その名前だけで私はひこが若い男だと決め付けていた。

もしかしたら、おじさんと呼べるような男性かもしれないし、最悪と言ったら失礼だけれど老人かもしれない。

いや、もしかしたら相手は……お、女かもしれない。そう考えれば、私が今まで見逃していたのも仕方ない。だって私は若い男性しか見ていなかったのだから。

しかしそうなれば対象は人里の人間全てが対象となってしまうし、1人1人訪ね歩いていたら時間がかかりすぎる。いや、私の時間は無限だから大丈夫だけど、何年もかかってしまったら慧音の心の傷が広がってしまうかもしれないし、ひこが死んでしまうかもしれない。

「というわけで、何かいい方法はないか？」

「あんたが私にそんなことを聞くなんて世も末ね」

今夜。私が焼き鳥屋をやっているこの時間帯にやってきた最初の客は、もう常連となつている輝夜とその従者の永琳だった。

輝夜が言うように私がこいつに相談事を持ちかけるなんて少し前までには考えられ

なかったけど……。

「友達に相談して悪いか？」

「……」

私がそう言うと、輝夜は信じられないものを見たような顔をして持っていた、まだ肉が刺さっていた串をポロツと落とした。

隣にいる永琳が落ちた串を地面に落ちきる前に取ったのは流石だと思う。いや、屋台で見えなかったから予想だけどき。

「あんた、頭大丈夫？ どこをどう考えたら私とあんたが友達になるのよ」

「私の頭は至って正常だよ。私とお前はよく殺し合いと言う名の喧嘩をする。こうして話もする。今みたいに相談しようと思える……こういうのを『友達』って言うんだと思うんだけど？」

私は蓬萊人……死なない存在。仮に世界が滅んだとしても、私や目の前の2人は死なない。

だけど回りはみんな死んでいく。老衰、事故、殺害、理由はそれぞれだけど、でも……死ぬ。

だから、私は同じ存在であるこいつらがいなくなることがとてつもなく怖い。嫌われることが怖い。逢えなくなるのが怖い。言葉を交わせなくなるのが怖い。

そう思ったら、もう輝夜を殺そうとか怨むとか、そんなことは思わなくなつた。むしろ同じ存在であることに共感を覚えた。親近感、親愛のようなものさえ抱いた。

だから……友達になりたいと思つた。

「……あつきれた。それであんたの今までの迷惑な恨み言やら殺し合いやらを忘れて友達になれつて言うの？」

「……嫌……かな」

輝夜の言うように、私の中にあつた怨みつらみや殺意はこいつにとつて迷惑でしかない。それに友達になりたいつて思つたのはあくまでも私……こいつがそう思うかは別の話。嫌だつて言われても仕方ない。

でも……やっぱり、悲しくはあるかな……。

「……で、あんたは誰を探してるのよ」

「……え？」

「だから！ あんたが誰を探してるのかつて聞いてるのよ！ いきなり〃探してる人がいる〃つて言われた後に脈絡なく〃いい方法はないか〃つて聞かれても困るのよ！」

あ、そういうえれば誰を探すかまでは言つてなかつたつて。いや、だつて客には焼き鳥を

出さないとって思ってたし、酒の用意もあったしさ。

「つていうか今の口ぶりだと、輝夜は私の相談事を聞いてくれるように聞こえるんだけど……。」

「仕方ないから手伝ってあげるわよ…… “友達” である私に感謝しなさいよ？」

「……うん。ありがとな、輝夜」

友達……簡単に出来るようでも難しく……だけど気づいたらなっている……そんな不思議な関係。

今日、こうして輝夜と友達になれたのも、“ひこ” というきっかけがあったからこそ。こじ付けかもしれないし、私が勝手にそう思っているだけだけど……でも、ひこという存在にお礼が言いたくなった。

そんな私が “本当のひこ” のことを知るのは……3日後のことだった。

「で、誰を探しているのよ」

「ああ、ひこって奴なんだけどき」

「氷狐……あの賢者や巫女なんかには渡さないわ……次こそは私が勝って……」

「え、なに？ 永琳の奴いきなり泣き出してどうしたの？」

「ああ、気にしなくていいわ。これはある意味病気だから。さて、ひこを探す方法を話し合いましうか」

「あ、ああ。(永琳もひこって奴のことが好きなのかな……?)」

藤原 妹紅 転

「うーっあーうーっ」

「……さて、どうしようかな」

空に浮かぶ私がこの妖怪を見つけたのはつい先ほどのこと。

白狼天狗である私はこの“妖怪の山”を見回り、ここに住む者以外の者が来た場合に追いつくのが仕事。

昔は排除していたけれど、今はスペルカードルールというもののせいで極力殺生は控えるようにと言われているが、いざとなれば“そうする”ことも辞さないようにと上司から言われている。

つまり、私はあそこで果物を採っている狐耳の妖怪を追い出す、または排除しなければならぬわけなんだけど……。

「……って落ちる落ちる！ その枝は細いから……ああもうー！」

「うっっ」

いつの間にか高い位置の果物を採ろうとしていた妖怪が細い木の枝の上に上り、案の定ぼつきりと折れてしまったので急いで下りて抱きかかえるようにして助ける。不思議

議そうな顔をしているが、果物はしっかりとその手にあつたのはなかなかの手腕と言わべきか。

つい助けてしまったけれど、私はこの妖怪を早く追い出さないといけない。が、どう見ても子供の妖怪……しかも言葉をちゃんと話していないところを見る限り、意思の疎通が出来るかも怪しい。住むもの以外の者には排他的なのが妖怪の山の住人の特徴ではあるが、生憎と私はそこまでではないし、出来れば里に赴いて果物以外の甘味を食べたいと思う。

それはさて置き、この抱きかかえている妖怪をどうするべきか……いや、だから追い出さないといけないんだって。

「……ここは妖怪の山だ。よそ者は疾く立ち去れ」

「うー?」

「ここから去れと言っている。3度は言わんぞ」

こんな言い方をしているけれど、私は「ここは妖怪の山という場所で、危ないから早くこの山から離れなさい」と言いたかった。私は誰かと会話をする際、こういうぶつきらばうな話し方になってしまう。そのせいかな、仲間内ではガラが悪いと言われ、少し肩身が狭い思いをしていたりする。

しかも言い方がキツイらしく、上司とは度々喧嘩になつてしまうのだ……こんな自分

が、私はあまり好きではない。

「うー」

「だから……なんだそれは」

内心でハア……とため息を吐いていると、妖怪が先ほど採った果物を差し出してきた。一体何のつもりだろうか。

妖怪の方を見れば、どこことなく心配そうな表情をしている……こんな表情を向けられたのは何十年ぶりになるかな。私に向けられる表情と言えば……喧嘩したときの怒り、仲間内の僅かな信頼と嫌悪、追い出す際の恐怖……命令を受ける際の無表情。

もしや同情でもされているのだろうか、などと考えたけど今の私は無表情でいる自信がある。なによりも言葉も話せないような妖怪にそんな知能があるかも分からない。

しかし、こうして果物を差し出されては私も何かしら対応しなければならぬ……それに、実は朝食を取っていないのでお腹は空いている。

「いらん。そんなものよりも早くここから」

「うー」

「だからいら」

「……」

「……わかった。わかったから泣くな」

本当は食べたいけれど口では拒否をする私。しかし拒否を続けると妖怪が泣きそうになったので内心では慌てて、表面では冷静に地面へと下り、妖怪を下ろす。

こんなことをしている場合ではないのに……と思いつつも意外なところで朝食を得たので幸運だなあと内心では喜んでいたりする。

果物は桃。秋の味覚であり、高い位置にあったためか程よく冷えている。一口パクリと食べてみれば口の中に果汁が溢れて甘味が広がり、今まで食べてきた桃はなんだったのかと言うほど美味しかった。

「……美味しいな」

「うーん」

「って待てコラー！ 山を降りろと言ったのになんでそっちに行く!?!」

私に果物を渡した妖怪はなぜか降りるところか先へと進んでしまった。急いで桃を食べ終え、山から下ろすために追いかける。

今までの人間や仲間とは違う、どこか保護欲を駆り立てられる妖怪。

私は、なぜかしばらくこの妖怪と山を巡るのもいいかと思いはじめていた。

「なんだって？ 氷狐がまたいなくなつた？」

「そうよ！ ああもう、今度は何に巻き込まれたつてのよ！」

甘味処の手伝いをしていると、店先からそんな話し声が聞こえた。なぜ私がここにいるかという、輝夜から「今まで通り人里で待つていればひこのことをよく知る奴と会えるから」と三日前の夜に言われたからだ。

昨日までは屋台や永遠亭までの護衛をしていたので来れなかったが……まさか今日になってようやくその知つてる奴に会えるなんてな。

「ひこがどうしたつて？」

「ああ、なんでも氷狐が八百屋にもここにも来てないからまた異変に巻き込まれたんじゃないかって……ていうかお前は誰だ？」

「私は妹紅。ちよつとひこつて奴に用事があつたから探してたんだけど……」

「のんびりと話している場合じゃないわ、早く氷狐を探しに行かないと！ ああもう、あれほど知らない人と妖怪と紫には近づくなんて言つたのに！ こんなことなら常に位置が分かる札を持たせておくべきだったわ！ いや、それよりも迷子防止に私が手を繋いだほうがよかつたかしら……」

「……なんか私の知つてる巫女と違う。誰このお母さん」

「気にするなよ。前からだぜ」

いや、それ以上にひこが迷子つてなに？ 大人じゃなかったのか？ なんか私の想像のひこから大分離れていったんだが。どこ行った私の想像した完璧超人のひこ。

それに迷子つて幼い子供じゃあるまいし……いや、もしかして慧音つてそういう趣味なのかな。

「ところで、妹紅は氷狐に何の用なんだ？」

「ちよつと友人がそいつに捨てられたらしくてね、一発殴つて謝らせてやろうかと思つてさ」

「え？」

「え？」

「……」

いや、何この沈黙。なんで私こいつに「何言つてんのこの人」みたいな顔で見られてるんだ？

あ、もしかして話を端折りすぎたかな。友人が捨てられたつて言つたし、理解が追いつかなかったのかもしれないし。

「……氷狐が捨てた？ 誰を？」

「私の友人を」

「名前は？」

「この里の守護者であり、教師でもある上白沢 慧音」

「……ああ、なるほど」

どうやら納得してもらえたらしく、この白黒は開いた左手に握った右手をポムツと置いた。

しかしその後になぜか爆笑された。隣にいる巫女は話を聞いていなかったのか、いきなり笑い出した白黒の方を見て冷たい視線を送っている。

「なにがおかしいんだよ」

「いや、なるほどな、そういう風に見えるわけだ。確かに氷狐のことを知らない奴が話を聞いたらそう聞こえなくもないか。妹紅、お前は一つ勘違いしてるぜ」

「勘違い……う？」

私が一体何を勘違いしているというのか。確かに最初は話を聞いただけで最低な奴だと思っただし、燃やし尽くす気だったけれど、それはひこを探して過ごすうちに良い方に改善できた。

それにいろんな可能性も考えた……もしかしたら女かもとか老人かも……子供かもとか。

いや、思い返してみれば慧音が捨てられたと言ったわけじゃなかったような……。そう考えていた私に、白黒は私にとって驚きの言葉を言い放った。

「氷狐は大人でも、ましてや人間でもないぜ？ あいつは子狐の妖怪だからな。青い髪の狐耳と尻尾を生やした妖怪……この里にいるなら何度も見てるはずだぜ」

白黒に言われた“青い髪の狐耳と尻尾を生やした妖怪”を記憶から思い出してみる。そういえば、門番初日にそんな妖怪を見たな。美味しい果物をくれたからよく覚えている。

八百屋にも現れて山菜や果物を売っていったつけ……確か、ひこつて朝早くから山に入ってそれらを採ってきて売るんだつたな……おばちゃんも“子狐ちゃん”つて呼んでたつけ。

寺小屋の子供達とも遊んでたし……。

『それにしても……ひこ、来ないなあ』

『うっ？』

あいつかあああああああ!!

え!! なに!! 私はひこと何度も会ってたの!! しかも気づかずに流してたの!!

ああ、それでおばちゃんは「相手してた」っていったのか……気づくか!! しかも誰が慧音の話を聞いて子狐の妖怪なんて予想できるんだよ!?

しかも私の勘違いの仕方は「最低男と捨てられた女の関係」。恥ずかしすぎるわ!! どうしてそうなった!!

「まあまあ妹紅。団子でも食って落ち着けよ」

「あ、ああ……ありがとう。お前、いい奴だな」

「お前じゃないぜ。魔理沙だ」

「分かった。ありがとう魔理沙」

「ってそれ私の団子でしょうがあああ!!」

「ちよ、霊夢さんここは人里……きやああああ!!」

となりで爆煙が発生して悲鳴とびちゅーんって音が聞こえたけど、魔理沙からもらった団子のおかげか気にならない。

問題はひこのことだ。先ほど巫女達は「ひこが異変に巻き込まれた」と言った。つまり、今この里にひこはいない。

この時間帯なら、もう八百屋で採ってきたものを売って話の通りここで団子を頬張っててもいい頃だ。

それがないということは、まだ山にいるのか、それとも住処から出てきていないのか

の二択。

そういえば、ひこが採りに行っている山は妖怪の山の近く……もしかしたら、そこま
で言ったのかもしれない。それに、妖怪の山には豊穰の神である「秋姉妹」がいる。今
の季節も秋だし、実りも豊富のはず。

もしそこにいるなら、はつきり言って相当マズイ。山に住む天狗たちは他の住人には
酷く排他的で天狗によつては力づくの排除も辞さないらしい。もしも見つかれば……
いや、考える前に行動だ。

「巫女、私は妖怪の山に探しに行くよ」

「は？ 氷狐がいつも行ってるのはその手前の山よ。そんなところにいるわけ……い
え、いるわ！ すぐに行くわよ！」

「急に行く気になったな。私は予想したからだけど、巫女はなんで？」

「勘よ!!」

「え？ ああ、そう……」

この巫女は私の手に負えない……私はそう確信した。
さて、手遅れになる前に、私も飛んでいった巫女を追いかけなきやね。

「おい、まだ採るのか？」

「あーうー♪」

何この子可愛い……じゃなくて。あれから少し経ったけれど、その間一緒にいてある程度この子について知ることが出来た。

名前は氷の狐と書いて氷狐と言い、普段はこの山の手前の山で採っているのだが、今日はこの山からいい匂いがしたのでわざわざ採りに来たのだとか。どうやら妖怪の山には初めて来たため、話で聞いてはいたがそれほど危険性を感じなかったらしい。まあこの辺りは私の警備範囲なので、確かに他の場所に比べて危険性はないだろう。

しかし、これ以上進んではマズイ。ここから先は別の天狗の警備範囲……しかも白狼天狗ではなく烏天狗が巡回している。巡回は基本的に白狼天狗の仕事なのだけれど、その上司になる烏天狗もちゃんと巡回している。

……まあ、極一部はこういう仕事をせずに新聞記事の取材ばかりしているような上司もいるけれど。

と、そんなことを考えている場合じゃないしこれ以上は本当にマズイ。上司が出てきて排除しろでも命令されれば、私はそれに従わざるを得ない。妖怪の山は縦社会なのだから。

とはいえこの子……氷狐はただ山菜や果物を採っているだけだし……何よりも、無愛想な私に果物をくれた上に無垢な笑顔まで向けてくれた。そんな子を排除できるほど、私は冷血ではない。

「氷狐、これ以上はダメだ。早くこの山から……」

「どうした犬走《いぬばしり》……む？ その妖怪は侵入者か」

そんな声が聞こえた瞬間、私の背筋が凍った。声がした方向……上、つまり上空を見れば、そこには名前どおり烏の黒い翼を生やした私達白狼天狗の上司である烏天狗の姿。

背筋が凍ったと言ったが、別に彼が怖いわけではない。上司と言っても階級的には同じであり、ただ白狼天狗よりも数が少ないので貴重、という意味で上司の位置にいるだけののだから。

問題は、私以外の天狗に氷狐が見つかってしまったということ。

「なぜ貴様が侵入者と共にいる。そのような体も妖力も小さき妖怪、貴様なら一瞬で終わるだろう。なぜ排除していない」

「……この妖怪は山の幸を採りに来ただけのこと。密偵や侵略の可能性も皆無と判断し、それだけならばと私が監視をしていました。採取が終わり次第、私が責任を持って麓まで……」

「送る必要はない。この場で排除しろ」

びっくり、と肩が跳ねたことを自覚する。正直、予想していた言葉ではあつた。そして、そう言われてしまえば私はそれに従うしかない。

私は腰に差している大太刀を鞘から抜き、氷狐に振り向いて上段に構える。

見た目こそ白い狼の耳と尻尾が生えている以外は人間の少女とそう変わらない私だがそこは妖怪、人間なんかとは比べるべくもない力がある。この一刀を振り下ろせば、私の胸ほどしかない氷狐など真つ二つになつてしまふだろう。

振り下ろせば、本来の任務を遂行できる。振り下ろさなければ、命令違反となつてしまふ。そんなことをすれば、良くて山から追い出され、悪ければ……。

「……っ！」

その先を考えることが怖くなり、決して少なくない情愛を抱いた妖怪に向かつて大太刀を振り下ろす。力いっぱい振るつた一太刀、ほとんど抵抗なくその体を両断できるだろう。

憎んでくれていい。意志が弱いから君を殺してしまう私を。

そう思つて君を見てみたら、なぜか君は私に笑顔を向けてくれていて。

「もみじ……♪」

道中で名前を教えたら「もーじ」と呼んだので矯正した私の名前を呼んでくれて。だから私は……目を瞑って振りぬいた。

ヒュンと鋭い音を立て、大太刀が「上空の烏天狗」に向かって振られたのを見て、私は安堵の息を吐く。隣にいる巫女を見てみれば、同じように安堵していた。

私達がこの場面をみたのは、ほんの数秒前のことだ。ひこ目掛けて振り上げられた大太刀を見て正直かなり焦ったが、自体は予想外の方向に進んだ。

「何のつもりだ犬走」

「……」

犬走と呼ばれた天狗は何も答ええない。代わりにひこを後ろに隠す様に位置取り、大太刀を天狗に向ける。

上空にいる男の天狗は大太刀の一閃を後ろに下がることで避けていたが、余程予想外なのかその声は微妙に震えていた気がする。厳格な口調だが、案外気弱なのかもしれない。

「何のつもりだと問うている！」

「この妖怪は私が監視し、採取を終え次第山の麓まで送ります」

「必要はないと言った！ 私が問うているのはその妖怪のことではなく、なぜ上司である私に刃を向けたのかということだ！」

「ここはまだ私の警備範囲……範囲内では担当の者の意思で動き、判断しづらい相手が来た場合のみ上司に命令を仰ぐという規則のはず。この妖怪は私が危険性は皆無だと判断しました」

「だから妖怪のことではないと言っておるだろうが！ ええい、貴様が排除せんと言うなら、私がやってやろう！」

イラついたのか、男の天狗は顔を真っ赤にして手にある葉団扇を振り上げた。

烏天狗は風に関した能力持ちが多いと聞くし、もしかしたらあいつもそうなのかもしれない。もしも「台風を起こす程度の能力」なんて能力だったら、あの天狗だけじゃなく後ろのひこにも被害が及ぶ。

同じことを考えたのか、私と巫女は同時にひこ達の元へと向かい……天狗と男の天狗の間に降り立った。

「っ、何奴!! は……博霊の巫女!! それに貴様は蓬莱人の……」

「流星は情報社会に生きる天狗。私のことも知ってたか」

「あんた、家の子を排除するとか言ってたわね……逆に退治してやろうか」

いや、お前の子じゃないだろ。とつつこむのは内心だけ。やつと目的の人物……いや、妖怪に会えたんだ。いきなり殺されてしまつては困るし、何よりも慧音が悲しむいや、何度も会つてるけどさ。

それに、私自身この妖怪を気に入っている。

「そんな奴が殺されるなんて我慢できないしな!! 焼き鳥にするぞ鳥!!」

ゴウ! と音を立てて燃え上がる私の両手。長く生きたせいかわりに妖力に目覚めた私が使えるのは、この炎だけ……威力は折り紙つきで輝夜と永琳の太鼓判もある。

今から山火事を起こすことだつてできるくらいだ……やらないけどさ。

「あつついわね! もうちよつと火力弱めなさいよ!」

「熱い……いや、秋なのに暑い……」

「うー……」

「おつと悪い」

3人から苦情がきたのですぐに火力を弱める。術者だからか私は熱くないんだけどな。

苦情もなくなったところで改めて男の天狗を見据える。正直、こいつから感じる妖力は他の天狗とそう変わらない。これなら私1人でも十分だし、巫女と天狗の3人なら負

けはないだろう。

「くっ、こうなつたら応援を……」

「呼びにいけると思うのでしたらどうぞ。私が“視た”限りでは、この周辺には誰もいませんが……ね」

「……覚えておれよ犬走。このこと、大天狗様に報告するからな」

「どうぞ。ただし、私も自分の警備範囲から離れて私の警備範囲内にいたことを報告させていただきます」

「そう言つてられるのも今のうちだけだー!」

小物臭い捨て台詞を吐き捨て、男の天狗は飛び去つていった。

妖怪の山は縦社会……上司に逆らつた挙句に刃を向けたこいつは、きつと只では済まない。山から追い出されるか……最悪、殺される。

そのことを、あの天狗にあそこまで言つたコイツが気づかないわけがない。体も震えているし、気づいていて逆らつたんだらう。

こいつは、とてもいい奴だ。少し無愛想だけど、他の天狗なんかとは比べ物にならないくらい。

「お前さ、名前は？」

「えっ？」

「名前だよ、名前。教えてくれないか？ 私は藤原 妹紅……健康マニアの焼き鳥屋さ」

「……犬走 権《いぬばしり もみじ》」

「よろしくな、権」

「ああ……妹紅」

ひこを抱きしめている巫女の前で、私と権はがっしりと握手を交わした。

なんとなく、その時の権の顔が……無愛想なんかじゃなくて、見た目相応の可愛らしい笑みを浮かべていた気がした。

「もうすぐだ……」

妖怪の山の上空に、先ほど部下に逆らわれるという屈辱を味わった天狗が飛んでいった。

向かう先は大天狗等がいる本部と言うべき場所。そこにいるであろう大天狗に権のことを告げれば、ほぼ確実に権は山から追い出されることだろう。

屈辱を味わわせられた相手が消えるのだ、それはさぞかし気が良くなるだろう。

しかし、それは叶わない。

「ごきげんよう」

「何や……………つ……………」

天狗の前に突然現れたのは、中華風の服を着た金髪の美女。その顔を見た天狗の顔が真つ青になり、美女は面白そうにクスクスと笑う。

美女……………八雲　紫は取り出した扇子で口を隠しながら天狗を見据えた。

「こんにちは、名も知らぬ鳥天狗さん。今日はあなたにちよつとした贈り物があつて来たの」

「そ、そんなものはいらぬ。私は急いでいるのだ」

「つれないですわね……………そう言わずに受け取ってくださいな。これは私からの贈り物ではなく、*「あの子」*からの贈り物なのだから」

紫の言つたあの子という言葉に覚えのない天狗は、その場で首を傾げてしまう。

その行動が引き金となったかのように、天狗の周りを色とりどりの弾幕が埋め尽くした。

「な……………あ!？」

「あの子は彼女達の後ろでこう思ったの……『友達をいじめたあの人は許せない』。子供って残酷なのよ？ 無邪気に花を引きちぎり、無垢に虫の羽を塗り取り……無意識に暴力を振るう。あの子は妖怪だからかそんなことはしないけれど……でも、やっぱり子供」

紫奥義「弾幕結界」

断末魔の悲鳴を上げることができず、天狗はその弾幕の嵐の中へと消えた。

一定時間経たない限り途切れることはなく、反撃すらも許されない『耐久スペル』に分類されるこのスペルカードは、中級がいいとこのあの日狗には数秒保つことすらできなかった。

当たっても、当たっても弾幕は終わらない。これはスペルカードルールではなく……：完全な暴力なのだから。

「あなたが飛んでいたのは、私が映し出した偽りの妖怪の山上空……あの場から飛び去った時点で、あなたは私の結界の中にいたのよ。誰かが気づくこともない。誰かに見られることもない。聞こえることも、入ってくることも、そもそも認識することも出来ない。だからあなたが助かることもないわ……もう聞こえていないでしょうけどね」

制限時間が過ぎ去り、美しくも荒々しい弾幕の嵐が止んだ。その中心に紫が目を向ければ、そこには天狗の影も形もなかった。

逃げた？ いや違う。弾幕の威力に耐え切れず、文字通り消滅したのだ。痕跡やかけらも残さず、塵の一つまで綺麗に。

紫は境界を操る程度の能力を使い、妖怪の山にいる存在全ての「事実と虚偽の境界」を操ってその記憶を僅かに変えた。

「『友達をいじめる奴なんか消えちやえ』……それは誰かが死ぬことだと、あの子は気づかない。子供は、自分にとって大切なもの以外はどうでもいいのだから」

だから意識を変えさせた。思い切る前に予測が出来てしまったから、記憶を僅かに変えてあの天狗との口論のことを忘れさせて、その思考《オモイ》を無理やりなかったことにした。

そうしなければ、氷狐に「殺し」というものをさせてしまうから。

「さようなら、名も知らぬ、この世から消え去った哀れな烏天狗。だけどそれすらも幻想郷は受け入れる……それはとても残酷なこと」

いつの間にか境界は消え去り、強い風が吹いたかと思えば紫の姿も消えていた。

ただ、いなくなつた紫の声がどこからか聞こえてきた。

それは怒りを含み……尚且つ愉悦の色も含まれていた。

「八雲は『家族』への暴言を許さない……その禁忌を破るなら、私は『幻想郷の母』として怒りましょう」

誰も聞く者がいない場所で、詠うように言葉は紡がれた。

ただ……その怒りに震えるように、幻想郷の大地が震えた気がした。

藤原 妹紅 結

妖怪の山に行った翌日の早朝、私は人里の門の前にいた。その理由は、もうすぐ来るであろう「2人」の妖怪と会うためだ。

門番の人と話をしながら待つこと半刻……ようやく私が待つていた妖怪達が現れた。

「う？ もーうー！」

「もーうじゃないだろう氷狐。妹紅だ」

「おはよう妹紅」

「ああ、おはよう権」

待つていたのは、氷狐と権の2人。なぜこの2人が一緒にいるのかと言えば、権が氷狐が妖怪の山に行った時に護衛を勤めているから。

なんでも権は「千里先を見通す程度の能力」……早い話が千里眼を持っているらしく、他の天狗に見つかる前に氷狐を安全な場所まで送り届けることが出来るんだとか。

「て、天狗!？」

「ああ、この天狗は大丈夫ですよ。私と氷狐の友人ですから」

「犬走 権と申します」

「藤原殿と氷狐の友人でしたか……なら大丈夫そうですね。ようこそ人里へ」

門番の人に通してもらい、私達はまず八百屋へと向かう。理由は当然、氷狐が採ってきた山菜と果物を売るため。

椀は人里が珍しいのか周りをきよろきよろと見回している。ちよつと人の視線が気にはなるが、私と氷狐を見ると1、2度頷いて椀から視線を外した。もともと妖怪を嫌悪していたのだから、天狗である椀に一瞬間な視線が行くのは仕方ないことだと思う。納得できるかは別として。

「うー!」

「あら、子狐ちゃんに妹紅ちゃんに……」

「うー、あーうー」

「あら、子狐ちゃんのお友達なのかい? それなら大丈夫そうだね」

「うー♪」

「え!? 今の伝わるの!?!」

なぜ今ので伝わるのか……ちなみに私は全く分からなかった。椀も私と同じように驚いているあたり、私と同じく分かってなかったんだろう。

そんな私達をよそに、氷狐とおぼちゃんは慣れた手つきで採ってきたものの売買をしていた。双方ご満悦だ。

「うー！」

「え？ 団子!？」

「椀、お前もか」

なぜ今ので分かるのか……裏切られた気分だ。とはいえ私も氷狐のいつもの行動から次は甘味処に行くとは思っていた。そういえば、昨日巫女にぴちゆられた魔理沙は無事だろうか。

私はいつの間にか手を繋いでいる氷狐と椀を見ながら、そんなことを思っていた。

「あーん……♪」

氷狐と一緒に団子を口へと運び、もぐもぐと咀嚼する。

妖怪の山ではまず味わえない職人の手による手作りの団子が生み出すこのちようどよい甘味……団子そのものももちりとしていて舌触りが良い。

美味しい。それ以外の感想なんてでなくらい美味しい。こんなものを食べてしまつては病みつきになってしまう。というかなつてしまった。今度から警備の時間の僅かな空き時間でも買いに来よう。

「へえ、そんな顔もできるんだ」

「ふえ？」

「さつきまで無表情だったけど……椀の顔、幸せそうに緩んでるぞ」

「っ!？」

妹紅に言われてすぐに自分の頬を触ってみる……うん、自分じゃ分からなかった。でも妹紅が言うならそうなんだろう。

恥ずかしい気持ちはある……でも自分が無表情以外の表情が出せるということが少し、嬉しかった。

そういえば、さつき門のところで妹紅は私のことを友達と言ってくれた。実は、私はこの時とても嬉しかった。

妖怪の山は縦社会……仲間内の関係なんて上司、部下、同僚くらい。普段無表情な私に話しかけるような物好きはおらず、会話は事務的なものばかり。1人だけ私とよく口論になる上司がいるが、総じて友人と呼べる存在なんていなかった。

でも……そう思って妹紅を見てみる。私と妹紅は氷狐を挟むように座っており、妹紅はちようど団子を口に入れるところだった。瞬間、妹紅の手は止まり、私の視線に気づいたのかこちらに顔を向けた。

「どうした？ 私の顔になんかついてるか？」

「いや……そういうわけじゃない。ただ……」

「ただ？」

「……友達とこうして団子を食べるといっのはいいものだ……そう思ったんだ」

「そっか」

少し恥ずかしい気持ちはあつたけれど、言ってみると妹紅はニカツと笑ってくれた。

なんだか、感じたことのない暖かさが胸に広がる。悪い気分ではなく、むしろいい気分。

その心地よさに心を委ねながら、私は最後の団子へと手を伸ばし……。

「もーらい」

「は？」

「え？」

「う？」

伸ばした手は空を切った。目の前を見てみれば白黒のいかにも魔法使いですと言わんばかりの格好をした少女がいる。

そしてその手には……私のところから取ったのであろう団子が一つ。そして少女はそのまま口へと運び……一口で食べた。

「うん、やっぱりここの団子は美味しいよな」

「……」

「……? どうした氷狐? 今日は嘔み付いてこないのか?」

「うー。うー」

「ん? こいつがどうしたって……っていかこいつ誰?」

私の団子……食べることを楽しみにしていて、今日やっと食えることができたのに。

しかもコイツが食べたのは私が最後に食べようと思っていたみたらし団子……人里に来る時に氷狐から一番美味しいと聞いたから最後に食べようとしてたのに。

「お……お……」

「え? 何? なんでこいつ泣いてるの?」

「うー……まーさ、あーうー」

「あーあ、泣かした。魔理沙さいてー」

「はい?」

「お前の血は何色だあああ!!」

「ええええ!! なんていきなり怒られたの!」

「ぐすつ……えぐつ……」

「もみじ。あーう」

「ありがと……むぐむぐ……」

魔理沙に天誅を下した棍は、泣きながら氷狐が追加したみたらし団子を受け取って食べていた。

因みに魔理沙は棍に大太刀の峰で思いつきり叩かれたので頭にたんこぶを作って野ざらしにしている。自業自得だな。因みに血の色は赤だった。

「一体なんの騒ぎよ……なんだ魔理沙か」

「れーむー!」

「おはよう氷狐」

今の騒ぎを聞いてか、空から巫女が降りてきた。氷狐は巫女を見るや否や椅子から飛び出し、突撃するように抱きついた。本当によく懐いてるなあ。

巫女も満更ではない……というか笑顔だ。めちやくちや嬉しそうだな。ところで、魔理沙はあのままでもいいんだらうか。道行く人が邪魔臭そうなんだけど。

「そういえば、あんた昨日は大丈夫だったの？」

「ふえ？」

「いやふえ？　じゃなくて。あんた昨日あの天狗から言いつけるとかなんとか言われてたじゃない」

「…………？」

私と権は巫女が何を言っているのか分からなかった。昨日、私は権以外の天狗には会わなかったし、巫女もその場にいたはずだ。

というか、昨日は氷狐がいつも甘味処に来る時間になつても来ず、それを心配した巫女と私が妖怪の山に行き、果物を採るために木から落ちそうになつてゐる氷狐を権が助け、そこでほかの天狗とは違うと思つた私が権と友達になつた……こんな感じだったはず。私達以外の奴なんか見ていない。

「…………つていう夢を見たんだけど」

「夢かよ」

「〜♪」

氷狐を撫でながらそんなことを言つた巫女。思わずつつこけてツツコンでしまった。

権も同じようにつつこけて団子を落とすようになってたけど、なんとか落とさずに済んだ様だ。

「まあそんな話はさて置いて……私と氷狐は今から神社に行くけど、あんたたちも来る？ 何も出さないけどね」

「遠慮しておくよ、今日は椀に人里を案内する予定だったからね」

「そう。それじゃあね」

「うー」

それだけを告げて、巫女は氷狐を抱き上げ、魔理沙を背負って飛び去っていった。なんだかんだで面倒見はいいようだ。

その際に手を振っていた氷狐に和みつつ、私は椀へと目を向ける。無表情ながらも手を振り返しているところを見ると、少し寂しそうではある。椀には無表情は似合わない……私はそう思った。

同時に、私はさつき見たような笑顔が見たいと思った。だから……。

「ほら、行くぞ椀」

「わわっ、妹紅！ 引つ張らないでくれ！」

「時間は有限なんだ、急がば回れってね。急いで里を回るぞ！」

「それは意味がちがあああ……」

今日一日、私が全力を注いで笑わせてやる。

笑う角には福来る。幸福は笑ってる奴に来るのだから。

「で、氷狐には会えた？」

「ああ、会えたよ。というか何度も会ってた」

「でしようね」

時間帯は夜。私が開いている焼き鳥屋に、1人の客が来ていた。

その客とは……私に氷狐に会う方法を教えてくれた輝夜。でも今の言葉を聞く限り、輝夜は私が「ひこ」という人物を勘違いしていたことを知っていたんだろう。だから敢えてどういう奴かは言わず、会う方法だけを教えてくれた。

「面白かったか？ 私の勘違い劇は」

「ええ。あの夜永遠亭に帰ってから爆笑させてもらったわ」

「性格の悪い奴」

「だってお姫様だもの」

「…………ふっ」

以前の私だったら……いや、私達だったら、もう殺し合いが始まっていただろう。

けれども、今はそんなことはない。殺意も、殺気も、憎しみすらなくなってしまう

た今では、こんな会話がとても楽しい。

こうして、私と輝夜が向かい合って笑いあっている……それだけが、とても嬉しい。「そういえば、椀って天狗と友達になったよ。少し無愛想だけど、笑った顔が可愛い奴でさ。きつと輝夜とも友達になれる」

「……………ふーん……………そう」

……………あれ？ なぜか輝夜が不機嫌になってしまった。商売柄、人の機嫌の変化には敏感なのですぐに分かった。

でも、今の話で不機嫌になる要素なんてあつたかな……私は椀と友達になった。きつと輝夜も友達になれる……何もおかしいところはない。いや、輝夜は私が椀と友達になったと言った時点で少し不機嫌になっていた。笑った顔が可愛いと言ったら、かなり苛立っていた……つてことは。

「……………妬いた？」

「っ!? ベベベ、別に妬いてないわ！別に妹紅が私以外の奴と友達になろうと関係ないし!? 私が妹紅しか友達がいないから羨ましいなんて思つてないし!? どんなに友達が出来ても私が一番じゃないと嫌だなんて思つてないし!？」

何この可愛い生き物。両手をパタパタと振つて顔も真っ赤にして説得力の欠片も感じないんだけど。

でも……一番の友達……か。あんまり一番とか二番とかっていうのは嫌なんだけだな。でも、そう思ってもらえるのは……悪くない。

そう思っていると、私は輝夜が無性に愛しくなって……気づいたら、屋台越しに輝夜を抱きしめていた。

「ちよ……いきなり何して」

「大丈夫だって。輝夜は……私の一番の親友だからさ」

「~~~~~!?!」

耳元で囁いてみると、輝夜は私から離れてしまった。

親友は嫌だったのかな……いや、顔真つ赤だから恥ずかしがっているのかもしれない。

「きよ、今日は帰るわ……また、来るから……客じゃなくて親友としてね」

口調こそ冷静だけど、輝夜は逃げるように全速力で飛び去っていった。

その去り際の言葉を聞いて、私は顔がにやけるのを止められなかった。

さて、こんな顔では接客なんて出来ないし、今日はもう店じまいにしようかな……そう思ったとき、今日最後の客が来た。

「妹紅、まだやっているか?」

「慧音じゃないか。ああ、まだやってるよ」

「それはよかった……もも一つ」

「あいよ」

頼まれた串を取り、網に置いて焼き始める。そういえば、慧音に氷狐のことを言っ
なかつたつけ。

ちようどいい……そう思つて、私は慧音に話しかけるのだった。

「紫、出てきなさい」

縁側に座つて夜空を眺めながら、霊夢はそう呟いた。

すると霊夢の正面の空間が割れ……そこから八雲 紫がゆつたりとした足取りで姿
を現した。

しかし、霊夢は紫に視線を向けることはなく、夜空から目を離さない。そのことに、紫
も何も言わない。

「単刀直入に聞くわ。あの天狗をどうしたの？」

「消したわ。文字通りに……ね」

「そう」

紫の答えを聞いても、霊夢は短く返すだけで夜空から目を離すことはない。

これは問答ではなく、ただの確認。昨日の男の天狗がどうなるかと、霊夢には一切関係ないのだから。

「蓬莱人と白い天狗、氷狐は昨日の出来事のことを忘れていた……いえ、違う出来事へと記憶が変えられていた」わ。これはあんたがやったのね」

「ええ。事実と虚偽の境界を操り、あの山全域の存在の記憶から昨日の天狗のことを忘れさせ、あの子たちには別の出来事を植えつけた」

「なぜ？」

「そうしなければ、氷狐があ的那天を殺してしまうからよ」

子供に犯罪を犯させたいと思う親はいない。危険なこと、いけないことをさせようと
思うものも、またいない。

紫が動いたのは、ひとえに氷狐に殺しというものを経験させないため。故に記憶を弄り、その時に思っていたかもしれない思考を無理やりなかったことにした。そして、代わりに自分が制裁したのだ。

「結果、氷狐に『消えちゃえ』と思わせることもなく、あ的那天に被害が及ぶこともなく、蓬莱人と天狗の関係を崩すこともなく、全ては丸く収まったということよ」

「……本当にそうかしら」

「…………？」

「確かに、あのままだったら天狗は山から追放、もしくは殺されていたかも知れない。でもあんたが記憶を弄り、あの天狗を消したから、全ては丸く収まったように思える…………ただ」

「ただ？」

「結果としてあの天狗が消えた以上、それは氷狐の能力が発動した…………ということにならないかしら」

「ざあ…………と、2人の間に嫌な風が吹いた。紫は驚愕に目を見開いて霊夢を凝視しているが、霊夢の視線は変わらず空を向いたままだ。」

紫の頬に嫌な汗が伝う…………それは、霊夢が言ったことを正しく認識してしまったから。

「…………この私が天狗を消したのは、氷狐の能力のせいだとも言うの？」

「別に。あんたが氷狐の思考を変えさせたのなら、あんたの行動はあんたの意思でしょう。でも、仮に氷狐が“消えろ”と思った場合、その場で消えるのか、それとも間接的な要因で消されるのか…………分からないじゃない？」

「何が言いたいの」

「私が言いたいののは、『本当に氷狐はそう思わなかったのか』ということよ」

「思わなかったわ！ 私が変えさせた！ あの天狗を消したのは私の意志……これが何にも変えられない真実よ」

焦るように、叫ぶように紫は言う。自分の行動は成功した。殺しを経験させなかった。あくまでも消したのは自分の意思だと。

それを聞いても、霊夢が紫を見ることはない。いつの間にか紫と割れた空間は姿を消し、霊夢は少し首が痛そうにしながら正面を向く。

右手を首元にやれば、そこにある綺麗な青い珠が連なって出来た首飾りがチャラつと音を立てた。

実は妹紅たちと分かれた後、霊夢は氷狐に今着けている首飾りの色違いのものを渡していた。それは、霊夢手作りの何の変哲もない首飾り。

渡したときの氷狐の嬉しそうな顔を思い浮かべ、霊夢の表情に笑みが浮かぶ。「……そうね。全ては丸く収まった……それでいいのよね」

一匹の天狗が誰に気づかれることもなく消え、大切なものたちは無事だった。ただ……それだけは確固たる真実だった。

「慧音」

「なんだ？ 妹紅」

「氷狐のことだけどき……まあ気にすんなって！ 氷狐はまだ子供だから、慧音の気持ちに気づかないだけなんだって！」

「は？」

「まさか慧音が子供を愛している（恋愛的な意味で）とは思わなかったけど、私、応援するから！ お母さんの存在は嬉しいかもしれないけれど、大丈夫！ いつか報われるときが来るから！」

「え？ ちよ、なんの話だ!？」

風見 幽香 起

〔風見 幽香《かざみ ゆうか》〕

季節の花が大好きであり、一年中花のある場所を渡り歩いている妖怪。鮮やかな緑色の髪と赤のチェック柄の服装が特徴であり、今までの

幻想郷の住人の例に漏れず、その容姿は美しい。

サデイスト的な一面を持っており、自身の生活を邪魔する者、目の前で花を粗末に扱うものには一切の容赦なく、尚且つ無慈悲に攻撃する。また、性格のせいか人間との関係は悪い。

紫や幽々子等と同じく永き時を生きており、自主的に他の存在に襲い掛かるといふことはしない。

その能力は“花を操る程度の能力”。能力の詳細については名前の通りなので少略させていただく。能力自体は戦闘向きではないが、その戦闘能力、妖力の総量は正しく大妖怪であり、幻想郷においての最強の一角。弱者は相手にせず、強者との戦いが好きな戦闘狂な一面もあるようだ。

現在は“太陽の畑”と呼ばれる広大な向日葵畑の管理をし、そこを中心に季節ごとに

花を見に行っているらしい。

今回のお話は、いつものように子狐の妖怪氷狐と幻想郷の住人達がほのぼのと、時に慌しく、それなりに華やかに過ごす……そんなお話。

季節は秋を越えて冬。冷たい空気と暖かいベッドの中で、私はゆっくりと体を起こした。

寒い……それが今起きた私の正直な感想だ。真冬と呼ぶべきか、寝起きの体にこの寒気は少々辛く、すぐに布団の中に潜り込みたい衝動に駆られる。

が、日課である家の外にある花壇の手入れをしない限り私の一日は始まらない。私は寒さに震えながら外に出て井戸に向かう。中を確認して見ると、幸いにも中の水は凍っていないようだった。幻想郷は極寒と言うほどではないにしろ、冬の妖怪や氷精という奴らのせいでたまに気温がバカみたいに下がる時があるのだ。

以前にもやたらと冬が長く、井戸の中の水や花が凍ってしまったことがあった。その時にはなぜか空から降ってきた冬の妖怪を半殺しにして苛立ちを解消したっけ。

「……………うう、さむ……………」

眠気覚ましに井戸から汲んだ水を浴び、意識をはつきりと覚醒させる。只でさえ寒い中で水を浴びたものだから体が凍ってしまったかのような錯覚を覚える。すぐに家に戻って体を拭き、寝巻きから普段着に着替え、朝食を作って食べ、そして花壇に向かう。花壇に咲いている子供達は、今日も元気に風に揺られながら私を出迎えてくれる。おはよう。今日も寒いね。お腹すいた。などなどの声が、花を操る力を持つ私には聞こえてくる。

「ええ、おはよう。それじゃあ、朝ごはんにしましょうか」

咲いている「アサガオ」の花達に微笑みかけ、日課である水遣りを始める。この私、「フラワーマスター」の風見 幽香の一日はこうして始まるのだ。

冬の花と言えば、有名なところではヒイラギかしら。幻想郷には元々色々な花が咲いていて、私も能力を使って咲かせたりするので数え切れない種類の花がある。

今日はそのヒイラギが咲いている場所まで行ってみようか……そう思いながら自慢の向日葵畑を歩いていると、見慣れた黄色の中に混じって見慣れない青色が映った。その青から僅かに妖気を感じられるということは、あの青は妖怪なのだろう。

感じる妖力は精々小妖怪程度……つまり弱者。本来ならそんな弱者は放つて置くのだけれど、場所が場所なだけに無視することは出来ない。もしも私の大切な向日葵達に傷を負わせたりにしていたならば……。

そうは思つてはいるものの、向日葵達からは危機感を感じられない。どちらかと言えば楽しんで……いや、その青を歓迎しているようだ。

一体何者なのか……そう思つて向日葵達のスキマから覗いてみる。

「うー。あー。うーあーうー」

揺れていた、そうとしか言えない。

獣の耳と尻尾を生やした青い髪の子供が、風に揺れる向日葵達に合わせてゆらゆらと揺れていた。一般的にはカエル座りと呼ばれる座り方で、その妖怪は右に左に楽しそうに揺れていた。一体何が楽しいのかしら。

それに、向日葵達も楽しそう……それだけで、少なくとも花に危害を加えるような妖怪ではないことが分かる。それだけで、私にとっては信用するに値する。

「……で何をしているのかしら？」

「……」

気がつけば、私は妖怪の前に姿を現していた。私を知る者なら、すぐさま逃げ出すか攻撃をしてくる。知らないなら、私と言う見た目は完全に人間の女性が現れたことを不

思議に思う。中には下種な視線を向けるような人間もいたわね。

さて、この妖怪はどんな反応を見せてくれるのか……。

「……ゆーか？」

「あら、私を知ってるのね」

「ゆーり、うー」

何を言っているのか全く分からない。しかし、向日葵達は何を言っているのか分からないらしい……なぜ分かる？

向日葵達に訳してもらおうと、私と言う存在のことは「紫」という人物から聞いていたのだとか。私を知る限り、この幻想郷で紫という名前の存在は一人しか知らない。

幻想郷の賢者「八雲 紫」……恐らく、この妖怪はその賢者の身内みたいなものなのだろう。ならば、私がどういう存在か、どれほどの危険性を教えているはず。ならば逃げ出すのが普通だし、妖怪である以上私の妖力がどれほどの大きさかも分かるはず。

しかし、この妖怪は私の顔を見つめるばかりで逃げ出す様子はない。それどころか、恐怖心すらも抱いていないようだ。強い妖怪ならまだしも、弱い妖怪にこのような対応をされたのは初めてだ。

「そう。なら私がどんなにこわい妖怪かも知っているでしょう？」

「うっ？」

舐められているわけではなく、本当に不思議そうにされてしまった。首を傾げられても困るのだけれど。

確かに私は弱いものイジメは好きではないし、戦いを楽しんでも自分から吹っかけるようなことはあまりしない。この妖怪は花を粗末に扱うような存在ではなく、花からも好かれるような存在なので攻撃する意味も意義もない。

しかしだ。大妖怪である私を前にしてこの態度……どうにも私が眼中にないと言われているような気がしないでもない。いや、どちらかと言えば危険じゃないと思われる気がする。

別にプライドだなんだと言うつもりはないけれど、このまま帰すというのも味気ない。ここは一つ、私がどれだけ怖い妖怪かを教えてあげましょうか。攻撃ではなく怯えさせる程度で。

そう思い、私は右腕に妖力を……。

「こんなところにいたのね氷狐。探したわよ」

「ゆーりー！」

込めようとしたところで、第三者の声によって気を逸らしてしまった。

いつの間にか。妖怪の隣には日傘を持った金髪の中華風の服装をした女性が立っていた。その女性は、この幻想郷において知らないものはいないであろう存在。

八雲 紫……そいつは妖怪に抱きつかれ、とても嬉しそうな顔をしていた。

「あら……ごきげんよう、フラワーマスター」

「ええ、ごきげんよう賢者。あなた、子供がいたのね」

「残念だけど、実の子じゃないわ。この子には、私を含めて2人のお母さん候補ともう2人の家族候補がいるけれど」

何その状況。何がどうなってそんな状況になったのかを、不覚にも問い詰めた。た。

というか、賢者がその妖怪の母親になりたがっているのが信じられない。妖怪に笑顔を向ける賢者には、いつもの胡散臭さが無い。が、それが逆に胡散臭い。

一体何を考えているのか……相変わらず心のうちが読めない相手ね。

「ていうか貴方、母親って言えるような歳じゃないでしょう」

「言ってくれるわね独り暮らし。相変わらず花だけが友達でマトモに話せる相手がないくせに」

「うるさいわね、喧嘩なら買うわよ?」

私と賢者が同時にスペルカードを取り出して構える。

花だけが友達なのがいけないのよ。ちゃんと話し相手になつてくれるし、中には私のことを母として見てくれる花だっているのよ。そりやあまあ、こんな寒い時期には人肌

が恋しくなるし、たまに人の声が聞きたくなくて人里に向かうこともあるし、宴会があることに気づかないで気づいたときには終わっていて拗ねたりもするけれど。

正直、さつき賢者が妖怪に抱きつかれて羨ましいなーなんて思ったりもしたけれど……誰かに言われる筋合いはないわ。

僅かに募った怒りに負け、私と賢者は同時にスペルを……。

「め」

宣言しようとしたところで、間に入ってきた妖怪に止められた。両手を目一杯広げていかにも「いけません」と主張している姿は、見ていて微笑ましい。

同時に、先ほどまで感じていた僅かな怒りが沈静化していく。それは賢者も同じのよう、いつの間にか私達はスペルカードを持つ手を下ろしていた。

「……やめましょう。私と貴方が戦ったら花達にも被害が出るし」

「ええ、そうね。氷狐も巻き添えにしちゃうかもしれないし」

お互いにスペルカードをしまい、完全に戦意がないことを示す。そうすると妖怪……：氷狐と呼ばれていたわね。氷狐は満足そうに笑い、賢者と手を繋いだ。

その手を見ていると、賢者が私の顔を見ていることに気づいた。その顔は、羨ましい

かしら？　と言っているようだ。殺意が沸いたが戦意がないことを示したばかりなので後で発散しようと言った。

「さて、霊夢が待つてることだしそろそろ行きましようか。もう勝手に動いちゃダメよ。」

「あーう」

「何しに来たのよ」

「氷狐を迎えに来たのよ。それじゃあね、フラワーマスター」

「ゆーか。あーうー♪」

「あ……」

賢者がスキマと呼ばれる異空間への出入り口を開き、氷狐を連れてこの場から去る。その際、氷狐は私に笑顔を向けて手を振ってくれた。

そんなことをされたのは、生まれて初めてかもしれない。少しの唖然、遅い理解、僅かな歓喜。向日葵達が教えてくれた氷狐の言葉は、“またね”の一言。

また来るといふのか。美しい向日葵が年中咲くこと以外には、私という危険な妖怪しかないこの場所に。どれだけ命知らずで、どれだけ無邪気なのか。

ただ、またねという言葉を嬉しく思う私がいて。また来てくれると思っっている私がいて。

「……次は、お菓子でも用意してあげようかしら」
人間の少女の様に笑う……私が出た。

「それはさておき、そこに隠れてる冬の妖怪出てきなさい」

「ひい！ ばれてる！」

「丁度いいところに来てくれたわ……おかげでストレスの発散が出来る」

「わ、私は今年は特になにもしてないわよ!？」

「偶然ここに通りかかってしまった自らの不運を呪いなさい……さあ、イイ声で鳴いてちょうだい？」

「い、イヤアアア!!」

風見 幽香 承

あの妖怪に出会った日から三日が経った。その間にあの妖怪……氷狐がこの向日葵に来ることはなかった。

当然かと思う反面、柄にもなく残念がつている私に気づく。たった一度のわずか十数分の出会い……その中で聞いた「またね」の言葉が、どうしても頭の中から消えてくれない。

何を期待しているのか。あの場には賢者もいたのだ、大切な子に私の危険性など教えて当然。それに、子供は大人の言うことを聞くもの……氷狐がここに来ることはないだろう。

そう思っていたら、外の向日葵達がざわめいた。それも嫌がるのか怖がるのかではなく、歓迎の意思を籠めて。

もしかして……そう思った私は、すぐに向日葵達のところへと飛んだ。そして、ついに先に見えた、三日ぶりとなる青の姿を見つけてその目の前に降りる。

「ゆーかー!」

「久しぶりね氷狐」

私を見て嬉しそうに名前を呼んでくれる氷狐。きっと私の顔はだらしなく緩んでいるに違いない。

しかしそう簡単に緩んでしまつては大妖怪のプライドに関わるのですぐにいつもの私の笑みを浮かべる。

「前にも言つたわよね？ 私はこわーい妖怪だつて」

「うー？」

前と同じように不思議そうに首を傾げられてしまった。賢者はこの子に何も教えないのかもしれない。

妖気を出して威圧してみても、怖がる様子は一切ない。逃げないし、怯えない。ただ、私に純粋な笑顔を向ける存在はこの子が初めてだ。賢者の笑みは胡散臭いので除外。

「……怖くないのね？」

「うー」

あつさりと頷かれてしまった。怖いもの知らずというかなんというか。

このまま舐められるわけには……と普段の私なら思うかもしれないけれど、今の私は凄く穏やかな気持ちでいる。それに……本当にここに来てくれたのが素直に嬉しい。

「……家にクッキーがあるわ。食べる？」

「うっ？」

「ああ、知らないのね。甘いお菓子よ」

「あーうー♪」

嬉しそうに尻尾を振りながら首も縦に振る氷狐……なにこのかわいい生き物。

そうと決まればすぐに家に向かいましたよ……そうやって飛ばうとした時、私のスカートが引つ張られた。

もちろん引つ張ったのは氷狐。振り返ると、氷狐は私の右手をギュツと握っていた。

「うーあーうー」

「……ええ、そうね。このまま行きましょうか」

「うー♪」

向日葵達に訳してもらった言葉は、手を繋ごう。断る理由もないし、三日前の賢者との姿を少し羨ましく思っていた私にとっては都合がいい。

ギュツと手を握り返し、飛ばずにそのまま二人で向日葵畑の中をゆつくりと歩いていく。

たまにはこんなのもいいか……そう想いながら繋いでいた手は、冬にも関わらずお日様のように暖かかった。

氷狐とクッキーを食べた日から更に数日の時が流れた。

私がいるのは人里の中……あまりここには近づかないのだけれど、そろそろ食料が尽きかけているので買い出しにきたのだ。

人間を食べる妖怪もいるし、私も食べられないことはない。でも……単純に美味しくないのでよね人間。たまに襲ってイイ声で鳴かせる方が断然愉しいしお腹も膨れるわ。

「あーうー」

「店主、売りに来たぞ」

「はいいらつしやい、子狐ちゃん、椀ちゃん」

この間の冬の妖怪はイイ声で鳴いてくれたなあなんて考えていると、丁度買いに行こうとしていた八百屋に氷狐の姿を見つけた。隣に居るのは天狗かしら……山の住人以外には排他的な天狗がこんなところにいるなんて珍しいわね。

氷狐と手を繋いでいるところを見る限り、ほかの天狗と違って人間に友好的な天狗らしい……人間の方も名前前で呼んでいるようだし、この里の人間とは仲がいいのかもしれない。

「氷狐」

「う？ ゆーか！」

「ゆーか……？ つ!? 貴様、風見 幽香か」

「あら、私のことを知っているのね」

「幻想郷最強の一角……フラワーマスターの幽香」

私を見るなり氷狐をその背の後ろに隠し、腰の大太刀の柄を掴む天狗。實力の差を分かっているのか、その顔には汗がたつたっている。

氷狐の態度で忘れかけていたけれど、これが本来の私と出会った時の相手の態度。

死ぬか、殺すか。弱肉強食の妖怪の世界ではそれこそが不変の理。この天狗の姿こそが正しく、氷狐の姿こそが異端。

丁度いいわ……忘れかけていたことを思い出させてくれたお礼に……少し遊んであげましょう。

そう思い、私は右手に持っていた傘を振り上げ……。

「めっ!!」

ようとしたらまた氷狐に止められてしまった。両手を限界まで広げる姿は、見ていても微笑ましい。

同時に、高まった殺意が霧散していくのも感じた。こんなに簡単に毒気が抜かれてしまうのは、もしかして氷狐にそういう能力があるからだろうか。

天狗も同じなのか、いつの間にか柄に置いていた手をだらりと下げていた。私と同じように、もう戦意はないらしい。

「……ここは人里。戦いは禁じられている」

「私には関係ない……と言いたいところだけれど、氷狐に免じてそのルール、守ってあげるわ」

本当に、甘くなつたものだど内心で苦笑する。私は、こんな妖怪ではなかったはずだ。自分の好きな花が咲く場所を巡り、自分の好きな花を傷つけた相手を蹴り殺し、妖怪らしく自分勝手に生きている……そう思っていたのだけれど、いつからこんなに甘く、誰かに“免じて”なんて使うようになったのか。

……そんなもの、分かり切っている。

「さて、食材がほしいのだけれど」

「はい、何にしますか？」

「そうね……この子達が今売ったものをいただけるかしら」

「分かりました」

少し皺のある顔に優しそうな笑みを浮かべる女性から、氷狐たちが売った山菜や果物、もともと売っていた野菜を受け取り、お金を渡す。因みに、お金は黴った相手が持つていたものだ。

しかし、思ったよりも多く買ってしまった。これでは持ってきたバスケットに入りきれないかもしれない……少し面倒だけど、入る分を入れて一度家に戻り、残りを取りに行くでしょう。

「はいどうぞ」

「ええ……あら？ 私はこんなカゴは頼んでないはずだけど」

「持つてるカゴじゃあ入りきらないよ。そのカゴをあげるから、それに入れていきな」女性から渡されたのは、私が持ってきたバスケットに入る分の食材と、何も入っていない私が持つてきたものと同じくらいの大きさのカゴ。

妖怪とはいええ、人間の商売のことくらいは知っている。そして、渡されたカゴはしっかりと編みこまれた丈夫そうなもの……それなりの値段はするだろう。少なくとも、手持ちの資金では足りないことは予想できた。

「悪いけれど、そのカゴの分のお金はないわよ」

「いらないよ。これは私の手作りさね、値段なんかないよ。それに、私はあげるといっ

たんだよお客さん」

このカゴが目の前的人物の手作りというのも驚いたけれど、何よりも私を風見 幽香と知ってなおお客として接しているこの女性が凄いと感じた。

先の天狗との会話で、私はこの女性が怯えていたのを知っている。現に、今も体が震えているのだから、私に恐怖しているのが分かる。

けれども、彼女は私を妖怪ではなく客として接した。その顔に笑みを浮かべ、私のことを思っただけは分からないがカゴまでくれるという……なんというプロ意識。こんな人間もいるのかと素直に感心してしまう。

「それじゃあ貰っていくわね……ありがとう」

「はい。またお越しください」

自然と出てきた「ありがとう」の言葉に、内心で驚愕する。私はこんなことで人間にお礼を言うような妖怪ではなかったはずだ。いや、そもそもお礼の言葉を口にしたことなんてあっただろうか。

過去の記憶を思い返してみるけれど、そんなことを言った覚えも、言われた覚えもない。記憶にあるのは、せいぜい命乞いをしながら鳴き叫ぶ相手か、それを見て嗤っている私。我ながら、大好きな花と血と被虐に満ちた生だと思う。

でも……悪くない。やたらと言うことでもないし、そもそも言う相手もない。だけ

ど、こうして稀に言うくらいなら……悪くない。

「ゆーか!」

「なあに? 氷狐」

「あーう、うーうー」

そんなことを考えていると、不意に氷狐に手を引つ張られた。

何かしらと目線を合わせて問いかけてみるけれど……なるほど、分からん。近くに花がいれば訳してもらえたかもしれないけれど、生憎と近くにあるのは野草ばかり。これでは彼が何を言いたいのかが分からない。

「……氷狐は一緒に甘味処に行こうと言っている」

困っていると、さっきの天狗が訳してくれた。一体どういう風の吹きまわしかしら。

それはどうでもいいのでさておき……甘味処。ということは団子に饅頭といった和菓子のお店のことだろう。正直、あまり和菓子は好きではない。クッキーやケーキなどの洋菓子は好きなのだけだ。

しかしせっかくだと誘ってくれているのに嫌いだから行かないというのも失礼だ。というか、誘ってくれたことが嬉しいので断りにくい。そんなことを考えていると、氷狐と天狗に片方ずつ手を握られ、強く引つ張られた

「ちよ、なに!?!」

「まどろっこしいからこのまま連れて行く。私は早く団子が食べたい」

「うーあー」

「ほら、氷狐もこう言ってる」

「分かんないわよ!」

こうして、私は半ば引きずられるように2人と共に甘味処へと向かった。

そこで食べる団子はとても美味しく、私の和菓子嫌いがただの食わず嫌いだったと思
い知らされてしまった。今度からたまに食べに来ることにしよう。

「団子はみたらしが一番です! 白き宝玉を美しく染め上げる琥珀の蜜。その二つの
奏でる、食欲を促す甘き『はあもにい』の素晴らしさ!」

「いいえ、一番美味しいのは三色団子よ。カラフルな色合いに一つ一つ甘さが僅かに
違う。何度食べても飽きないように工夫された職人の技が光る、素晴らしい一品だわ」

「みたらしです!」

「三色よ!」

「うー……」

先ほどまでの無愛想な顔はどこかに消えた天狗とみたらし団子と三色団子のど
ちらが美味しいかで口論をする私。その間にいる氷狐から苦笑するような声が聞こえ
たけれど、今は気にしない。

天狗はどうやらこの敬語口調が素のようで、表情もはつきりと出ている今の姿は見た目相応の女の子にしか見えない。それはそれで微笑ましいのだけれど、この聖戦には関係ない。

みたらしが美味しいことは否定しないけど、三色団子はそれを上回るわ。こんなに説明してるのに、何で分からないのかしら。

「だったら氷狐に決めてもらいましょう」

「そうね、それがいいわ」

「う？」

「さあ氷狐。みたらしと三色、どっちが美味しい!?」

氷狐にそれぞれみたらし団子と三色団子を差し出す。選ばれた方が、此度の聖戦の勝利者……私と天狗は互いを見合い、その間で火花が散る。

氷狐を見てみれば、迷っているのか二つの団子を困ったように交互に見ていた。因みに、彼はどちらの団子も一本ずつ食べていたのでどちらも好きであろうことは予想できる。しかし、先に食べていたのは三色だったはず……いや、もしかしたら好物は最後まで取っておく派なのかもしれない。いや、子供である彼なら、きつと好きなものは最初に食べる派のはず。

「お、氷狐に権と……見ない顔だな」

「まーさ。うー……」

「魔理沙！」

「その白黒！」

「みたらしと三色、どつちが美味しい!?」

「え、何この状況」

答えは出ないまま、私の知らない人物がやってきた。氷狐と天狗の名前であろう名を
読んだから、この二人とは知り合いなんだろう。

それはさておき、この聖戦の参加者が増えたのは行幸。これで敵軍に大差を付けられ
ることでしょう。

「どつちが美味いかってなあ……どつちも団子には変わらないだし。強いて言うな
ら、氷狐にもらった団子は格別に美味いぜ? てなわけでもら」

「あんたは氷狐のを盗るなって何回言えば分かるのかしら……?」

おもむろに氷狐の持っているみたらし団子に手を伸ばす白黒。その白黒に向かって
声をかける新たな乱入者。

恐る恐る、白黒が振り返る。果たしてその背後にいたのは……。

「げえっ!? 関羽！」

「れーむ！」

「誰が三国志の英雄か。おはよう氷狐」

幻想郷の巫女……博麗の巫女だった。この巫女とも面識があるなんて、氷狐の顔はどこまで広いのか。

もちろん、この場に来たからには巫女にもこの聖戦に参加してもらいましょう。天狗もその気のように、私たちは互いに視線を交わし、言葉もなく頷きあつた。

「巫女」

「霊夢」

「何よ椀……あんたはフラワーマスターの風見……だったかしら？ あんたみたいなお妖怪が何で人里に……」

「そんなことはどうだっていい。みたらしと三色、どつちが美味しい!？」

「知るか。私が一番美味しいと感じる団子は、氷狐と一緒に食べる団子よ」

「我が子と食べるご飯が一番と。早速お母さん発言いただきました」

「誰が母親か」

駄目だこの巫女早く何とかしないと。乱入者は現われど明確な好みが決まらない。それどころか選択肢が増える始末。

これではこの聖戦は終わらない……やはり、最後は氷狐の選択に委ねることにしよう。天狗もそう思っているのか、私と氷狐を交互に見ていた。私はまた頷き、天狗も頷

いたところで改めて氷狐に互いの団子を差し出す。

「さあ、氷狐！」

「うー……」

再び困ったように笑う氷狐。実はもう聖戦だとかどつちが美味しいんだとかはもうどうでもよかつたりする。

私は、単純に楽しいのだ。こうして誰かと瑣末なことで言い争ったり、誰かに意見をきいたりすることなんて、今までに経験したことなんてなかつたから。

周りからは大妖怪と恐れられ、人間に会えば恐怖の感情を向けられ、花とともに独りさびしく生きてきた。本当に寂しい毎日を過ごしてきた……花たちがいなかったら、壊れていたかもしれないほどに。

妖怪だから独りでも大丈夫だとか、気にしないとか言うのは孤独を知らない馬鹿者の言い草。妖怪にも心や感情はあるのだから、寂しいと感じたり悲しいと感じたりすることだってある。

誰かと会えば怯えられ、誰かと話せば会話も通じず、手を差し出せば逃げられる……それがどれだけ寂しく、悲しいか。

でも、今は楽しい。こうして隣に誰かがいることが、こんなにも心が安らぐなんて知らなかつた。

そして……知ってよかった。

「氷狐が困ってるからやめなさい。おいでー氷狐ー」

「うー」

「ああつ、重要参考人が！」

「それは意味が違うだろ……ん？ いや、あつてる？」

巫女が氷狐を呼び、呼ばれた氷狐は巫女に抱きつく。それを見た天狗が慌て、白黒がつつこむ。

他愛もない日常……だけど、人間と妖怪がその日常を作り上げているとなれば、それはもう一つの奇跡。あつという間に壊れそうなの、だけど壊したくないと思う。

「待ちなさい巫女。氷狐は渡さないわ……団子の意見を聞くまではね！」

「なっ!? 氷狐は関係ないでしょうが！ 氷狐を放せ！」

「ふふふ、放すのは意見を言った後よ」

そんな日常に……私も入りたいと思った。

「今のうちよ天狗」

「はい！ さあ氷狐、みたらしと三色、どっちが美味しいですか？」

「うー……！！ う！」

「なぜここでリンゴを取り出した？」

「っていうかどこに持ってた……あ、かごの中のリンゴがない」

「団子よりリンゴってことね」

風見 幽香 転

「あら……そう、もう『これ』が始まるほどの月日が流れたのね」

一年の時を経て、再び訪れた春のある日に、それは起きた。

自宅の窓枠から外を見る私の目に映ったのは、山や世界を彩る四季折々の花たち。本来春に咲くようなものではない花も咲き乱れ、その風景は美しいというほかない。

外に出てみれば妖精達の騒ぎ声が聞こえ、幽霊達がこの太陽の畑にまで溢れ返っている。この現象は、60年前にも起きた。

かつて聞いた閻魔の説明では、60年に1度の間隔で外の世界で発生する幽霊の増加で三途の川の案内人である死神の仕事の許容量を超える数の幽霊が幻想郷に出現したため、溢れかえった幽霊が花に憑依し、花が咲き乱れる現象が発生した。また妖精は自然そのものであるため、不自然な花に大騒ぎしているというものだったかしら。

つまり、これは異変ではなく自然現象。犯人も何もないのだ。花が好きで私にとっては、一種のお祭りみたいなもの……ならば、私がやることはただひとつ。

「さあ、今回はどんな花が見られるかしら？」

楽しい楽しい……花見の始まり。

襲い掛かってくる妖精を半殺しにしながら人里へとやってきた私は、目当ての妖怪を探す。その人物とは、当然氷狐。一人で見るよりも複数で見るほうがきつと楽しいと思っただからだ。

さて、いつもなら八百屋のあたりにいるはず……と視線を八百屋に向けるとあつさりと目当ての妖怪を見つけた。白黒と巫女もいて、なぜか巫女に抱き付かれているけれど。

「氷狐！ 怪我はない!? 誰にも襲われてない!？」

「うー?」

「むしろ霊夢に襲われてるように見える気がするぜ」

「それは同感ね」

「う? ゆーか!」

「こんにちは氷狐」

何気なく白黒に賛同すると、氷狐がパアツと花が咲くような笑顔を見せてくれた。今日は花がいっぱいの一日ね。

しかし、なぜか巫女と白黒が私を見た瞬間に氷狐を抱き上げて私から距離を取った。いきなりのことに唾然としたけれど、普通に考えてこれは失礼ではないかしら。なぜか巫女は私を睨んでいるし。

「出たわね、この異変の犯人!!」

「異変……?」

「とぼけても無駄よ! あんたがこの幽霊やら花やらの異変の犯人だつてことはわかつてるんだから!」

ああなるほど、巫女はこの自然現象を異変だと判断し、私とその犯人だと思つていいのか。確かに以前この現象を経験していない存在なら、普通は異変だと思つてしまうでしょう。実際、私も60年前は閻魔に聞くまで異変だと思つていたんだし。

巫女は私が犯人だと疑つている様子……白黒も八角形のものをして臨戦態勢に入っているし、戦う気は満々のようだ。唯一氷狐だけが、状況をよく分かつていないようにキョトンとしている。

「残念だけど、これは私がやったことじゃないわ」

「嘘つけ! 花を咲かせることが出来るなんてあんた以外いないじゃない!」

「いや、氷狐もやろうと思えば出来る気がするぜ」

「う?」

「あんたは黙ってなさい」

確かに、幻想郷で花を咲かせる、操れる妖怪は私以外には知らない。でも今の白黒の言い方だと、氷狐も花を咲かせることが出来る、もしくは出来る能力を持っているように聞こえる。

もしかして、氷狐が花たちに好かれるのはその能力のおかげだろうか。自然に好かれる程度の能力とか……中々素敵な能力ね。

「とにかく！ あんたを退治してこの異変を解決させてもらおうわよ！」

「それは無理ね」

「彼女の言うとおりですよ、今代の博霊の巫女」

「なんでよ……って今の声は誰？」

突然聞こえた私たち以外の声に、巫女が怪訝そうな顔をする。白黒と氷狐も声に聞き覚えはないようで、キョロキョロとしていた。

私には聞き覚えがあったので、声の主が誰かはすぐに分かった……が、姿が見えない。「どこを見てるんですか。私はここですよ」

「どこよ」

「声は聞こえど姿は見えずだぜ」

私もキョロキョロと巫女たちと同じように周りを見渡してみるけれど、知る姿を見る

ことは出来ない。

その後もここだどこだと繰り返すものの、やはり姿は見えない。でもよく見てみれば巫女たちの口元がニヤついていることが分かる……私も同じだとは思うけど。

「全く……声は聞こえるんですね？ なら、声のするところに集まってください。集まりましたね？ では……みーさーげてーごらん」

「……わあ!?!」

「うー♪」

「うそつき!! 途中からニヤついていたの知ってますよ!! それからその妖怪、あなたの身長で私が見えないとかありえないでしょう! しかも目合いましたよ!?

それから風見 幽香!! あなたは私の姿形も声も知ってるでしょう!! 私にわざとぶつかったのも知ってますよ!!」

言われたとおりに一箇所に集まって下を見てみれば、そこにいたのは私よりも濃い緑色の髪をした少女の姿。背は氷狐よりも少し高いくらいで、棒を片手に私たちに怒る姿は非常に微笑ましい。

が、この少女こそ幻想郷古参にして死者を裁く閻魔大王、四季映姫・ヤマザナドゥ《しきえいき》その人。〃白黒はつきりつける程度の能力〃を持ち、その決定は絶対に覆ることはないらしい。

本来は説教が長く、閻魔の名に恥じず真面目で厳格な人物なのだけれど……60年前に出会ってから弄ると楽しいことに気づいて以来、こうして会った時は遊んでいる。因みに、ヤマザナドウというのは役職の名前らしい。

「全く、この私がこのような使い古されたボケをする羽目になるなんて……」

「お約束はどの年代にも笑いを与えるものだぜ？」

「私は笑点の方が好みます。全く、あなたは普段は頭を使っているのにその知識や頭脳を生かすことはあまりない。その魔法の知識、知らないことを知る貪欲さは褒めるところではありますが、その知識を得る手段が盗んだものというのはいただけません。いいですか？ 知識は何も自分の力だけで得るものではないのです。幸いにもこの世界には魔法使いはあなたの他に2人はいるのですから、たまに勉強会などを開けばいいでしょう。わざわざ借りると称して本を盗む必要はないのです。なのにあなたは欲しかった本があれば盗み、読みたかった本があれば盗み、見たことのない本があれば盗み……死んだときに困るのはあなたなのですよ？ 善行を積み重ねばあなたは死後に必ず後悔します。そんなあなたに出来る善行は……」

ああ、始まってしまった。閻魔大王四季映姫による、賢者も裸足で逃げ出す説教が。彼女の説教はとても長い。しかも白黒はつきりつける程度の能力のせいか、一度始まったら相手が逃げ出すことはできない。現に白黒は逃げ出すどころか自然と正座し

ている始末だ。

因みに、閻魔はたまに地獄から幻想郷にやってきてその住人に説教をすることもあるらしい。私もされたことはあるけれど、そのときは「楽しむために相手を懲るのはいけない」で始まり、なぜか「その胸を少しでも分けて欲しいです」で終わったわね。

「霊夢、助けてくれ」

「無理」

「余所見に私語とは随分と余裕ですね。もう少し説教の時間を増やしましょう。それから巫女もこの場にいなさい。あなたにも言いたいことがあります」

「嫌よ。私は早くこの異変を解決して氷狐とのんびりしたいのよ」

「全く……あなたは少々自分の勘に頼りがちのきらいがありますね。いいですか？

あなたはこの幻想郷の巫女、博霊の巫女なのです。博霊の巫女の仕事は博霊大結界の維持と幻想郷の平和を守ることにあります。今までのあなたはともかく、今のあなたはこの妖怪を中心に考えるようになっていきます。これでは人外と人間のバランスが崩れてしまう恐れがあります。僅かな時間とはいえ神社から離れる時間も増え、その妖怪とともにいる時間が増えています。それでは他の妖怪に示しがつきません。大体、その妖怪の能力は危険すぎる。幻想郷にとって退治すべき妖怪は……」

不意に、巫女が閻魔に向けて弾幕を放った。いきなりのことに啞然とする白黒と氷狐

……そして私。

巫女が強いというのは聞いているけれど、まさか閻魔に向かつて攻撃をするような無謀な人間とは思わなかった。

閻魔といえば、言わば「神」。人間と神とでは言い表せない「差」が存在する。これは妖怪にも当てはまることだ。その閻魔に、巫女は攻撃した。それは、従者が主に逆らうことに等しい。

「……なんのつもりですか?」

「いきなり出てきて氷狐を退治しろですって? つまりなに? あんたは氷狐を殺せつての?」

無傷で出てきた閻魔に、巫女は俯きながら問いかける。その声に宿る感情は……怒り。

対する閻魔に怒りの感情は見えない。まるで巫女が攻撃するということを分かっていたかのような表情で、俯く巫女を見ている。そんな閻魔の問いかけに対する答えは……。

「それが、幻想郷の安全と安穩に繋がります」

「ふざけるなあああ!!」

「……氷狐、私と少し散歩しましょうか」

「うー？」

空へと上がった二人を見上げながら、私は氷狐を抱き上げる。閻魔の長い説教が嫌だったのか、今まで耳をたたんでいた氷狐に先の間答は聞こえていないだろう。それでいい……子供に殺生を聞かせてはいけない。

氷狐には、巫女がいきなり攻撃して怒ったように見えただろう。あのような姿を見るのは初めてなのか、少しびっくりしているようだ。それは白黒も同じみただけだ。

私がすることは、あの巫女の姿をこれ以上氷狐に見せないことと……ここから離れること。

私は巫女と閻魔の飛んで行った方角を見つめる白黒をそのままに、氷狐を抱き上げたままこの場から飛び去った。

「霊符「夢想封印」!!」

巫女がスペルカードを発動し、私に七つの誘導弾が飛んでくる。ちゃんとスペルカー

ドルールを守っている辺り、理性がなくなつたわけではない。

相手を狙う誘導弾ではあるけれど、絶対に命中するわけではない。巫女から飛んでくる札に気を付けつつ弾をよけ続ければ……そうしている内にスペルカードの制限時間がきて誘導弾は消えてしまった。

「スペルカードブレイク……まだ続けますか？」

「当たり前よ!!」

悔しがる様子もなく、あくまでも私を落とすべく巫女は弾幕を飛ばし続ける。私が弾幕を放たないのは、余裕があるからではない。巫女の怒りの気迫が反撃という手段を取らせてくれないのだ。

それほどまでに、巫女はあの妖怪に入れ込んでいる……巫女だけではない。八雲 紫とその式神達、氷精、霧雨 魔理沙、伊吹 萃香、フランドール・スカーレット、八意 永琳、上白沢 慧音、藤原 妹紅、犬走 椛……そして、風見 幽香。

これだけの力のある存在から好かれ、自らも好き、人里の住人からも愛されている存在……妖怪とはいえ、それだけなら別に問題はない。問題は、やはり能力。

オモイの形次第では破壊の力になりうるその能力は、とても軽視できるものではない。しかし、罪を犯していない者を裁くことも、直接殺めることも、閻魔の私はできない。八雲 紫がどうにかすることを願ったが、あれでは無理だろう。

ならば、私じゃなければいいのだ。

「っ!! 氷狐!!」

不意に、巫女が妖怪の山の反対方向にある“無名の丘”の方角を向いた。つまり、巫女の勘がそこにあの妖怪いる、もしくはは向かっていると告げているということ。

丁度いい。あの場所には鈴蘭の花が咲いている……元々あの場所はまだ名付け前の名無しの幼子を鈴蘭の毒気で安楽死させて間引きに来る場所……故に“無名の丘”。そして、そこには毒を扱う妖怪がいる。

「さっさと落ちなさい!! 氷狐のところに行けないでしようが!!」

「すみませんが、もう少しここに居てもらう理由ができました」

巫女の放つ弾幕を避けながら、今度は私も弾幕を放つ。

罪なき子狐が、せめて花に包まれて逝くようにと願って。

「これが鈴蘭よ。きれいでしょう?」

「うー♪」

私たちがやってきたのは無名の丘という場所。目の前には、真つ白な鈴のような形をした花たちが綺麗に咲いている。鈴蘭の名前は、見た目が鈴のような形をしていることからきているらしい。

見た目の美しさとは裏腹に有毒……なのだけれど、妖怪である私たちにはこの程度の毒は効かない。まあずっと浴びていたら気分は悪くなるでしょうけど。

氷狐も喜んでいるようだし……もう少し近くで見てもよいかしら。そう思って鈴蘭の花畑に降り立ってみると、少女のような声が聞こえた。

「スーさんに近づかないでよー」

「うっ？」

突然聞こえた声と現れた小さな影。その正体は、真つ赤なゴスロリ服を着た腹話術用の人形程度の大きさの妖怪。

見たところ、妖力自体はそれほどでもないみたいだけれど……この妖怪は鈴蘭の花達に好かれているようね。いや、どちらかと言えば、我が子に注ぐような愛情を向けられている。

「スーさん……というのはこの鈴蘭のことかしら？」

「そうよ！ スーさんは私の命の恩人……何のつもりで近づいたのよ!？」

なぜこの妖怪はこんなにも喧嘩腰なのかしら。それに、この鈴蘭達が命の恩人というのも分からない。分かっているのは、この妖怪は鈴蘭の花達を大切にしているということ。

それだけで私の戦意はなくなるのだけれど、このまま一方的に怒鳴られっ放しというのは気に入らない。

「何のつもりも何も、私たちはこの花達を近くで見ようと降りただけで何もするつもりはないわよ」

「あんたみたいな強い妖怪がそんな理由で来るもんか！」

「……勝手なこと言ってくれるじゃない。何様のつもりなのかしら？」

「ひっ！」

軽く妖力と殺気を込めて睨んでみると、妖怪は分かりやすいくらい縮み上がった。怖いもの知らず、というわけではないみたい。

だからと言って、私より弱いやつに私の行動をとやかく言われる筋合いはないわ。花と氷狐がいるから、攻撃はしないけれど。

「大体あなたは誰なのよ。名を名乗りなさい」

「め、メデイスン・メランコリー……つい最近妖怪化した人形の妖怪」

「そう。私は風見 幽香」

「ひー」

私の名前を聞いて、妖怪……メデイスンの震えが増した。私のことは知っているよね……もうこの反応にも慣れてしまったけれど。

氷狐も自己紹介をしたようだけど、相変わらず何を言っているのかは分からない。それはメデイスンと同じ……。

「氷狐って言うんだ」

「うー」

分かっているようだった……ちよつと負けた気分。そこからはメデイスンの妖怪化した経緯を話してもらった。

メデイスンは先ほど自分で言った通り人形の妖怪。なぜここにいるのかと言えば、人形の時に人間にこの場所で捨てられたからなんだとか。妖怪化した原因は鈴蘭が持つ毒。この毒を長年浴び続けた末に、人形はメデイスン・メランコリーとして妖怪化した。そんな会話をした後には、氷狐とメデイスンはすっかり仲良くなっていた。

「てややー!」

「うー!」

「とりやりやー!」

「あーうー!」

何をしているのかと聞かれれば、私は鬼ごっこと答える。メデイスンが鬼で氷狐が逃げる役。

ただ、メデイスンが捕まえようとする時になぜか掛け声とともに飛び掛かり、氷狐に避けられるという滑稽な状況になっているけれど。鈴蘭をつぶさないようにしているのは流石といったところかしら。

どちらもとても楽しそうに笑っている……先の話の続きになるけれど、メデイスンは人間という存在に対して復讐を誓っているらしい。人形にも意志があり、人間の玩具ではないのだと。だが鈴蘭の毒によって妖怪化した彼女は、長時間鈴蘭の毒を浴びずにいると動けなくなってしまうらしい。そのせいで、この無名の丘から離れることが出来ずにいる。

さつき彼女はスーさんがいるから大丈夫と言っていたけれど……その表情には寂しさの色が見えた。そして、似ていると思った……花がいるから独りでも平気だと言っていた頃の私に。

どれだけ大切なものがあっても、どれだけ人や他の存在が嫌いでも……独りとは寂しいもの。大妖怪と言われる私ですら寂しいと感じてしまうのだ。孤独からくる寒さに体が震えてしまうのだ。やっぱり寂しいと、他の人の声が聞きたいと泣きそうになってしまうのだ。

だから……私は……。

「氷狐?!」

慌てたようなメディスンの声にハッとなり、声が出た方を向く。そこには、横たわる氷狐と必死に体を揺するメディスンの姿があった。

私は急いで立ち上がり、二人の元へ跳ぶ。数秒で辿り着き、そこで見たのは……苦しそうにしながら体を震わせている氷狐。

「いったい何があったの?」

「わ、わかんない。急に倒れて、いきなり苦しみだして……わ、私の能力のせいかな」「あなたの能力は?」

「毒を扱う程度の能力……だけど! 氷狐にも幽香にも使つてない! 今日一度だつて使つてない!」

そんなことは分かっている。もし故意的に使つたなら、こんなに慌てはしないだろう。状況が状況だからと言ってメディスンを疑うようなことはしない。

問題は、どうして氷狐が苦しんでいるか。彼女の能力ではないし、今までの経緯を思い返してみてもこんなに苦しむようなことになる理由は見当たらない。ならば、なぜ

……。

—見た目の美しさとは裏腹に有毒……—

ハツとして、氷狐の周りを見る。視界に入るのは鈴蘭の花、花、花。

私たちは、いつからここにいた？ 私たちが来たのは昼前くらいのはず……空はもう茜色に染まっている。楽しい時間が過ぎるのは早いとは言うけれど、夕方になっているとは気づかなかった。

だけど私たちは妖怪……鈴蘭の毒程度ではこんなことには……いや、メデイスンという妖怪と共に過ごしているこの花達の毒は本当に「普通の鈴蘭の毒」と同じ強さなのか？ 二人から離れて風上にいた私と人形という無機物の妖怪であるメデイスンはまだしも、鈴蘭の花畑の中を走り回った氷狐は……。

「……今はそんなことを考えている場合じゃないわね」

「その通りよ」

声が出た方を向けば、そこにいたのは閻魔と戦っていたはずの巫女の姿。ボロボロの姿を見る限り、辛勝と言ったところかしらね。

巫女は素早く私たちの元まで降りてきて、氷狐の体を抱き上げる。その姿を見て、メ

デイスンが慌てたように声を上げた。

「あ、あんたは誰!? 氷狐をどうするの!？」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないのよ。氷狐は医者連れて行くわ。幸いにもあの医者には氷狐を溺愛してるし、死に物狂いで直してくれるわよ」

「じゃあ私も行く!! 毒が原因なら、私の能力が役立つわよ!!」

通せんぼをするように巫女の前に浮くメディスンに、巫女は冷たい視線を向ける。その目が、はつきりと「邪魔をするな」と告げていた。

その視線に疎むことなく、メディスンは力強く自分は役立つと告げた。本当なら人間である巫女に話しかけることも、この場所に入られることも嫌でしょうに……。

「……あんたは氷狐の何?」

「友達!!」

「……そう。なら行くわよ。あんたは?」

メディスンの答えにどことなく嬉しそうな巫女。そんな彼女が目を向けたのは……私。

言いたいことは分かっている。私はどうするのか。そして、私は氷狐のなんなのか。それに返す答えは一つ。

「ここに連れてきた私の責任だもの、道中の障害は排除してあげるわ……それに、友達

「は助け合うものなのでしょう?」

最初に私に笑顔を向けてくれた愛しい友人。私に友人というものを作るきっかけとなってくれた、愛らしい妖怪。

その妖怪に立ちはだかる壁も、立ちふさがる者も……全部私がどうにでもしてあげましょう。

私は大妖怪、フラワーマスターの風見 幽香なのだから。

「……分かったわ。それじゃあ行くわよ!」

「ええ!」

「うん!」

想いは一つ。氷狐を助ける……ただそれだけ。

愛しい友人を、誰も亡くしたいなんて思わないから。

だから今は……氷狐が助かることだけを願った。

風見 幽香 結

氷狐が倒れた日から5日……私は、迷いの竹林にある永遠亭という場所に来ていた。その理由は、ここに彼が入院しているから。

あの時、この場所に来た私たちは永琳という医者に氷狐を託し、メデイスンを残して一度帰った。異変が終わった翌日に来て氷狐の可愛らしい寝顔を見た時は安堵の息が漏れた。

彼が倒れたのは、私の予想通りメデイスンと共に過ごすうちに強くなつた鈴蘭の毒のせい。彼女の能力である「毒を扱う程度の能力」のおかげで通常よりも早く解毒剤ができ、もう何も心配はいらないらしい。ただ、毒の影響で身体機能に少し異常が出ており、少しの間入院が必要なんだとか。この説明を受けた時、巫女といつの間にかいた賢者が妙に悔しがり、医者者の永琳が妙に嬉しそうだったのが印象的だったわね。

そんなことを思い返しながら氷狐のいる病室に入った私が見たのは……。

「あんた誰よ」

「氷狐の友達のメデイスン・メランコリーよ。あんたこそ誰よ」

「氷狐の親分のチルノよ」

「友達じゃないのね。だったら邪魔だから帰りなさいよ」

「うっさいわね、自分の面倒を見るのも親分の仕事なのよ」

メデイスンとバカで有名な氷精がバチバチと火花を散らしている光景だった。ベッドの上で氷狐は上半身を起こした状態でいがみ合う二人を見て苦笑いをしている。

この5日の間、氷狐にはこうしてお見舞いに来る人が沢山いた。毎日来ているのは私と巫女、賢者。他には今ここにいるメデイスンに氷精、吸血鬼とその従者に賢者の式神に化け猫、椀、白黒、里の守護者くらいね。他にも来ているらしいけれど、私が会ったのはこれくらい。

今の時間は昼……巫女は朝と夜の2回くるらしいのでどれだけ溺愛しているかが分かるわね。永琳も付きっ切りで氷狐のことを看病していたみたいだし。

因みにメデイスンは今回のことをきっかけとして永琳に解毒薬を作る協力をしていく。これによって様々な種類の薬が作れたと永琳が語っていたのを偶然聞いた。

それはさておき、そろそろ殴り合いに発展しそうな子供の喧嘩を止めるとしましょうか。氷狐はまだ病人……病妖なのだから。

あれから更に数日が経ち、氷狐が退院した翌日に博麗神社で宴会が行われた。名目は異変解決ではなく、氷狐の退院祝い。

色々知らないメンバーもいるけれど、参加している殆どはお見舞いに来ていた妖怪に人間ね。因みに、私は宴会に参加したのは初めてだったりする。あるのは知っていたけれど、関係のない私が入るのは……と黙っていたしね。

でも、それは間違いだったわね……妖怪として。こんなに楽しいなら、勝手に参加していればよかったわ。

「待て待てー!」

「うー♪」

「にゃー♪」

「チルノ! フランの前に仁王立ちして!」

「におーだち?」

大人組や年長組がお酒を飲み交わす中、氷狐と吸血鬼の妹、化け猫、氷精、メデイスンのちびっこ組は仲良く追いかけてっこをしている。吸血鬼の妹……フランでいいか。日傘を差しながら飛んでいるフランが鬼で他4人は逃げる役。

子供特有の無邪気な笑顔が振りまかれ、私たち見ている者を和やかな気分にさせてくれる。視界の隅にいる、あの中に入りたそうにウズウズとしているフランの姉も、とて

も微笑ましい。

「初めての宴会はどうかしら？ 独り暮らし」

「あなたの言葉を軽く流せるくらいに楽しませてもらつてゐるわよ。それから、私はもう独り暮らしじゃないの」

いつの間にか隣にいた賢者の毒を軽く流し、余裕の意味を込めて賢者を横目に見ながら小さく笑つてやる。

実はあの自然現象以来、メデイスンが私の家に住むようになった。鈴蘭の花を全部持つてくることは出来なかつたけれど、幾つかを花壇に移動させることで彼女が無名の丘を離れても大丈夫なようにした。数本だけなのと外にあるから私が毒に倒れる心配はないし、透明なビニールシートを空間に余裕を持たせてかけることで他の花たちにも影響はない。

寂しかった家が、明るくなった気がした。

「そう……それじゃあ、もうあなたを独り暮らしとは言えないわね」

「あんまり残念そうじゃないわね」

「ええ、むしろ喜ばしいわ。あなたの友人としては……ね」

「……は？」

いきなり変な言葉が聞こえた気がした。思わず素つ頓狂な声が出てしまったじやな

い。

賢者の顔を見てみれば、口元を扇子で隠しているのでその表情を知ることが出来ない。ただ、どこか恥ずかしそうにしているように見えた。

「……笑えない冗談ね」

「酷いわ冗談なんて。これでも、知り合い以上友達未満くらいには思ってたのよ？」

「それって友達じゃないんじゃない？」

「ええ。でも、今こうして一緒にお酒を飲んでるんですもの……ダメかしら」

いつもの胡散臭そうな雰囲気は今の賢者にはない。それが逆に胡散臭いのだけだ。

それにしても……「知り合い以上友達未満」か……なかなかうまい言い方だと思う。

お互いのことを知ってはいても、会えば口喧嘩にスペルカードによる戦い。毒がその口から吐かれなかったことはなく、私の孤独を突いてくる嫌な奴。

そうは思ってるのに、嫌なら無視すればいいのに、なぜかそうするつもりにはならなくて。孤独に押しつぶされそうになって、悲鳴でもいいから人の声が聴きたくて人間や妖怪を襲って……いつしかフラワーマスターなんて呼ばれて恐れられていた私。

ただ会話がしたかった私に聞こえてくるのは悲鳴と怨嗟の声。それに慣れてしまつて、他の言葉を聞きたくて、また襲って……そんなことを繰り返していた私と、初めて「普通」に会話をしてくれたのは……ほかでもない賢者。

そんな懐かしいことを思い出し、私は手にしているワイングラスの中の果実酒を飲み干した。

「……ねえ」

「なにかしら」

「注いでくれないかしら……」紫

「……どうぞ、幽香。私にも注いでくれるかしら？」

「いいわよ」

差し出したワイングラスに、紫が持っていた赤ワインを注いでくれる。差し出されたワイングラスに、私を持っていた葡萄の果実酒を注いであげる。

トクトクと音を立てて注がれていく綺麗な濃紺と真紅。私たちは同時にグラスを顔の位置まで持ち上げ……カチンと互いのグラスを小さく当てて綺麗な音を奏でた。

「乾杯」

今日は、良き日だ。

彼岸花が咲き乱れる彼岸のとある場所に、私こと四季映姫はいた。目の前にある三途の川の向こうでは、今頃あの子狐の妖怪の退院祝いの宴会が開かれている頃だろう。

結局、あの妖怪……氷狐を亡き者にすることは叶わず、ただ苦しませるだけの結果となつてしまった。閻魔という役職上、自分から手を出すことは出来ないのでまた運が味方に付くの待っしかない。

「あれ？ 映姫サマがここに来るなんて珍しいですね」

「小町……その口元の涎のあとはなんですか？」

「うえあ!? こ、これはですねー」

私に声をかけてきたのは部下である死神、《小野塚 小町》《おのづか こまち》。なかなか優秀ではあるのですが、サボり癖があるのでよく私に説教をされています。

見たところ、またサボっていた様子、これは説教をしなければ……と思いましたが、今はそんな気分ではありません。

「……あれ？ 説教はしないんですか？」

「今はそんな気分ではありません。……代わりに、少し質問に答えてもらいます」

「これまた珍しいですね。どんな質問ですか？」

「もしも限りなく無害な存在が世界を滅ぼしかねない力を持つていた時……あなたならどうしますか？」

私の質問を聞いて、小町は考え込んだ。この存在とは、当然氷狐のこと。

彼がどれだけ無害であり、同時にどれだけ怖い存在かを私は知っている。オモイ一つでほぼ何でもできる能力……子供ゆえの残酷さでその力を使ってしまったとき、どうなるのかなんて私には想像がつかない。

永遠にそんなことにならないかもしれない。逆に、1秒後には幻想郷が滅びてしまうかもしれない……そんな危険な能力。いつそうなってしまうのか、私は常に戦々恐々としている。

だから……彼が“こちら側”にきてくれるように願った。閻魔として間違っているであろうこの考え。でも私にとってこの選択が絶対であり、正義。例え巫女たちから憎まれたとしても、私は胸を張れる。

「映姫サマ。その存在は限りなく無害なんですよね。具体的にはどんな存在なんですか？」

「そうですね……妖怪ではありませんが、中身は普通の子供です。母親のような存在や兄弟のような存在にも恵まれ、時に人の心を救うような優しい存在ですよ。……優しい

……存在です」

過去、閻魔になる前の私は普通の地蔵だった。どこにでも立っているような、ごく普通の。いつからか私には自我が芽生え、動けない私の楽しみは私の前を通り過ぎていく存在を見ることだった。

それも数年も続けば飽きてしまい、いつしか私は自分で動けるようになりたいと思い始めた。だけど所詮は意思だけが宿った地蔵……雨風に晒されても動くことは出来ず、願いは叶うことはない。世界は、そんなに優しくないのでから。

だけど……彼は優しかった。

彼と出会ったのは雪の降る寒い冬のある日。青い髪と尻尾を揺らしながら、私の頭に乗る雪を退けて大きな葉っぱを被せ、目の前にリングを置いてくれたことを今でも覚えている。

更には、今で言うマフラーのようなものまで巻いてくれた。……暖かった。何も感じないハズの岩の体が、確かに暖かさというものを感じた。

お礼がしたい……でも動くことができないからそれは出来ない。その時、私はもう一度「自分で動きたい」と強く願った。

そして、願いは叶った。岩だった体は肉を持ち、寒さを感じ、果実の甘みを感じた。だけれどそれが起きたのは彼と出会った翌日……お札をすることは出来なかった。

だからこの幻想郷で彼を……氷狐を見つけたのは運命だと思った。そんな私が今ではお礼どころか命を狙っているのだから……人生とはままならないものですね。

「なんだか思いが籠ってますねえ映姫サマ」

「そんなことはどうでもいいのです。で、答えは？」

「そうですね……ま、どうでもいいんじゃないんですか？」

「……人の話を聞いていましたか？ その存在は世界を滅ぼすかもしれない。そんな存在を放っておくと、あなたは言うのですか？」

「いやだってですね、そいつは優しい奴なんですよ？ そんな奴が世界を滅ぼすだなんだと言われても正直ピンと来ませんって。全部可能性の問題ですし、映姫サマの言うこともわかるんですが……そんな暗いことばかり考えてるのもよくないですよ。そんなだけいい奴なら死んだら悲しむ奴もいますし……それから気づいてますか？ 映姫サマ」

「……何がですか」

「映姫サマ、さつきからずっと泣きそうな顔してますよ？」

小町の言葉に体が硬直する。泣きそう？ 閻魔大王であるこの私が？

……そんなこと、とつくの昔に気づいていましたよ。泣きそうどころか、心の中ではずっと泣いていました。

こつそりと永遠亭に氷狐のお見舞いに行った時、ぐつすりと眠る彼の寝顔を見て思わず笑みが零れた。軽く頬を触ると擦ったように身をよじる彼を見て、胸の中が幸せであふれそうになった。

同時に、自分がどうしようもなく醜いと思った。僅かでも滅びの可能性があるからとはつきりと命を奪うと決めた私の行動が、私の願いを叶えてくれた恩を仇で返すその考えが、それが幻想郷のためだと自分に言い訳をするその思いが、醜く思えて仕方なかった。

ごめんなさいと、聞こえるはずのない彼に向かってつぶやいたことは1度や2度なんかじゃ全然きかない。巫女たちに憎まれるのはいい。でも、彼には憎まれたくない都合のいいことだっと思って考えた。

私は卑怯者です。彼を殺すだなんだと思い、口にしながらも自分の心ばかり守ろうとしている。巫女に平等だなんだと言いながら、私は危険だからと寿命を無視して彼をこの彼岸にさせようとしている。これでは仮に彼が来たとしても……合わせる顔がな

い。

「映姫サマ」

「……なんですか、小町」

不意に、小町に強く抱きしめられた。私の貧相な体とは違うふくよかな体に嫉妬しうになるけれど……それ以上に、なぜか安心感に包まれた。

不思議と鬱屈していた心も落ち着く……私は意外と単純なのかもしれない。

「映姫サマが何を思つてあんな質問をしたのかはあたしにはわかりませんが……あんまり独りで思いつめないで下さいよ。そりゃああたしも頭がいいつて訳じゃないですが……一緒に考えて、より良い答えを出す手伝いくらいはしますから」

「……危険なんですよ。排除する以外にどんな方法があるんですか」

「少なくとも、映姫サマがそこまで悲しむような結果にならないようにします。答えを出します。二人でダメなら3人で、3人がダメなら4人で……そうやって考える頭を増やしていけば、案外いい案は出るもんですつて」

「それでもダメならどうするんですか……? 誰にも聞き入れてもらえなかつたら……」

「あたしが映姫サマと考え続けます。絶対あたしは映姫サマに独りで考えさせたり、辛い思いをさせたりしません。もう知っちゃいましたから、嫌と言つても付き合います

んで」

ニツと頼りがいのある笑みを浮かべる小町に釣られ、私も小さく笑みを浮かべたことを自覚する。そんなことを言われてしまったては、同性であるにもかかわらず惚れてしまっいそうだ。

なんだか、何とかなる気がする。排除だとか、殺すだとか、そんな物騒なことをしなくても危険をなくす……そんな奇跡のような方法がある気がする。

小町となら見つけられるだろうか。八雲 紫や八意 永琳等の知識を借りれば、その奇跡《オモイ》を現実《カタチ》に出来るだろうか。

ただ……もう少し様子を見てもいいかなと……私は考えを改めることにした。

「永琳、〃うちの子〃を長いこと預かってくれてありがとう」

「いえいえ、こちらとしても〃今後のため〃になつてちようどよかったわ」

「誰が紫の子だつて？ 氷狐はうちの子よ」

「今後のためか……なら、氷狐を今後の為に寺小屋に……」

「ねえ幽香。巫女たちは何を話しているの？」

「うー？」

「……近づいちゃダメよ。特に氷狐はね」

子狐青年記

これは、ごく普通の日常の中に、ちよつとした非日常が混じつたお話である。

「ん……」

早朝、八雲 紫は心地良い暖かさの中で目が覚めた。寝ぼけた頭ではまだ現状をはつきりと認識できてはいないが、誰かに抱きつかれているということは理解できた。

誰かに、とは言つても紫と一緒に寝るのは子狐の妖怪、氷狐だけなので必然的に氷狐が抱きついていることになるのだが。

「……まだ起きていないなんて珍しいわね」

この八雲家では起きる順番が大体決まっている。八雲家の家事を一手で担う藍が最初に起き、次点に氷狐。その後氷狐が橙を起こし、紫は時に自力で、時に藍に起こされるのがいつもの流れであった。

だが、今回は珍しく紫は早起きをしたようだ。外はまだ白んだばかりであり、氷狐は

おろか藍すらも起きている様子はない。早起きではなくフライングの勢이었다。

「ふふ……隣に氷狐がいる時に起きるなんて初めてじゃないかしら」

なぜか少し得した気分になり、紫はまだ眠っている氷狐の頭を撫でる。嫌がられながらも藍が橙と一緒に3人でお風呂に入っているせいか、その綺麗な青い髪はサラサラとしていてとても撫で心地がいい。初めて氷狐と一緒に入ろうとした時は妙に嫌がられて酷く傷ついたなあ、とは紫の苦い思い出。

しばらく氷狐の髪を撫でていた紫だが、ふと違和感を感じた。記憶の中にある彼の髪の長さはせいぜい首の上あたりまでだったはず。が、今紫の手がある位置は背中の上あたり……髪の感触は、まだある。

思えば、今自分を抱きしめているであろう彼の手は妙に大きい。それに、こんなに力強くはなかったはずだと、痛みではなく安心感を感じながら紫は思う。

やがて意識は覚醒を始め、ぼやけていた視界は鮮明に目の前の風景を写し始める。そこで紫が最初に見たものは……。

見覚えのある青い髪と、寝顔にあどけなさを残す見知らぬ青年だった。

「いきなり叫び声を上げられたので何があったかと思えば……あの青年は誰ですか？

どこかで見たような気はしますが」

「見知らぬ青年が同じ布団にいたらそりやびつくりするわよ。どこかで見たような気はするけれど」

居間でテーブルを挟んで対するように座りながら、紫と藍は台所へと目を向ける。そこにいるのは、先ほどまで紫を抱きしめながら眠っていた青年と、藍の式である橙の姿。いや、本当は彼女たちもあの青年が誰かなどとうに気が付いているのだ。が、それを口に出すのはあまりに非常識であると思い、口には出せずにいた。自分たちが妖怪などという非常識な存在であることを棚に上げて。

「橙―醬油とつてー」

「はい、氷狐」

「ありがとう♪」

「いえいえー♪」

（(やっぱりかああああ!!)）

ここは幻想郷、常識などあるはずもなかった。というわけで、今回のお話は……氷狐がなぜか青年になってしまったという……そんなお話である。

【いただきます】

いつものように4人で食卓を囲み、ちよつと違う風景に違和感を感じつつ紫は箸を進める。その目は、他の3人にへと向けられていた。

まずは藍。紫と同じように周りをチラチラと確認しながら食べ進めている。やはり今の食事風景に違和感を感じているようだ。次に橙。2人のように周りを見ることはなく、笑顔のまま食事を続けている。そして氷狐……なぜか青年となっている彼もまた、橙と同じように笑顔のまま箸を進めていた。

全員を確認したところで、紫は改めて氷狐を見やる。頭にはちゃんと青い毛並みの狐の耳が生えており、同色の髪は腰ほどまでの長さある。尻尾の数は変わらず一本だけなので、体が大きくなつた分妖力も増えた、ということではないらしい。感じる妖力も、子供時のものと比べて何ら遜色はない。

そしてその顔だが……何と言えればいいのだろうか。漢の顔……などというものではなく、少年というほど幼い顔つきでもない。カツコいいと言えばカツコいいのだろうが、綺麗だと言えば綺麗だろう。絶世の、などという言葉があるが、それほどか？ と聞かれれば否と答える。

何か言葉を付け加えるとするなら、
“純粹”。
無垢な子供がこの世の不条理や社会の

裏などを知らないまま、愛し愛され続けてきたならこんな顔になるのだろうかという、子供の愛らしさと大人の雰囲気が共存した「純粋な青年」……紫が考えた末に出した結論がこれだった。

「氷狐。お茶のお代わりをもらえるかしら」

「うん。はい、紫」

「っ!? あ、ありがとう……」

少し低くなった声で名を呼ばれ、紫の心臓がドキリと跳ねる。お礼を言えば子供の時と変わらぬ笑顔を向けられ、彼女の心臓はまた大きく跳ねた。

顔を赤くしてお茶を飲む紫の姿に、氷狐と橙は不思議そうに首を傾げ、藍はため息を1つ吐く。が、藍自身も顔が赤く染まっていることを、彼女は気付かなかった。

「紫、大丈夫? 顔赤いよ?」

「だ、大丈夫よ」

「藍様もお顔が赤いですよー?」

「だ、大丈夫だよ橙」

「……………」

いつもとは少し違う朝食を終え、氷狐はいつものように紫にスキマを開いてもらって妖怪の山へ来た。以前に犬走 椛と出会って以来、紫にはいつも妖怪の山の椛の警備範囲内に送ってもらおうようになっていたのだ。

そしてこの時間になれば椛自身も氷狐がこの場所にいるということをつかっていたため、彼女はいつも氷狐が来るよりも先に来ている。今日も当然彼よりも早く来た。

「おはよう氷……」

「椛！ おはよう♪」

目の前の笑顔で自分の名前を呼ぶ青年姿の妖怪は誰だと、椛は僅かに目を見開いた表情で心のうちで叫んだ。この場所を知っているのは送り迎え担当の紫と自分、そして氷狐の3人のみ。なぜこの妖怪が知っていて、自分の名前も知っているのか……と考えた椛だが、妖怪の姿をよく見てその答えを得た。

頭の青い毛並みの狐耳とお尻の尻尾、青い髪は長くなっているが、それらの特徴を持つ妖怪は1匹しか知らない。つまり。

「……氷狐？」

「うん？ そうだよっ」

今度こそ、権は本当に叫び声をあげた。

「なぜ大人の姿なんだ？」

「うっ？」

すっかり自分よりも高くなってしまった氷狐を見上げながら、権はそう問いかけた。権は、氷狐という妖怪はあの子供の姿で完成している妖怪だと思っていた。なので、今の氷狐の姿は信じられないものがあるし、そもそも昨日まで子供だったのに次の日には青年になっていたなど誰が予想できるだろうか。非常識な存在が集まる幻想郷だが、この現象はあまりに非常識すぎる。

上司なら喜ぶだろうなあなどと考えていた権だが、不意に先ほどまで隣にいた氷狐の姿がないことに気付いた。どこに……と後ろを振り返ってみれば、自分のすぐ後ろで考え込んでいる彼がいた。

「うーん……わかんないや」

どうしたと権が聞く前に、苦笑いをこぼしながら氷狐がそう答えた。どうやら先の権の問いを考えていたらしい。

権も苦笑を浮かべ、そうかと一言だけ返す。そこからはいつものように二人で山菜と果物を捜し歩き、氷狐が慣れたように良いものを採っていく。子供のときには採れな

かった低くも高い位置にある果物を採った時の氷狐の顔はとても嬉しそうだったと椀がつぶやくと、氷狐は少し恥ずかしそうに笑った。

その姿を見た椀もまた紫同様に心臓を大きく跳ねさせたが、それを表情には出さない。

ある程度集まったところで氷狐は人里へと向かい、椀は巡回があるので氷狐を山の麓まで送り届けた後に別れた。姿が見えなくなるまで彼を見送った椀は空へと上がり、自分の警備範囲を飛び回る。

「……大人になるとああなるんだ」

何を思っつてその言葉を口にしたのか。それは、椀本人にしかわからない。

「おばちゃん」

「いらつしや……おんやまあ、子狐ちゃんかい？ 随分と大きくなったねえ」

いつもの時間にいつもの八百屋にやってきた氷狐。その氷狐を見た店主の反応は、数年ぶりに孫に会った祖母のようなものだった。なんの違和感もなく青年を氷狐だと受け入れたのは、年の功というものだろうか。

少しの談笑を交えながら採ってきたものを売り、資金を得る氷狐。その資金を手に彼はいつものように甘味処へと向かい、長椅子に座って団子を頼む。その際に店員のお姉さんも青年を一発で氷狐だと分かったのは言うまでもないだろう。

出てきた団子は三色団子とみたらし団子を三本ずつ。少々量が多いが、体が大きくなっている氷狐には丁度いい数だった。

1本目、三色団子を頬張る。鮮やかな桃、深緑、白の三色の団子はそれぞれ僅かに甘みが違い、何度食べても飽きさせない。見た目の色合いのせいか、子供に大人気である。

2本目、みたらし団子を頬張る。三色よりも強く、かといってしつこくない甘みは食べる者を笑顔にさせる。透き通るような琥珀色の蜜のかかったシンプルな白い団子も見る者を魅了する美しさ。見てよし食べて良しの逸品である。

3本目を口にしようとした時、氷狐の視界の隅に見慣れた白黒の服を着た少女が映った。どう見ても霧雨 魔理沙である。その目は氷狐が持つ三色団子に向けられているため、また盗る気なんだということは彼にも分かった。

また盗られるのかなあと悲観した時、魔理沙の気配が自分の前で止まったことに気づいて彼女に目を向ける。その目に映ったのは、なぜか困惑の表情を浮かべている魔理沙だった。

「氷狐……なわけないよな。でもその髪色と耳と尻尾は……」

どうやら魔理沙は今の姿の水狐を彼だと疑っているらしい。疑うも何も青年は水狐であるし、別に欺くために青年の姿になっているわけではないのだが。

不意に、水狐の子供心から来る悪戯心に火がついた。いつも魔理沙には泣かされているのだし、少し意趣返しをしよう……要するに悪戯してやろうと考えた水狐は魔理沙の目の前に持つていた団子を差し出す。

「食べる？ お嬢さん」

「へ？ あ、くれるなら貰うぜ」

ラッキー、と嬉しそうに笑いながら水狐の隣に座りながら三色団子を頬張る魔理沙。美味しそうに食べている魔理沙に水狐は顔を寄せ、耳元でこんなことを囁いた。

「あ、それ僕が口をつけたやつだった……これって間接キスってやつかな？」

「は？ え？ ……っ!？」

いきなりそんなことを囁かれ、実は乙女な魔理沙の顔が真っ赤に染まる。気がつけば肩に手を回されて向かい合う体勢になっており、お互いの顔は吐息がかかるほどに近い。

あまり男性との付き合いがない魔理沙にとってこの距離はあまりに近い。先の囁き

のこともあり、冷静な思考など今の魔理沙にできるはずもなかった。当然、慌てる彼女を見てニヤけている口など見えているはずもない。

「どうしたの？ そんなに恥ずかしかったかな？ それとも、間接じやイヤだった？」

「お、おま、何言ってる！」

「ふふ……」

「ーっ!？」

幻想郷では見ない、いわゆるオトナの顔。そんな顔をした相手に指先で自らの唇を優しく撫でられ、ただでさえ赤い魔理沙の顔は羞恥で更に赤くなった。

どこか妖しい笑みも彼女の目には魅力的に映り、自分が口の割に嫌がっていないことに気付いた。気がつけば魔理沙は自然と目を閉じており、徐々に氷狐の顔も近づいていく。

そして、お互いの唇が重なる……。

「こーら、それ以上はダメよ氷狐」

る前に、氷狐は声の主によって魔理沙から引き離された。

「霊夢？」

「そうよ。なんのつもりかは知らないけれど、*“それ”*はダメ」

声の主は博麗 霊夢。霊夢は氷狐の腰に回していた手を離すと、未だに目を閉じている魔理沙の頭を引つ叩いた。

「いてっ！ あれ、霊夢じゃないか……」

「何をあからさまに残念そうな顔をしとるかお前は。そんなに氷狐と接吻をしたかったのかしら？」

「は？ 氷狐？ どこに……まさか」

「そのまさかよ。あんたが今接吻しようとした相手が氷狐よ」

「あはは、分からなかったでしょ」

呆れたようにため息を吐く霊夢と無邪気に笑う氷狐を交互に見て、魔理沙はしばらく魂が抜けたように真っ白になる。

そして霊夢の言ったことを理解し、先の自分の行動を思い返した魔理沙が取った行動は……。

「じ、じじじ、じゃあな!!」

顔を再び真っ赤にして、箒に跨って全速力でこの場から飛び去ることだった。

魔理沙を見届けた後、残った団子を食べた氷狐と霊夢はいつものように博麗神社へと来ていた。

二人は縁側で座りながら緑茶を啜り、湯呑みの中が空になると特になにをするでもなく、これまたいつものように霊夢は氷狐に膝枕をする。霊夢に頭を撫でられてご満悦の彼を見て、彼女自身も笑みを浮かべた。

なぜ彼女が青年を氷狐だと分かったかと聞かれれば、躊躇いなく勘だと答えるだろう。そんな霊夢の勘でも分からないことがあった。

「氷狐。接吻なんてどこで知ったの？」

「せつぶん？」

「外ではきす、だったかしら」

「あれ？ あれはフランが持ってきた本に載ってたよ」

よし、フラン殺す。霊夢の頭の中は一瞬にしてその言葉で埋め尽くされた。気分は大したもの汚された感じである。因みに、先ほどの氷狐の言動や行動もその本に載っていたことである。

つまり、氷狐は本に載っていたことをしただけであり、それがどのようなものかは知らないのである。

「……とりあえずフランには今度夢想封印ね」

「う!? なんて!」

「なんでもよ。ねえ氷狐、きす、つていうのはね、本当に心から好きな相手にしかしちやいけないし、誰にでもやっていいものでもないのよ?」

「そうなの?」

「そうなの。わかった?」

「うん……ごめんさい」

霊夢に諭すように言われ、氷狐の耳と尻尾はシュンと垂れ下がる。大人の姿になつても氷狐は氷狐のままだと分かり、霊夢は微笑ましさと安心感から小さく笑みをこぼす。

……が、それは次の氷狐の言葉で消えた。

「じゃあ、霊夢にはしていいのかな」

「……は?」

いつの間にか、霊夢は氷狐を見上げていた。別に不思議なことではない。ただ、氷狐が霊夢を押し倒しているだけである。

とは言っても中身は所詮子供、その行動が色欲から来るものなどではない。この行動

も、この体勢も、すべては本の知識だ。どのような本かは大雑把に予想していた霊夢は、今後の展開も当然知識としては知っている。

ゆえに、その顔が羞恥から赤く染まることは仕方ないものだった。

「はえ!?! ちよ、氷狐!?!」

「霊夢」

慌てる霊夢をよそに、氷狐は甘く彼女の名前を呼ぶ。その顔は子供などとは到底思えないオトナの顔。これも本の内容を真似ているだけなのは、今の霊夢にはわからない。

「れいむ」

もう一度、彼は彼女の名前を呼んだ。バクバクと今まで生きてきた中で一番心臓が早鐘を打っている状況に、霊夢はこれが緊張しているということなのかとどこか客観的に見ている自分に気付いた。

人里で魔理沙にしたように徐々に顔を近づける氷狐……その顔は真剣そのものであり、間違つても冗談ではないことは一目でわかった。早くなる鼓動は収まる気配を見せず、霊夢自身も体験したことのない状況に限界が近かった。

「れいむ……だいきき」

その言葉を最後に、霊夢の頭は臨界点を突破した。

はつと、霊夢は目覚めた。空は茜色に染まり、現在の時刻が夕方であることはすぐに分かった。

上半身を起こして下を見てみれば、そこには自分の膝を枕にして眠っている子供姿の氷狐。

「……夢……だったのかしら」

だとすればなんと恥ずかしい夢をみたのだろうか、と、霊夢は自己嫌悪した。ただ、やけに夢の内容がハッキリとしていて現実味があるのが気にはなつたが。

何気なく氷狐の髪を撫でると、擦つたいのか耳がピクリと跳ねた。微笑ましく癒される光景に、自己嫌悪していた霊夢の心がどんどん安らいでいく。

「だいすき……ねえ」

異性のそれではなく、家族や友人としての好意。それだけのはずなのに、夢の中の話なのに、妙にその言葉が頭に残っている。

不快感はない。むしろ幸福感に浸っている。しかし、恐らく夢のようにはないだろうと思った。

ただ……。

「私も大好きよ」

もう一度、あの青年を見たいと……霊夢は思った。

どこまでが夢で、どこまでが現実だったのか……それを知る者は幻想郷にはいない。だが、霊夢が夢を見た翌日からしばらくの間、氷狐を見て赤面した存在が何人かいた。そうな。

『フランを出しなさい!! 出せこらあああ!!』

「フラン！ あなた靈夢に何したの!? あんなに怒るなんて一体どんなとんでもないことを……」

「わたしは何もしてないよ?」

「で、でもあんなに……ああ!? 美鈴がやられた!? フラン、今すぐ靈夢にあやま……っってどこに行くの!?!」

「この本を氷狐と一緒に見るの♪」

「本? タイトルは……愛憎と肉欲の宴? ってこれ18禁って書いてあるじゃない! 年齢的にはOKだけど私たちは見た目的にアウトよ!! こんなものを氷狐に見せてどうするの!?!」

「逆光源氏計画!」 0

保護者激闘記

今回のお話は、八雲 紫 結で少しだけ書かれた氷狐の親権を巡って行われたバトルロワイアルのお話である。

「絶対に勝つわ……これ以上胡散臭い奴の家に氷狐を置いておくもんですか」

「言うわね貧乏巫女。あなたに力の差というものを教えてあげましょう」

「巫女には同意するが、私も負けるつもりはないぞ？」

「今度こそ、絶対に氷狐と暮らすのよ……今度こそ」

博麗神社の上空にて、博麗 霊夢、八雲 紫、上白沢 慧音、八意 永琳の4人が4つ巴になって自分以外の3人を睨む。さて、異変解決祝いの宴会の中で突然始まったこの戦いの説明をしよう。

この戦い、後に「保護者たちの仁義なき戦い」と呼ばれたり呼ばれなかったりする戦いはスペルカードルールの下に行われる変則的バトルロワイアルである。ルールは簡

単、相手を撃ち落として自分1人だけ生き残れば勝利。他は普通のスペルカードルールと何ら変わりはない。

尚、この戦いを制した者は現在八雲家に住んでいる氷狐と暮らす権利を彼に断りなく得ることが出来る。いつの間にか商品となっている氷狐は下で魔理沙とお酒を飲んでいるが。

「合図は？」

「そうね……氷狐があのお酒を口から離したら、でいいんじゃない？」

「いいわ」

「分かった」

紫の言葉に了承の意を返した3人と紫は、下で酒を飲んでいゝる氷狐を見やる。その距離はかなり離れているにもかかわらず、その眼にははつきりと氷狐の姿が映っているらしい。

くびくびと、霊夢たちに見られているとも知らずに飲み続ける氷狐。やがてそのグラスに入っていた果実酒はその姿を消していき……。

「ぷは♪」

「「死いいいいねええええ!!」」

「ええええ!!」

飲み干したと同時に、3方向から慧音に向かって弾幕が殺到した。スペルカードこそ使われてはいないが、博麗の巫女、幻想郷の賢者、月の頭脳の3人が撃ち出す弾幕の量は常軌を逸していた。避ける方法など、上下に動くしかない。

満月の夜になればワーハクタクという存在になれる慧音だが今は昼、月など上つてい
るはずもない。というか、仮にワーハクタク化しても無理な気がする。それはさてお
き、慧音は目の前に大量の弾幕があるにもかかわらず動かなかった。否、混乱して動け
なかった。それはなぜか。

人里で教鞭を振るっている慧音は、紫や永琳程ではないにしろ頭がいい。その頭の中
では、霊夢も永琳も紫を狙うと踏んでいた。

理由は、現在氷狐と一緒に暮らしているのが紫だからだ。最初に彼女を落とせば、少
なくとも氷狐の住む場所が変わるからである。今となつてはそんな考えも無駄になつ
てしまったが。

ぴちゅーん。そんな音が聞こえた時、慧音は色とりどりの煙を体から発生させながら
地上目がけて落下していくのだった。慧音脱落。

「ふん、自分の視点すら持たない守護者如きが私たちと肩を並べようなど……片腹痛
いわ!!」

「メタな」と言うんじゃないの」

「ていうかあなた本当に巫女？」

などと会話をしながらも、彼女たちから放たれる弾幕や札、矢が途切れることはない。口は言葉を発していても、その眼が落とすべき相手から外されることはない。

3人は空を縦横無尽に飛び回り、弾幕、札、矢を避けながらそれらを放ち続ける。しかし、なかなか当たらない。そこで霊夢は、懐から1枚の札を取り出した。

「さっさと落ちなさい！ 特に紫!!」

霊符「夢想封印」

最初にスペルカードを使ったのは霊夢。その札は七色七つの霊弾へと変わり、紫に四つ、永琳に三つ飛んで行った。その霊弾は相手を追いかける誘導弾であり、霊夢が最も多用する博麗の業である。

更には普通の弾幕や札も紫に飛ばすというサービスっぷり。そこに手加減という言葉は一画たりとも存在しなかった。

「多すぎないかしら!?! でもこのくらいなら!」

しかし紫も伊達や酔狂で賢者の名を得てはいない。誘導弾の速度や飛んでくる弾幕と札の軌跡を瞬時に計算し、安全なルートを割り出して避け続ける。

だが永琳のことも忘れてはならない。彼女も誘導弾に追われてはいるがその数は紫よりも少ない3つ。霊夢からの弾幕も飛んできてはいないので紫よりも避けることは容易い。さらには反撃として霊夢と紫の二人に向かつて弾幕と矢を飛ばすという余裕っぷりである。

「つ〜く〜」

その矢が霊夢の顔をわずかにかすり、同時に夢想封印の制限時間が来てその姿も消えてしまう。ここぞとばかりに永琳は懐から札を取り出し、その名を口にする。

秘術「天文密葬法」

放たれたのは幾つもの霊弾。それらは空をある程度飛び回り、霊夢と紫の前で小刻みに振るえながら止まった。

二人がなんだ？ と首を傾げたのも束の間、霊弾は一つずつ赤く染まったかと思えば大量の弾幕へと姿を変えて二人に襲いかかった。時折永琳自身からも大きめの単発の零弾も放たれている。

次々に赤く染まり、大量の弾幕へと姿を変えていく霊弾。しかし、霊夢と賢者は弾幕を放つことをやめて避けることに専念することで被弾することを回避していた。

「くっ……流石は巫女と賢者ね……」

なかなか当たらない現状に永琳が冷や汗を流す。このスペルカードは大量に弾幕を放つのでスキマも小さく、一度霊弾が止まるので心理的な隙も付きやすいカードである。しかし、弱点も存在する。

最初に放つ霊弾の数は有限であり、全てが弾幕になってしまうと制限時間が切れるまで大きめの単発の霊弾しか撃てないのだ。この時の永琳はほぼ攻撃を当てることは出来ないといっても過言ではない。

そしてその時は来てしまった。霊弾は使い果たしてしまい、時間制限はまだ少し残っている。もう大量の弾幕はないと気づいた霊夢と紫は今までのお返しとばかりにありったけの弾幕を永琳に注いだ。

無論、霊弾を使い果たしたとはいえそう簡単に被弾する永琳ではない。紫がしたような計算は、むしろ永琳の得意分野である。氷狐の能力によって得た頭脳ではあるが、長きにわたる時の中で更に研磨され、その知識と演算能力は他者の追隨を許さない。

躲し躲されを繰り返し、ようやく制限時間が来たことで永琳の攻撃が最初の弾幕と矢に変わる。拮抗する戦況と落ちない相手……3人の体力と余裕は少しずつなくなっていく。

下にいるギャラリーも最初こそ騒いでいたが、今では逆の意味で騒いでいた。

「誰かあの3人を止めろ！ レミリアとか幽々子とか鈴仙とか！」

「私!? 魔理沙は私に死ねって言うの!?」

「私もあの3人の中に入るのちよつとねえ〜」

「巫女に瞬殺された私があの中に入って生き残るのは無理かと……」

なぜこんなに魔理沙が慌てているのか……それは、今の宴会の惨状にあった。

一言で言うなら、地獄絵図。上空から降り注ぐ大量の“流れ弾”により、地面は抉れ、酒樽は割れて中身をまき散らし、何名か被弾し、慧音がへこんだ地面の上で横たわっている。ヤ無茶しやがって。

もはや宴会を楽しめる状況ではない。フランや萃香などの戦い大好きお祭り大好きな存在は未だに楽しんでるようだが。

かと言ってあの3人を今生き残っているメンバーで止めることは出来ない。いや、止めることは出来るだろうが後々の復讐が怖くて手が出せないのが魔理沙達の心情だった。そして、下にいる人妖が思うことはただ一つ。

【早く終わってくれ……】

下が大変なことになっているとは露知らず、3人の戦いは激化していく。と言っても

あまり状況は変わってはいないが。

一枚ずつスペルカードを使った霊夢と永琳だが、まだ体力に余裕はある。が、このまま拮抗が続けば霊力の問題で紫に負けることになる。逆に紫は妖力に余裕はあるものの体力に余裕がなくなってきた。普段運動をしないのがこんな時になって仇になってしまった。

誰も顔には出さないものの、自分が落ちるといふビジョンが頭から離れない。だが、慌てればそれこそ落とされるだろう。そこで動いたのは霊夢だった。

「これで終わらせるわよ!!」

狐霊符「夢想封印・絶」

使用したのは氷狐とともに作り出したスペルカード。春雪異変以来となるその札から放たれた数多の霊弾は2人の周囲で円を描くように集まる。その円は時間が経つごとに数を増やし、やがて2人の周りには5つの霊弾の円が出来上がった。

そして霊夢が右手をギュツと握りしめると、その動きと連動するように円が一瞬にして中心に向けて収縮した。

このスペルカードは、氷狐の動きを表したものだ。霊弾が相手の周りで円を描くのは

氷狐が相手の周りを楽しそうに動き回ることを表し、最後に相手目がけて収縮するのは抱きついてくる姿を現している。故に、霊符ではなく狐霊符。かつて幽々子を下したそのスペルカードは……残念ながら2人に命中することはなかった。

「っ!? いらない……いや、上!!」

「落ちなさい!」

禁薬「蓬莱の薬」

収縮する瞬間に上空に向けて動くことで霊夢のスペルカードを避けた永琳が新たにスペルカードを宣言する。それは伝説の霊薬の名を冠したスペルカード……宣言と同時に永琳を中心に夥しい数の弾幕が360度方向に放たれた。

制限時間が過ぎるまで弾幕は終わらず、相手は反撃をすることが出来ずひたすら避けて耐えるしかない。『耐久スペル』……このカードが発動した時点で、霊夢と紫は避けることしか出来ない。

規則正しくレーザーのような長細い霊弾が飛び交い、永琳を中心に放たれる弾幕は途切れることなく、本当に僅かな隙間を残しつつ周囲を蹂躪する。チツチツと体に掠らせながらも、霊夢と紫は細心の注意を払って避け続けた。

「まだ……落ちないのっ!？」

「落ちてたまるか!!」

スperlもラストスパートに入り、唯でさえ多い弾幕の数がさらに増えた。それでもルール上、必ず逃げ道はあるので霊夢は勘で、紫は計算で避け続ける。焦りながら叫ぶ永琳に、冷や汗をかきながら叫び返す霊夢。先ほどまで余裕だった体力はかなりの勢いで消耗していき、永琳に至っては二回目のスperlカード、それも耐久スperlを使ったことで霊力の消費も激しい。

やがて、制限時間がやってきた。弾幕は一瞬で消滅し、後に残ったのは方で息をする霊夢と永琳。

そして……スperlカードを手にした紫の姿だった。

「深弾幕結界 — 夢幻泡影 —」

「な……あ!？」

「後手必殺……ごめんなさいね?」

スperl宣言と共に二人の周囲に現れる、永琳のスperlカードに引けを取らない数の弾幕。円を描くように次々と弾幕が現れ、中心の二人に向かって飛び、再び弾幕が現れ

……ただそれだけが続けられる。

その軌跡は見るものを魅了するには十分な美しきであり、しかしそれに見とれてはあつという間に被弾するだろう。そして、これもまた「耐久スペル」……霊夢と永琳はひたすらに避け続けるしかなかった。

しかし、如何せんコンデイションが悪い。霊夢は二連続の耐久スペルであり、体力も精神力もほとんどないに等しい。永琳は先ほどのスペルで霊力を大量に消費しており、落とせなかつたという事実もあつて焦りが大きい。

体力、霊力、冷静さ、精神力……それらが尽きた二人に残されたのは……大量の弾幕に蹂躪されるという悲惨な結末だった。

「ふう……なんとか勝ったわね」

落ちた二人を見届け、紫は安堵の息を吐く。今回紫が勝てたのは、このバトルロワイアル形式という戦いだつたことが大きい。霊夢はその能力ゆえに被弾する確率はほぼ0に等しく、永琳は紫とそう変わらない実力の持ち主。一對一だったなら、どちらが勝つてもおかしくない。

しかし、今回のようなバトルロワイアルなら話は変わってくる。回り全てが敵である事実は精神力を削り、攻撃が当たらなかつたり当たりそうになつたりすれば焦りを生み、動き続ければ体力がなくなっていく。

結果、動き回りながらスペルカードを2回使用した霊夢と永琳が先に体力と霊力を使い果たし、温存していた紫が勝利を得たのだ。

「さて……そろそろ宴会の続きで……も……」

強敵二人とさほど視界に入らなかつた1人を下した勝利の美酒に酔いしれようと神社に降り立つた時、紫の目に飛び込んだのは死屍累々という言葉が合いそうな現状だった。

地は抉れ、人妖問わずに倒れ伏し、立っている者は紫以外に存在しない。宴会場は戦場のようになつてしまっていた。

流星にこの状況で勝利の美酒を……などと考えられるほど紫は凶太くはない。考えるのは、どうしてこうなつてしまったかということ。そして、その答えはあつさりとした。

(どう考えても……私たちのせいよねえ……)

大きなため息を一つ吐き、紫はスキマを開く。氷狐と橙を庇うようにして倒れている藍の下から二人を引きずり出して抱きかかえ、藍の襟首を掴んで引きずりながらスキマの中へと入っていく。体力はないが、人間よりは遥かに力はあるようだ。

そして背後の地獄絵図を見ながら一言。

「……じゃあね〜♪」

そんなふざけた言葉を残し、八雲家は神社より立ち去るのだった。

これは、後に保護者達の仁義なき戦いと呼ばれたり呼ばれなかったりする戦いのお話である。

この戦いを見ていた人妖達は、ただ一つだけを願った。
もう二度と巻き込まないでくれ……と。

「紫様、晩御飯は抜きでよろしいですね」

「え!?! 決定なの!?!」

「ええ。ああ、今日は氷狐と橙が作ってくれるそうです。きっと美味しいですよ? 二人が作ってくれる晩御飯は……二人には3人分でいいと言っておきましたのでご安心ください。ていうか反省してください」

「そ、そんなあ……」

「氷狐く紫様泣いてるから後でおにぎり作ってあげようね」

「うー♪」

子狐絶望記

雨の降る、周りも気分も暗い日のことだった。

どこで間違ってしまったのか……霊夢は血まみれで横たわる子狐の妖怪の亡骸を眺める。

その頬を伝うのは、涙。後悔と、怒りと、喪失感を漂わせるその雫を流す彼女の顔は、恐ろしいほどに無表情であった。

「…………ごめんね…………ごめんね氷狐」

願いが叶うなら、霊夢は過去をやり直すことを願うだろう。そして、それを叶えることができる存在が目の前にいる。しかし、霊夢がそれを願うことはもう、ない。

どうせ何をやっても、彼を生かす方法はないのだから……そう思っても。

彼女は……また繰り返し返す。

これは、あくまでもIF《もしも》のお話。

きっかけは恐らく、氷狐が妖怪の山へいつものように山菜を採りに行った時。その日、権は朝早くから上司に絡まれてしまい、いつも氷狐が来る場所に時間通りに来れなかった。

時間通りにその場所にやってきた氷狐は権が来るまで待っていた。しかし、いつまで経っても待ち人は現れない。そして、それは唐突にやってきた。

「グルルルルウウ……」

「う!？」

現れたのは、一匹の狼の姿をした妖怪。その体は傷だらけで、先ほどまで戦闘をしていた、または攻撃を受けていたということは幼い氷狐にもすぐに分かった。

その狼の妖怪は、氷狐を見ていた。獲物を見つけたというような、文字通り肉食獣の目。その目を直視してしまった氷狐は尻餅をついてしまい、その青い瞳に涙を浮かばせる。

食べられる。そう思ったのは元が動物故の本能だろうか。ガタガタと体は震え、とても逃げられる状態ではない。仮に逃げたとしてもすぐに追いつかれてしまうだろうか。

やがて、その時は来た。大口を開けて飛びかかり、その巨体で氷狐に覆いかぶさる妖怪。後数秒もすれば、その口周りは鮮血に染まることだろう。

もうすぐ終わる。本能的にそれを悟った氷狐は、身動き一つしない。涙もいつの間にか止まり、その表情は無表情と呼ぶべきものになつていた。

死にたくない、ただそう思った。その直後に、彼の体が言いようのない感覚に包まれた。何かが湧き上がるような、何かを思い出すような感覚。突然の感覚に氷狐は怯えることはなく、自らにとつて自然なものであるように思えた。

そこで彼は本能で理解した。『そういうコト』への能力《チカラ》の使い方。自らも肉食獣であるという事実。幼さから来る無邪気な破壊衝動。妖怪としての、本能。お肉を食べたい、コレを壊したい。そんな感情に支配される。

だから、思考し《オモツ》た。

—死んじやえ《コワレチャエ》—

それから数分後、棍が到着して見たものは……血まみれの姿で自分に笑いかける氷狐の姿。

その手には何かの肉の塊が掴まれ、聡明な棍は何があつたのかを瞬時に理解した。理

解してしまった。

氷狐が何モノかに襲われ、それを殺害した。ただそれだけのこと。そして、それをさせてしまったということ。

椀が感じたのは、己の無力さ。なぜこんなことになってしまったのか。なぜこんなことになっているのか。ここは椀の警備範囲内……その何モノかがいたということは、見逃していた……つまり、自らの力不足に他ならない。

罪悪感と、後悔と、情けなさに苛まれる椀の目からは涙が零れる。感じる負の感情は、嫌が壞にも椀の心を蝕んでいく。だが、それ以上に。

「もみじ。うー♪」

変わらない無邪気な笑みを浮かべる子狐が、どうしようもなく怖かった。

何かが変わったと、慧音は氷狐を見ながら思った。

いつの頃からか、氷狐は山菜の他に何かの肉を持ってきて八百屋以外に売るようになった。人里にやってくる時間も心なしか遅くなったし、山菜の質も落ちたような気がする。

変わらないのは、売った後に団子を食べること。その後には神社に行くこと。甘味処で繰り返しられる魔理沙とのケンカも変わらないし、時々寺小屋に来て子供たちと遊ぶことも、なんら変わらない。

何が変わったのか、今日の前で魔理沙と団子でケンカしている氷狐を見ながら考える。そこで、一つの違和感に気づいた。

（普段のケンカの時……氷狐はこんなにも荒々しかつたか？）

慧音の記憶では、二人がケンカした時は精々少し噛み付いたり少し引つかいたりする程度。しかし、今日の前で行われているケンカでは、魔理沙の腕には血が流れるほどの引つき傷が出来てしまっている。

何よりも……彼の表情が憤怒に染まっていた。普段なら、ここまで怒りを露にはしない。これではまるで敵意を抱いているかのようだ。その形相に、あの魔理沙ですら怯えてしまっている。

「ひ、氷狐？　なんでそんなに機嫌が悪いんだ？」

「ううううう……！」

機嫌が悪いのはお前が団子を盗ったからだと言いたいが、これはいつものような微笑ましいケンカとは訳が違う。方や腕から僅かとはいえ血を流し、方や文字通り牙を剥いている。

おかしい。ただそれだけが慧音の思考を埋め尽くす。何がおかしいのか……それは氷狐。では氷狐の何がおかしいのか。変わり始めたのはいつだったか。そう考えてはみるが、人里以外では交流する機会が少ない慧音では答えを出せなかった。

その日のケンカは、霊夢が力づくで止めたことで終わった。

その日、永琳は非常に機嫌がよかった。なぜだと聞かれれば、それは氷狐が永遠亭に来たからだと答える。

一緒に住んでいる紫や毎日のように会える霊夢とは違い、迷いの竹林の奥にある永遠亭に住む永琳は氷狐と会うことは少ない。たまに診察や置き薬の点検と集金として人里に鈴仙と共に向かうこともあるが、それでも出会う可能性は低かった。

さらに言えば、健康的な生活を送っており、病気にかかっても自分の能力でほぼ無意識に治してしまう氷狐がこの永遠亭に来ることは殆どない。今回ここに来ているのは、その殆どの部分の話だ。

今は氷狐と共に休憩を兼ねて日向ぼつこの最中である。この時間を邪魔しようものなら、その存在は数瞬で矢にその身を穿たれるだろう。

「静かね……」

「すー……くー……」

「あらあら」

気がつけば、いつの間にもやら氷狐は眠ってしまった。永琳は聖母のような笑みを浮かべ、その綺麗な青い髪を撫でる。

サラサラとした髪はとても肌触りがよく、ずっと撫でていたい気持ちにさせられる。永琳は今まで撫でられなかった分楽しもうと、やんわりと優しく撫で続けていた。

その時、青い髪の中に赤い糸が混じっていることに気づいた。ゴミと思って永琳がその糸を手にとって持ち上げると、その糸から鉄のような臭いがした。

「これは……血？」

赤い糸だと思って手にしたそれは血に染まった何かの毛であることに気づいた永琳は、その日の夜にその毛を調べてみることにした。

調べた結果、髪の主こそ分からなかったが、その血は少なくとも氷狐のものではないということが分かった。ならば、誰のものなのか。なぜ、氷狐の髪に混じっていたのか。疑問が浮かんで消え、浮かんで消えを繰り返し、やがて幾つかの可能性を考えつく。

偶然混じってしまった。妖怪同士の戦闘に巻き込まれ、紫などに助けられた。思いつ

いた中では、この二つが有力であろうと、永琳は思う。本当はもう一つ可能性があるが、彼女はそれを口には出さない。

水狐が何かを直接殺した……そんなバカなど、さすがの永琳も内心で笑うだけだった。

その日、紫は何かに殴られたような衝撃を受けて目が覚めた。痛みからか目から涙を滲ませ、起き上がった紫は半強制的に覚醒した頭でその衝撃の原因を探るように回りを確認する。

その犯人は、水狐だった。なぜ分かったかと聞かれれば、そこそこ大きな石を持った手を振りぬいた体勢の水狐がいたからだ、紫は答えるだろう。

「つて石!?! 水狐!! 流石にそれはやりすぎじゃないかしら!?!」

「うー♪」

怒る紫に対し、水狐は無邪気に笑いながら石を外に投げ捨てて部屋から出て行った。教育を間違ったかしらなどと非行に走った子供を見るような母親の心境で、紫は投げ捨てられた石をなんとなく持ち上げてみる。

自分にしてみればさほど重いとは感じないが、子供が持つには少し重いか。などと考えていた紫の指に、なにやらヌルリとしたものが触れた。

「……………えっ?」

その指についたモノを見て、思わず紫は絶句して石を落としてしまった。指についたモノ……………その赤い液体を見て、紫は信じられないものを見た心境だった。

赤い液体……………即ち、血。殴られたとは思ったが、まさか血が出るほどだとは考えてもみなかった。殴られた部分に触れてみるが、やはりヌルリとしたモノが指に付着し、目の前に持つてくればその指は赤く染まっている。

おかしい、氷狐はこんなことをするような子ではなかったはず……………そう考えた紫は、一体氷狐に何があったのか、きっかけは何だったのかを考える。

一日二日と記憶を遡っていき……………ふと、ある一日を思い浮かべた。それは、血まみれの氷狐と、彼に対して怯えた表情を浮かべていた椀をスキマ越しに見た日。

何があったかは、椀から予想という話で聞いていた。その話を聞いて紫はすぐに嫌がる氷狐を風呂呂に入れ、その日の記憶を以前行ったように事実と虚偽の境界を弄ることで消した。……………消したはずだと、紫はどこか自信がなさそうに心のう内で呟いた。

もしかしたら、消せていなかったのか。それともあまりに強く記憶に残ってしまったのか。しかし、一度記憶の中を確認した時にはしっかりと消えていたはずだと、紫

は思い返す。

そう、今回は、少々度が過ぎただけ。後でちゃんとしかかっておかないと。

そこで思考を終え、紫はいつものように一日を始めるのだった。

ある日から、幻想郷の結界が弱くなり始めたことに霊夢は気づいた。

今のところそれほど何かが起きているということはないが、この状況がこれ以上続くなら幻想郷は再び外の世界と交じり合ってしまう。しかし、そんなことを放っておく紫ではないだろうと霊夢は樂觀視していた。

そしてもう一つ、霊夢には不思議なことが起きていた。

「氷狐ー。食器の準備してくれる？」

「うー♪」

ある日から、紫が氷狐を迎えに来なくなつた。それは氷狐が紫の元に帰らないということなので霊夢にとっては万々歳なのだ。が、霊夢にはどうにも不思議で仕方なかつた。

もしかしてケンカでもしたのだろうか？ などとは考えるが、氷狐の笑顔を見ればどうでもよくなつてしまう。朝起きたら氷狐がいて、朝昼晩の食事を氷狐と共にして、同

じ布団で眠る。そんな日々が、霊夢にとってこの上ない幸せになっていた。

しかし……その幸せを、霊夢は自分の手で壊すことになる。

その人物は、氷狐がいつものように人里に行っている時に博麗神社にやってきた。その人物を見て、霊夢は不機嫌さを隠そうともせず顔をしめた。

「何の用よ」

「……あなたに頼みたいことがあります」

やってきたのは、閻魔大王の四季映姫だった。以前氷狐を殺すために動いていたことに激怒した霊夢は、彼女にいい印象は一切持っていない。それどころか大嫌いである。

しかし、どうにも今の彼女は真剣とか無下に帰しがたい雰囲気を感じていた。霊夢が言葉もなく居間に誘導するくらいには。

居間に来た二人はテーブルを挟んで向かい合わせに座る。最初に口を開いたのは、霊夢。

「で、私に頼みたいことって？」

「その前に、あなたに言っておくことがあります」

「何よ」

「八雲 紫が殺されました」

映姫の言ったことは、霊夢には到底信じられないことだった。

八雲 紫は幻想郷の最強の一角であり、その妖力の量と反則じみた能力ゆえに負けることを想像するのが難しい存在である。これがスベルカードルールで負けたという話ならまだ分かるが、死ぬ、殺されるといふのなら話は別。

しかし、霊夢は納得した。紫は死んだ。故に境界、結界が徐々に崩壊していつている。簡単な話だった。そしてそれは、少しづつ、だが確実に幻想郷が崩壊していつている事を意味する。紫のような能力を持つ存在など、1人として存在しないのだから。

「そしてその犯人は……水狐です」

「……あんたふざけてんの？ 水狐に出来るわけが」

「本当にそう思っていますか？」

「……あの子がそんなことをする訳が」

「子供の癩癩は、時に過剰な暴力となるものです。その日、八雲 紫は彼に石による殴打を受けて起床し、その行為を咎めた。それが彼が癩癩を引き起こす原因となり……その能力を持って有無を言わさず」

殺された。子供に常識は通じない。例えこちらの言い分が正しいとしても、子供にとつてはどうでもいいのだ。

癩癩を起こした子供は、言葉すら通じなくなる。辺りにあるものを投げつけ、心のままに、感情のままに暴言を吐き、暴力を振るう。そこに理性や加減という言葉はなく、本人も状況を理解しない。

それが妖怪となれば、被害は相当なものになる。ただの暴力なら、紫には効かなかった。しかし、能力となれば話は別。

思考《オモイ》を現実《カタチ》にする程度の能力。思考次第では殆どのができてしまうその能力が、今回最悪の方向に発動してしまった。話にしてみれば、ただそれだけの話なのだ。

「さて、そろそろ本題の依頼の話をしましょう」

「やめて……」

「依頼の内容は、もうあなたも気づいている通りの内容です」

「言うな……っ！」

「八雲 紫を殺した、今現在幻想郷を危機に陥れている妖怪……そして、生かしておけば今後も不利益をもたらす危険性の高いあの妖怪……」

「それ以上っ！ 言うなああああ!!」

「子狐の妖怪……氷狐を殺してください」

「はあつ……はあつ……うぐ……ううぐ……」

雨の降る、周りも気分も暗い日のことだった。

ぬかるんだ神社の庭で、血まみれで倒れる氷狐の体を霊夢は泣きながら抱きかかえる。

映姫がやってきた日から2日後の今日、霊夢は悲しみと吐き気を押し殺して氷狐に攻撃を加えた。結果、一撃で殺すことは出来なかった。

なぜ2日という時間があったのか。それは、単純に氷狐が神社に帰ってこなかったから。なぜかはわからないが……今となっては、そんなことは関係ない。

「ゴボ……あ……う……」

「っ！ 氷狐！ ごめんね！ ごめんね氷狐！」

血を吐き、虫が鳴くような声を出す氷狐に、霊夢は謝罪の言葉を口にす。しかし、それは何に対する謝罪なのだろうか。

攻撃を加えたこと。映姫の依頼を実行してしまったこと。一撃で楽にしてやる事が出来なかつたこと。もしかしたら、それ以外のこともかもしれない。

段々と弱くなる鼓動。一度は氷狐の死を体験した霊夢に、その事実は到底容認できるようなものではない。しかし、その原因を作ってしまったのは紛れもない自分。

「れ……む……」

「嫌っ！ 氷狐！ ひっお!!」

やがてその鼓動は完全に止まり、その青い瞳は何も映さなくなる。以前のような仮死ではなく、紛れもない死……霊夢の心は、絶望という闇に染まってしまった。

死なないで。生きて。そう強く想っても、願いは現実とはならない。分かっているのだ。例え生き返つたとしても、また氷狐は殺されることになるのだと。

物言わぬ小さな体を抱きかかえ、霊夢はどうしてこうなってしまったかを考える。今思えば、例え氷狐を殺したところで幻想郷の崩壊は止められない。境界を操れる紫は、もういないのだから。いや、そう言えば藍が死んだとは言っていないから、境界を操れないにしろ保つことは出来るのか。

そんなことを考えながら、もう一度霊夢はどうしてこうなったかを考える。一体何が

原因で氷狐は紫を殺したのか。例え癩癩を起したとしても、そんなことをする子ではなかったのに。

「なんで私が氷狐を殺す必要があった。なんで私に氷狐を殺させた。なんで氷狐がこんなことになっている。なんで氷狐はそんなことをした。一体どこから狂ってしまった。一体どこから壊れてしまった」

壊れたように……いや、壊れてしまった霊夢は何度も自問自答を繰り返す。何度も同じ言葉を繰り返し、何度も氷狐の髪を撫でる。

やがて、どうしてこうなってしまった？ という疑問は、どうすればこうならなかった？ という疑問に変わった。

どうすれば氷狐は死ななかった。どうすれば紫は死ななかった。どうすれば自分は彼を殺さずに済んだ。

そこで霊夢は、氷狐の方を見ながらあることを思いついた。彼の能力は体さえあれば、純粋なオモイさえあれば発動する。無から有を生み出すことはできないが、それ以外ならほぼ何でもできるという反則っぷりだ。

ならば、時を遡ることもできるのではないか？

その答えに辿り着いたとき、霊夢は壊れた笑みを浮かべて心から願った。楽しかった、平凡だったあの日々に戻りたい。もう一度、温かな体温を感じたい。もう一度、もう一度、もう一度。

そして、その思いは現実となった。

ハッと、霊夢は目が覚めた。体は嫌な汗にまみれ、まるで長い悪夢を見ていたように動悸が激しい。いや、実際に悪夢を見ていたのだ。

壊れてしまっていた心が治っていく。そう、あれは物凄く悪い夢だったのだ。あんなことは現実にはないのだ。そう認識して、霊夢は安堵の息を漏らした。

不意に、誰かが境内に入ってきた気配を感じた。それはまっすぐに霊夢の方に向かってきており……霊夢の勘が、その人物に会うなど告げる。しかし、その勘に従うよりも早く、気配の主は縁側にいた霊夢の目の前に現れた。

「あつ……」

「……にいましたか博麗の巫女」

目の前の少女を見て、霊夢の心が再び崩壊を始めていく。

なぜだ、あれは夢ではなかったのか、なぜお前がここにいる、なぜ結界が不安定になっている、なぜそんなにも思いつめた表情をしている。

浮かんでは消えていく疑問。そして、突きつけられた現実に、霊夢は眩暈を覚える。そんな彼女のことなど知らないとはかりに目の前の少女……四季映姫・ヤマザナドゥは、霊夢にとって最悪の言葉を告げた。

「あなたに頼みたいことがあります……その前に……八雲 紫が殺されました」

悪夢は、終わってはくれない。

あれから何度同じことを繰り返したのか、もう霊夢は覚えていない。その間に分かったことが幾つかある。

時間を遡ることが出来るのは二日までが限界。そして、その二日の間にどんな行動を起こそうが必ず氷狐は死んでしまうということ。藍と橙は健在であり、紫の変わりに幻想郷の結界の維持に努めているということ。

映姫の依頼を蹴ると、氷狐は紫を殺された恨みを晴らしに来た幽々子によって殺される。その幽々子を妨害しても、今度は彼女の命令を受けた妖夢によって斬り殺される。能力で抵抗されるよりも速く、彼女たちは彼の命を奪うことが出来た。

それを止めても次が、それを止めてもその次が来て、彼の命を奪っていく。目の前で、最初の自分よりも簡単にあっけなく、大切なモノが奪われていく。なら初めから氷狐を守るために動けば……そう思つて実行しても、今度は数で守りきれなくなる。

その度に時を遡り、目が覚めるとすぐに映姫が霊夢の前に現れ、依頼と紫の死を口にする。

ならばその日よりも更に遡れば……と考えたが、なぜか氷狐が死ぬまでの間に彼を見つけたことが出来ない。最期の一步手前まで、彼の姿を確認できない。

霊夢の心は、最初の時点で壊れてしまつていた。絶対に避けられない氷狐の死、同じことを口にする映姫、殺しに来る幻想郷の住人、それを止められない自分。

どうやったらこの地獄から抜け出せる。どうやったら氷狐を助け出すことが出来る。霊夢は壊れ、狂いかけていた。

そして、また繰り返す。

「巫女、あなたに頼みたいことが」

「紫が殺されて、その犯人である氷狐を殺せてんでしょ……もう何度も聞いたわ。

何回も、何十回も、何百回も、何千回も、もう何万回も聞いた気がするほどに」

霊夢がそんなことを口にしても、映姫は首を傾げるだけで深くは追求しない。その日もまた、最初と同じように映姫は依頼と紫の死を口にして去っていった。

何も変わらない、何も変えられない、無限に続く地獄の二日間に、いつしか霊夢の思いは変わっていた。

どうすればこの地獄を終わらせられる。答えは簡単、氷狐の命を諦めればいい。しかし、それが出来るような低い愛情を霊夢は抱いていない。

氷狐を助けつつ、地獄から抜け出す方法はないのか……壊れ狂った頭で、霊夢はもう一度考える。それすらも何度も行ってきたことだった。

しかし、今回は少し違った。偶然視界に入ったとある「モノ」……それを見て、霊夢は小さくつぶやいた。

「やっとおわれる……ふ……ふ……」

「れーむー!」

「ひーん」

二日後、雨が降る日に霊夢は最初に彼を殺した場所で氷狐と出会った。もうこの出会

いも何度も経験したことはあるが。

今、霊夢は笑っていた。壊れたいびつな笑顔ではなく、綺麗な笑顔で笑っていた。霊夢は走り寄ってきた氷狐を抱きしめ……嬉しさを滲ませた声で囁く。

「ねえ氷狐……お願いがあるの」

「うー？ あーうー？」

「そう、お願い。氷狐はなにもする必要がない、簡単なお願いよ」

「うー♪」

了承するように頷く氷狐に、霊夢は更に笑顔を輝かせる。

そして氷狐を抱きしめたまま顔の位置を同じ高さに合わせて……涙を流しながらつづやくように言った。

「私と……一緒に死んでね」

そつと、氷狐の首に包丁の刃が添えられた。それはゆつくりと霊夢の方へと引き寄せられ……次の瞬間には彼の首から鮮血が噴水のごとく溢れだした。

ふらりと地面に倒れそうになるその小さな体を、霊夢は優しく抱きしめる。どれだけが血に塗れようとも構うことはなく、その顔に極上の笑みを浮かべて。

「だあいじようぶ……さびしくないよひこお……わたしも……」
いっしょにいくからね。そうつぶやいた霊夢は、そつと自らの首に包丁の刃を押し当て……ゆつくりと引いた。

これは、もしかしたら起きるかもしれない絶望にまみれたお話。
願わくば……このようなことが起きないことを。

「ねえ氷狐。ちよつと頼みが」

「なあ霊夢に氷狐。ちよつと頼みがあるんだ」

「うー？」

「……何よ魔理沙。悪いけど、今はアンタの頼みをきいてる場合じゃ」

「まあそう言うなよ。すぐに終わるからさ」

「……はあ。言ってみなさい」

「おう。なあ二人とも……私と一緒に……死んでくれないか？」

子狐多恋記

これは、子供たちの可愛らしく微笑ましい恋物語の I F の短編集である。

【狐猫夫婦の一日《こねこふうふのいちにち》】

「ゆーり！ らん！」

「藍様！ 紫様！」

ある日の昼下がりに、氷狐と橙は手を繋いで居間にいる紫と藍の前に出た。

子供二人が手を繋いでいるというなんとも微笑ましい姿に頬を緩ませたのも束の間、次の橙の言葉で2人の時間が止まった。

「わたし達、結婚しました！」

「うー♪」

「あなたー、あーん♪」

「あーん♪」

目の前の光景が何なのか、紫と藍の2人には理解できなかつた。

確かに、目の前の2人は普段から仲がよかつた。よく2人で遊び、よく2人で家事を手伝い、よく2人でお風呂に……これは氷狐が嫌がるから違うか、などと現実逃避を試みるが、目の前の光景……氷狐と橙がお互いに昼食を食べさせあつていゝという光景は変わらない。

いや、仲がいいのは良い事だ。少々仲が良すぎる気もしなくもないが、彼女たちにとっての問題はそこではない。

(先を越された……)

そう、そこである。妖怪とて心と性別がある以上、恋愛を行うこともある。時には妖怪同士で、時にはそれ以外の種族と愛情を持つてまぐわうことも無きにしも非ずである。

そして、彼女たちは妖怪であると同時に女性である。世の流行には敏感だし、髪や肌

の手入れだつてする。結婚願望というものは特にないが、婚期というのは気にする。無論、年齢的に考えてそんなものは当に過ぎ去つてゐるが。

何が言いたいかと言えば、自分たちよりも先に結婚した子供2人が羨ましいのだ。

「つてそうじゃなくて！ 氷狐に橙！ 結婚つてどういふことなの!」

「そ、そうだぞ。あ、お飯事とかさういふ遊びなんだな？ そうなんだな!」

まくし立てる2人に、氷狐と橙は不思議そうに首を傾げた。言葉にするなら、この人たちは何を言っているのだろうか？ という感じだ。

同時に、自分たちの言葉が嘘だと疑われているということに気づいたのだろう、橙の目に涙がにじみ始め、それを見た氷狐が2人を睨み付ける。妻を泣かしたな？ と言わんばかりの眼差しで。

泣き出す橙とジト目を向ける氷狐にたじろぐ紫と慌てる藍……仲の良い4人の間に亀裂が走つた気がした。

「いや、ね？ 疑つてるわけじゃないのよ？ ほら、泣き止んで？ ね?」

「すまない、疑つた紫様を許してやってくれ。私は2人の仲を応援するぞ」

「つて藍、何を私だけ悪者にしようとしてるのかしら」

「ちえん。あーん」

「グスツ……あーん……♪」

醜い争いをしている主従を無視し、小さな夫婦は仲睦まじく食事を再開し、目に涙を溜めていた橙は幸せそうに笑みを浮かべる……これが夫婦と独り身の温度差か。

この後の食事は、夫婦は仲むつまじく、独り身はどんよりとした空気で終えていったことは想像に難くないだろう。後に紫と藍は語る。今日ほど味噌汁がしよっぱく感じたことはない……と。

朝食の後、橙と氷狐はずっと一緒にいた。二人で藍の家事を手伝い、二人で人里までお使いに行き、お使いの後はチルノやフラン、メディスン達と一緒に遊んだ。その遊びの最中ですら、二人は片時も離れなかった。

鬼ごっこでは片方が鬼にならない限り一緒に逃げていたし、かくれんぼなら同じ場所に隠れ、だるまさんがころんだでは常に隣同士である。チルノ達もそれを当然のことと思っているかのように見守るだけで特に何も言わない……フランだけ何かやり切ったような、満足そうな顔をしているが。

日が暮れば子供たちはそれぞれの住処へと帰り、八雲家に帰った二人は藍と共に夕飯を作り始める。紫はまだ帰ってきていないようだ。

そして夕飯が出来上がった頃、ようやく紫が帰ってきた。なぜかボロボロになっているが、その理由を子供二人が知ることはなく、藍だけは何かを察したように珍しく主を

労わっていた。

「藍……私はやったわ……やりきったのよ。あの過保護な母親から二人の結婚を許してもらえたのよ……」

「ご立派です紫様……ですが、それは普通氷狐がやるべきことではないかと」
「……」

その日、紫は涙ながらに語る。今日ほど美味しく、そしてしょっぱく感じた食事はないと。しょっぱくは二回目であることを、藍はツツこまなかつた。出来た従者である。

「ひーん♪」

「うー?」

その日の夜、橙と氷狐は同じ寝室にいた。普段は橙は藍と、氷狐は紫と同じ寝室である。

中にある布団は一枚であり、枕は二つ……小さな夫婦は今日から同じ布団の上で眠るようだ。無論、体の大きさを考えると二人が一緒に寝てもまだスペースに余裕はあるが。

尚、親バカ二人が隣で聞き耳を立てていることを、二人は知らない。

「おやすみのちゅー♪」

「うー♪」

(なににいいいい!?)

壁の向こうで親バカ二人の顔が驚愕に染まっているとは露知らず、夫婦は向かい合わせに座ってその両手をしっかりと繋ぐ。

そして目を瞑ってゆっくりとその距離を縮めていき……ちゅっ、と軽くも可愛らしい音を立てて口付けを交わした。

離れた二人の顔は特に赤く染まってはおらず、その行為の意味をよく理解していないことを表している。しかし、壁の向こうにいるバカ二人にはそんなことがわかるはずもなく……。

(嗚呼、橙に氷狐……知らないうちに大人の階段を上っていたのね……ていうか羨ましいわ、私なんてお付き合いどころか同じくらいに異性と手を握ったことすら……)

(な、なんて純粋な……私の経験した愛の中でこれほどの純粋な愛情劇はあつただろうか……いや、ない)

この二人、顔が本人たちよりも真っ赤である。永い時を生きる大妖怪なのだが、根は乙女で純情のようだ。

「おやすみ氷狐」

「うー、ちえん」

バカ二人のことなど知る由もない二人は同じ布団に入り込み、向かい合わせになって笑顔を交わす。この二人の幸せな生活は、明日からはずっと続くことだろう。

子狐の妖怪と化け猫の妖怪……小さな妖怪の夫婦に、幸あれ。

「氷狐ー、あーん♪」

「あーう♪」

「美味しいわね藍……きつとこの味が幸せの味と言うのでしようね」

「そうですね、紫様」

「……ねえ藍」

「なんでしょう紫様」

「今日から一緒に寝ないかしら」

「……そうしましょうか……」

【氷精の告白? 《ひようせいのかくはく?》】

それは、とある日のことである。いつものように遊んでいたチルノ、氷狐、橙、フラ
ン、メデイスンの5人……匹？ は帰る時間となったのでそれぞれの帰路につく。

楽しい時間はすぐに過ぎ去り、後にやってくるのは楽しかった余韻と僅かな寂しさ。
それを感じたチルノは、いつものように笑顔を浮かべ、帰っていく。『友達』に向かつて
手を振るう。

「また明日ねー！」

距離的にはもう声は届いていないだろう。しかし、チルノは手を振る4人の影を確認
して満足そうに頷いた。明日になれば、また会える。もう以前の寂しかった日々に戻る
ことはない。

ふと、チルノはその寂しかった日々を思い浮かべる。他の妖精よりも力が強く、同時
に他の妖精よりも攻撃的で、他の妖精よりもほんの少しだけ頭がいいチルノは、その他
の妖精たちから避けられていた。

特にチルノが何かをしたというわけではない。ただ、他の妖精が力の強いチルノを恐
れただけである。しかし、その避けるという行為はチルノを深く傷つけた。

話しかけても逃げられ、遊びに入ろうとすれば逃げられ、ただ近くを通っただけで逃

げられる。嫌な顔をした訳ではない。何か陰口を言われた訳ではない。元より、妖精にそんな知能はない。

ただ、何をしても逃げられる……そんな寂しい日がずっと続いていたある日に、チルノはスペルカードルール……弾幕ごっこという「遊び」を知った。

それは弱者でも強者に勝つ可能性がある遊び……新しいものや遊ぶことが大好きな妖精達はすぐにやり始めたし、チルノも当然やり始めた。しかも、他の妖精たちがチルノとも弾幕ごっこすることを逃げることもなく応じたのだ。当時のチルノからしてみれば、これほどに嬉しい事はなかった。

しかし、それも数日の間だけ。チルノに勝てる妖精は一人としておらず、戦えば負けるのが「当たり前」になった時、チルノはまた独りになってしまった。

力を磨いても、それをぶつける相手は妖精にはいない。そこでチルノが目をつけたのが他の種族……妖怪と人間等だった。しかし、妖精と人間、妖怪の間には越えられないと言っても過言ではない「壁」が存在する。

結果を言ってしまうえば、チルノが勝てるのは小妖怪までが限界であり、人間にいたっては弾幕ごっこを行える存在自体が少なかった。それを行える人間には、数秒も持たずに負けてしまった。

妖精の中では、最強。一転、その枠から出てみれば精々下の中がいいところ。中妖怪

以上には相手にされず、人間には妖精だからとバカにされ、大妖怪に至っては道端の石ころ程度にしか見られない。

誰にも相手にされず、ただただ寂しい日が続いた。そんな時に出会ったのが、ある子狐の妖怪……氷狐だった。

当初の氷狐はスペルカードルルと言うものを知らなかった。そんなことを知るはずもないチルノは一方的に攻撃を仕掛けてしまったが、それはもう過ぎたことだ。正確には、途中で霊夢に撃ち落されたので記憶が曖昧になっているだけだが。

その数日後、氷狐はスペルカードを持ってチルノの縄張りである霧の湖にやってきた。なぜ来たのかとチルノが聞けば、彼はカードを作ったからこないだの続きをやろうという。

戦った結果は、当然ながらチルノの圧勝。負けた後は1週間ほど彼の姿が見えなくなり、それが弾幕ごっこをやり始めた当初の妖精たちと重なってしまったチルノは泣いてしまったことを覚えている。

しかし、彼はまたやってきた。スペルカードを持って、また「遊ぼう」と笑いながら言った。言ってくれた。それがチルノに取ってどれだけ嬉しかったか、どれだけ言っただけ言っただけ言葉を、氷狐は知らない。チルノ以外、誰も知らない。

言われたその場でうれし涙を流し、帰った自宅で思い出して喜びに悶え、次の日にま

た遊んで夢ではないと安堵したことを、本人以外誰も知らない。

今では、氷狐以外の友達も増えた。橙にフランにメデイスン、夜雀の妖怪に螢の妖怪に宵闇の妖怪……そして、同じ妖精である「大妖精」という妖精。気づけばこんなにも友人が増えていた。以前よりも、ずっと楽しい日々が続いている。

同時に、寂しさを感じることも多くなった。家に帰れば寂しさから泣いてしまう、なんてこともよくあるくらいだ。今では寂しさを紛らわせる為に大妖精の家やフランの家に泊まりに行くことも多くなった。氷狐と橙の家は場所が分からないので行けず、他の者の家は少々遠いので行けない。

「はあ……ん？」

今日は泊りには行かないので、明日までまた寂しい時間を過ごすことになってしまふ。そんな暗い気持ちになった時、チルノは偶然とある本を見つけた。その本とは……。

「うんにやらのススメ……？」

「告白のススメ」と書かれた一冊の本だった。

「氷狐！ あたいに、毎晩お味噌汁を作ってくれ！」

翌日の昼、やってきた氷狐に向かってチルノはいきなりそう言った。当然ながら、言

われた氷狐はキョトンとしている。

言った本人は自分の予想と違っていたのか、キョトンとした彼の顔を見てキョトンとしていた。やがて言葉の意味を理解したのか、氷狐はコクリと頷く。その日から、氷狐はチルノの家に毎晩味噌汁を持ってくるようになった。

「氷狐！ あたいと同じおバカに入ってくれ！」

「うー？」

その翌日、チルノはこんなことを言ってきた。当然意味が通じるはずもなく、氷狐は思いつきり首を傾げてしまった。尚、おバカではなくお墓が正しい。読み方がちよつと掠っている。チルノ超頑張った。

妖怪と妖精、互いに不死に近い存在である2人にお墓に入る、などという概念があるわけでもない。結局この日の言葉は、2人には正しく理解されないまま遊びの中で忘れ去られていった。

「氷狐！ あたいと同じうんにやらになつてくれ！」

「……？」

言葉も出ない、というのは今の氷狐の状態を指すに違いない。もはや言葉として意味

を成していないチルノの発言は、完全に彼の理解の外であった。言った本人も、恐らく何を言っているのか分かつてはいないだろう。

チルノが言いたかったことは、「同じ苗字になってくれ」ということだろう。2人は苗字がないのに何を名乗れというのだろうか。

結局この日の言葉も、遊びの中で忘れ去られていくのだった。

次の日も、その次の日もチルノは拾った本で見た言葉を氷狐に言っていた。しかし意味が理解できたのは最初の味噌汁くらいであり、他は言葉として成り立っていないものばかりだった。チルノは漢字が読めないで、ほぼ全てが「うんにやら」となってしまうのである。

そんなある日、チルノはいきなり本を破り捨てた。

「あーもう！ 読めないし意味わかんない!! 氷狐が毎晩味噌汁持ってきてくれるのは嬉しいけど、あたいが言いたいのはそういうことじゃない!」

毎晩毎晩読めない字を頑張って読んだにもかかわらず、その言葉は通じない。自分でも何を言っているのか分からない。氷狐が遊んだ後にも来てくれることは素直に嬉しいが、味噌汁を持ってきたらすぐに帰ってしまう。

そうじゃない。チルノが求めているのはそういうことではないのだ。ただ、誰かと一

緒にいたい。氷狐と一緒にいたい……ただそれだけ。

「……そうだ！」

その時、チルノの頭の中にいい考えが浮かんだ。

「氷狐！ あんたはあたいの子分なんだから親分のあたいとずっと一緒にいなさい！」

翌日、チルノはフランと橙、メデイスンのいる前で氷狐にそう言った。そこで氷狐は、初めての反応を見せた。それは、苦笑とも困惑とも取れるような表情。拒否ではない。ただ、困っている。

チルノの頭の中では、二つ返事で了承するか頷くかの二択だった。こんな風に困った顔をされるのは、完全に予想外だった。

「い……いやなの？」

「うー、うーあーうー」

「じゃあ、なんでそんなに困ってるのよ」

「あーうー」

氷狐が言うには、ずっと一緒にいるということとは夫婦になるということであり、子分と親分の関係ではすなわけることは出来ないということだった。勿論そんなことはないの

だが、氷狐はそう教えられていた。誰に？ 親達に。

自分の言った関係が、自分と彼と一緒に居れなくしている……そう考えてしまったチルノは、急に孤独感を感じてしまった。今の関係がある限り、氷狐とは一緒に居られないのだと。

だから、泣きながら言った。

「じゃあ……こぶんとかおやぶんとかじゃなくていいから……いつしよにいてよお……」

「……うー」

泣き出してしまったチルノを、氷狐は優しく抱きしめる。いいよ、という一言を添えて。

場の空気を察してか、その場に居たはずのフラン達の姿はなかった。この場にいるのは、今は抱き合う2人だけ。

2人はしばらくの間、遊び場の中心で抱きしめあうのだった。

「作戦大成功だねメデイスンちゃん」

「そうね。ところでフラン、どこであんな本手に入れたの？」

「んー？ ああ、あれはね……」

『こあー、私が外から手に入れた本知らない？』

『何の本ですか？ パチュリー様』

【天使で子悪魔な妹様《てんしでこあくまないもうとさま》】

「氷狐、いらつしやい！」

「うー、ふらん！」

その日、氷狐は紅魔館にやってきていた。出迎えたのは咲夜……ではなくフランドールである。

今日この日、氷狐は紅魔館に一日泊まることになっている。勿論紫は大反対したのだが、初めてのお泊りということでもどうしても行きたかった氷狐は泣き落としを無自覚で行うことで紫を陥落させたのだ。子供恐るべし。

着替えの入った荷物を背負い、氷狐はフランに手を握られて館の中を歩き出す。咲夜の能力によって見た目以上の広さを誇る紅魔館は、子供2人には少々、というよりもかなり広い。氷狐は紅魔館に入ったことが以前参加したパーティー以外にはないため、好奇心旺盛な子供のように目をキラキラとさせている。実際子供だが。

隣で氷狐の様子を見ていたフランは得意げに胸を張り、あれはどこだこれはどこだど軽い説明を入れながら部屋の中を案内していく。無論、氷狐は話を完全には覚えられないしフランもそれは分かっている。

495年という時間を地下で過ごしたフランにとって、こういった触れ合いや会話は何気ないものであっても大切に楽しいものだった。そして、こういうことが出来るようになったのは……紛れもなく、今手を繋いでいる妖怪のおかげであることも理解している。

「氷狐！ 次はあっちに行こ♪」

「うー♪」

故に、その幼い心が恋心を持つことは……自然なことであった。

いつからその想いを自覚したかと聞かれれば、フランは氷狐に救われたときだと答える。

初めて触れた温もり、ひどい事をした自分を嫌わないでくれた上に狂気という呪いから解き放つてくれた存在。

姉とともに起き、姉とともにメイドの作る料理を食べ、魔法使いに勉強や常識を教わり、遊びに行つて帰つてきた際に門番に行つてきます、ただいまと言うと行つてらっしゃい、お帰りなさいと返つてきて、夜はまた姉と眠る……そんなありふれた幸せな日々をくれた存在。

とは言うものの、495年間もの間地下にいたフランが「恋心」などという感情を知っているわけがない。最初は胸が熱くなる、胸がドキドキするということに病気ではないかと恐怖を抱いたものだ。

しかし、それはパチュリィがいる大図書館で偶然見つけた本によつて病気ではないと分かった……ある意味では病気とも言えなくもないが。

その本とは、どこにでもあるようなラブロマンス系の小説。後に小悪魔が趣味で集めている本だと分かり、見つけたことを期にフランはよく小悪魔から借りるようになる。尚、小悪魔が集めているものはあくまでも「純愛系」に限るのであしからず。

その本を読み進める中で、フランは自分が氷狐に対して抱いている感情が「恋」なのだを知った。それからかもしれない。フランの読む本が純愛系からどんどん過激な方向へ進んでしまったのは。

だからだろう……今夜、フランがあんな行動を取ったのは。

「氷狐ー、あーん♪」

「う？ あーん♪」

「ぶっ!!? ゲホッゴホッ! ちよつとフラン! あなた何やってるの!?!」

「あーんだよあーん。お姉さま知らないの?」

夕食時、食堂のような場所でレミリア、フラン、氷狐、美鈴の4人は咲夜の作る食事を取っていた。パチュリーは持病の喘息があるため、小悪魔は主と共に食事を取るので大図書館で食べている。咲夜は当然料理を作り終え、運び終えてからレミリア達と共に食事を取る。

その最中、フランは隣に座る氷狐に向かってフォークに刺したハンバーグを氷狐に差し出し、氷狐はそれを躊躇いなく食べた。因みに、ハンバーグの肉は普通のひき肉で作ったものである。決して人肉ではない。

「それくらい知ってるわよ! でもそれは好きな人にしかやっちゃいけないのよ!?!」

「じゃあ問題ないよね? 私は氷狐のこと好きだし」

「そ、それならいい……つて、え!?! どういうことなのフラン!?!」

「お嬢様、食事中はお静かに。はしたのうございます」

「うぐっ……」

ドヤ顔でさらりと言つてのけたフランを身を乗り出して問い詰めようとするレミリアだが、いきなり現れた咲夜の言葉を聞いて紅魔館当主として、女として自重しようとして椅子に座りなおした。フランは幸せそうな顔で氷狐に「あーん」をしているが。本を読んでいるからか、レミリアよりもフランの方が大人に見えてしまうのは気のせいではないだろう。

不意に、氷狐が慣れないフォークで出されたパスタをくるくると纏めだした。その手つきはお世辞にも上手とは言えないが、子供がやる分には微笑ましいことこの上ない。そして氷狐は、そのパスタを纏めたフォークを……フランへと差し出した。

「フラン。あーん♪」

「ふえ!? え、つとお……」

まさか相手からされるとは思わなかったのか、しどろもどろになってフランの顔が赤く染まる。いたずら好きな女性とは、得てして不意打ちに弱いものである。フランが女性と見られるかどうかは別として。

同時に、好いている相手から「あーん」をされて嬉しくない存在がいるだろうか？
少なくとも、フランは嬉しい。

「あー……ん」

なので、パクリとフランには少々大きいそれを、彼女は顔を赤らめながら美味しそうに、それでいて少し恥ずかしそうに口へと向かい入れた。ゆつくりと口を動かし、少々飲み込みづらいそれをフランは少しずつ嚙下していく。

そして、ごっくんと飲み込んだフランは、赤い顔のまま一言だけ呟いた。

「……………おいしい」

「尚、パスタの話です」

「咲夜……………何を分かりきったことを言っているの?」

「いえ、勘違いしそうな人が何人かいる気がしたので」

夜……………それは妖怪達……………特に吸血鬼にとつては朝というべき時間帯……………なのだが、フランとレミリアの姉妹はこの幻想郷での暮らしですっかり人間と同じような過ごし方になってしまった。別段困っているわけではないし、住人達と触れ合おうと思えば自然とそうなたただけなのだが。

何が言いたいかと言うと、吸血鬼姉妹は朝起きて夜眠ると言いたいだけである。

「……………お邪魔しまゝす……………」

夜遅くに、氷狐の眠る客間にフランが静かに現れた。なぜか裸である。フランはゆつくりと氷狐に近づき、眠っていることと起きそうにないことを確認する。確認を終える

と、フランはにやり、どこか妖艶に見える笑みを浮かべた。

この時点でフランが何をするつもりか分かった人もいるだろう……しかし、彼女が何をするつもりなのかは、本人の口から言って貰うとしよう。

「あとは氷狐の服を脱がして私が布団の中にもぐりこめば……きせーじじつの完成」

という訳で、フランがしようとしていることは既成事実の作成。どう考えても見た目が子供の2人では肉体関係を持つようには見られないので無駄な頑張りとなることは想像に難くないが。

しかしフランはそう思っていないようで、意気揚々と氷狐のベッドに潜り込む。そして氷狐が起きないように服を脱がすべく服に手をかけ……その際に彼の寝顔が目に入った。

暗い部屋ながら、その青い髪はしっかりと目に映っている。光っているようにすら見えるが、流石にそれは目の錯覚だろう。

静かな呼吸と共に上下する胸……閉じられた瞳からは警戒の言葉を感じることは出来ない。元が獣であるなら野生の勘のようなもので起き上がりそうなものだが、その気配は微塵もない。悪く言えば、隙だらけ。良く言うなら、心を開いてくれている。

しばらくの間、フランはその寝顔に魅入っていた。思えば、フランが見た寝顔は姉で

あるレミリアのものが殆どであり、こうして好きな異性の寝顔を見るのは初めてである。

そう考えると、フランは急に自分の胸がドキドキとしてきたことを自覚した。同時に罪悪感というか背徳感というのか、そういった感情が心の内を占める。

「……………やめよ」

真つ赤な顔をして、自分がどれだけ恥ずかしいことをしようとしていたかを自覚したフランはその行動を取りやめた。が、依然としてその視線は氷狐の寝顔をに釘付けである。

じつと見つめるフラン。その顔は徐々に、無意識に氷狐の顔との距離を縮めていく。吸い込まれるような感覚……………フランはそれに抗うことなく身を任せ……………。

「……………んむ」

そうすることが自然なように、ゆっくりとその柔らかな唇に口付けた。

デザートにフルーツタルトを食べたからかその口付けは甘く、どこか以前口にした血の味を髣髴とさせた。だからといって吸血衝動が湧き上がる訳ではないが。

ずっとこうしていたい……………そうは思っても、いつ起きてしまうか分からないこの状況ではこれ以上続けるのはマズイ。フランは誘惑に抗いつつ、ゆっくりと口を離す。

そこで再び視界に入った寝顔……………その口元に流れる透明の液体は、もしかしなくても

フランの唾液であろう。

なんとも言えない感覚が背筋を走りぬけ、フランはどこか恍惚とした表情を浮かべる。

「はあ……ひっお……」

欲しい。この妖怪の全てが欲しい。その欲望に意識を持つていかれそうになるが、フランは理性でその欲望を抑える。

欲望ではなく、理性を持つて自分は氷狐を手に入れるのだ。そのためにこうして最初は既成事実を作り上げようとしたのではないか。などと少し間違った考えをしつつ、フランは首を振る。

やがて色々と葛藤していたフランは、疲れたのかその全ての思考を放棄して氷狐の隣に寝転ぶ。どうやら部屋には帰らずにここで眠るようだ。裸のまま。

「絶対……ぜえつたい私のモノにするんだから。あの本みたい……恋人になってみせるんだから」

恋に恋するお年頃……という訳ではないにしろ、今のフランはそれに近い。しかし、その愛情は間違いなく本当である。

だから、この行動は子供だから……ということかどうか一つ。

「氷狐……だーいすき♪」

「フラン！ フランはどこ!?!」

「お嬢様、お静かに。妹様は只今氷狐の寝室でお眠りになられていますので」

「そ、そうなの……って氷狐のところで!?! なんて!?!」

「お嬢様には……肉体的に後10年ほど成長したらお教えします」

「どういうこと？ ねえ、なんで顔が赤いの？ 咲夜」

「すー……くー……」

射命丸 文 起

〔射命丸 文《しゃめいまる あや》〕

妖怪の山でブン屋、つまり新聞記者を営んでいる少女の姿をした鴉天狗。幻想郷には1000年前から住んでおり、その力は数いる鴉天狗の中でも最高峰に位置するといふ。

“文々。新聞《ぶんぶんまるしんぶん》”という新聞を自ら執筆、発行しており、自ら配達しているにもかかわらず購読者はほぼ0に等しいのだとか。彼女の同僚曰く、内容がデタラメとのこと。

記事の為なら東奔西走なんのその、あることからないことまで頑張る姿は非常に楽しそうであるとか。しかし購読者は増えない。

その能力は“風を操る程度の能力”。能力の詳細については名前の通りなので省略させていただく。この能力と鴉天狗としての身体能力故に、そのスピードは“幻想郷最速”の称号を得るほど。

礼儀正しい性格ではあるが、弱者に強く強者に弱いという幻想郷に住む鴉天狗の例を少し持っており、自分よりも弱い存在に対してはやや高慢。

今回のお話は、鴉天狗の少女の文と子狐の妖怪、氷狐がいつもの仲間たちとほのぼのと、時に慌ただしく、そしてまさかの展開になったりならなかったりするお話。

「うーん……」

妖怪の山にある我が家で椅子に座りながら唸っているのは私こと射命丸 文。

前回起きた異変である「大量の花が一斉に咲き乱れる」という異変……私は先ほどもであの異変の記事を書いていた。しかし、その内容は簡単に言えば「幻想郷の様々な場所で色んな花が咲いていた」というものにしかならなかったもので没にしたのだ。

花ということで風見 幽香が怪しいと思つて話を聞こうと思つたが相手は幻想郷最強の一角であり、戦闘狂とも聞くフラワーマスター……戦闘にでもなつたら目も当てられないので自宅には行っていない。

博霊の巫女に話を聞きに行つてみたけど神社を留守にしていたし、人里に向かう途中で見かければ殺気をばら撒きながら閻魔と弾幕ごっこしてるし、閻魔に勝つちゃうし勝つたらすぐどっかに行っちゃうし……結局話を聞いたのはポロポロになっていた閻魔ただ一人。その閻魔も話を聞こうとしたらいきなり「貴女は少し、好奇心が旺盛過ぎ

る」と行つて説教始めるし……散々な一日だった。

こうなつたら宴会に入り込んで自棄酒だ！と意気込んで神社に行つてみれば人影は一切見当たらず、2、3日足を運んでも宴会はやっていなかったのので一人寂しく我が家で飲んでいたのが7日くらい前のこと。

部下の権でも弄つて遊ぼうかな……なんて思つても肝心の権の姿が見えず。溜まりまくつたストレスを発散するかのように新聞を書いて結果は先ほど言つたような感じになり、結局没。

ストレスは発散できず、不幸ばかりが続いている気がする。最近は何と会うこともそうなく、面白いことも中々起きない。

「……たまには、人里に行つてみましょうか」

なんとなく、窓の外を見ながら呟いてみる。私は他の鴉天狗達と比べてそこまで人間という存在が嫌いではないし、たまに入つては私が書いている『文々。新聞』の購読者にならないかと勧めるくらいのはしているので人間との仲もそんなに悪くない。

ここしばらく行つてないし、私の顔を覚えている人間がいるかは分からないけれど、暇つぶしと気分転換には丁度いいかもしれない。思い立つたが吉日、今から行つてみようか。時間帯は太陽が真上あたりにあるくらい……つまりは昼時。ついでに昼食も里で食べてしまおうか。

「そうと決まれば、れっつごーです！」

普段はしまっている黒い翼を出し、家の外に出る。バサツと勢い良く広げてみれば、自慢の艶のある漆黒の羽が宙を舞う。

翼はためかせ、空を飛び……私は一陣の風になる。その瞬間が、私は何よりも好きだった。

「到着です」

時間してみれば10秒とかかかってないけれど、私は人里の門の前に下り立った。中に直接下りてもいいのだけれど、以前やったら里の守護者から「子供たちを怯えさせるな!!」と言われていきなり頭突きを食らったのでそれ以来私はこうして門から入るようになっている。

門番であろう男性は私の姿を見ると警戒するように目を鋭くさせた。が、何かを思い出したかのように目を見開くと私から視線を外した……私のことを覚えていたのかもしれない。

「文々。新聞、試しに読んでみませんか？」

「以前」にも言いましたが、読んでも購読はしませんよ。清く正しい射命丸さん」
試しに門を通る際にそう呟いてみると、クスリと笑うような声と共にそんな言葉が返ってきた。少し前、こんな会話を人間の「少年」とした覚えがある。因みに、「清く正しい射命丸」というのは外の世界で言う「きやつちこびい」とか言うものだ。

あの時の少年が、今では妖怪相手に睨む事ができるほどの屈強な男性になつていたなんて……妖怪という種族ながら、感慨深いものがありますね。……ていうか私はどれだけこの里に来ていなかったのか。

それはさて置き、お腹もすいてきたのでそろそろ里の中に入るとしましうか……そう思つていざ足を踏み入れてみると、私の隣を小さな妖気を持った青い何かが走り抜けていった。

何となく、私はその青が気になつたので追いかけるように青の背を追い、そのついでに青の観察をする。

頭に見えるのは何かの獣らしき青い毛並みの耳、お尻の部分からはこれまた何かの獣らしき同色の尻尾が生えている。その姿は、どこか私の部下を髣髴とさせた。

耳と尻尾と同じく青い髪はうなじが見える程度に短く、着ている服装は……後ろからではよく分からないが紫色の対極図が描かれた布に、恐らくは白い服を着ている。なぜかその服装に見覚えがあるけれど、何となく気づかない方がいい気がしたので気にしな

いことにした。

そして、アレから妖気を感じるということは……まあ獣耳が生えている時点で分かっていたことではあるけれど妖怪だということを意味する。それは特に問題ないのだけれど……なぜだろうか。私は、あの妖怪が気になった。

付かず離れずの距離を維持しながら追いかけること数分、妖怪がたどり着いたのは人里唯一の寺小屋。妖怪が寺小屋に何のようなのか……と疑問に思ったのもつかの間、私の目に信じられない光景が飛び込んできた。

「行くぞひゃー！」

「うー！」

私の目の前にあるのは、人間の子供と子供の妖怪が仲良く蹴鞠をしている……つまり、楽しそうに遊んでいるという光景。それは、妖怪である私にとっては信じられない光景だった。

妖怪とは、人間の恐怖などの感情から生まれ、そして人間を食らう存在である。この幻想郷では里の中の人間を食らう、殺すというのはご法度だけれど、里の外ではその限りではない。つまり、決して人間が妖怪に恐怖を抱いていない訳ではなく、妖怪は昔に比べれば減ったとは言え人間を食料であると思っっている者も少なくはない。

妖怪に見た目は関係ないし、子供のような見た目でも人間の大人以上の力を持つ存在

も少なくはない。見た目で判断してはいけない、というのは人間の中での妖怪に対する共通の見解のはず。ならば、目の前の妖怪と楽しそうに遊ぶ人間の子供たちと……それを寺小屋の中から優しい目で見ている里の守護者はどういうことだろうか。

そんなことを考えていると、守護者と目が合った。途端に、守護者の目が鋭くなり、私を警戒しているのが見て取れた。いや、私を警戒するのに目の前の妖怪に無警戒というのはどういう見なのか……少しだけ、納得がいかない。

そもそも、私よりも弱いくせに私を睨んでいるというのが気に入らない。先の人間である門番は……まあこの際置いておくけれど。

少しイタズラでもしてその顔を驚愕に染めてやろうかしら……なんて思ったのが不味かったのかもしれない。

「不用意なことをすれば……滅するわよ」

ゾクリ、と背筋を嫌な感じが通り抜けた。同時に、イタズラの為に動こうとしていた私の体が石のように固まって動かなくなる。

この感じを、私はかつて感じたことがあった。そう、それはまだ鬼が妖怪の山の頂点として君臨していたはるか昔の話。初めて鬼と出会い、その力を恐れ、姿を見ただけで

生きた心地がしなかった、常に命を握られているかのような感覚。

いったい誰なのか……その疑問は、すぐに解決した。

私の横を通り抜け、視界に映ったのは紅白の巫女服。頭には大きな赤い布が蝶のようになつて髪を縛っており、その身から溢れる霊力と一瞬感じた怒気は……紛れもなく博麗の巫女。その巫女は真つ直ぐに青い妖怪の元へ行き……信じられないことにその妖怪を抱き上げた。

「う？ れーむ！」

「氷狐ー、今日はなかなか神社に来ないから探してたのよ？」

「うー、うーあー」

「そうだったの？ それなら邪魔して悪かったわね。でももうすぐお昼休みも終わる時間だし、今日はこのまま一緒に神社に行くわよ」

「あーう♪」

「さて巫女、もう少し氷狐を生徒たちと遊ばせてやっても……というか、もう少し私に氷狐という癒しを」

「仕事しろ」

思わず笑つてしまいそんな会話だけど、笑うどころか身動きひとつ取れないのが私の現状。先ほど感じた巫女の力が怖くて、とてもではないが口を開くことはできない。

しかし、私は口元に笑みを浮かべていた。理由は単純……嬉しかったから。

妖怪と人間が楽しそうに遊んでいる？ 巫女が妖怪をさも当然のように抱き上げて
いる？ これほど信じがたい光景を、私は今まで見たことがない。それすなわち……
すくーぷ”です！

ああああ、本当なら今すぐカメラにこの現場を収めて自宅に帰って現像して新聞を書
き上げて幻想郷中にばら蒔きたいです！ でも動かない私の体。なんて歯痒いのです
か！

やがて巫女は妖怪をなぜか横抱きしたまま空へと上がり、博麗神社の方角へと飛び
去っていった。私は体が動くようになった瞬間に素早くカメラを構え、飛び去る瞬間の
巫女を収めることに成功した。

「……………え？」

気のせいかもしれないけれど……その僅かな時間で、あの青い妖怪と目があつた気が
した。……いや、さすがに気のせいかもしれない。巫女はもうある程度離れていたし、
あの妖怪の目がそれほどいいとは思えない。

ただ……本当に何となくではあるけれど……あの妖怪は、私に向かって小さく手を
振っている気がした。

「……………気のせい……………ですよね」

そう、気のせい。寺小屋の方を見てみれば、巫女が飛んでいった方角に向かって手を振っている人間の子供たちと、ものすごく悲しそうな顔をしている守護者の姿。あつちに向かって手を振っていたのだと、普通に考えれば分かることだ。

だけど……なぜだろうか。私に向かって手を振ったわけではない……そう思うだけで、少しだけ寂しく感じてしまったのは。向こうは私を認識しているかも怪しく、私はあの妖怪を今日初めて見たというのに。

結局私は昼食を取ることもなく、自宅に戻って写真の現象と新聞の執筆に取り掛かった。その際、私はなぜか撮った写真を目に見える位置に置きながら新聞を書いていた。

「……あなたの名前は、何ですか？」

誰も答えるはずのない部屋の中で、写真に向かってそう問いかけてみる。そこに映っているのは、巫女の背中と、顔と両足だけが映っている青い妖怪。心なしか、その視線はこちらを向いているような気がする。

人間に畏怖されず、人間に恐怖を抱かせず、人間とともに……それが当たり前のよう

に遊んでいた、この目で見ても信じがたい光景を作り出していた不思議な妖怪。
あんな妖怪は、今まで見たことがない。人間に友好的な妖怪は見たことがあるが、人間と遊ぶ姿なんて見たことがない。

だけど、見てしまった。その光景を、楽しそうな人間と妖怪の姿を。

見たならどうする？ 当然、こんなすくーぷは頼って置かないのがブン屋である私、射命丸 文である。すぐに書き上げ、幻想郷中にこの事実を知らしめなくては！ 少し誇張も入れたほうが購読者も増えるかしら……なんて考えは見ない振り。

「さあて、かきあげますよー！」

退屈な日々で溜まっていたストレスは、いつの間にか何処かへと消えていた。里へと行ったのは、いい気分転換になったみたいです。

この妖怪を追えば、きつと新鮮で誰もが見やるすくーぷを得ることができる……私
は、どこかそう確信していた。

「なぜ……なぜですか!？」

「文様？ 一体どうしたのですか？」

「あや、権じやないですか。随分とお久しぶりです……じゃなくて！ 新聞ですよ新

聞！」

「新聞？」

「そうですよ！ なぜ購読者が増えないのですか!? 妖怪と人間が笑いあうという素

晴らしい場面を収めた記事だというのに！ 珍しく他の天狗を驚愕させたという会心の出来だというのに！ 一体なぜですかああああ!?!」

（ああ、この山の住人はあんまり山から出ないから知らないんだ……今の人里では氷狐や私等限定でその光景が日常だということ。これだから引きこもりは）

射命丸 文 承

あれからあの青い妖怪と接触しようとする事と早5日……私は一度たりともあの妖怪と話すことが出来ずにいた。

接触すること自体は簡単だった。あの妖怪はどうやら人里によく来ているようなので、人里の中に居れば高い確率で出会うことができたから。しかし、そこからが問題だった。

『ちよつとすみま』

『氷狐ー、団子食べに行きましょう』

『うー♪』

『いや、あの……』

という感じで博麗の巫女に見計らったように邪魔されたり。

『今度こそ……ちよつとすみ』

『氷狐!』

『がはあ!』

『う? えーり!』

『ええ、えーりよ。今からお昼にするのだけれど、一緒にどうかしら?』

『あーうー♪』

『い……いったい何が……?』

という感じで訳もわからないまま吹っ飛ばされて地面に倒れ伏したり。その時、私が遠くなる意識の中で最後に見たのは赤と青の左右非対称の奇抜な服でした。

そのほかにも時に白黒の魔法使いに先を越され、時に賢者と共に買い物をしていたの
で近づくことすらできず、風見 幽香と一緒に歩いていた時は全力で逃げた。ていうか
なんで幻想郷最強の一角である二人と仲良く歩いているのかあの妖怪は。

とまあこんな感じで発見は出来ても話すことは出来ないのが私の現状である。
どう考えても邪魔されてるとしか思えない。しかし邪魔をしている相手が私よりも強
いのでどうにもできない。白黒はすぐに巫女と接触するので近づこうにも近づけない
し。

今日も今日とて私は人里の入口の前に居る。今日こそはあの妖怪と……と思う反面

今日も無理だろうな、という諦めの感情もある。

「今日は誰に邪魔されるのやら……ハア……ん？」

悲観してため息を一つ吐くと、不意に私のスカートの裾が誰かに引つ張られた。いたい誰だ……と鬱陶しく思いながらそちらに目を向けてみる。

青い毛色の獣の耳と青い髪。お尻から生えているであろう同色の尻尾はゆらゆらと揺れており、私を見上げるその綺麗な青というよりは蒼と言うべき瞳。その瞳、はどこか心配そうに私の姿を映している。その姿は紛れもなく、私が会おうとしていた妖怪だった。

「うー？ あーう、あー？」

「……えつと……」

マズイ、何を言っているのか全く分からない。恐らく私のことを心配してくれているのだろう、という予想は出来るものの確証があるわけでもない。それに、こうもあつさりと接触できてしまったことに少し混乱してしまっているのが言葉が出てこない。

取材しようにも言葉が通じない、分からないのであればやりようもない。記事にしても「うーあー」ばかりになってしまう。

「文様？ こんなところで何をしているんですか？」

「あや、栴じゃないですか」

どうしようかと思っていた時、私の耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。声のした方向に顔を向けてみれば、そこにいたのは私の予想通り、部下である犬走 権の姿があった。

白狼天狗であり、妖怪の山の巡回が仕事である権が人里にいるなんて珍しい。というか、なぜこの部下は仕事もせずにこんなところにいるのかしら。

「権じゃないですか、じゃありません。なぜあなたがここにいますか。仕事してください」

「失礼な、今から取材という名の仕事をしようとしていたところです」

「それしかしてないでしょう。文様が必要な書類を提出してないと大天狗様がお怒りでしたよ」

「私よりも弱い奴の言うことなど聞く耳持ちません♪ ところで、権はなぜここに？ あなたこそ仕事を……」

「私は休憩時間です。今から氷狐と一緒に甘味を食べに行くので……行くよ氷狐」
「うー♪」

むう、権が可愛くないです。昔はあんなに文様文様と私の後ろをついてきてくれたというのに……時間の流れは速いんですね。あんなにも生意気……もとい、成長しちやつて。

という感じに私が感慨深く思っていると、不意に右手が引かれた。今度は何だと思つて手の先を見てみると、犯人はあの妖怪だった。その妖怪は椀とも手を繋いでおり、樂しげにニツコリと笑つて私たちの手を引いたまま歩き出した。

「な、なんですか？」

「うー♪ あーうー、うー♪」

「文様も一緒に甘味処に行こう、と言っています」

「あ、いいですね……ではなくて！ 椀！」

「はい」

「あなた、この妖怪が何を言っているか分かるんですか!？」

「はい」

あつさりと言われてしまい、私は二の句を告げることができなくなつた。半ば呆然としてみると腕を強く引かれ、こけそうになるも何とか体勢を整えることに成功する。強く引いたのもやはりあの妖怪。早く行こうとばかりに少し不満そうな顔で私と椀の手を一生懸命引く姿は非常に微笑ましい。

そんな妖怪を見た椀は私が見たことのないような優しい笑みを浮かべ、妖怪と並んで歩き出した。同時に私に顔を向け、早く行きましようと言つて視線で訴えかけてきた。目は口ほどにものを言うとはまさにこのことだと思ふ。

渋々……というほどではないが少し納得がいかないまま一緒に歩いて行くとすぐに目的の甘味処に辿り着いた。椀と妖怪はすぐに私から離れ、あつという間に外に出ている椅子を陣取ってしまった。……妖怪の手が離れたことを少し寂しく思ったのは内緒です。

「あら、子狐ちゃんに椀さん。いらっしやい」

「こんにちは。みたらし3つで」

「うーあーうー」

「はい、みたらし団子3つに3色団子とみたらし団子を1つずつね」

「お願いします」

「うー♪」

なぜあの人間はあの妖怪の言っていることが分かるんですか!? しかも椀とも仲がよさそうです……というより椀が常連っぽいのはなぜでしょうか。もしか、休憩時間の合間にここに食べに来ているのでしょうか……だとすれば、最近中々椀と会えなかったのは椀が人里に来ていたから？

てつきり椀は他の山の住人と同じく余所者に排他的だと思っていたんですが……違ったようですね。そうでなければわざわざ人里に来ることはないでしょうし。

「あーうー」

「文様、何をそんなところで突っ立っているんですか。団子、いらないうんですか？」
「いります！」

慌てて妖怪の隣に座り、先の店員が来るのを待つ。人間の作る甘味は本当に美味しいので私も大好物だ。

お品書きに目を通してみれば、なかなか種類が豊富である。みたらしと3色団子、黄粉餅に餡子餅にわらび餅、水羊羹に芋羊羹、栗金団、豆大福に苺大福なんてものまである。姿かたちを知っているのもどれもこれも美味しそうだ。昔に数回来たことがありますが、その時よりも品物が増えているのでどれにしようかと目移りしてしまう。

「文様、みたらし団子がお勧めですよ」

「そうですね……では私もみたらしに」

「いえ、3色団子こそ至高だわ」

「はえ？」

聞き覚えのない声と感じたことのある妖気に間の抜けた声をだしてしまった。恐る恐る声のした方……上に顔を向けてみて、見なきやよかったと酷く後悔した。

白い服の上に羽織った赤い袖のない服に同じ色の赤いスカート……そして、鮮やかな緑色の髪と好戦的な笑み。どうみてもフラワーマスターの風見 幽香です。会いたくありませんでした。

「幽香……あなたはまだそんなことを言っているんですか。見たらしの方が美味しいと何度言えば」

「あなたこそ気付きなさい椀……3色の方が美味しいと」

「みたらし4つと3色1つお待ちどう様です」

つて椀は何を風見 幽香と張り合っているんですかこの命知らずがああああ!! いくら人里の中では殺生を禁じられているとはいえ、彼女がそれを守るかどうかも分からないというのにいいいい!!

しかも運の悪いことに店員さんまで来たし! 店員さん逃げて! 超逃げて! つてああもう混乱して何が何やら!

「あら、幽香さん。3色団子ですか?」

「ええ、3つでお願いね」

「かしこまりましたー♪」

なんでそんなにも仲良しこよしいいい!! 思わずカメラで撮ってしまいました……人間とにこやかに会話する風見 幽香とか一体どういうことですか……実は偽物と言われた方が納得と理解ができますよ。

しかし椀も店員さんも幽香と呼んでましたし……感じられる妖気の量から考えても風見 幽香本人であるのは疑いようのない事実。実は友好的な妖怪だったのでしよう

か？

「あなた……今何をしたのかしら？ 言いようによつては……殺すわよ？」

「ひいひい！ すみませんすみません！ ただカメラであなたを撮っただけです！ あなたには何も影響も悪いこともないですから！」

「カメラねえ……そういえば、あなたは誰なのかしら？」

「あ、私はブン屋をやっている清く正しい射命丸です。これが私が書いている文々新聞です」

「ブン屋……ねえ」

怯えながらも新聞を渡すことができた私を褒めてやりたい気分です。今渡した新聞は前に見た妖怪と人間が一緒に遊んでいたという現実を少し誇張して書いたもの。他の鴉天狗を驚愕させた逸品です。

これを見せれば購読者も増えるはず……という私の予想は見事に裏切られ、購読者は全く増えていない。本当に、なぜ増えないのでしょうか。

「……あんまり面白くないわね」

「え!? だつ、だつてこんなこと今までありえなかつたでしょう!? 妖怪と人間が一緒に遊んだり笑っていたりするの……」

「今さつきありえたじゃない。私とあの店員が笑い合っていたでしょう」

「あ…………？」

言われてみれば、と素直に思う。しかし、それはあくまでも店員とお客という形だからなのでは？　とも思う。確かに信じられないことではあるが、確かな事実。

でも、面白くないというのは納得できない。折角撮れたすくーぷで折角書いた記事だというのに、そんな言い方をされては不満に思うのも仕方ない。私にだって、ブン屋にだって、矜持というものはあるのだから。

「…………」

「不満そうね。私を睨みつけるなんて、中々いい度胸してるじゃない」

「別に…………そういうわけでは…………」

「ま、面白くないなんて言われれば当然か…………かといって正直に感想を述べたのにそんな表情をされては不愉快だわ」

「ゆーか」

どんどん不機嫌になっていく風見　幽香を前にして恐怖を感じていた私と彼女の前に現れた…………というか間に入ってきたのは、あの青い妖怪だった。私のせいとはいえず機嫌な彼女の前に出るとは、なんて命知らずなのだろうか。

しかし、その行動はありがたい。彼女の怒りの矛先がこの妖怪に向いた瞬間にとんずらさせてもらおう。

「なにかしら？ 氷狐」

「うーあーうー、めっ」

右手の人差指を立てて何かをのたまう妖怪。いきなり何を言っているんだと思ってしまうた私はおかしくないはず。

同時に、あ、この妖怪死んだなと思った。いや、風見 幽香を知るものなら普通そう思いますって。加虐趣味で戦闘狂で情け容赦を知らない幻想郷最強の一角である風見 幽香を知る者なら。ほら、今まさに彼女が妖怪の頭に手を置いて握りつぶそうと……。

「……そうね、こんなところで怒りを振りまくのは無粋だわ。ごめんなさいね、氷狐」
「うー♪」

握りつぶすどころか謝った上に笑いながら妖怪の頭を撫で始めましたよ彼女。誰ですかこの人、絶対風見 幽香じゃないですよ。ていうかあなたもこの妖怪が何を言っているのか分かるんですか。私は全く分からないのに。

ハッ、これもかなりのすくーぷでは？ いえ、かなりどころか最上級に位置するほどのすくーぷです。他の鴉天狗に記事に見せれば再び驚愕の表情を見ることが出来るでしょう。このまま無事に帰ることが出来たら話ですが。

それにしても……この妖怪は何者でしょうか？

博麗の巫女を筆頭に幻想郷の強者や重役と知り合いであり、大事にされているこの妖怪。人間と仲良く遊び、危険とされる妖怪を笑顔にさせる。私も気にはなっている。

しかし、見るからに弱者であるこの妖怪にそれほどの価値があるのだろうか？ 幻想郷の住人は皆自分勝手な部分があり、自分にとって利益がないのに仲良くするというのはいささか疑問だ。

無償の愛……というものを否定はしませんが、幻想郷でそれはなかなかないでしょう。それが妖怪なら尚更。

つまり、この妖怪と仲良くしている存在にとつて、この妖怪は何かしらの利益を生んでくれるのだろう。その利益は何なのかまでは分からないけれど。

この妖怪はよくすくーぷを作り出してくれるし、私も仲良くしておこうか……でも巫女たちが邪魔してきそうですね。

「うー」

「……？ なんですか？」

「あーうー」

不意に、妖怪に声をかけられた。そちらに目を向けてみれば、そこにあつたのは私に3色団子を差し出している妖怪の姿。先ほども考えたように、この甘味処で甘味を食べたのは大分昔になる。あの時に食べた3色団子は、いまでも鮮明に思い出せるほどに

美味しかった。

そんなことを考えていると、いつの間にか私の手には団子が握られていた。どうやら無意識のうちに妖怪から受け取っていたらしい。そのまま口に入れ、白の団子を一つ食べる。

ああ、この味だ。妖怪の私にとってはそれほど昔ではないが、どうしようもなく懐かしく感じる。思えば、私がこの里にあまり来なくなつてどれだけの時間が流れたのだろうか。

少年が大人になるほどの時間……ざっと見積もつて2、30年のいったところだろうか。なんだ、そんなに永くはないじゃないですか。しかし、懐かしいと感じるには十分な時間ですね。

あの時お爺さん、お婆さんというべき見た目だった人間は、もうこの世には存在しないのだろう。人間の生は、ひどく短い。私を知る人間は数を減らし、私が知る人間は違う姿になっている。今まで気にも留めなかったのに、今になつてそれを酷く寂しく感じってしまったのはなぜだろうか。

……なんてね、理由は至つて簡単なこと。

“また人里に来てしまった”から。

私は、妖怪の中では知り合いや友人といった存在を大切にする方だと思う。だから、私の知らないうちに変わってしまった人間や亡くなってしまった人間を知ってしまったて寂しいと感じてしまうのだと思う。人間を襲う妖怪にあるまじき事だとは思いますが、元は鴉である私はあまり人間を襲う必要はないのでさほど関係ない。

そうだ、これを機にまた人里で文々。新聞の購読者を増やすために色んな人に話しかけてみようか。おしゃべりは好きだし、こうして甘味があるのだからたまに食べにくるのもいい。

でも一人だと味気ないので、来る時には椀と一緒に来ましようか。それに、ここに来れば……きつとこの妖怪もいる筈。

この妖怪を見ていれば……一緒に居れば、きつとすくーぷには困らないだろう。その為には、この妖怪と仲良くなっておかないといけない……いえ、違いますね。

「ねえ」

「う？」

私は、この妖怪と仲良くなりたいのです。ですから……。

「私は射命丸 文って言うんです。あなたのお名前はなんですか？」

まずは、自己紹介から。

「今日でこの場所ともおさらば……か」

「あーうー……寂しくなるねえ。早苗、本当にいいのかい？」

「はい。私は、お2人の風祝《かぜはふり》ですから」

遙か昔から建っている神社を見上げ、わたし達3人は周りの光景を目に焼き付ける。ビルやら家やらが立ち並び、この町はすっかり緑が少なくなってしまった。そのことを少し悲しく思う反面、今まで住んできた場所故にここから“消える”ことを少し寂しく思う。

でも、それも仕方のないこと。これ以上この世界にいと、本当にわたし達は早苗を残して消えてしまうのだから。

妖怪や神様はこの世界ではすっかり空想のものとされ、神を敬う人間なんて殆どいやしない。もう、この世界に神はいらないのだろう。

雷や嵐、地震を神の怒りと恐れられたのも今は昔の話。科学で全てを解決し、自然に恐怖

しても神を恐れることなどなくなってしまった。事実、もう神に地震やら雷やらを起こす力は残っていないのだけれど。

だからわたし達は行くのだ。失われた力を取り戻すために……消えないために……家族を独りにさせないために。

「それにしても、あんたのそのあーだのうーだのの口癖、すっかり板についてきたね」「そりゃあ1500年以上も続けりゃあ板にもつくさ。この口癖は、わたしの大事な思い出だからね」

「思い出……ですか？ その口癖、昔からじゃなかったんですね」

「ああ、これは……わたしの大事な人の口癖さ。今はどこで何してるのかなあ」

「きつと『向こう』で元気にしてるさ。今頃、大好きなりんごでも食ってるんじゃないか？」

「あはは、そうかもね」

神奈子の言ったことが簡単に想像できてしまったので思わず笑ってしまう。そうだ、『向こう』に行けば、きつとあいつとも会えるんだ。いつの間にか居なくなっていた……あいつと。

全く、なんで居なくなってしまったのか……と考え、どう考えても昔に行った戦い……今では『諏訪大戦』なんて呼ばれているもののせいだと気づいてしまった当初は

思いつきり泣いたものだ。持ち物とかは何も持っていなかったから、居たという痕跡がなくて長い夢を見ていたんだと思った。でも、記憶は残っていたから……彼の存在を忘れないようにと願って“うーあー”を口癖にしたのだ。

ねえ、お前はわたしのことを覚えてるかな？ 本当に……“そつち”にいるのかな？ もし居たなら……。

また、一緒に居られるかな？

「さあ、行こうか早苗」

「はい」

わたし達の残り少ない“神力”と早苗の能力を借り、目の前の神社ごとわたし達を違う世界へと移動させていく。

そこは、妖怪と人間がいる世界。古き時代の色と匂いを残し、わたし達が消えずに済む楽園。

目指すは“幻想郷”。願うは早苗と神奈子とわたし……3人が過ごす安寧の日々。ただ、この願い《オモイ》が叶う《カタチになる》のならば……彼とも、共に暮らせませうように。

「ところで神奈子様。諏訪子様の大事な人って誰ですか？ 神様ですか？」

「ん？ いや、妖怪さ」

「よ、妖怪!？」

「そうだよ。私の大事な人は、青が特徴の子狐の妖怪」

その能力故に、神に愛され……そして神を愛した妖怪さ。

「見ましたか幽香。氷狐は3色を渡しましたよ。これは間違いなく、好きじゃない方を渡しましたね」

「何を言っているのかしら椛。これは間違いなく、美味しい方を渡したに決まってるじゃない」

「いいえ、好きじゃない方です」

「美味しい方よ」

「なんで椛はあんなにも真剣なんですか……たかが団子の好み」

「たかが団子の好み!! これはお互いの命をかけたまごうことなき聖戦！ それを

たかがなどと軽く見るなんて言語道断!!

そこになおりなさい!!」

「ひい!? ごめんなさい!!」

射命丸 文 転

それは、本当に突然の出来事だった。

「ここが幻想郷唯一の神社、博麗神社ですね？」

「そうだけど、あんた誰よ」

「私は現人神《あらひとがみ》の東風谷 早苗《こちや さなえ》と申します。突然ですが、この博麗神社……私達が信仰を得る為に譲って頂けませんか？」

私と巫女、氷狐がお茶と甘味を頬張っている昼下がりに、突然現れたこの緑色の長髪をした巫女服の少女は博麗の巫女に向かってそんなことを言ってきたのです。なんて命知らずな……と思ったと同時になんて面白そうな、と思ってしまうたのはブン屋の性でしょうか。

当然、見知らぬ誰かに神社を渡せ、なんて言われて頷く存在なんていないわけでした。

「いきなり現れていきなり神社をくれなんて……渡せるわけないでしょうが」

「やっぱりそうですか……ん？」

不意に、早苗と名乗った少女の目が団子を頬張っている氷狐の方を向いた。その視線に気づいたのか、氷狐の顔も彼女の方を向く。

少女は青い狐耳……まさか……などと呟いており、氷狐はなぜかすすんと鼻を鳴らしている。そして、氷狐が疑問の声を上げた。

「すーん……？」

「っ!!」

氷狐が誰かの名前らしきものを呟いた瞬間、少女が驚愕の表情を浮かべ……次の瞬間には氷狐を抱きしめていた。

その光景にしばし唾然とした私達だったが、一足先に我に帰った巫女が抱きついている少女に向かって手を伸ばす。

「な……にをしようかあんたは!」

しかしその手は少女に触れることなく空を切った。少女はどこへ……と疑問に思ったのも一瞬、巫女が空を見上げたので追うように私も空を見上げると、いつの間やら氷狐を抱きかかえたまま空に浮かんでいる少女の姿があった。

「すみませんが、この子連れて行きます! 返してほしかったら、神社を明け渡してくださいね!」

それだけを言い残し、少女……早苗は去っていった。隣で憤慨する巫女が本当に怖いのです。その恐怖を心の隅に置き、私はあの少女のことを考える。

あの人間は見たことがありませんし、神社明け渡し理由に「私達が信仰を得るため

“と言っていました。その言葉から察するに、あの少女は先日妖怪の山の頂上に突然現れた神社の関係者。

妖怪の山の住人総出で神社を警戒していますが、分かっているのはその神社には神が存在し、その神が山をよこせと言うから山の住人は殺気立っている。

しかし相手は外の世界からやってきたとはいえ神。妖怪である私達とは強さの桁が違う。追い返そうにも追い返せず、そもそも力づくで追い出そうなどと言う豪傑は天狗にもいない。保守的で慎重と言えば聞こえはいいけれど、何も行動しないのだから同じ天狗として情けなく思う。私も直接会う勇氣は無いけれど。

それにしても、あの少女はなぜ氷狐を誘拐したのやら。おかげで隣にいるお母さんか、らいつの間にか殺気が漏れています。誰か助けてください。

「ここにいましたか文様」

「あや、柎じゃないですか。どうしましたか?」

「天魔様から全天狗に命令が来しました。妖怪の山の守護をするようにと」

「あやや……天魔様からの命令では従う他ないですねえ」

その願いが通じたのか、神社に柎が来てくれました。が、持って来てくれたものはあまり喜ばしくないもの。

大天狗くらいから来る命令なら無視してもいいんですが、天魔様なら話は別。天魔様

は天狗の、妖怪の山の最も位の高いお方。縦社会である天狗の中で不良天狗の位置にいる私も、その天魔様からの命令には従わざるを得ません。

つまり、私は嫌々ながら山の守護へと向かわねばならなくなりました。これでは氷狐を探しに行く事など……いや、待てよ？ あの少女が山にある神社の関係者なら向かう先は間違いなく妖怪の山。ということは、私が山に戻れば監視という命題で氷狐の散策、ひいては救出が出来るということになります。

ならば、ここで私が山に戻るのには決して悪い話ではない……？

「分かりました。それでは巫女さん、私は山に戻りますね……って聞いてないですね」
「また巻き込まれた……あの巫女絶対許さないわ……この怒り全てぶつけてやるううう……」

怖っ。子供を攫われたお母さんの怨念怖っ。これもう怒気じゃなくて妖気か瘴気の類ですよ。まあ話を聞いていないならそれでもいいでしょう。

どうせ巫女もすぐに山に来るはず……その時までには私が氷狐を救い出し、その報酬として巫女さんには文々。新聞の購読者になって貰いましょう。巫女が購読者になれば、きつと人里でも購読者が増えるはず。という打算的な目的も持ち合わせつつ。

「あの……巫女はどうしたんですか？」

「可愛い息子さんが誘拐されたんでお怒りなんです。触らぬ神に祟りなし、行きます

よ椛」

「え、氷狐が誘拐!? どういうことですか文様……って速っ!」

目の前で友達が理由も分からず連れて行かれたんです……私が怒らない訳がない。

あの巫女……本当に神社を奪うだけのために氷狐を利用しようとしてるなら……とっ捕まえて鳥葬にしてやります。

そう思っていた時期が私にもありました。

「どきなさい文……邪魔するなら退治……殺すわよ」

「何で訂正したのに悪くなってるんですか!」

「霊夢だから仕方ないって。ほら、どいた方が身のためだぜ? マジで」

「本当にどいた方がいいですよ文様。怪我ですんだら良い方ですから」

山に戻って早々私と椛に言い渡されたのは侵入者の排除。山全体が殺気立ってる中で進入してくるなんてどこのバカだと内心呆れながらいざ現場に向かってみれば、そこにいたのは赤鬼と魔理沙、ボロボロの椛の三人。部分的に巫女服が黒く滲んでいるとか見えません。血の匂いなんてしません。

どきたいです。今すぐに道を空けると生存本能が囁いています。ですが、上司の命令には逆らえないのが天狗社会の悲しいところ。ここは気を強く持ち、あくまでも仕事を

しつっ……それとなく負けて巫女達に同行しましょう。主に私の命の為に。

「正直、私は貴方達の自由にさせてあげたいですが、そんな簡単に通しては他の天狗に示しがつきません。それに、上司の命令は絶対ですから、そこに私の意志が入ることもありません。なので、力づくでどうぞ。手加減してあげますから本気でかかってきなさい!!」

まあ手加減なんてするまでもなく今の巫女に勝てる気なんてしませんが、それでも私は妖怪、鴉天狗の射命丸 文。1000年の時を生きる妖怪としての矜持くらい、少しは持っています。なので、通してあげたいし逃げ出したいのは山々ですが、そう簡単に負けるつもりはありません。

幻想郷最速……その一端を魅せるくらいは、許してくださいよ？

「諏訪子様！ 諏訪子様ー!!」

「あーうー、早苗どうしたの？ そんなに慌てて……っ!?」

慌てたようにわたしの名前を呼ぶ早苗の声が聞こえたので神社の外に出てみると、わたしの目に永らく見ていなかった青が映った。

その青は、わたしをしつかりと見つめている。嗚呼、これは夢なのかな？ こっちに居ると思っていた。生きていると思っていた。けれど……もしかしたら……と心のどこかで思っていた。

早苗が抱きかかえていた青は早苗に下ろしてもらい、ゆつくりとした足取りでわたしの元へと歩み寄る。ゆつくりなのは、わたしが誰なのか覚えていないからかもしれない。

もし覚えていないなら、それも仕方ないかもしれない。何せ、離れてから数えるのも億劫なほどの年月が経ったのだから。

「ただ……もしも覚えてくれていたなら……わたしの名前を呼んでくれたなら。」

「すーん……う？」

「っ！ 氷狐!! ひこお!!」

「こうやって抱きしめて……泣くくらいはいいよね？」

「ぐすつ……ありがとう早苗。氷狐を連れてきてくれて」

「い、いえいえ」

たつぷり泣いた後に早苗にお礼を言くと、なぜか早苗は目を逸らしながら少しももつた。その様子は、言うなれば母親にいけないことをした現場を見られた子供の様。

その姿を見て、わたしの頭に1つの疑問が浮かんだ。それは、早苗が連れてくる前は氷狐はどこに居たのか？ というもの。

わたしはこの神社の中から出ていけないので幻想郷のことをよく知らない。神社の信仰は早苗がやる気を出していたし、わたしの見た目では侮られかねないという理由で天狗達へのこの場所に神社を構える許可を貰う交渉は神奈子が行っているから。わたしの仕事は家事全般だったりする。それでも家事は早苗よりも上手いのだ。

何が言いたいかと言うと、わたしは他の2人が何をしているのか知らないのだ。

「ねえ早苗。氷狐はどこから連れてきたの？」

「えーつと……それはですねえ……」

「すーん」

「ん？ なに？ 氷狐」

「あーうー、うーあーうー」

抱きしめたままの氷狐の頭を撫でながら、わたしは氷狐の言葉に耳を傾ける。最初は全く分からなかったけど、ある程度一緒に過ごす内に分かるようになったから驚きだ。

因みに、今氷狐はこう言っている。『れいむとあやといっしょにいたらいきなりつれ

てこられた”……いきなり？ れいむとあやというのが誰かは知らないけれど、この場合は友達、もしくは家族と考えられる。その2人が一緒に居るときにいきなり連れてこられたということは……。

「さーなーえー」

「ひゃい!!」

「いきなり連れてきたとはどういうことかな？ 早苗は氷狐を誘拐してきたということかな？」

「ご、ごめんなさい！ その子があまりにお2人から聞いた特徴と一致していたのでつい……」

ついで誘拐してきたと言うかこの風祝は。教育を間違ったかな……などと悲観しても時既に遅し。

氷狐と会えたことは嬉しいし、早苗の気持ちも……まあ分からなくはない。もしもわたくしが早苗の位置にいたら、きつと同じことをする。だけど、犯罪はいけません。

これが物とかだつたら返してきなさいと軽く言えるんだけど……氷狐は物じゃないし、れいむとあやとやらには悪いけれど、簡単に手放したい存在ではない。つまり、返す気もない。

「早苗。諏訪子。お客さんだ」

「お客さん？」

「もしかして……」

「ああ、博麗の巫女とやらだ。怒涛の勢いで天狗共を気にも留めず蹴散らしながら守矢神社《このぼしよ》に向かつて……ってなんで氷狐がここに？」

「かー！」

「神奈子だ、か・な・こ」

苦笑しながら氷狐の呼び方を訂正する神奈子。この光景も懐かしいね……諏訪大戦での舌戦の日以来かな。あの時は思わず吹き出してしまつてすんごい形相で神奈子に睨まれたつけ。顔が赤かったから怖くなかつたけど。

それにしても、神奈子は淡白というか……わたしなんか抱きついた挙句泣いちゃつたのに。もう少しリアクションがあつてもいいのに。

「それはともかく、なんで巫女が……つてもしかして」

「ああ、恐らく目的は氷狐だ。氷狐の名前と緑の巫女殺すつて呟いてるらしいな」ということはれいむ、もしくはあやという人物、または人外が博麗の巫女であり、早苗はその巫女の目の前で氷狐を攫ってきたと……やつてくれたね早苗。

多分信仰のことで博麗神社に行つたんだらうけど……今更何言つても遅いか。ここまで来てるつてことは巫女の氷狐に対する想いはかなりのものみたいだし、そんな巫女

相手に氷狐と一緒に暮らしたい、なんて願っても却下されるだろう。だけど……。

わたしの想いも……そんなに安っぽいもんじゃないんだよね。

「もうすぐ神社だな。鳥居が見えてきたし」

「氷狐を攫った緑の巫女殺す……待ってなさい緑髪いいいい……」

「だから怖いですって」

勇んで巫女たちに挑んだ私でしたが、見事に巫女に瞬殺されました。というか勝てる気が全くしなかった上に元々さほど勝つ気がなかったので巫女がスペルカードを発動した段階で被弾して負けました。

というかですね、単純に避けられませんでした。どんだけ霊力つき込んだんでくらい威力もありましたし……最後まで戦っていたらどうなっていたことか。主に私の体が。

因みに、先ほどまで居た椀は今はいません。巫女が余りに同僚たちを蹴散らすのでその救助と手当てをしに行きました。私は巫女たちの監視……という名目で巫女たちと同行しています。

「待ちなさい！」

神社も間近に迫った頃、鳥居に続く階段の上からつい数刻前に聞いた声が聞こえた。私達が動きを止め、声のした方を向いてみれば……そこにいたのは私の予想通り、東風谷 早苗と名乗り、氷狐を誘拐した張本人である少女がそこにいた。

「……というか今出てくるとかなんて命知らずな……ああ、この人は……現人神と言っていたからこの神は、が正しいでしょうか。この神は外から来たから巫女の危険性を知らないんですね。いやー、無知って怖いですねえ。」

「よく来てくださいました、博麗神社の巫女さん。神社を明け渡してくれる気になりましたか？」

「……」

「……巫女さん？ あのー……何かりアクションしてくれないと困るんですけど……」

「……ミツケタ」

「……はい？」

「見つけたぞ緑髪いいいい!! 家の子を返しなさいあああいい!!」

「ひいいいい!!」

「だからお前の子じゃないだろ」

「あの人本当に巫女ですか？ 邪神か何かの間違いでは？」

私と魔理沙の言葉など気にも留めずに少女に向かって弾幕を放ちながら距離を詰めていく巫女。それに対し、怯えの表情を浮かべながら逃げる少女。あー分かりますよその気持ち。滅茶苦茶怖いですよね、怒ってる巫女。それを笑いながら見ている魔理沙はどれだけ肝が据わってるんですか。

そうこうしている内に2人は妖怪の山から離れてどこか遠くへ飛んでいつてしまった。多分しばらくは帰って来ないでしょうね。少女の方はご愁傷様です。自業自得ですが。

「さて、私達は氷狐を助けに神社に行きましようか」

「お前、結構強かだよな」

「世渡り上手と言ってください」

という訳でやって来たのは山の頂上に突然現れた神社。ここにいるのはあの誘拐犯の仲間でもある神……正直、氷狐を取り返せるかどうかは絶望的。

しかも、ここには八坂 神奈子という神の他にもう一柱神がいるとの情報も入っている。人間と妖怪2人では神2柱を相手にするのは荷が重すぎるのが現実。

「おお……霊夢んとこの神社よりもなんか神々しいな。霊夢んとこもこれくらい神々しければ参杯客も増えるかもしれない」

「本人いないことをいいことに言いたい放題ですね。あまり気を抜かないで下さいよ？　ここに居るのは八坂 神奈子とかいう、有名な軍神だそうですから」

「生憎、神奈子はさつき出て行ったから留守だよ」

そんな声と共に神社の中から私達の前に姿を現したのは氷狐と、彼と手を繋いでいる……氷狐よりも少し大きいくらいの少女。

頭には大きな目玉のついた大きな帽子を被っており、紫色の服を着ている。その姿は幼く、氷狐と並び立っている姿を見れば姉弟のようにも見える。

しかし……その小さな体から溢れる霊力とも妖気とも違う力が彼女を人ではないと言っている。霊力とも妖気とも違う力……それは“神力”。信仰によってのみ得られ、

信仰の度合いによって強くなるその力は、文字通り神である証。

つまり、この少女こそがこの神社の2柱の内の謎とされていた1柱。紛れもなく神。その力は、妖怪や人間なんて軽く凌駕してしまう……。

「なあ。お前さ、あの誘拐犯の仲間？」

「早苗のことだね。仲間っていうか家族だよ」

「その家族が誘拐したそこにいる妖怪を心配しているお母さんみたいな奴が居るんだよ。返してくれないか？」

「本当は嫌だけど……いいよ。会おうと思えばいつでも会える……それだけでも幸せなことだしね」

神と戦いになるのではと危惧していた私ですが、どうやらその必要はなさそうです。ていうか神様相手になんつー不遜な態度でいらっしやるのかこの白黒は。

幸いにもこの神様は機嫌を悪くしている様子は見られないし、話は通じるし常識神っぽいので安心です。まるで氷狐のことを前から知っている、しばらく会えなかったというような言葉は少々思うところがありますが……。

「と言いたいところだけ……やっぱり離れてた分ずつと一緒に居たいというのが本音なんだ。返してほしかったら……やることは解るよね？」

「ああああ、やっぱりそんな上手い話はないですよねー」

「いいじゃん解りやすくして。幻想郷の住人なら、それくらいが丁度いいだろ？」
私はどちらかといえば平和主義なんですけど……すくーぷやら騒動やらも大好きですけどね。

それに、相手は子供みたいな姿をしているとは言っても神。何度も言うように、神と他の存在には明確で越えられない力の差というものがある。私と魔理沙の2人で同時に戦ったとしても、勝てる可能性は殆どない。

「ですが……」

「ああ。その勝てる可能性を作り出せるのがスペルカードルールさ」

「ふふっ、いいね。やっぱ子供は元気が一番さ。さあ、氷狐も一緒に遊ぼうか」

「うーん」

「はい!?!」

神は信じられないことを言ったかと思えば、手を繋いでいた氷狐を抱き上げて宙に浮かんだ。しかも氷狐も乗り気です。

そして私たちが制止の声をかける間もなく、神と氷狐から弾幕が飛んできた。当然、私たちは飛ぶことで回避し、また飛んできた弾幕を避けていく。

「ちよ、マジで氷狐も一緒にやるのか!?!」

「ん? 氷狐はダメなのかい? 仲間外れはいけないよー」

「うー！」

「いや、そうではなくてですね……氷狐も仲間外れにする気はないですから怒らないでください」

「だったら問題ないね？ 子供はみんな仲良く遊ぶもんさ」

「というか私は子供ではないのですけど……あーでも年齢的に考えると神の方が恐らく年上ですし、子供扱いされても仕方ないかもしれません。」

しかし、勝負ではなく遊びと言いましたか。それはつまり、私たちでは勝負にならないという遠回しの罵倒でしょうか？ それとも……本当にただの遊びなのでしょうか。

「さあ、楽しい楽しい『神遊び』の始まりさ。見事わたしたちに勝って、氷狐を取り返してみな！」

ともかく……今は全力で挑むとしましょうか。

ああ、楽しいな。こうして早苗と神奈子以外と遊ぶのは何時以来になるかな。

わたしを信仰してくれる人間達が減って、昔のように参杯客や神社の下に住んでいた人間達と子供の振りをして触れ合っていたのも今は昔。いつしか私を認識できる人間

は早苗以外にいなくなり、会話をする相手が早苗と神奈子だけになり……口にも顔にも出さなかつたけれど、わたしは寂しかった。

広かつたわたしの世界は酷く狭くなり、信仰が薄れて存在すらも危うくなった。寂しさと恐怖に、2人に内緒で泣いたこともある。

そんな私の楽しみは、たまに神社にやってくる子供たちの遊ぶ姿を見ることだった。遊ぶ姿が、私と……氷狐と一緒に遊んでいた光景を思い出させてくれるから。

それが今では、こうして氷狐と触れ合いながら子供たちとわたしが直接遊んでいる。こんなに……こんなに嬉しいことはないよ。

因みに、わたしは勝つ気は全くない。さつき言つた本音は本当だけど……その前に言つた言葉も偽りのない事実。遊び云々は、わたしのわがままみたいなものかな。

だつて……もう少し、氷狐と一緒にいたかつたし。それに、氷狐に教えてもらった弾幕ごつことやらもやってみたかつたしね。

「小さい上にすばしい！ でも、これならどうだ?！」

恋符 「マスタースパーク」

「あつはは！ すごいすごい！」

「うーっ」

「ちよつと魔理沙！ 氷狐に当たったらどうするんですか!？」

「大丈夫、気絶で済むはずだから！」

飛んできた極太のレーザーみたいなものを下に掻い潜るように避けてわたしと氷狐は楽しいという思いを乗せた言葉を放つ。いやー、幻想郷の人間はすごいね。まさかレーザーが飛んでくるとは思わなかったよ。

でも、あれは当たったら気絶では済まないでしょ、確実に。あれには絶対に当たらないようにしよう……主に氷狐のために。

「次は私です！ いっきますよー！」

「無双風神」

そう言うのと鴉天狗の少女は右に勢いよく動き、大量の弾幕を飛ばしてきた。確かに量が多いけど、これくらいなら当たる心配はない。

かと思いきや、まだ弾幕がこちらに向かつて飛んできている最中なのに少女は右から左へと動き、また大量に弾幕を飛ばしてきた。

さらにまた左から右へと動いて弾幕を、さらに左から右へ動いて弾幕を……その左右

への移動はどんどん速くなり、いつしか少女の姿は幾つかの線にしか見えなくなり、動く度に飛んでくる弾幕の量が増えてきた。確かに、弾幕の量が多い。線にしか見えないその速度は、風神の名を冠するに相応しいかもしれないね。

「だけど、私は本当の風神と戦ったことがあるんだ。そいつに比べれば君が風神の名を語るには……まあ速度だけなら許してあげようかな」

彼女の速度がどれだけ速くても、弾幕の速度は変わらない。量ばかり増えても、わたしには1つ足りとも当たらなかつた。

そうやって避け続けていると、忽然と大量の弾幕が姿を消した。多分、制限時間とやらが来たんだろうね。

「あやや、全然当たってないですね」

「ま、これでも神だからね。さてと……楽しかったよ、名前も知らぬ子供たち。これで終わらせようか」

そう言った後に、わたしは1枚の札……スペルカードを取り出す。これは、氷狐に説明を受けた後に急いで作った今わたしが持っている唯一のスペルカード。

時間は短かつたけど、氷狐と一緒に考えて作った……記念の1枚。

「わたしが持っているカードはこれ1枚。ルールに則り、これを被弾せずに避けきれば君らの勝ちだよ」

「いいぜ、どんなカードだって避けきってやるさ！」

「私もですよ。そして氷狐は返してもらいます」

「あはは、いいね。子供が元気が一番！ それじゃ、行ってみよう！」

神妖「かつて遊んだ鬼ごっこ」

子供たちに向かって飛んでいく、ぴよんぴよんと跳ねるような軌道を描く弾幕と、それを追いかけるように飛んでいく弾幕。この二つを1セットにして、飛ばす数をどんどん増やしていく。

跳ねる弾幕は、相手に向かって飛ぶホーミング弾。そして……。

「うわつと!? なんだこれ!?!」

「ず、ずいぶんと避けづらああああ!! かすった! かすりましたよ!?!」

後ろの弾は、〃跳ねる弾を追いかける〃弾。相手が跳ねる弾を避ける度、その避け方によつて軌道が変わる弾。不規則で面白いでしょう？

スペルカードは、名前と弾幕の軌道に意味があるように作るらしい。このスペルカードは、わたしの思い出の1つを弾幕として表したものだ。

跳ねるの弾は、昔、氷狐とした鬼ごっこの時の逃げる役のわたし。後ろの弾は、鬼の

役である氷狐。

私が彼と最初にした遊びが鬼ごっこだった。その時は、彼がいつまでたつてもわたしを捕まえられないから泣きそうになっていたことをよく覚えている。

ふと気がつけば、設定した制限時間が迫っていた。子供たちはまだ被弾していない……恐らく、このまま被弾せずに避けきり、わたしと氷狐は負けてしまうだろう。

不意に、抱きかかえている氷狐がわたしの首周りにぎゅつと抱きついてきた。その感覚で、わたしの心に懐かしさと嬉しさがこみ上げてくる。

ああ、思い出した。泣きそうになつたらわたしは立ち止まって……それを見た氷狐がわたし抱きついてきて。その時に、わたしは決まってこう言った。

「…………ふふつ。つかまつちやつた」

そして、制限時間が終わりを迎えた。

「あーうー、負けちゃつたよ神奈子」

「はいはい」

あの遊びからしばらく経つた夜、わたし達は神社の中にある居間で寛いでいた。勿

論、氷狐はここにはいない。

わたしと氷狐に勝った2人は名前を名乗った後、氷狐を連れて博麗の巫女を探しに去って行ってしまった。魔理沙がまた遊ぼうと言ってくれたことは、素直に嬉しかった。

あの時鴉天狗の長である天魔とやらに会いに行っていた神奈子は、交渉の末にこの場所に在住する許可を取ることができたらしい。その際に拳に赤い何かが滴っていたのは見なかったことにした。

早苗は、なんとか生きてこの場所に帰ってきた。ボロボロではあったけれど、重症というほどではなかったのは奇跡だと思う。便利だよねえ、早苗の『奇跡を起こす程度の能力』。

「負けたのに随分と明るいいじゃないか諏訪子。本当はわざと負けたんじゃないか?」
「あはは、遊びに手を抜くようなことはしないよ」

そう、わたしは遊びには手を抜いていない。ルールに則って遊び、魔理沙と文はそのルールの中でわたしに勝った。弾幕ごっこ、すごく楽しかったなあ……またやろう。

そうだ、今度は氷狐とやってみようか。それとも、また氷狐と一緒にやってみようか。きつと、とても楽しいに決まってるんだ。だから……。

「神奈子」

「うん？」

「幻想郷《ここ》はいいところだね」

「……ああ」

きつと明日も楽しくて……幸せな1日になるよね。

射命丸 文 結

氷狐の誘拐と妖怪の山の頂上に現れた神社、この2つの事件が終結してから数日後の今日、お祝いとしてこの博麗神社にて宴会が開かれていた。前回は参加できなかった分、今回はしっかり楽しもうと思います。

宴会に参加している面子は博麗の巫女に魔理沙、人形遣い、冥界に住むという亡霊に半人半霊、賢者御一行、伊吹 萃香様、紅魔館一向、迷いの竹林に住んでいるという蓬莱人2人と兎の耳を生やした少女、椛の友達だという白い髪の蓬莱人、里の守護者、私と椛、風見 幽香……そして、新参者であり、事件を起こした犯人の守矢神社の一行という豪華で胃が痛くなるような面子が参加していました。

あの事件の後、守矢神社は天魔様との「穏便」な交渉の結果、山の頂上に居を構える許可を得られたそうです。天魔様が許可を出したのなら、その部下である私達は従うしかないです。ただ、しばらく天魔様が物凄く落ち込んでいたお姿を晒していたのが気にはなりましたが……いえ、藪蛇はつつきたくないで忘れましょう。

因みに、なぜ私が伊吹 萃香様と彼女に対して様付けなのかと言うと……まだ鬼が地上にいたころ、妖怪の山の頂点が鬼であり、私たち天狗は天魔様を含めて鬼の部下だっ

たからです。いやあ、鬼の皆さまにはお世話になりました。いろんな意味で。

「い、以前はすみま」

「あ〃？」

「ひう！」

「いや、霊夢……早苗は謝ろうとしてんだから聞いてやれよ」

「あ〃!？」

「すみません。調子こいてすみません。だから睨まないで……ていうかなんで私睨ま
れてんの？」

尚、巫女の怒りは早苗さんに対してのみ収まっています。解決した次の日にはああや
やって謝りに来ていたようですが……聞いての通り、巫女は全く聞く耳を持たず威圧
し、その威圧に早苗さんは耐えられず萎縮してしまい、謝ることが出来ずにいるよう
です。魔理沙は自ら藪の中の蛇に会いにいつていたので知りません。背中に庇われてい
る早苗さんの魔理沙を見る目が熱っぽいか知りません。ついでに言う、他の魔法使
いや半人半霊、ウサミミ少女が早苗さんを羨ましそうに見ているのかも知りません。

「れーむ」

「なあに？ 氷狐」

「あーうー、め！」

ああ、そういうえば最近になつて私は氷狐の言葉がある程度理解出来るようになりました。なので、今彼が何を言ったのかも分かります。

彼は今、こう言いました。『ずっとおこつちやダメ!』と。激しく同意します。宴会の場ですつとあのように怒りを振りまかれては美味しいお酒も不味くなつてしまいません。他の方は我関せずという姿勢ですが……私もそういう姿勢で居たかったです。

「……」

「……」

「……氷狐が言うんじゃ仕方ないわね。いいわ、いつまで経つても怒りつぱなしつても疲れるし……許してあげるわよ」

「あ、ありがとうございます!」

「よかつたな早苗」

どうやらようやく早苗さんはお母さんに許してもらえた様子。これであの事件についてはもう全てわだかまりがなくなつたと言つても良いでしょう。幸い、守矢のお三方は他の幻想郷の住人とは良い関係を築けているようですし。

早苗さんは魔理沙や私、他の魔法使いや半人半霊、ウサミミ少女と友人関係ですし、八坂の神は賢者の式神や亡霊、萃香様等と一緒に飲み比べをしていますし、諏訪子様は……。

「氷狐ー！ 遊ぶよー！」

「うー！」

「やっと来たわね氷狐。子分は親分の傍にいないとダメでしょ！」

「はいはい……素直に寂しいと言えればいいのに」

「バカだから無理だよメデイスン」

という会話をしながら鬼ごっこを始める子供たち……因みに鬼は氷狐です。とまあ、あのように子供に混じって遊んでいます。神とはいえ見た目は子供、全く違和感がないです。周りの存在も微笑ましいモノを見るような暖かい目で子供たちを見て……いえ、1人だけ一緒に遊びたそうにしていますね。

あれは確か、紅魔館の当主、レミア・スカーレットでしたね。圧倒的な〴〵かりすま〴〵とやらで周辺の妖怪や妖精を手懐け、自身の力も幻想郷の最強の一角に位置すると聞いています……が、見る限りは素直になれない子供ですね。当主という肩書きがそうさせているのかもしれませんが。その隣にいる従者がなぜか肩を震わせていますが、気にしないことにします。

他の人妖たちは……巫女と賢者と……確か、永琳と名乗っていましたっけ？ それと里の守護者……この4人は、なにやら物凄い真剣な表情、尚且つ小声で話をしています。一体どんな話をしているのか気になりますが、私の本能が聞くなとガンガン叫んでいま

すので今回は従うことにしましょう。

風見 幽香は椀と、椀の友達だという妹紅という方、更にその方の友達だという輝夜という随分と美しい方と一緒に、彼女が咲かせた様々な花を見ながら団子を食べています。本当に仲が良いようですね。時折みたらし！ やら3色！ やらが聞こえるのは無視する方向で。ていうかまだ決着付いていないんですかその団子談義。他の2人があきれた顔をしていますよ。

魔理沙は先ほど言った面子に囲まれて楽しそうにお酒やら料理やらを口にしていきます。周りの存在が互いを睨み合っているのはツツコミを入れるべきでしょうか。

「お、早苗のから揚げ美味そうだな。もーらい」

「あ……」

「うん、美味い！」

「あの、それ……私の手作りなんです……」

「マジで？ 早苗って料理上手いんだな」

「いえ、そんな……えへへ」

(((新参者がああああ……)))

魔理沙と早苗さん以外の方の体から出る瘴気というか怒気というか、そんな感じのものが凄いです。4人よれば巫女に匹敵する勢いですね。それに気づかないのか、それと

も意図して無視しているのか、魔理沙は凄いと思います。早苗は勝ち誇った顔をしています。それが更に4人の神経を逆撫でしているのは言うまでもありませんね。

……あれ？ ひよつとして私だけ一人ぼっちですか？ 椀は風見 幽香たちと食べますし、魔理沙も早苗さんたちと一緒にですし、巫女も氷狐も……。うわ、私寂しい妖怪ですね。他の知り合いといえ、妖怪の山に住む天狗か河童くらい。その2人はこの宴会に来ていませんし、今から呼んでも……。多分来ないでしょうね。引きこもりと人見知りですし。

むう、これでは折角久しぶりに宴会に参加できたというのに楽しくありません。とは言っても椀のところに行く勇氣はありませんし、魔理沙の所に行くにあの怒気が私にまで降りかかってきそうですし、巫女のところは本能が拒否していますし、萃香様のところに行くなんてもつての外。鬼怖い。子供たちの中に入るのもちよつと……。

「ちよつと良いですか？」

「はー。」

もうレミリアさんのところに行ってみようかと思っていた私に声をかけてきたのは、紅魔館御一行の中に居た門番でした。予想外、というか参加していたことを忘れていた相手に話しかけられ、キョトンとしてしまった私は悪くないと思います。

さて、私はなぜこの方に声をかけられたのでしょうか。何か粗相をした、というわけ

でもなさそうですね……とそこまで考えたところでこの方が持つ2つの杯と徳利が目に入った。その私の視線に気づいたのだろう、目の前の方は見せ付けるようにそれらを少し高く持ち上げた。

「一緒に飲みませんか？」

「……喜んで」

やっぱり、宴会とは楽しいものですね。こうして他の方々のやりとりを肴に、ほとんど知らない相手と飲むのもいいものです。とは言っても、流石にお互いに自己紹介くらいはしましたが。

この方は紅 美鈴という名前だそうです、私の記憶通り紅魔館の門番をしている方でした。私に声をかけた理由は、守矢神社の一件で山に戻る途中の飛んでいた私を見かけたからだそうです……って飛んでる私を見かけたとかどんな視力と動体視力をしてるんですか。結構な距離と速度があつたはずなんですけど。

「文さんは新聞というモノを書いているんですね？ どういったものなんですか？」

「よくぞ聞いてくれました！ こちらが私の書いている文々。新聞です」

どこからともなく新聞を取り出して美鈴さんに渡す私。いつでもどこでも誰にでも

新聞の購読を勧誘できるように持ち歩いているのは当然です。美鈴さんは私の手から新聞を受け取り、開いて中に目を通し始めました。

こうして自分の書いた新聞を見ている人を見るのが、私は飛ぶ瞬間の次に好きだった。それが楽しげなモノだったらもつとこのだけけれど、生憎とその顔を見たことはない。

人間も、妖怪も、私の新聞を見て浮かべるのは苦笑いか嘲笑。面白くないと、こんなものかと口には出さなくとも伝わるそれは、私に酷く悔しい思いを抱かせた。

取材も撮影も執筆も勧誘も仕事、というよりも半ば趣味で行っていること。だからやっている間は楽しいし、書いたものを見てもらいたいし、面白いという言葉も欲しいけれども、その言葉は得られない。

……ああそうだ。私は、私が書いた新聞を読んでもらって……その人の笑顔が見たいんだ。びつくりさせたいとか、意趣返しをしたいとか、そんなことではないんだ。

ただ、面白いと思つて欲しい。いつの間にか、私はそんな純粋な想いを忘れて、面白ければ誇張とか何してもいいなんてことを思っていた。それで反応が芳しくなければ不貞腐れて、仲間内でひそひそとバカにされて、見返してやるなんて思つて……本当に、私は今まで何をしてきたのやら。

そう考えると、今更になつて美鈴さんの反応が怖くなりました。表情を伺う限り、文

面に集中しているようで無表情なので感情は読めませんが……この表情は今まで何度も見てきたもの。次に浮かぶのは苦笑か、それとも嘲笑か……。

やがて美鈴さんは読んでいた新聞をたたみ……。

「いやー、思わず見入ってしまった。文さんの新聞は面白いですね」

苦笑いでも嘲笑でもなく、彼女は笑ってそう言うて下さいました。その言葉をお世辞と取ってしまった私は、相当心が荒んでしまっているでしょう。

美鈴さんに渡した新聞は今回の事件とは何の関係もない、氷狐と寺小屋の子供たちが遊んでいる様子の写真と簡単な遊びの内容、甘味処の新作のお菓子とその写真、及び私が食べた感想などといった日常風景。そこにびっくりするようなくーぷはないし、見ようと思えばいつでも見られそうなものばかり。

今までの私の新聞に比べれば、そんなに面白い内容だとは思わない。確かに書いている時は楽しかったし、新聞として形にはした。これを人里の人たちに読んでもらおうともしたけれど、その前にあの事件が起きてしまったので今の今まで忘れていたのは内緒です。

「面白かった……ですか?」

「はい。私は普段、門の前から動かないのでこういう人里の日常風景とか気になっていたんですよ。それにこの甘味……美味しそうですね。かすていら……でしたっけ

？ 食べに行きたいなあ……」

そうか、私はよく見かけることでも、美鈴さんは門番だからあまり人里には来れないから見れないんですね。それなら、面白いと感じるのも分かります……そっか。私と美鈴さんは「違う」。感性が違うのは当然のこと。

今までの私は、自分が面白いことは他の存在も面白いと思うに違いないと考えていましたが……それ自体が間違い。感性や思いは千差万別、違うのが当然。でしたら、私が書くべき記事の内容は私が面白い、ではなく万人が面白いと思えるような記事。

試しに、暫く人里のちよつとしたことや妖怪の山の風景、雲の流れで天気の予測でもしてそれを記事にしてみましようか。私としては少し物足りませんが、記事を書くこと自体は楽しいですし……もしもこうすることで面白いと言ってもらえるなら……笑顔を見ることが出来るなら。

「文さん」

「なんですか？」

「また、読ませてもらっても良いですか？ 出来れば、門のところにいる私の元にまで持ってきて欲しいんですが……」

「……いいですよ。そうなると、美鈴さんは文々。新聞の最初の購読者になりますね。書きあがり次第、お届けにあがりますよ」

「ありがとうございます♪」

それはきつと……凄く幸せなことだと想うから。

「うー！」

「甘い、甘いわ氷狐！　自分が親分に勝とうなんて野いちごを凍らせて食べるくらい

甘いわ！」

「むしろ冷たくない？　ていうか美味しいの？　それ」

「克蘭ベリーソースとどっちが甘いかな」

ああ、楽しいな。こうして子供に混じって遊ぶのは、本当に何千年振りになるのかな。人間の子供じゃないのは少し残念だけど、それは今は過ぎた願い。人里という場所には学校……寺小屋があるみたいだし、今度そこに行つて、あわよくば子供たちと遊んでみようかな。

因みに、今は鬼ごつこの真つ最中。鬼は氷狐だけど、もう少しのところで逃れられてしまうので未だに鬼が変わることはない。氷の羽が生えている女の子……チルノは親分だ子分だと言っているけれど、どういうことだろう？

外の世界で言うゴスロリ風の服を来た女の子はメデイスンというらしい。人形の妖怪らしく、氷狐の友達らしい。それを聞いて安心した私は、心境的には氷狐のお母さん。日傘を差した枯れ枝に寶石が付いているような羽の女の子はフランというらしい。こつそりと彼女に聞いた話では、氷狐を自分好みに育て上げようとしているとか。私も参加したいと言うと、フランは快く了承してくれた。

もうこんなにわたしにも友達が出来た。それはとても嬉しいことで……とても幸せなこと。何よりも……。

「…………ぐすつ」

「あ、やば」

「もう！ チルノがやりすぎるから……」

「あ、あたいだけのせいじゃないでしょ!？」

「自分が悪いって意識はあるんだね」

そんなことを考えていると、不意に氷狐の目に涙が溜まり始めた。その姿がどうにも遠い思い出の中の彼と重なって……わたしは彼のすぐ近くまで行って足を止めた。

そうすると、氷狐はわたしに走り寄ってきて……勢い良く抱きついてきた。その行動も、この暖かさも、全てがわたしの思い出と変わりのないもので。

「う……………」

「ふふ、捕まっちゃった」

こうしてまた彼と触れ合えるということが、どうしようもなく幸せなことだつて想つた。

さて、捕まっちゃったからには次はわたしが鬼の役。わたしが捕まった後は、いつも逃げ切れるか切れないかの力で氷狐と遊んでいたけれど……幸いにも、今回は生きのいい子供たちがいる。少しくらい本気をだしても大丈夫かな。

「さて、次はわたしが鬼だよ。逃げないと捕まえるよ！」

「ふん！ 蛙の神様なんかにあたいが捕まるもんか！」

「神様を挑発すんなこのバカ!!」

「氷狐ー、チルノとメデイスンがバカやつてる今のうちに逃げるよ」

「うー♪」

ふふふ、今のは少しだけカチンときたかな。そういえばチルノは蛙を凍らせて遊んでいると聞いたし、ちよつとお仕置きが必要みたいだね。因みに、蛙云々の情報提供は文だよ。

そうと決まれば即行動。かつて鬼ごっこで、いつの間にか一緒に遊んでいることから“謎の子鬼”と呼ばれたわたしの実力……見せ付けてあげようかな。

「なんで氷狐がわたしの大切な人なのか？」

「はい」

宴会の同日の夜、早苗がそんなことを聞いてきた。確かに、ちゃんと説明したことはなかったかな。

彼と出会ったのは、まだわたしが守矢ではなく、「洩矢」の神として奉られていた頃。最初は妖怪が村の中に入ってきたことに対して警戒していたし、危険なら滅しようとも考えたっけ。

だけど、彼は驚くことに村人から愛されていた。危険どころか無害な妖怪だった。これは面白い、こんな妖怪は見たことがない。そう思つて、気まぐれに会つてみようと思つて行動したのが最初の出会い。

神であるわたしと対峙しても、彼は怯えるどころかキョトンとして首を傾げていたっけ。その仕草が見た目相応に可愛らしくて……思えば、この時からわたしは氷狐という妖怪に対して警戒心をなくし、好意的に思い始めたのかもしれない。

いつの頃からか、わたしは村人と仲良くする氷狐が羨ましく思つた。神として存在するわたしの姿は幼い。その為、こんな見た目では信仰してもらえなくなるかもしれないという恐怖から人前には決して出ないようになっていた。それが功を制してか、それとも祟り神である故にか、信仰は薄れることはなく、わたしは諏訪の神であり続けた。祟ら

れたくないという恐怖心で、人の心を縛って。

なのに、恐怖されるはずの存在である妖怪の氷狐は村人と仲良くしているのだ。彼に対して怒りを覚えたのは、これが最初で最後だった。

そんなわたしを、氷狐は手を引いて外へと連れ出した。抵抗してもなぜか力は使えなかったし、普段からは信じられないような腕力を発揮していたからそのまま付いていくしかなかったつけ……今考えれば、完全に能力を使っているよね。

結果、人前に姿を現したことの無いわたしは氷狐の友達の間人として村人と触れあい、時に子供たちと遊び、時においしいちゃんおばあちゃんとのほのぼのしたりしていた。神らしくないと思うけど、とても楽しくて……幸せだったなあ。

「それが切欠と言えば切欠かな……わたしに知らなかった世界を教えてください……わたしは彼を大好きになったのは」

「そんなことが……」

まあわたしは神だつてことはその後をやってきた神奈子との戦い……諏訪大戦で村人にはばれちゃつたし、氷狐も居なくなつてしまつただけ……最初はわたしの国と信仰を奪いに来た神奈子とも、今はこうして一つ屋根の下で同じ釜の飯を食べてるんだから月日つてのは凄いいよねえ。

「さ、もういいでしょ。いい子は寝る時間だよ」

「もう、諏訪子様も神奈子様も私を子ども扱いするんですから」

「事実、早苗は子供でしょ？」

かつてわたしは、早苗の先祖である女性との間で神力を使つて子を宿した。つまり、早苗とわたしは本当に血がつながっていることになる。早苗はこのことを知らないけれどね。そしてもう一つ、早苗にも、神奈子にすら内緒にしていることがある。

早苗の能力は「奇跡を起こす程度の能力」。酷く曖昧だけど、奇跡的なことなら「ほぼなんでも出来る」能力。いくら早苗が現人神とはいえ体のベースは人間のもの……ヒトには行き過ぎた能力だ。

だけど、この能力を得ることが出来たのはある意味で必然。だって早苗の体にはわたしの他にもう一つ……かなり薄まってしまったけれど、人外の血が流れているのだから。

一度だけ……たった一度だけ、わたしは「彼」の精を彼が寝ている間に中に受けたことがある。勿論彼は知らないし、了承も得てはいないけれど……理由は……わたしだつて、神とはいえ女の子だし。その精を神力で体内に蓄えておき、子を宿すときに少しだけ混ぜた。反省も後悔もしていない。

「早く寝ないと明日起きれないよ。明日は巫女と仲良くなるために遊びに行くんでしょ？」

「そうでした！ それではおやすみなさい、諏訪子様」

「うん、おやすみ」

自分の部屋に向かったのであろう早苗の背中を見送り、わたしはどこに住んでいるかも知らない氷狐の顔を思い浮かべながら夜空を見上げる。排気ガスなどで淀んでしまっている外の世界とは全く違う星の輝きに、昔を思い浮かべてついつい口元が緩んでしまう。

この空の下に、彼はいるのだ。いつでも会える。いつでも触れ合える。声を聞ける。話が出る。一緒に遊べる。同じ時を過ごす事が出来る。今日遊んだだけでは全然足りない。もつともつと、話したいこともやりたいこともしたいことも沢山、沢山あるんだ。

「おやすみ、氷狐」

今ここにわたしがいることが……君と繋がっているという確かな奇跡。

「おはようございます美鈴さん。早速持つてきましたよ」

「わあ、ありがとうございます文さん。早速読んでも？」

「どうぞどうぞ。あ、それから……これ、一緒に食べませんか？」

「それはかすていら!? いいんですか？」

「ええ、私と美鈴さんはその……ゆ、友人ですから」

「……あ、ありがとうございます」

（美鈴にも春が来たのね……）

子狐幻想記 起

【氷狐《ひこ》】

彼は子狐の妖怪であり、現在は八雲 紫の計らいで八雲家に住んでいる。

容姿はうなじが見えるくらいに長さの青い短髪で頭には青い毛並みの狐の耳、お尻からは同じ毛色の大きな尻尾が生えている。瞳の色は青、というよりも「蒼」というべき色合い。見た目は3〜5歳の子供で服装は特に決まっていない。着物やら浴衣やら紫とお揃いの服やら様々である。

その能力は「思考（オモイ）を現実（カタチ）にする程度の能力」。使うためには一切の混じり気のない純粹な思考が必要であり、思考次第では「ほぼ何でも出来る」能力である。ただし、無から有は生み出せない。他人の思考を現実にすることも出来るが、それには上記の条件を満たしつつ彼の体に密着する必要がある。また、現実にしたものに過程は存在しない。例を挙げるなら、能力でリングを真つ二つにした場合、「どうやって」真つ二つにしたのかが分からないという状態になる。

妖力の総量は小妖怪ほどしかなく、空もほんの少ししか飛べない。が、その実年齢は2千万を超えるという真の意味での幻想郷最古の妖怪。

うーやあーなどの拙く幼い言動しか出来ず、思考力も子供ほどにしかない。リンゴや甘味、果実酒など甘いものが好物。お風呂は大嫌いな様子。家事は紫以上には出来る。実は大人の階段を上らされていた、実は遠い子孫が出来ていた、現在進行形で逆光源氏計画を進められている、彼の保護者になりたい存在が日夜激闘を繰り広げていたりなかつたりなど本人の知らぬところで色々と計略されている。

今回のお話は、この作品の主人公……氷狐を中心に織り成す、ほのぼのとしながら過去としていく……そんなお話である。

ぴくん、と青い耳が動いたことを合図に氷狐は目を覚ました。閉め切っている障子越しに少しだけ入る朝日を少し眩しく思いながら片目を擦り、彼はまだ薄暗い部屋の中を見回す。見回した後は軽く深呼吸して畳のいい匂いと共に隣から香る甘い匂いを体に入れ、隣から聞こえる寝息を立てている妖怪へと顔を向ける。

そこにいるのはこの家の主であり、幻想郷の賢者の異名を持つ八雲 紫。無防備に眠っている姿を見ることが出来るのは、幻想郷の中でも氷狐か従者の藍くらいなものだろう。甘い匂いも、彼女から香るものだ。

眠っている紫を見た氷狐は自らの唇に立てた人差し指を持って行き、誰にでもなくし……つと呟きながら紫を起こさぬように布団から出る。そのまま寝巻きのまま静かに閉めていた障子を開き、部屋から出てゆつくりと閉めた。

なるべく足音を立てぬように廊下を歩き、目指すは台所。歩く度に霊夢から貰った赤い首飾りがチャラチャラと鳴り、その音を楽しんでいる内に目的地に辿り着いた。

「うー」

「ん？ ああ、おはよう氷狐。いつも早いな。おいで？ 顔を洗ってあげよう」

「あーうー♪」

そこに入れば、いつも同じ狐の妖怪である八雲 藍がいる。藍が眠そうに目を擦っている氷狐を見れば、いつも苦笑を浮かべて台所で顔を洗ってくれる。そうしてさっぱりした氷狐が次に向かう先は藍と、藍の式神である橙の部屋。

静かに障子を開けて中に入ってみれば、そこにいるのは未だに眠っている橙。この橙を起こすのが、氷狐の最初のお仕事である。

「ちえん。あーうー」

「むにや……」

「うーうー」

「にやむにや……？ あ……ひこ〜」

ゆさゆさと橙の体を揺ること13秒。ようやく目を覚ました橙は氷狐の姿を確認すると抱きついてきた。しかし、彼は慌てない。だつていつものことだから……そして子供だから。抱きついてきた橙をそのままうんせうんせと布団から引き摺り出し、その後は予め用意していた桶の中に入っている水を片手で掬って藍がしてくれたように橙の顔を洗う。手が小さいので水をあまり多く掬えないが。

それでも目を覚ますには充分だつたらしく、橙は氷狐から離れて自分で顔を洗い始める。数回洗った後に氷狐からいつの間にか持つていた外の世界産のタオルを受け取り、水をふき取ると本日最初の笑顔を浮かべた。

「おはよー氷狐ー♪」

「うー、ちえん♪」

挨拶を済ませれ2人は仲良く台所へと向かう。その目的は、橙が愛する主に朝の挨拶をするため。それから……。

「藍様！ おはようございます♪」

「おはよう橙。氷狐も、橙を起こしてくれてありがとう。それじゃあ2人も、始めようか」

「はいっ！」

「うー！」

今日の朝ごはんを、3人仲良く作るためだ。

「行つてらつしやい氷狐」

「あーうー」

紫が起きて4人で朝ごはんを食べ、服を寝巻きから着替えれば、後はそれぞれが自由に過ごすのが八雲家の日常。氷狐も紫にスキマを開いてもらい、妖怪の山とある場所に足を運ぶ。これも、ほぼ毎日行われていることだ。

とある場所、というのは白狼天狗の犬走 椛が巡回している範囲内のどこか。目印は特になく、氷狐も紫も感覚的にこの場所を覚えていて。まあ、それは……今日の前にいる椛にも言えることではあるが。

「おはよう氷狐。今日も早いな」

「もみじ、あーうー。うーうー」

「ああ、それでは行こうか。離れるなよ」

「うー♪」

2言3言会話した程度で話を切り上げ、椛は氷狐と共に歩き始める。理由は、人里の八百屋に売るための山の幸を探すためだ。空を飛ばないのは氷狐があまり飛ばない、山の幸は基本的に地面の近くにあるためである。

はぐれないようにと2人は手を繋ぎ、氷狐の感覚を頼りに山菜やら果物やらを収穫していく。1時間もすれば氷狐の両手いっぱい集まり、椀が持つてきていたカゴの中に詰める。カゴの中は半分ほどしか埋まっていないが、これで十分に一日の糧を得ることが出来る。それに、あまり多く採ってしまったては山の住人が困ってしまうのでほどほどにしておかないといけない。

「こんなものか。氷狐、そろそろ行くうか」

「あーうー」

頃合を見て椀がそう提案し、彼が領いたことを確認した後、彼を抱き上げた椀は空に上がる。その際に自分の周囲を「千里先を見通す程度の能力」を使って確認する。周囲に自分の警備範囲内に近づく他の天狗や侵入者がいないことを確認し、彼女は人里の方向へと飛んだ。尚、カゴは氷狐が大事に抱きかかえている。

人里に着けば、最初に出会うのは門番の男性。何の能力も持たない人間の身でありながら長年里の門番を続けている彼は氷狐と椀の姿を確認すれば柔らかな笑みを浮かべ、いつもの様に門を開けた。

開いた門の先に見えるのは里に住む人、人、人。普段は妖怪に恐怖している人間も、それが慣れ親しんだ妖怪なら笑顔を浮かべる。以前はどこか距離を置かれていた椀だったが、ここ暫く氷狐と、あるいは里の人間から信頼されている妹紅と一緒に里に来るよ

うになって以来はそのようなこともなくなっていた。

下ろされた氷狐と椀が向かう先は、いつもの八百屋。その店主は御年60を超える女性で、店を一人で切り盛りしている。この店に通う人外は殆どが幼い容姿をしているため、大抵は孫のように、或いは子供のように扱われることが多い。無論、氷狐はその筆頭である。

「あーうー」

「店主。いるか？」

「おや、子狐ちゃんに椀ちゃん。いらつしやい」

人の良さそうな笑みを浮かべ、店主は2人を歓迎する。そこからはいつものように採ってきた物を売り、その分の資金を得る。見た目が子供だからと言って渡す資金を減らしたりしないのが、この店のいいところだ。

資金を得た氷狐と椀が向かう先は、この店のすぐ近くにある甘味処。最近では新作の甘味が文々。新聞で紹介され、売り上げが増えたと専らの噂である。それと同時に、文々。新聞の購読者が増えたとの噂も出ているが、真実かどうかは定かではない。

「うーあー」

「あら、子狐ちゃんに椀さん。お団子ですか？」

「ああ、いつものを3つ頼む」

「うーあーうー」

「はい、みたらし団子3つと3色とみたらし1つずつ……それから、3色3つです
ね？」

「頼むわね」

「かしこまりましたー♪」

2人の隣には、いつの間にか風見 幽香の姿があつた。それに特に驚いた様子もなく、女性店員は店の中へと消えていった。この光景は、別に珍しいことではなかった。

幻想郷最強の一角、フラワーマスターの風見 幽香。かつては大妖怪と人間人外問わずに恐れられていた彼女も氷狐、権と過ごしているうちに里の人間に受け入れられた存在だ。今では甘味処で聖戦と称した幽香と権による2人の団子談義は名物になりつつあつた。最近ではそれぞれの間が増えているとかいないとか。

「出ましたね幽香……今日こそ決着をつけてやります」

「言うじやない権……では決着をつけましょうか」

「みたらし（3色）と3色（みたらし）……どちらが至高か！」

そんな2人を楽しそうに見ているのはやはりと言うか氷狐。基本的にリンゴや甘い

ものが好きな彼はどちらが上、という話には加わらない。自分の好きなもの以外は どうでもいいという子供心があるから。

彼の頭では、2人は仲がいいな—くらいの緩い思考しかされていないだろう。出された団子をそつちのけで語り合っている2人を見ながら、自分はマイペースにみたらし団子を美味しそうに頬張っている。その姿は、見るものが和むほどに愛らしい。

みたらしを食べ終え、残りの3色団子に向かって手を伸ばす。その時になって現れ、彼が手にした団子を搔つ攫つていくのが……自称普通の魔法使い、霧雨 魔理沙である。

「もーらい」

「う!? まーさー! あーうー!」

「そんなに怒るなよ氷狐。いつものことだろ?」

「そうね、いつものことよね」

怒る氷狐に対し、笑いながら奪った団子を口へ運ぼうとする魔理沙の手がピタリと止まった。その顔は青ざめ、冷や汗を流し、恐怖を感じているのか震えている。

そして恐る恐る後ろを振り返ってみると、そこにいたのは……素敵な楽園の巫女、子狐のお母さん、博麗の巫女こと博麗 霊夢の姿。首には氷狐とは色違いの青い首飾りがある。

「ひいっ！　○イオ!!」

「それはレミアんとこのメイドでしょうが。氷狐の盗るなって何度言えばああああ!!」

霊符「夢想封印」

「……あーうー」

怒っていた氷狐も、霊夢の攻撃を受けた魔理沙を見て思わず苦笑いを浮かべる。魔理沙が来て、魔理沙が氷狐の団子を盗って、霊夢が来て、霊夢が魔理沙をお仕置きする……これらも団子談義と並ぶ甘味処の名物だった。尚、この程度では団子談義は止まらないので現在も続いている。

黒焦げになって地面に横たわる魔理沙をわざわざ踏みつけ、霊夢はいつの間にか奪い返したのか3色団子を氷狐へと手渡す。なぜ団子が無傷なのかは突っ込んではいけない。

「氷狐も油断しちゃだめよ？　魔理沙が来たらとりあえず噛み付きなさい。それから、知らない人と妖怪には付いていけないこと。お菓子とかも貰っちゃだめよ？　それから……」

このように霊夢が母親化するのも、もうほぼ毎日あることだった。氷狐の朝は、ドタ

バタとしていて退屈することはないのだ。

それに、彼自身はこんな騒動は大好きである。それは、その騒動の中に自分の好きな存在が入るから。自分の傍には、大好きな存在がいつもいるから。なので、例えば霊夢が少し説教のような話をしていたとしても。

「分かった？ 氷狐」

「あーう♪」

元氣良く、返事を1つ。

この後は博麗神社で霊夢と復活した魔理沙と共に昼食を食べ、2人と共に縁側で日向ぼっこをしつつ仲良くお昼寝。

夕方ごろに迎えに来た紫に起こされ、少し不機嫌になった霊夢とそんな彼女を見てニヤニヤしている魔理沙に見送られながら、彼は紫と共に八雲家に帰っていく。その後、藍と橙と共に夕食の用意をし、食べた後は無理やり2人と一緒に風呂に入る。

入った後は紫と同じ布団に入り、その一日を終え……楽しい楽しい夢を見る。そして、次の1日を迎える。

それが氷狐の基本的な、ほのぼのとした日常である。

「みたらしです！」

「3色よ！」

「権一、こんな時間まで持ち場を離れるなんてあなたらしくな……ああ、またですか」

「文様、みたらしですよね!？」

「文、3色よね!？」

「わ、私を巻き込まないでください！」

子狐幻想記 承

「ゆーこ、うー!」

「こんにちは幽々子」

「いらっしやい紫、氷狐くん」

よく晴れた昼下がりの空の上。昼夜問わず暗い空の広がる冥界にある大きな屋敷に、氷狐と八雲 紫、屋敷の主である西行寺 幽々子の3人はいた。今まで触れることはなかったが、氷狐が八雲家に住むようになってから彼は紫と共にたまにこうして西行寺の屋敷を訪れる。最も、頻度はそれほど高くはないが。

「お庭番のあの子の姿が見えないわね?」

「妖夢ならあのおつかいに出かけているわ。さつき食べたお昼だけじゃ足りなくてねえ」

「相変わらず大食漢ね……」

「こんな美人に向かって漢なんて失礼しちゃうわ」

「大食いっつってんのよ食いしん坊」

あらあら、というどこぞの奥様風に手を頬に当てながらニコニコとしている幽々子

と、対照的に疲れたような顔で額に手を当てる紫。以前は逆の立場であつた2人だが、こうしてボケとツツコミの役割が変わるのは彼女たちにとつての日常である。

そんな彼女たちを、氷狐はいつも楽しそうに見ていた。友人、親友、悪友、ママ友なんて言葉が似合いそうな2人の会話は、見ているだけで面白いのかもしれない。もしくは、彼は単純に仲良しの存在を見ていることが楽しいのかもしれない。

「幽々子様ー、只今帰りましたー……あ、紫様に氷狐。こんにちは」

「お帰りなさい妖夢」

「お帰り妖夢。お邪魔してるわよ」

「よーむ、うーっ」

やがて、おつかいに出ていたという魂魄。妖夢が買い物袋を引っさげて帰ってきた。大量に食材の入った買い物袋は両手にそれぞれ7つずつといかにも重そうではあるが彼女の顔は至つて涼しげだ。半人半霊、彼女も立派な人外である。

彼女が帰ってくれば、始まるのは1度中断されたという西行寺家の昼食。まだお昼ご飯を食べていなかったという紫と氷狐も同伴に預かり、4人で妖夢の作る昼食を平らげていった。大量に買ってきたはずの食材の半分はこの昼食で消えうせ、消えた内の8割は幽々子の胃袋の中に消えていったのは言うまでもないことだろう。なぜ亡霊が飯を食えるのだ、なんてツツコンではいけない。非常識が常識なのが幻想郷である。

その日、紫と幽々子の2人は平凡な日常会話を、氷狐は紫の膝の上でお昼寝を、妖夢はお庭番の仕事や家事、剣術の稽古などをして1日を終えた。途中、お腹がすいたので氷狐の尻尾に噛み付こうとした幽々子に紫が割と本気の弾幕をぶち込むという事件が起きたが、それでも無事に1日を終えた。終えたつたら終えた。

とある日、氷狐は伊吹 萃香と共に縁側で酒を飲んでいた。こうなつた経緯は、八雲家によつてきた萃香を氷狐が出迎え、珍しく他の八雲家の住人がいなかった為である。氷狐、初めてかもしれないお留守番。

無論、酒呑童子である彼女の出す酒が果実酒のような甘いものの訳がなく、度数の高いそれを飲んでしまった彼は今、顔を真っ赤にしてふらふらと体を揺らし、くびくびと酒を飲んでいる。完全に酔っ払っていた。

「あちやー……こりや見つかつたら霊夢か紫に殺されるかな？」

「ふゆ………」

声なのか鳴き声なのかも分からないような声を出す氷狐に目を向け、冷や汗をかいていた萃香の酒気が一瞬飛んだ。

着崩れた着物にとろんとしてうつすらと潤んだ瞳、口元からはだらしなく酒が垂れており、その姿は子供でオスだというのにも関わらず、妙な色気を感じさせる。しかも子

供を酔わせているという背徳感が彼女の背中を駆け抜け、ゾクゾクとした言い知れない快感に体を奮わせる。

(つて遊郭に来たおっさんか私は)

なんて冗談を頭に思い浮かべ、家主と紅白の母親に見られたら間違いなく殺されるであろう未来を想像した彼女はすぐさま着崩れた着物を直し、無理やりに寝かしつけるべく行動を起こす。

「さあ氷狐、ねんねしようなー。主に私のために」

「やー……」

「やーじゃなくて。お前べろべろに酔ってるし寝たほうがいいって。私が酔わせて襲ってるように見られでもしたら死ぬから。冗談抜きで死ぬから。私がふあっげぶう!!」

寝かしつけるために両手を押さえ込み、廊下に押し倒す萃香。その行動だけを見れば、どう考えても変態である。しかしながら実態は子供同士のスキンシップにしか見えないのはその幼い姿故か。どっちも1000才を軽く上回っているのに。

そんな感じで頑張ること数秒、唐突に彼女の頭に何かがぶつかった。あまりの質量と激痛から鬼であるにも関わらず意識を失う寸前の萃香が見たものは……えげつない位の霊力の籠った霊弾と霊力を纏った矢。

(……)これは靈夢と医者(……)

母の愛は、時に空間すら越える。距離的な意味で。

後に帰ってきた藍と橙が見たものは……先に帰ってきていた紫が頭から血を流して倒れている鬼にトドメを刺そうとしている姿と、それを必死に止めている氷狐の姿だったという。

その日、氷狐は迷いの竹林にある永遠亭に来ていた。勿論能力を使って。

彼が来ることで一番喜ぶのは、この永遠亭で医者をしている八意 永琳。遙か昔に永い時間会えなかったということもあり、彼に対する愛情は幻想郷でも1、2、3、4、5を争うことだろう。

尚、この永遠亭には永琳、蓬莱山 輝夜、鈴仙・優曇華院・イナバの他に因幡 てゐ《いなば てゐ》という兎の妖怪がいるが、この妖怪と氷狐は会ったことがない。その理由は、彼女が悪戯好きであることが上げられ、永琳が氷狐が来ている間は頑丈で頑強でよくわからないモノで作り上げられた檻に閉じ込めているからである。哀れ兎。

「いい天気ねえ」

「あーうー♪」

氷狐が来たからと言って何か特別なことをするわけではない。買ってあつた甘味と

お茶を出し、ただ一緒に甘味を食べたり、日向ぼっこをしたり、永遠亭の周りを散歩したり、一緒にお昼寝をしたり。

永い時を共に過ごせなかった永琳にとっては、これだけでも充分に幸せなことだった。最初の友達で大事な家族……そんな存在だからこそ、こうした日常が何よりも幸せなのだ。

最も、本音では共に暮らしたいと思っっているであろうが……博霊 霊夢と紫、洩矢 諏訪子がそう簡単に許すはずもないので今は空想にしかならないが。人里の守護者？ 実力が違いすぎて話にならないし話を聞く必要がない。

そんなことを考え、不意に目の前の甘味を美味しそうに頬張っている愛しい子狐に目を向ける。それだけで彼女は幸福感に浸れるし、それだけで充実感を得られる。何も焦ることはない。お互いに時間は無限にあると言える存在。いつかまた、共に暮らせる日は来るのだ。

「それを食べたらお昼寝しましょうか」
「うーあーうー♪」

今はただ、この日常が愛おしい。

その日、氷狐は紅魔館にいた。

「男女の営みというのはね、うんたらかんたら」

「ふむふむ」

「にやー？」

「いとなみってなんだ？」

「ちよつと黙っててチルノ。聞こえないから」

「うー？」

そしてフランドール・スカーレット、橙、チルノ、メデイスン・メランコリーらと共に諏訪子から性教育を受けていた。最初は仲良く紅魔館の中で遊んでいたはずなのにどうしてこうなった。

真剣に聞き入っているのはフランとメデイスンの2人で他の3人はよくわかっていない様子。分かれても困るが。諏訪子もなぜ聞かせているのか。その理由は大体こんな感じである。

紅魔館でかくれんぼをして遊んでいた6人の内、諏訪子とフランが図書館に隠れて艶本……俗に言う18禁の本を偶然にも見つけてしまった。普通なら慌てるなり顔を赤くしつつも興味本位で読むなりその他諸々……だと思われるがそこは氷狐を色んな意味で育てようとしている2人。かくれんぼの最中にも関わらず氷狐を見つけ出し、思いつきりその場で性教育を始めたのだ。そこに他の3人も入って現在の勉強会の出来

上がりである。因みに鬼はチルノだった。

しかし、その勉強会は唐突に終わる。諏訪子達の目の前で忽然と氷狐と橙の姿が消えた……というか足元に現れた気味の悪い空間に繋がっている穴に落ちたからだ。その穴から変わりに現れたのは……紅白と紫の鬼。

「うちの子に何を教えているのかしら……？」

「霊夢の子じゃないでしょ。うちの子よ」

「いや、あんたらの子じゃないから。橙はともかく、氷狐はあんたらの子じゃないから」

そんな諏訪子のツッコミを無視し、霊夢と紫はその身を穴から出し、穴は消え失せる。突然現れて言い知れない怒気を纏う2人に、フランとチルノ、メデイスンの3人はお互いを抱き締めあつて恐怖からか、それともチルノが寒いからか震えていた。

なんで聞こえていないはずの話の内容を知っているんだとか、なぜこの場所が分かったのか……そんなことは疑問に思わない。幻想郷ではそれが普通なのだ。

「とりあえず、色神は消えなさい！ ついでに紫も消えなさい！」

「最初は同意するけど最後は拒否させてもらうわ！ そろそろ自重しなさい腋巫女！」

「いきなり出てきていきなり暴れるなんてなってないね！ 神様怒らせると罰が当た

るよー！」

「フラン、チルノ、逃げるよー！」

「りょーかい！」

そして始まる人神妖の大戦争。子供たちはすぐさま安全な場所まで避難したため、幸いにも怪我はなかった。

ただ、今回のことで紅魔館が半壊したために当主は号泣、息の荒い従者に慰めてもらった後、紅魔館修復の間紅魔館組は八雲家でお世話になったそう。フランちゃん棚から牡丹餅。

ある日の夕方、一緒に遊んでいた寺小屋の子供たちと上白沢 慧音と別れた氷狐は少し寂しそうにその去っていく背中を眺めていた。迎えに来た紫に手を引かれ、開かれたスキマを通ればそこはもう八雲家の玄関。そこを通れば八雲 藍と橙と一緒に夕食の用意をして4人仲良く作った夕食を食べ、嫌々ながらお風呂に入れられ、紫と同じ布団で眠り、次の日を迎える。

子供心で氷狐は思う。友達とずっと一緒に遊んでいられたら……しかしその思考は叶わない。無意識にそれは叶わないと思っっているのか。それともそれほど本気ではないのか……それは彼にしか分からない。

だが、彼はふと思いつく。それは子供のように単純で、子供ののように純粹で。

“そうなった” 未来を想像したのか、彼の顔に笑みが浮かぶ。その未来は、きつと楽しいのだろう。その未来は、きつと幸せだろう。だから思うのだ……そうならいいの。だから願うのだ……そうならいいの。だが、それを願ってしまうのは……。

— ぼくがだいすきなみんなと……いっしょにいられますように—

それは……子供ように残酷なことなのだ。

「……………ん……………」

「あら、起きたのね霊夢」

朝、霊夢はいつものように目覚めた。寝ぼけた目を声のした方に向けてみれば……そこにいたのは、十六夜 咲夜。なぜ彼女が……なんて疑問を思い浮かべることもなく、霊夢はさも当然のようにその光景を受け入れた。

「……おはよう咲夜」

「ええ、おはよう。起こす手間が省けて助かったわ。私はお嬢様と妹様を起こしてやるから、〃その子〃を起こして居間にいらっしやい。お嬢様たちとその子以外は、みんな起きてるわよ」

そう言つて去つていく咲夜の姿を見届け、霊夢は隣にいる布団の温もりとは別の温もりの主に目を向ける。規則正しい寢息が、彼がまだ眠つていると言うことを教えてくれる。その姿を見て、彼女は優しい笑みを浮かべた。

青い髪を撫で、その撫で心地のよさをしばらく楽しむ。それを名残惜しげに終えれば、未だに眠り続ける体をゆつくりと揺すつた。

「ほら……起きなさい。もう朝よ」

「うー……」

ゆつくりと、まだ眠そうなまぶたが開いていく。そこに現れた蒼い瞳が霊夢の姿を映し……嬉しそうに、彼は笑みを浮かべた。

「あーうー……れーむ」

「ええ、おはよう氷狐」

何気ない、ありふれた朝の挨拶。そして、そこから始まるのは……。

“いつもと変わらない”……平凡な日常。

「すー……んー……」

「うーん……くー……」

「……」

「あや、咲夜さん？ そんなところで固まってどうしたんですか？」

「……」

「咲夜さ……鼻血を出して気絶してる……？ 美鈴さん、彼女に一体何が……？」

「知らない方がいいこともあるんですよ文さん」

子狐幻想記 転

『いただきます！』

「あーうー♪」

博麗神社の奥にある居住空間、その中の居間でいただきますの大合唱と共に行われるのはいつもと同じ朝食。

この神社に住む八雲 藍、十六夜 咲夜、鈴仙・優曇華院・イナバ、魂魄 妖夢等4人がかりで作り上げる料理は尋常ではない量がある。咲夜が居間の空間を広げていなければ絶対に入りきれないほどに。しかしそれほどの量があったとしても、数10分もすればその料理もなくなり、残るのは大量の洗い物のみである。この中の半分は西行寺 幽々子の胃の中へ消えるのだ。

博麗神社で行われる朝食……否、食事全ては戦争と呼ぶべきものである。

「幽々子！ それ私の中から揚げでしょう!?!」

「いいじゃない紫、いっぱいあるんだし。あ、妖夢、ご飯のおかわり、よろしくね」
「またですか……もう5合目ですよ?」

「合!?!」

「お嬢様……あまりこぼさないで下さい」

「し、仕方ないじゃない！ このおはし、つてのはなかなか慣れないのよ！」

「橙ー、味噌汁は熱いから気をつけるんだぞ？」

「はい、藍様！」

主従が入り乱れて世話をしたり、されたり、おかずの取り合いをしたり。

「目玉焼きには醤油と決まっています！ なんですかその白いどろつとしたものは
！」

「いいえ、マヨネーズよ！ そんな塩っ辛い黒い液体なんかかけられる訳ないでしょー！」

「団子じゃなくてもケンカするんですか」

「文さん。触らぬ神にんとやらですよ」

「呼んだかい？」

「おい、まだ勝負の途中だろう。どこ見てるんだお前は」

いつも団子でケンカをしている2人が違うことでケンカしていたり、それを上司と門番が見ていたり、神と鬼が朝から飲み比べをしていたり。

「鈴仙、お酒持ってきてー。ほらーもこーも飲みなさいー！」

「鈴仙、酒じゃなくて水を持ってきてくれ……」

「あはは……ちよつと待つててください」

「あたい、熱いの飲めない」

「冷ましてあげるから貸しなさい」

うさ耳少女が月の姫にお酒をねだられたり、酔っている姫を白髪の蓬萊人が介抱したり、氷精が熱い味噌汁を飲めなかつたり、隣の人形の妖怪が冷ましてあげたり。

「今日はこのプランで行くよ」

「うん、分かった」

「む……私よりも美味しいかもしれません……」

「私も料理、覚えたほうがいいかしら……」

「パチュリー様？ 何か言いましたか？」

「魔理沙は前に早苗の料理を褒めていたし……練習するか」

祟り神と悪魔の妹がよからぬことを企てていたり、風祝が半人半霊の料理に敗北感を感じていたり、魔法使い2人が何か決意していたり。

そんないつも通りの“日常”を見ながら、氷狐は博麗 霊夢と八意 永琳に挟まれながら嬉しそうにご飯を食べていた。その様子を見た霊夢と永琳もまた笑みを浮かべ、視線を目の前の混沌とした光景に移すとすぐに苦笑に変わったが。

「毎度毎度騒がしいわね……もつと静かに食べられないのかしら」

「無理ね。面子が面子だし」

「お、氷狐の食べてる焼き鮭美味そう。頂き！」

「やー！」

「やめんかい!!」

「ぶぐがつ!!」

これまたいつも通りに視界の横から氷狐のものを盗ろうとする白黒魔法使いに瞬時に反応し、霊夢が盗人を畳の床に沈める。決してテーブルの上で叩き潰すような真似はしない。食べ物が勿体無いから。

大騒ぎして、たまに暴れて、ケンカもして。しかしこの場にいる存在達は、皆この空間が、日常が大好きだった。そして今日もまた……“いつもと同じ日常”が始まるのだ。

子供たちは遊びに出かけ、従者たちは大量の洗い物やら家事やらおつかいやらに時間を使い、魔法使いたちは勉強に励み、その他はのんびりと過ごすのが朝食を終えてからの時間。因みに、霊夢はのんびりと食後のお茶を啜っている。こんな時間が、もう一週

間ほど流れていた。

今日は氷狐たちは寺小屋へ向かうと言っていただろうかなどと考え、ぼんやりと空を眺める。ただただ流れていく雲を見つめる姿は非常に絵になるのだが、霊夢の心は苛立ちでいっぱいだった。

「もう一週間になるのに……異変はどこでおきてるのよ」

この一週間、不思議なことに霊夢の勘は常に「異変が起きている」と告げていた。当然、霊夢はまた氷狐が巻き込まれたら堪らないとばかりに異変解決に乗り出したのだが、幻想郷は平和そのものであり、異変らしい異変は起きていなかった。

自分の勘も鈍ったのかと樂觀視するが未だに勘は異変が起きていることを告げており、それが一週間も続いているので軽い頭痛すら起きている。ここまで来て異変はない、などと言えるほど霊夢は樂觀的ではない。同じ釜の飯を食っている者たちをも疑ったが、怪しい動きも何も見られない。

異変は、確かに起きている。にも関わらず、自分には異変がなんなのか分からず、見つけられない。今は八雲 紫と永琳に協力を仰ぎ、他の者の知らぬ内に調査を手伝って貰っている……が、それも今日で三日目となり、未だに有力な情報はない。

どうしたものかと頭を抱えてみるが、当然ながら決して頭が良いとは言えない霊夢の頭では妙案も良案も浮かぶはずもない。じんと軽い痛みを訴える頭が少し痛くな

るだけである。

怪しいのは、霧の湖にいつからあるのか分からない紅い館、妖怪が住んでいないのに“妖怪の山”なんて名づけられている山、なぜか空に入り口がある冥界、迷いの竹林くらいである。当然ながらこれらの場所も調査した。

しかし分かったのは紅い館は割りと綺麗な状態であり、妖怪の山の頂上に神社があり、冥界の奥に大きな屋敷と巨大な枯れ桜“西行妖”があり、竹林の奥には永遠亭という名の屋敷があること……つまり、霊夢が異変を解決したときとなんら変わりはない。

「……………」

ふと、霊夢は自分の考えに違和感を感じた。これらの調査した場所は、自分が異変解決のために出向いた場所であり、山を除いて実際異変を解決した場所でもある。どの様に解決したかもしつかりと思い出せるほどに、その記憶は霊夢の中に確かにある。

紅い館ではレミリア・スカーレットと相對し、冥界では幽々子と相對し、竹林では蓬萊山 輝夜と相對し、山では東風屋 早苗と相對した。この神社で共に暮らす彼女たちと、霊夢は確かに戦ったのだ。

ならばなぜ、その場所で戦うに至ったのか。身内による割と本気の勝負とはいえ、わざわざ場所をこの神社から移す必要はない。皆空を飛べるのだし、上空で戦った方が早

い。実際、これらの戦いの場は全て上空だったのだ。

「何かを忘れてる……何が違う……ううん、どこから」間違ってる……う？」
何気なく、自然と霊夢はその考えに辿り着いた。そして持ち前の勘が、その考えが正しいと肯定する。

もしかしたら、この考えを突き詰めていけば異変が何なのか分かるかもしれない……そう霊夢が考えたとき、隣で自分と同じようにお茶を啜っていた永琳が手を振っていることに気づいた。その視線の先には、遊びに行っていたはずの子供たちの姿。当然、その中には氷狐の姿もある。

「れーむ！ えーりー！」

「……霊夢の名前が先なのね」

「私のせいじゃないでしょ」

いつの間にか、先の考えはどこかへと行ってしまった。今はこうして永琳に大して優越感に浸り、自分と彼女の間に座る子狐の無邪気な笑顔を見ることに集中したかった。それだけで、霊夢は幸せなのだ。しかし……と霊夢は不思議に思う。

今の暮らしは騒がしいが楽しく、心地いいもののはずなのに。こうして隣に座る氷狐と一緒にいるだけで幸せな気分になれるというのに。

氷狐を見るたびに頭痛が酷くなり、どうしようもなく泣きたくなるのはなぜなのか……彼女には分からなかった。

「霊夢……今の暮らしはどう？」

「あんたはいきなり何を言い出すのよ」

とある日に、異変が何かを突き止めるべく幻想郷中を2人で飛び回っていた時、霊夢は紫からそう問いかけられた。

突然今の暮らしはどうか？ と聞かれれば万人がいきなりなんだ？ という反応をするだろう。実際、霊夢もそうなった。今の暮らしはどうかなんて、お前も一緒に住んでるだろうに、と内心でツツコミを入れて。本当なら口に出してもよかったのだが……紫の顔があまりに真剣だったために言うことができなかつた。

「……はあ。毎日騒がしくて嫌になるわよ。魔理沙は何度言っても人のものを盗るわレミリアはすぐに泣くわフランと諏訪子は氷狐に変なことを教えるわ永琳は私に嫉妬

の視線を向けてくるわ紫は胡散臭いわ」

「その流れで私の名前を出す必要はなかったでしょう!？」

「でもまあ……悪くはないわ」

霊夢の脳裏に蘇るのは、変わらない平凡な日常。朝起きれば愛する子狐の温もりを感じ、自分が用意しなくても美味しい朝食が並び、時間帯に関係なく食事はいつも騒がしい。昼は遊びに行く子供組を見送り、たまに家事をしたり、お茶を飲んでのんびりしたり。夜はそんなに広くもないお風呂に誰かと一緒に入り、たまに氷精が溶けて消えるのを見て笑ったり、嫌がる子狐を無理やりお風呂に入れたり。最後は朝のように子狐の温もりを感じ、寝顔を見ながら眠り、また朝が来る。

今までも行われてきた変わらない日常。そんな日々がとても新鮮で……霊夢にはそれがとても大切なもので。

(…………え? “新鮮”で…………?)

そんな日々が…… “ニセモノ” であると気づいた。

「う…………お”え”え”え”え”え”っ!!」

「れ、霊夢!？」

霊夢はその場で吐いた。嫌なものを全てぶちまけるが如く、朝食食べたものも昼食べたものも、今まで食べたものを全て吐き出すかのように。

気づいてしまった。気づきたくなかった。分かってしまった。分かりたくなかった。理解してしまった。理解したくなかった。

もう霊夢は戻れなくなってしまうた。今までの過ごした日々を「変わらない日常」だなんて思えなくなってしまうた。以前に、どこから間違っているのか？ と考えたことを思い出す。どこから、ではない……間違っていたのは最初から。

なぜ同じ神社で暮らす者たちと違う場所で戦ったのか？ 答えは「戦った場所が相手の住む場所」だから。思い出してしまった。この神社に住んでいるのは霊夢と居候のような鬼が一匹だけ。その他の住人は誰一人としてこの神社には本来いないのだ。

「ゆかり……あんたは……気づいてたのね……？」

「……私が気づいたのは、外に出たときよ。いつものように妖怪に与えるための人間を……そう思っ出てみたら……」

人間は誰一人として「存在しなかった」。今までと違う決定的なそれを見たことで、紫は今まで過ごしてきた日常がニセモノであると気づいた。気づいてしまった。

境界を開いて世界中を見た。交差点や大通りなど人が大勢いる場所、ビルや家屋の中なども可能な限り覗き見た。しかし、いるべき存在は一人たりとて見つけることは叶わ

なかった。

「人間が全て消えれば、私たち妖怪は存在を維持できなくなるわ……妖獣は別だけれど。だけど、私はこうして存在している」

「……わたしがいるからじゃ……」

「妖怪に一番必要なのは、妖力ではなく“恐れ”。恐怖を抱いていない霊夢一人では意味がないわ。私たちがこうして存在してられるのは、人里の住人が“まだ”いるから……不思議よね？ 外の人間だけが消えて、幻想郷にいる人間だけが存在しているなんて」

紫の言うように、人里にいる人間は変わらずそこにいる。寺小屋は定期的に開かれ、八百屋や甘味処は毎日開き、ほかのお店も毎日開いている。門番も毎日雨が降ろうが風が吹こうがそこに立っている。人里は。紛れもなく“変わらずに”あるのだ。

「でもね、消えたのは外の人間だけではないわ。幻想郷にいるはずのほとんどの存在がその姿を消しているの」

「……は？」

「今のあなたなら分かるでしょう？ 妖怪の山には大勢の妖怪がいた。冥界には幽霊だっていた。死神もいた、閻魔もいた、妖精もいた、地底にも数多くの妖怪がいた……でもね、どこにもいないの。不思議よね？」

「地底という場所に関しては行ったことのない霊夢には理解が及ばなかったが、他の場所のことは分かる。閻魔に関しては、霊夢が一番嫌いな相手といっても過言ではないほどの存在だ。」

そして、ニセモノの日常の中で彼女が見たものは紫が行ったこととは正反対のものだ。妖怪の山に妖怪はいなかった。冥界に幽霊はいなかった。妖精も神社にいる氷精以外見たことがないし、閻魔も見えていない。見たくもないが。

「外の間人はいなくなった。でも幻想郷の間人はいる。今の神社に私たち人外がいる。だけど他の人外はいない。その違いはなんだと思う？ どうしてそうなったと思う？」

紫にはその違いも、なぜそうなったかも分かっているのだ。それは、今の話を聞いた霊夢にも分かるほどに簡単なこと。

消えたものとそうでないものの違い……それは「彼」が知っているかないか。なぜそうなったか……それは「彼」がそう思（ねが）ったから。異変は起きていた。原因も犯人も分かる。解決だって、今日中にしようとすれば出来る。しかしそれをするには……。

「もう一度聞いわ霊夢……今の暮らしをどう思う？」

“変わらない日常”が終わってしまふことを意味する。

ちやら、と首もとの赤い首飾りから軽い音を立てながら、氷狐は縁側に腰掛ける霊夢の膝の上に頭を置いた。

時間帯は夜……霊夢が真実に気づいてから14回目の夜である。日を負うごとに酷くなる頭痛を永琳からもらった頭痛薬で耐え、今の幸せな日々に浸り続ける毎日。

ぼんやりと夜月を眺めていた霊夢は、不意に氷狐が自分の首にある彼とお揃いで色違いの青い首飾りに伸びていることに気づいた。ちやらちやらと楽しそうに触る姿はまるで赤ん坊のようであり、自然と霊夢の顔に笑みが浮かぶ。

この首飾りは、霊夢が自分で作った世界に一つずつ、一対で存在する唯一無二のもの。母だ子だなんて周りから茶化されながら、夜なべ……とはいかないまでも丁寧な丹精と愛情を込めて作ったもの。渡した日から寝るときもお風呂に入れられるときも肌身離さず付けてくれている姿を見たときは嬉しきで胸がいっぱいになったものだ、と、霊夢は誰に知られるでもなく思う。

今頃、台所では夕食の際に出た大量の洗い物と藍や咲夜等従者組が戦っている頃だろう。その主たちはのんびりとお風呂にでも浸かっているのではないか？ 鬼や神は食後の酒でも飲んでいそうだ。子供組は一部は寝ているのかもしれない。魔法使い達や風祝は勉強かゆりゆりしくやっているのではなからうか。

そんな考えを終えた霊夢の脳裏に次に浮かんだのは、いつかの紫との問答。今の暮らしはどうかと聞かれ、霊夢が出した答えは答えではなかった。

『あんたは……どうなのよ』

『私は楽しいわよ？ こんな個性溢れる大家族、他にはないもの』

『でしようね』

『でもね……』

『……？』

(「私が好きだった日常ではない」……か)

「うー？」

「なんでもないわ」

暗い表情でもしていたのか、下にいる氷狐から心配そうな声がした。すぐに霊夢は笑

みを浮かべ、優しい手つきで彼の頭をなでる。気持ちよさそうにころころと笑う姿は、見ているものに癒しを与えることだろう。しかし、今の霊夢の心を癒すことは出来なかった。

異変解決は、博麗の巫女が行うべき仕事。その役割にある霊夢は、どんな形であれ異変を取める義務がある。別段役割に拘っているわけではないが、それは行わなければならぬと霊夢も理解しているし、今までだつてしてきた。

しかし、今回は今までとはベクトルが違う。事実として、外の人間の消失と幻想郷のほぼ全ての人外の消失という今までにない大規模な異変は起きている。が、その事実には気づいているのは紫と自身のみであり、他の存在は今の日々が日常だと思い込んでいた。あらゆるものから浮くハズの霊夢自身や境界を操る紫ですらも最初はそう思い込んでいたのだから、如何に今回の異変が強大な力の元に起きたのかが解るといふものだ。

紫が直接解決に向く、行動を起こすのは以前の「不完全な満月」のように幻想郷が危機の場合のみ。しかし今回の異変はそのようなことはない。平和で、幸せで、不変の日々が過ぎていくだけのもの。よって、紫が直接何かをするということはないだろう。つまり、自分さえ解決に動かなければ……この日常は続くのだ。

「……ねえ氷狐」

「う?」

「今の暮らしは……楽しい?」

「あーうー♪」

何気なく、霊夢はそう問いかけていた。当然ながら帰ってきた答えは是。楽しくないハズがない……なぜならこの異変は……氷狐が起こしたのだから。

思考を現実にする程度の能力。それが無から有を生み出すというものでなければあらゆる思考を現実にし、空間を超越し、生死を捻じ曲げ、能力を封じ、別の存在になり、495年もの狂気を消し去り、凡人を天才に変え、そして世界のあらゆる存在を選別して消滅させることが出来るほどの能力。

ほぼ何でも出来る。それだけにこの能力は脅威であり、危険。しかし同時に無害であり、有益を生む。

今の彼は無害だ。逆に解決に乗り出して痼癩などを起こされてしまえば、今度は全てが消えてしまいかねない。その恐怖は、当然ある。能力があることもあつて、霊夢は解決する気がおきないということもあつた。

(……あ)

ふと、霊夢の頭に一つの妙案が浮かんだ。そして、勘がそれこそが正解だと囁く。

しかし同時に、勘がそれははいけないとも囁いた。矛盾する勘……これは霊夢が

始めて体験することだった。だが、いつだって自分の勘を信じて進んできたのだ。それが異変解決に繋がるなら、実行しない理由はない。

だが、嫌な予感がすることもまた事実。実行するべきか、それとも先延ばしにするべきか……霊夢が選んだのは前者だった。

「氷狐」

「うー?」

「……私ね、今の生活がすごく楽しいの。毎日毎日うるさいけれど……それでも楽しいわ。あんたと一緒にいられるし、ご飯は誰かが作ってくれるし、家事しなくても誰かがやってくれるし……楽で好きだわ」

「……れーむ……?」

どこか不安そうな氷狐の声を聞き、霊夢の胸の奥にちくりとした痛みが走る。その痛みを感じなかったことにし、彼女は更に言葉を続ける。これは、自分がやらなければいけないことなのだから。

「でもね、〃これ〃は違うの。この世界にいるのは知り合いだけで、他には誰もいない。それはとても楽しいことよ? ずっと友達や家族とえられる……それはとても楽しいこと。だけど、二度と新しい出会いは来ない」

もしかしたら、友人が増えたかもしれない。もしかしたら、新たに幻想郷の住人が増

えるかもしれない。そんな未来の出会いが、今の幻想郷からは失われている。

友人だけが、家族だけが、知り合いだけが存在する世界。それは知らない人と話す不安を無くし、些細なケンカを除いて平和に過ごすことが出来るのかもしれない。平和で、楽しくて……それはある種の理想の世界なのだろう。勿論、氷狐がそこまで考えて能力を発動したわけではないのであろうが。

彼はただ、思っただけなのだ。友達と、家族とずっと共にいたい。ただそれだけを願う…… “それ以外の存在” を消滅させてしまった。それこそが……今回の異変。

「未来の変わらない日々なんて私はごめんだわ。朝起きて、掃除をして、ご飯を食べ、人里にあんたを探しに行つて、見つけたら一緒にお団子とかりんごとかを食べ、神社と一緒に昼を食べて、遊んだりお昼寝したりして……あんたを迎えに来た紫に嫉妬して。そんな日々の中でたまに異変の解決とか妖怪退治とかをして、また同じように一日を迎えて……そんな世界が、私の大好きな日常なの。だから氷狐……」

だからこそ、霊夢はこの子供の思いを砕く。非道と呼ばれるかもしれない。外道と呼ばれるかもしれない。幼い子供の思いをなかつたことにしようとしているのだから。

しかしそれでも霊夢はこの異変を解決する。それは博麗の巫女である故に……否。間違つたことをしている子供を正すために。

―この世界を……元に戻して―

何かが変わったと、霊夢は確信した。無論、それは目に見えているわけではないが……確かに何かが変わったのだ。神社の中から人の気配が消えたのが、その理由でもあるのだが。

恐らく、今この神社にいるのは霊夢と氷狐の2人だけ。過程をすつ飛ばして結果だけを得る能力なので、本来いる場所に瞬間移動した、というようなことが起きたのかもしない。氷狐がまだここにいるのは、霊夢が能力を発動したせいだろうか。

何はともあれ、世界は元に戻った。外の世界には人間がいるだろうし、幻想郷にはまた妖怪が溢れていることだろう。それはそれで面倒だと思いつつも、彼女は安堵の息を吐く。そして、これで終わりではない。能力を使った反動なのかいつの間にか眠ってしまったっている氷狐の体を抱き上げ、霊夢は今1つ思考する。

氷狐は、いつも異変に巻き込まれてきた。それはその能力が原因であったり彼自身の原因であったりと理由は複数あるものの、大体は能力のせい。閻魔が退治するように言つて来たくらいだし、今回のことが事だ、霊夢にも流石に能力の危険性は理解できた。そこで先ほど浮かんだ考えだ。彼の能力は無から有は生み出せないが、今回の異変で有を無にすることができるとわかった。その規模は、大きいという言葉では片付け

られないほど。

ならば、“能力を消す”ことも可能なのではないか？

「……大丈夫。私がいるし、紫も永琳も諏訪子も……ちよつと頼りないけど慧音もいる。魔理沙もフランも、他にも沢山あんたのことを好いてくれてる奴はいる。だから……能力がなくなっても大丈夫」

そんな言葉と共に、霊夢は氷狐の体をぎゅつと抱きしめた。その際に2人の首飾りがちやら、つと音を立て、霊夢の手が氷狐の首飾りを撫でる。

元々、この首飾りは“明日もまた会えるように”という子供じみた願掛けの元に作り出したものだ。夕方までしか一緒にいられなくても、次の日になればまた会える。そういう願いを込めたもの。

世界が元に戻っても、紫の家に帰っても、次の日にはまた会える。ただそれだけを願った。先の願いで能力が発動したこともあり、自分はかなり単純で子供みたいな思考をしているのかもしれない、と霊夢は一人自嘲する。

「もうすぐ紫が迎えに来る……だけど、また明日会えるわ」

そう願いながら、霊夢は紫が来る前に願ってしまった。嫌な予感が大きくなることを

無視して、それはいけないと勘が叫ぶことを無視して。

—思考を現実にする程度の能力を……消して—

ちやら、つと音が鳴った。

「……………あ……………え……………？」

気がついた時には、霊夢は自身の体を抱きしめていた。しかし、体には自分以外の体温の温もりがしっかりと残っている。

何が起きたのか、霊夢は理解することを拒否する。してしまえば、心が壊れるかもしれない。自分なかつたから。しかし、視線を下に向けてしまったときに理解してしまった。

自分の青い首飾りとお揃いの首飾り。その持ち主の姿はどこにもなく、それだけが自分の膝の上にあつた。

「あ……………ああ……………」

「……霊夢」

誰かが、優しく霊夢の名を呼んだ。その声の主に顔を向けることはなく、彼女はただ目の前の現実を受け入れられないでいた。

「わたし、わたし、は……能力を消してって思っただけで、それ、だけで」

「……ええ、そうでしょうね。それが駄目だった。絶対に願ってはいけなかった」

「な……んで、ひこが」

「永琳の話では、彼は少なくとも2000万以上もの時を生きているわ。妖怪は時間とともに必ず強くなっていく存在。なのに氷狐は……姿はともかく、妖力は小妖怪程度で知識や言葉は子供並み……成長が見られない。でも何かが強くなっていなければおかしい……じゃあその強くなったものとは何かしら？ 答えは……『能力』よ」

紫はスキマ妖怪という一人一種族と呼ばれる特殊な妖怪だ。このスキマ妖怪という種族の名の由来は言わずもがな、境界を操る程度の能力があるためである。いわば、能力が妖怪となったと言ってもいいのかもしれない。

では、もしも何らかの理由でその境界を操る程度の能力が消えてしまった場合、彼女という存在はどうなってしまうのだろうか？ 確固たる理由はないが、恐らくは妖怪としての彼女は消えてしまうだろう。

氷狐は、最初はただ能力を持った妖怪だったのだろう。それが時が経つにつれて能力

だけが強くなっていき、世界すら組み替えるほどの力を持つてしまった。

「それほどの能力が、小妖怪程度の器で保つと思う？ 答えは否。成長し続けた能力は成長しない器からあふれ出し……妖怪としての『在り方』が変わってしまった。『能力を持った妖怪』から、『妖怪化した能力』に」

自我がなくなった訳ではない。心がなくなったわけでもない。ただ、その存在が変わってしまっただけ。その結果、ほぼ何でも出来るといふ神に等しい能力を得た。ほぼノーリスクで使える、強大で危険で夢のような能力を。それは言ってしまうえば、能力が能力を使っているだけに過ぎないのだ。

そんな彼から能力が消えた。それはつまり、『能力から能力が消えた』ということに他ならない。

「霊夢……氷狐を『消した』のはあなた。でもそのおかげで異変は解決したわ……」

「ちが……わたしは、そんなつもりじゃ」

「これで幻想郷の危機はなくなつたし、閻魔があなたに彼を退治するように言うこともない。だって彼はもういないんだもの」

「つ……ひ……こ……」

「幻想郷を救ってくれてありがとう霊夢。それじゃあ、私は帰らせてもらおうわね」

ここにこれ以上留まると、あなたを殺したくなるから。

紫が帰った後も、霊夢はただ違う、違うとだけ何度も呟いていた。これもまた二セモノなのだ。そう信じ込まなければ自分を保てそうになかったから。

本当に大切にしたいものを、彼女は自分の手で失った。受け入れられない現実と向き合うことも出来ず、ただただ現実逃避だけを行い、時間だけが過ぎていく。

「ちがう……ちがうの……こんなことをのぞんだんじゃない……ちがうのお……」

ちやら、と音が鳴った。それは首にある首飾りからか……それとも握り締めた持ち主のいない首飾りからか。

それは、霊夢には分からなかった。

子狐幻想記 結

「紫様……氷狐は……」

「話は聞いていたでしょう藍。あの子は消えたわ」

霊夢に話をしたすぐ後、八雲 紫は自宅で泣きそうな顔の八雲 藍にそう言った。その言葉聞き、藍は泣きそう、で済んでいた表情をくしやり歪め……その目から一筋の涙を流す。

彼女がニセモノの日常を過ごしていたと知ったのは、世界が元に戻ってからすぐのこと。記憶としては残っていない。まるで夢を見ているような感覚だった。しかし、霊夢と紫の会話を聞き、その夢が現実として起きていたことを知ったのだ。

彼女が見る主の顔は、よく見えない。彼女に背を向けているからだ。ただ、その両手は何かを耐えるかのように強く握りしめられている。

「……何か方法はなかったのですか」

「なかったわ。少なくとも、私では思いつかなかった。永琳なら何か浮かんだかも知れない。でも彼女はニセモノの日常に気付かなかった……いえ、気付くことを拒否していたようにも見えたわ。教えてもよかったのだけれど……彼女にとって、彼と同じ空間

で過ごしていたあの世界はまさに夢にまで見た世界。知ってしまったえば、世界を元に戻す行為を妨害される恐れもあったもの」

「でしたら、あの世界で生きるのも一つの選択肢だったでしょう!?! 彼を……氷狐を消してまで元の世界に戻る必要は」

「私が大事なものは、彼ではなくて幻想郷と……そこに住むすべての存在よ」

はつきりと、主は告げた。それを聞いた従者の顔に浮かぶのは……驚愕。そして、悲しみ。

いわば、1を助けるか100を助けるかという話だ。100を捨てて1を取るのか、それとも1を見捨てて100を生かすのか。紫が取ったのは、後者。

「だったら……なぜ霊夢にあんな言葉を……」

『これ以上ここにいと……あなたを殺したくなるから』

「……そうね。明日、霊夢に謝っておかないとね」

それだけを言い残し、紫は屋敷の中へと去っていく。藍はその後ろ姿を静かに見送る

ことしかできなかつた。そして見送りながら、藍は一人先の会話を思い返す。

彼が大事なのではなく、幻想郷とそこにいる存在全てが大事なのだと彼女は言った。かつて彼のためにと烏天狗一羽を消し去り、あんなにも彼を巡って霊夢たちと争つていたにも関わらず、彼女は氷狐を自らが手を下したわけではないとはいえ切り捨てた。

彼女の幻想郷に対する想いはほかの存在よりも遥かに重い。誰よりも幻想郷を想い、誰よりも幻想郷を愛しているのだと、藍は断言できる。それでも、思つてしまう。

他に方法はなかつたのか。彼を消さずに以前と変わらない日常に戻ることではできなかつたのか。彼を切り捨てることに心苦しきを感じなかつたのか。

「……そんなことはありませんよね……紫様」

否、と藍は呟く。きっと霊夢に言った言葉は、何も彼女一人にぶつけられたものではないのだろう。本人も無意識に呟いたのかもしれない。あれは、八つ当たりに近いものだった。

強く握りしめられた両手は、霊夢ではなく自分に向けられた怒り。寂しがり屋な紫が、彼が消えて何も思わない筈がないのだ。

自室に敷かれている布団を見て、紫は固まる。なぜなら、布団の上には枕が二つあったからだ。そして、この布団と枕を用意したのも紫自身。

無意識のことだった。自然と二つ置いていた。それは、体に染み付いた動きだった。「……何を馬鹿なことを……彼はもう……」

そう呟いたときには、もう耐えることなどできなかつた。目からはぼろぼろと涙があふれ、壁に背を預けながらその場に崩れ落ちる。泣き声をあげなかつたのは、紫なりのプライドだろうか。

ニセモノの日常に真つ先に気付いたのは紫だった。そして気付けば、誰が犯人かなんてすぐにわかつてしまう。そこからが紫の葛藤の始まり。

元々、氷狐をこの屋敷に住ませたのは彼を見張るためという意味合いが強い。ほぼなんでも出来る能力……そのあらゆる危険性を考え、どうやって止めるかなどの対処法なども思いつく限り考え、今まで過ごしてきた。しかし、その生活の中で得る幸せが大きかつた。

ただ彼と共に、従者達と共に送る日々が楽しかつた。能力の危険性や対処法などを記憶の隅の押しやるほどに。その日々を、彼女は間接的であれ自ら壊したのだ。何も思わない筈が無い。悲しくないはずが無い。

しかし彼は消えてしまった。器から溢れた強大な能力もろとも消えてしまった。今まで人々から恐れを抱かれなくても存在し続けた彼は……。

「……あれ？」

消えてしまった。“死んだ”……のではなく、“消えた”。その考えをした時、止まりかけていた紫の思考が再び動き出す。

氷狐は“強くなり過ぎた能力が体という器からあふれ出し、その在り方が変わっただけの存在”……例えるならば、大きな浴槽一杯にお湯を張り、その中に小さなコップを沈めたような状態。このコップが氷狐の肉体……器であり、お湯が能力。

その中からお湯……つまり能力だけが消えた。それだけならば、器は残るはずなのだ。それがたとえ死んでいたとしても、器が壊れたわけではないのだから。それに、妖怪である彼は霊夢が願う前に、消えるならばもつと早く消えているはずなのだ。

子狐妖怪、氷狐は人々から“恐れられていない”。妖獣とはいえ妖怪の類である以上、その存在を妖怪として留めるためには少なからず恐れが必要だ。外の世界では恐れられないからこそ妖怪が力を失い、果てにはその存在を失う。

人里の住人は、たとえどれだけ仲がよく友好的な妖怪であっても心のうちでは恐れを抱いている。そうしなければ妖怪がその力と存在を失い、人間と妖怪のパワーバランスが崩れてしまうために紫が仕方なくそう仕向けたからだ。

しかし、氷狐だけは違う。心の底から愛され、恐れられていない。かく言う紫もその能力こそ怖いだが彼を怖いなどとは一度足りと思ったことは無い。恐れを抱いたことは無い。しかし、彼は存在していた。つまり、彼は初めから他の妖怪とは在り方が違っ

たのだ。

「妖怪化した能力という状態になっていたから……？　違う、それでも妖怪なら恐れが必要のはず。そもそもの疑問は『なぜ器ごと消えた』のか。妖獣なら、元となる動物の死体ぐらいいは残るはず……」

いつしか涙は止まっていた。回り続ける思考は疑問への答えを導き出そうと回転し続け、紫は時間を忘れてその思考に没頭する。その中で、一つの仮定を考え付く。

消えてしまった、のではなく、『消える必要があった』としたら？

いつかした思考、その記憶を呼び覚ます。妖怪は、時間と共に必ず成長する。そして、その中で最も効率のよい体へとその存在を変えていくのだ。体が小さくても、大きくても、力が強くても、弱くても、それは自分の意思ではなく存在が選んだ最も効率のよい在り方。あらゆる妖怪はその弱かったり足りなかったりする部分を嘆くことこそすれ、自身の在り方を疑問に思う存在はいない。

彼は、能力は成長していても、容姿や思考に変化はなかった。それは、能力を使うのにあの姿と思考が最も都合が良く、効率的だったからだ。そしてもしも……もしもだ。

その基盤となる能力が消えたことで、存在の在り方を変える必要があったとすれば？

それも器ごと、丸々全てを変えする必要があつたとすれば？

「……夢物語ね。そもそも恐れられていないのになぜ存在できるかの説明がつかない」

自身の考えに対して落胆とため息を吐き、紫は一人自嘲する。こんな都合のいい考えが現実になるほど、幻想郷は非常識ではない。

彼は消えた。それだけが変わらない事実。そう思考を終わらせ、紫はいつもより広く感じる布団にその身を横たえる。一人分の温もりしかない布団……それが妙に寂しく、心に穴を開けていく。そして完全に意識が闇に落ちる時、紫は思った。

息子を失った母親と言うのは……こういう心境なのだろうか。

夜が明けた。それは、彼のいない日々の始まりであることを彼女……霊夢は昨日の夜からいた縁側で感情なく心の中で思った。

あれから霊夢は一睡もしていない。それどころか移動すら、体を横たわらせることもなく……赤い首飾りを握り締めたままずっと座り続けていた。その表情は、俯いているために確認することはできない。

朝食をとろう、などという気なんて起きる筈がない。無気力。今の彼女からは、そんな言葉しか出てこない。

考えてみればおかしな話だ。あらゆる存在と平等に接し、そのどれもに心を置く事になかった博麗 霊夢が、たかだか一妖怪の消失にここまで意気消沈しているなど……閻魔に見られれば不甲斐無いなどと言われてしまうかもしれない。

「……ああ……そっか」

小さく……本当に小さく、彼女は呟いた。なぜこんなにも悲しいのか。なぜこんなにも心の内が空虚なのか分かってしまったから。

母だ子だと茶化され、最近では本当にそうかも、などと思っていた。しかし、それは間違いなのだ。親子の様など……自分も、周りも間違っていたのだ。

彼を愛しているのだと、霊夢は失った今ならばつきりと言える。それは母から子への家族愛などではなく、年頃の少女が異性に抱くそれ。

あらゆるものから浮いてしまう彼女が、唯一足をつけることが出来た存在。自分から、足をつけようと初めて動いた相手。そしてきつと、それは彼女の初恋なのだ。

その相手がいなくなったのだ……もう、心が誰かに降りることなどない。彼と出会う前までの生活が戻ってくるだけだ。

起きたらご飯を作って、境内の掃除をして、たまに妖怪退治や異変解決をして……そ

んな生活に。

「……戻れる訳……ないじゃない」

戻れる訳がない。この寂しさをしってしまったから。

これから行われていく日々には、常に寂しさと空虚感が付きまとうこととなるだろう。もしも彼がいたならば……そんな考えが頭を過ぎることも、日に2度3度で済むとは到底思えない。それは、霊夢にとつては地獄以外の何者でもない。

でもそんな日々がやってくるのは決まっていることなのだ。否、もう始まってしまっているのだ。

人里を訪ねたとしても、彼の姿はそこにはない。寺小屋に行っても、山に行っても、紫の屋敷に行けたとしても、それは変わらない。神社に彼は現れない。もうあの愛らしい姿を見ることもない。つたない言葉で霊夢の名を呼ぶこともなく、笑顔を見ることもできないのだ。

「会いたい……っ」

そんな地獄は耐えられない。そう思った霊夢の口から出たのは、そんな言葉。叶わないと知りつつも口に出てしまった……心からの願い。

流れ出る涙を止める術を、彼女は知らない。無意識に両手で涙を拭うことしか出来ない。

「ひこ……ひこお……っ」

だからだろうか……握り締めていたはずの赤い首飾りが、いつの間になくなっていくことに気づくのが遅れたのは。

だからだろうか……いつもの勘が、いつかのように「今すぐ走れ」と叫んだことに反応するのが遅れたのは。

だからだろうか……。

先ほどまで感じなかった……馴染みのある妖力に気づいて顔を上げるのが遅れたのは。

「そう……そうなの」

「うん、そうだよ。流石賢者ってところかな？ よく気づいたね」

「考えてみれば分かることよ……それが出来ないくらい動転していたのね……私は。これは霊夢に殺されるかしら？」

「随分と物騒な話になったね……まあわたしには関係ないけどさ。で、なんで急にそんな話を？」

「……あなたには、分からないことよ。それじゃあ、お暇させてもらうわね」

そう言つてスキマを開き、そこを通つて歸つていつた紫を見ながら、諏訪子は首を傾げた。

彼女は、朝早くにいきなり諏訪子の寝室に現れたのだ。それも、少し確認させて欲しいという理由で。その話も、すぐに終わつたが。

「意外に知られていないのかな？」

「何がですか？」

「おはよう早苗。いや、氷狐のことさ」

「氷狐君……？」

諏訪子の呟きを聞いて部屋に入つてきた早苗に挨拶をしつつ、諏訪子は今していた話を簡単に教える。

紫が聞いてきたことは二つ。それは彼……氷狐が諏訪子と共にいた時の様子と、周りの氷狐に対する見方。これは完全に確認のためだけに聞いたように諏訪子と思う。諏訪子がよく気づいたと褒めたのは、もう一つの確認。

「氷狐君の何が知られていないんですか？ まさか、実は女の子とか!？」

「いや、違うから。ちゃんと付いてるもの付いてるから。普段の彼を見ると結構分かりそうなものなだけだなあ……つて言つても、わたしが気づいたのも結構経つてからだけだ」

「……？ 私には分かりません。氷狐君に何か秘密でもあるんですか？」

「よくわからない部分はあるよね……年齢とか。まあ、みんな彼の思考を現実にする程度の能力に目が行くから気づきにくくはあるのかな」

「……あのー諏訪子様？ その言い方だと、まるで氷狐君には……」

「うん、早苗が思っていることで正解だよ」

彼……氷狐には思考を現実にする程度の能力以外にもう1つ、能力がある。

1つの存在が2つ以上能力を所持していると言うのは、全く例がないわけではない。例えば、化け猫妖怪の橙。彼女は普段の式神状態の時に“妖術を扱う程度の能力”を持つ。が、化け猫の時には“人を驚かす程度の能力”を持つ。こういう言う方をするならば、霊夢も“空を飛ぶ程度の能力”と“霊力を扱う程度の能力”の二つを持っていることにもなる。

里の守護者、上白沢 慧音もまた、人間時とワーハクタク時で能力を1つずつ、計2つの能力を持っている。このように、能力を複数持っているというのは全くありえない訳ではない。

「わかんないのは、なんでそれを賢者が聞きにきたかなんだよねえ」

「諏訪子様諏訪子様」

「なに？ 早苗」

「氷狐君が能力を二つ持っているのは分かったんですが……その能力ってなんですか？」

「ああ、それはね……」

「愛し愛される程度の能力？」

「ええ。それが彼のもう一つの……私がついさつきまで気づくことが出来なかった能力」

「どこか嬉しそうな表情で、紫は藍にそう告げた。愛し愛される程度の能力……この能力こそ、彼のもう一つの能力にして本質。」

「愛し愛される……名前だけを聞けば、洗脳系の能力に聞こえなくもない。むしろ、そういう風にか聞こえないだろう。しかし、実際はそんな強力な能力ではない。お互いの心に、ちよつとした“切欠”を与える能力……説明をするなら、そう言うのが正しいだろう。」

気持ちを強制させる能力ではない。『ちよつと気になるな……』ぐらいの切欠をお互いの心に引き起こす能力であり、そこから気持ちが発展するかは完全に運任せ。事実、いつか紫によつて消された鴉天狗には殆ど意味がなく、椀に始末するよう仕向けた。人里の人間に恐れを抱かれないのは当然。心から愛し、心から愛してくれている存在の何を恐れると言うのだ。

「……氷狐にもう一つ能力がある、ということは分かりました。しかし、彼はもう……」

「藍。妖怪は恐れによつて存在しているわ……でもね、彼の場合は違う。恐れはそれほど……いいえ、全く必要ないの。彼の妖怪としての本質は愛し愛されること……私達とは在り方そのものがまるつきり違うのよ」

「だから、それを知つて何の意味があるんですか!? 彼はもういない! あなたがそう言ったでしょう!」

「そうね……でもそれは間違いだった。彼は今までの基盤であつた思考を現実にする程度の能力を失い、その存在を保てなくなった……ではもし……もしもよ?」

もしもその基盤の部分に別の何かが入り、その何かに最も適した存在へと変わる必要があつたなら?

「夢物語ですそんなもの！」

「物語ならハッピーエンドで終わらせたいでしょう？ 大丈夫よ藍……ここは幻想

郷」

非常識が常識の世界なのだから。

感じた妖力に向かっていた霊夢が辿り着いた場所は、神社の中にあるいつかの草むら付近。霊夢の生活は、この場所から変わったのだ。

この場所で、霊夢は彼と出会った。山菜とお金を手渡され、なんだこの妖怪はと思ったことを、霊夢はまだ覚えていいる。そこから始まったのは奇妙な……それでいて悪くない生活。

毎日のようにやってくる妖怪と一緒にご飯を食べた。昼寝もした。遊びもした。スperlカードルールを教え、一緒にスperlカードも作った。時にやって来る度に彼の団子やら何やらを盗る白黒魔法使いに制裁を下し、迎えに来る紫に嫉妬の視線をぶつけていた。

いつしか毎朝人里に出向いて彼の姿を探すことが日課となり、見つければ夕方まで一

緒にいた。それが日常になり、幸せであると自覚したのも随分前のことだ。そんな思い出が、霊夢の脳裏に次々と浮かぶ……この走馬灯のような体験をするのは、二度目。しかし、最初のように嫌な感じはしなかった。

「……ひーん」

優しく、愛しさをこめてその名を呟く……否、草むらの向こうに聞こえるように呼ぶ。ああ、もう名を呼ぶだけで泣いてしまふそうだと霊夢は一人に思う。もう泣いてしまっているだとか、自分には見えないから知らない振り。

(「そうだ……私は……思ったじゃない」
がさがさと、草むらから音が鳴った。

(「また明日会えるわ」って……昨日の夜に)
ちやら、と音が鳴った。

「れーむー!」

昨日と何も変わらない……愛しい彼の、声がした。

これは、外の世界から人間が紛れ込んだり、一度死んだ人間が別の存在となって幻想郷に転生する……などという話ではない。

これは、とある一匹の子狐の妖怪が幻想郷に住む者たちと時に和やかに、時に慌ただしく……愛し、愛されながら日々を過ごす。

ただ……それだけのお話。

閻魔奮闘記

「……そうですか。わかりました」

「ええ。それでは、私はこれで」

そう言つてこの場から姿を消したのは八雲 紫。そして、彼女と話していたのは四季 映姫・ヤマザナドウである。なぜ紫がこの場……映姫の、閻魔の部屋にいたのか。それは、幻想郷の地獄を管理している映姫に今回起きた異変を伝えるためである。

今回起きた異変……博麗 霊夢と紫だけが認識している異変を、2人は「無想異変」と名付けた。想いが無くした異変……名前の通りである。無論、その詳細も閻魔である映姫は紫より伝えられた。

その時の映姫の表情は、蒼白という他なかつたことだろう。知らず知らずの内に己という存在が世界から消えていたのだ。その恐怖は計り知れないものがあることだろう。しかし、それも一瞬。氷狐が能力を失つたと聞いてすぐに表情は蒼白から安堵のものへと変わった。

幻想郷のことを考え、彼の能力のことで悩んでいたのは紫だけではない。映姫だつてその1人であり、悩んでいた時間なら紫よりも多いのだ。が、その悩みは消えた。もう

映姫が霊夢に彼を滅するように依頼することもないし、殺害などという計画を考える必要もない。

そう、映姫は悩みが消えた瞬間から氷狐を狙う必要がなくなった。つまり、これでの存在と同じように氷狐と接することができる。

「……わけがないでしょう……」

ぐつたりと、映姫は机の上にうなだれた。

映姫が彼と最初に出会ったのは、彼女がまだ物言わぬ地蔵の時。彼の能力によって動ける体を授かり、時を経て閻魔大王となり、幻想郷の地獄を管理するようになって彼の存在を再び知り、紫よりも早くその能力と危険性に気付き、霊夢が彼と出会う前からどうやって彼を亡き者とするかを心苦しさを感じながらも考えてきた映姫。

能力を消す、なんてことを考えずに最悪の方法ばかり考えていた映姫が、どのような表情をして彼の前に姿を現せるというのか。彼と接触したことはあるが、ほんの少しだけ。彼の記憶に残ってるかも怪しい。いや、十中八九残っていないだろう。

一番の問題は、霊夢。一度は彼女に彼を殺せと言った身……そのせいかな、今では映姫を見る度に攻撃をしてくる始末。しかし、それを怖がってはいけない。別に怖がってないが。

「彼が本当に無害になった以上、私が彼を狙う必要はない。次に私が取る行動はただ

「一つ！」

一方的に知っているだけの関係を捨て去り、相思相愛……ではなく顔見知り、友人くらいに彼と仲良くなること。それが、今の映姫の願いであった。

「絶対に仲良くなってみせます!!」

「映姫サマー、書類を持ってきましょう……おお、なぜかはわからないけど映姫サマーが燃えている……」

というわけで今回のお話は、閻魔大王が一匹の妖怪と仲良くなるために奮闘するお話である。

氷狐と仲良くなると意気込んでみた映姫だが、現実的に考えてそれは難しいことは自覚している。その最たる理由として、霊夢の存在が挙げられる。

先に挙げたように、霊夢は映姫に対して敵意を抱いていることは確実。以前に討伐依

頼を出してプチ切れられ、神と人間の差など関係ないとばかりに閻魔を下した。それ以降は正にゴキブリを見つけた主婦のごとく、閻魔を見つけては攻撃してくる始末だ。

そんな彼女と、氷狐はよく行動を共にしている。つまり、彼と仲良くなることはおろか、接触することすら不可能に近い。難しいではなく不可能に近い。閻魔だつて命は惜しいのだ。

「どうするべきか……」

「何がですか？ 映姫サマ。あ、もしかして例の存在のことですか？」

「小町……ええ、その存在のことです」

先ほど書類を届けにきた映姫の部下、小野塚 小町の言う例の存在とは当然氷狐のこと。以前に小町にこの存在をどうするかという話をして以来、ずっと最も良い方法を考えててきた。もちろん二人でだ。

そういえば、彼女にはまだ異変の事を話していなかったかと思いつた映姫は、彼女について先ほど紫から聞いた話をする。その話を聞いた小町の顔には、笑顔が浮かんでいた。

「良かったじゃないですか映姫サマ。これでもう悩まなくて済みますね」

「確かにそのことで悩む必要はなくなりましたが……代わりに別のことで悩みができてしまいましたよ」

「……苦労してますね、映姫さま」

「その苦労の一部にあなたのサボり癖があることを気づいていますか？　そう、あなたは普段からサボることが多すぎる」

「（あ、説教が始まる……これは阻止しなければ！）あー、映姫さま!?　その新しい悩みつてなんですか!?!」

「……まあいいでしょう。その悩みとはですね……」

その後、新しい悩みがその存在と仲良くなりたいたいと言う以前に比べて遥かに可愛らしい悩みであることに思わず表情を緩めてしまった小町が映姫に恥ずかしそうに説教をされたのは言うまでも無いことだろう。

映姫が紫の話を聞いてから4日ほど経った。現在彼女がいるのは人里の門の前。彼女は氷狐と仲良くなるべく、仕事を可能な限り終わらせて今日この日を含めた2日間だけ休暇をもぎ取ってきたのだ。帰った時には書類の山が迎えてくれることは間違いない。

彼女は門の前で一人、グツと両手に力をこめて決意を新たにする。必ずこの2日以内

で彼と仲良くなってみせると。その様子を見た門番から微笑ましいものを見ているような視線を向けられていることなど気づかないくらい真剣に。

そしてその気持ちのまま人里の中へと足を踏み入れた映姫は……。

「何しにきたのよ閻魔……」

「……なんで巫女がここに？」

「勘よ」

「答えになっていませんが、よくわかりました」

あらためて自分がどれほど無謀なことに挑もうとしているのかを悟った。

幸いというべきか、映姫は現れた霊夢に攻撃されることもなく人里の中に入ることができた。但し、霊夢の監視付きで。無論、監視の理由は氷狐に近づかないようにするためだろう。

こうなってしまうては、彼女が氷狐と接触することは難しい……とは考えず、寧ろ好都合だと映姫は考えた。その理由として、霊夢が氷狐と非常に仲がいいことが挙げられる。

霊夢が人里に来る理由が氷狐と会うためなのは周知の事実であり、映姫も当然知っている。今の時間帯が朝方であることもあり、こうして霊夢が見計らったように映姫の前

に現れたのは何も彼女が来ることだけを予期したものではないだろう。つまり、こうして霊夢と一緒にいれば彼と出会えると、映姫は確信していた。

「れーむー！」

「氷狐、おはよう」

「うー♪」

かくしてその確信は大当たりだった。自分たちが歩いてきた門の方角から彼は現れ、振り向いた霊夢に飛びつくようにして抱きついた。その様子を羨ましく思いながらも、映姫は彼と再び出会えたことに内心で歓喜した。

映姫が彼を直接見たのは、彼が毒に倒れて永遠亭にいた際にこっそりと見舞いに行つた時が最後。元気に動き回っている氷狐の楽しそうな表情を見て、知っていたとは言え報告と直接見るのでは安堵の度合いがまるで違う。

抱擁を交わす二人を見ていた映姫だが、なぜか霊夢が気になった。今までの霊夢は、どこか母親のような目で彼を見ていたと映姫は記憶している。が、今の霊夢が氷狐に向ける眼差しは恋慕のそれ。何か間違っているような気がした映姫だが、馬に蹴られたくはない……もとい、巫女の霊弾を受けたくはないので思うだけにとどめた。

不意に、氷狐の視線が映姫へと向けられた。その視線に込められている「この人は誰だろう」という思いに、やはり自分のことを覚えていないのかと当然に、同時に落胆し

つつも小さく手を振ってみる。すると彼は笑顔で振り返してくれた。それだけで、彼女の心になんともいえない嬉しさが広がっていく。

「……」

「……手を振っただけじゃないですか」

同時に、巫女からぶつけられる嫉妬の視線に映姫は内心冷や汗をかいた。未だに無邪気に手を振ってくれている氷狐に手を振り替えしつつ、顔は霊夢から背けられる。閻魔だつて命は惜しい。

しかしずつとこうしてはいられない、と映姫は少しだけ身を屈めて氷狐に視線を合わせる。映姫は彼を知っている……が、彼は映姫を知らない。ならば、やることは一つ。

「私は四季映姫・ヤマザナドゥ。映姫、が名前です」

「えーき？」

「はい、えーきです。あなたの名前はなんですか？」

「ひー♪」

「氷狐……良い名前ですね」

まずは、自己紹介から。

今更氷狐と仲良くなることは無謀だと考えていた映姫だが、思ったよりも簡単かもし

れないと思い始めていた。いきなりの霊夢との邂逅は流石に焦ったものの暴力的に拒絶されることもなく、氷狐と出会えて自己紹介をするに至った。この時点で、映姫の目は半分ほど達成できている。

一方的に知っている関係から知り合いというレベルにまで引き上げることができた。ならば、後はもつと仲良くなつて友人、もしくはそれ以上の関係となるだけ。

(いや、それ以上の関係ってなんですか)

と自分で自分にツツコミを入れつつ、映姫は目の前を歩く二人を見る。手を繋いで歩く霊夢と氷狐の姿は、互いの身長差もあつてか姉弟のように見える。霊夢をよく知るものなら、親子のようだと比喩するかもしれない。しかし、先の霊夢の氷狐に向ける眼差しを見た映姫にはそれらとはまた別の関係に見えた。

それは恋人……ではなく片思いの男女。それもどちらかが鈍感だとかお互いに思い合っているのに気づいていないなどというものではなく、片方が恋し、もう片方はその対象に入っていないというような切ないもの。そういった関係を幻視した映姫は霊夢を応援したくなる衝動に駆られるが、同時に疎ましくも思った。当然、なぜそう思ったのかは理解できない。

(というかですね、私の目的は彼と仲良くなること……)

ふと、本当にそうなのか？ と心が首を傾げた。いや、仲良くなりたいたいのには本音であ

ることは確かなのだ。が、それだけだったか？ という疑問が映姫の心に浮かんだ。

足を止め、彼女は疑問について考える。彼……氷狐と仲良くなる。具体的にはお互いを名前で呼び合えるくらいにはなることを目標に。それは既に達成できているものと考えて差し支えないだろう。

しかし、未だに彼女は彼と仲良くなることを望んでいる。これ以上仲良くなるということは、親友となりたいのだろうか、それとも男女の関係になりたいのか、彼女には分からない。だが、なんとなくそれは違うと思った。

仲良くなること以外の理由で、彼に近づきたいと思っている。しかし、その理由が思いつかない。しばらくその理由を立ち止まったまま考えていた映姫だったが……。

「……………あれ？ 2人はどこに……………」

霊夢と氷狐に置いていかれたのは、まあ当然のことだろう。

2人がどこへ行ったのか、映姫には大体の予想はついていた。今までの行動から察するに、2人は甘味処、或いは博麗神社に行っている可能性が高いと考える。その考えの下に甘味処へと足を進める映姫であったが、そこに2人の姿はなかった。なれば、2人は神社のほうにいるのだろう。

ならば急ぐ必要はないと、映姫は甘味処で一服することにした。この場所で彼がよく

食べている団子を口にするのもいいかと考えたからだ。勿論食べたら神社に向かうつもりなのでお土産用の団子も注文しておく。

「はむ……うん、ここの味は変わりませんね」

幻想郷の住人という中において、映姫は紫ほどではないにしろ最古参とも言うべき存在だ。その幼い見た目もあつてか甘いものが好きである彼女も、この甘味処は古くから懇意にしている。そのため、氷狐が同じ店の団子が好きだと知って、少し嬉しかったことを、彼女はいまでもよく覚えていた。

美味しい美味しいと団子を食べていると、不意に人間の親子の姿が目に入った。人里なのだから親子がいるのは当然なのだが、なぜか映姫はその光景から目を離せず이었다。

青年と呼んで差し支えない男性と、美人寄りの容姿であろう女性、そしてその間にいるのは彼等の息子と思わしき少年。見た目だけならば、氷狐と同じくらいだろうか。楽しそうに手を繋ぎ、自分の前を横切っていく親子の姿を見て、映姫は羨望の眼差しを向けている自分に気づいた。

「……親子……ですか」

人間であれば、恐らくは自然と家族、親子という形となる。しかし、人外は一概にそうとは言えない。

子を産み、卵を生む妖怪は例外。この存在は元々獣や虫と言った存在が妖怪化した存在。己の種族反映の為に繁殖しようとする本能がある。妖怪化してからはその本能が薄れるようだが、それは半ば不老長寿となるからであろう。

そして恐れなどの思いから直接生まれた妖怪はそう言った形……番（つがい）や夫婦と呼ばれる形に収まることは少ない。無論恋愛を行う妖怪はいるし、子を宿すことも産むこともできる。それは閻魔と呼ばれる映姫として変わらない。

しかし、妖怪は自身が不老長寿である故に、そう言った本能は殆どない。つまり、家族というコミュニティを作る意義がないのだ。八雲家などの例外もあるが。

元々が地蔵である映姫には、当然ながら親、家族と言った関わりは一切ない。強いて言うならば、その地蔵の製作者だろう。しかし後になってから自我を持ち始めた彼女に、その存在についての記憶などあるはずもない。天涯孤独と言ってしまうと、そんなだろう。

「……ああ、居たじゃないですか。私にも父と呼べる存在が」

今までの考えを否定するかのように、ストン、とある考えが映姫の心の中に嵌った。同時に、彼女は氷狐と仲良くなるという目的の他の目的……否、本来の目的を思い出した。そうとなれば即行動。行くか行かないか、などという選択は一瞬の時間があれば決まる。

白黒はつきりつける程度の能力……優柔不断という言葉など、彼女の辞書には存在しないのだ。

映姫の予想通り、氷狐は博麗神社、その生活スペースの縁側にいた。靈夢の姿がないのが気にはなつたものの、これ幸いと映姫は氷狐に近づいていく。その足音に気づいたのか、氷狐が彼女の方に顔を向けた。

浮かぶ表情は、笑み。純粹に、彼は映姫がこの場に現れたことを歓迎している。それだけで、映姫の顔にも笑みが生まれた。

「えーきー！」

「はい、えーきです。置いていくなんて酷いですよ」

「あーうー……」

映姫が苦笑しながらそう言ってみると、彼はしゅん、と狐耳と顔を俯かせた。その姿がとて微笑ましく、彼女の苦笑はすぐに微笑へと変わる。

改めて思う。彼を亡き者にしようと思苦しく思う日々が終わりを告げてよかつたと。それを成した靈夢には感謝しても仕切れないとも思う。何よりも、今こうしている瞬間

が、時間が愛おしかった。仕事の都合上長く彼と居ることは叶わないだろうが、少なくともこうして姿をさらして言葉を交わすことは出来る。

「……お願いを一つ聞いてくれるなら、許してあげますよ」

「うー？」

映姫は彼が何を言っているのかは分からない。しかし、少なくとも彼がお願いという言葉に対して興味を抱いたことは分かった。その際に彼が首を傾げていたものだから、彼女は思わずクスリと笑ってしまう。

そうして彼女が氷狐に対してしたお願いと言うのは……。

「うーうー♪」

「えへへ……」

見た目相応の笑顔を浮かべる映姫が氷狐にしたお願いは、頭を撫でてほしいという可愛らしいもの。当然、氷狐は断るところか嬉しそうに彼女の頭を撫でている。その理由は、彼女の目的に関係している。

そして頭を撫でられながら、映姫は目的を口にした。

「氷狐……突然こんな事を言われたら困惑するかと思いますが……ありがとうございます」

「うっ？」

「あなたは覚えていないかもしれませんが、物言わぬ地蔵だった私に寒さを感じる肌を、果実を甘いと感ずる口を、こうして動ける体をくれました。あなたは、私の恩人なのです」

映姫の言葉に、氷狐は彼女の予想通り首を傾げた。彼が2000万もの間八意 永琳のことを覚えていたのは、彼女を愛していたが故。ただの地蔵に出会った切欠までは覚えていないだろうという予想は、悲しいかな正解だった。それを少し寂しく思うが、それは今の幸福に比べれば微々たる物。

映姫の本来の目的……それは、彼へと感謝の言葉を届けること。彼が居なければ、今こうして自分が存在していたという保証はどこにもないから。

「だから……ありがとうございます」

心からの、ずつと言いたかった感謝の気持ちを言葉に出す。何度でも言いたいのが、それでは彼を困らせてしまう。もつと言いたい言葉があるが、それは彼を困らせてしまう。

だから、口から出すのはありがたいがどうの感謝だけ。もう1つは、心の中に。

「……あーうー♪」

この笑顔を見られただけで満足だからと、映姫はもう1つの言葉を飲み込んだ。

その日の夜、映姫は彼岸の先にある自宅へと帰ってきていた。今は休暇中であるため、のんびりとベッドの上で体を横にしている。

あれから見計らったように戻ってきた霊夢は映姫を少々睨みながらも追い出すことはせず、仲良く(?) 3人で映姫のお土産である団子を頬張っていた。その後はのんびりとお昼寝をし、夕方になれば共に紫と共に神社から去っていく氷狐を見送った。

さて、自分も帰ろうというときに、霊夢は映姫に予想外なことを言ってきたのだ。その事を思い出したのか、彼女の頬が楽しそうに緩む。

「“あんたにも紫にも負けない”……ふふっ。安心してください巫女。少なくとも、私にその気はありません」

霊夢に聞こえないことが分かっているにも関わらず、映姫は1人呟く。その頭に浮かぶのは、1匹の子狐の妖怪。

自分が彼に向ける想いは、恋慕のそれではないと映姫は確信している。とは言っても、友人に向けるものとも違うが。ならば、それはどういった思いなのか。

地蔵に肉体を与えた……その行動を見れば、見るものが見れば、思うものと思えば、それは神の所業ともいえる。崇拜、信仰という考えに至る可能性もあったが、映姫が思う

それは違う。

映姫は、氷狐によって作り出された。それは言い換えれば、生み出されたということでもある。昼間に見た親子、それに向ける羨望の視線。その意味をはつきりと理解した彼女が彼に思ったことは一つ。

「休日の後一日……巫女に勘違いさせておくのも面白そうですし、明日も会いに行きましょう。また、頭を撫でてくれるでしょうか……いえ、きつと笑顔でしてくれますね。そうですよね……？」

「お父さん……」

その想いは、血のつながった子が父を慕うものと同じもの。

「はっ！」

「ど、どうしたの？ 早苗」

「なぜか、私も言わなければいけないことがある……気がします」

「……？ 何を？」

「お父さん、もしくはおじいちゃん、或いはご先祖様と」
(この子は一体何を感じたんだろう……)

子狐話集記

これは、幻想郷の住人のいろいろとアレな話をするお話である。

【恋の白黒魔法使いの話 《こいのしろくろまほうつかいのはなし》】

霧雨 魔理沙は自宅で腕を組んどある現実と向き合っていた。いや、向き合っていたというよりは再認識していたと言った方が正しいのかもしれない。

彼女の頭に浮かぶのは、同じ魔法使いのパチュリー・ノーレッジとアリス・マーガトロイド、半人半霊の魂魄 妖夢、月人の鈴仙・優曇華院・イナバ、そして風祝で現人神である東風谷 早苗。

以前に魔理沙は手癖が悪いせいで他の存在から嫌われていると言ったが、事実はそのではない。むしろこういった人外には博麗 霊夢と同様に好かれている。それは彼女の分け隔てない、人懐っこく明るい性格によるためであろう。それを踏まえた上で。

「……やっぱ、そういうことなのか？」

疲れたようにため息を一つ。しかし表情は満更でもなさそう。むしろ嬉しそうである。

魔理沙は机の上にあるいつもの黒いトンがり帽子を被り、家から出て箒に跨り、浮き上がる。目指すのは、霧の湖に聳え立つ紅の館。

「そんじゃ……まずはパチュリーからだな」

「なあパチュリー」

「なに？ 魔理沙」

「あたしのこと好きか？」

「ぶふっ!? ごっほげほー」

いつもの如く門番をぶつとばし、当然のように図書館の中に入り、自然に子悪魔に出して貰った紅茶やらお菓子やらをパチュリーと共に魔導書を読みながら口にしていた。魔理沙がそう言うと、パチュリーは飲んでいた紅茶を盛大に吹き出した。

当然彼女が読んでいた本は吹き出した紅茶で見ても無残な状態……それに對し、魔理沙は読んでいた本を机の下に隠し、自身に飛んでくるものは何も乗っていない皿で防いだ。乗っていたはずのお菓子は全て魔理沙の口の中である。

「いきなり何を言い出すのよ!？」

「もぐもぐ」

「飲み込んでから話しなさい……っていつの間にかお菓子が無い!」

「ごくん……美味かった。で、あたしのこと好きか?」

いつもはしないツツコミをしたせいか少し疲れた様子のパチュリーに、魔理沙は再び問いかける。その問いを、パチュリーは少し顔を赤くしながらも考える。

なぜ魔理沙が急にこのような質問をしてきたのか。もしや、そういうことなのか?

我が世の春が来たのか? などと考えるが魔理沙の表情は至っていつも通り。何かを期待している様子もなく、目線は手にした本に向いているので本当に純粹に聞いてきたのだろう。という判断をしたパチュリーの返答は。

「そうね……好きよ。友人としてね」

「そっか。あたしもパチュリーのことは好きだぜ。友人としてな」

本当はもつと上の好意なのだとは言えず、当たり障りのない答えを返した。それに対して返ってきた答えに少しがっかりとしながらも、一緒に返ってきた笑顔を見て上機嫌になる。

なぜ急にこのような質問をしてきたのかはパチュリーには分からない。が、その日はいつも以上に楽しい時間を送ることができた気がした。

次の日、魔理沙は人里にいた。その理由は、寺小屋で行われる、アリスによる人形劇を見るためだ。

その道中で甘味処で団子を食べている氷狐を発見、いつものように団子を貰う（盗む）と運悪く霊夢が登場。いつものようにその身にスペルカードによる七色七つの霊弾を受けた。このようなことを繰り返しているしか、魔理沙はこのぐらいでは気絶しなくなつたことは喜ぶべきか悲しむべきか。

「あんたも懲りないわね……ていうか随分としぶとくなつたじゃない」

「いつも喰らつてるからな。相変わらずお母さんの怒りは痛いぜ」

「誰がお母さんか白黒。滅するぞ」

「ごめんなさい、笑顔で言うのやめて。マジで怖いから」

にーつこりとした霊夢に思わず土下座する魔理沙。本能が言っている、ここで謝らなければ死ぬと。

なんとか許してもらえた魔理沙は2人と分かれて寺小屋へと向かう。2人も誘つたのだが、氷狐は友達と遊ぶ約束を、霊夢は妖怪退治の依頼を受けていたようでそのまま別れることになった。

そしてやってきた寺小屋。既に人形劇は始まっているらしく、子供たちの楽しそうな声が響き、その中で物語を朗読しているアリスの綺麗な声が、魔理沙にはよく聞こえて

いる。外の世界では紙芝居のときに使うような棒を用意し、その後ろで人形を動かす者が声を出して劇を披露する。が、魔法使いであり、人形遣いであるアリスは朗読も人形の動きも台詞も演出も全て一人で行うことができる。

かくして人形劇は好評のまま終わりを迎える。そして子供たちに手を振りながら帰ろうとするアリスに、魔理沙は後ろから声をかけた。

「お疲れ、アリス」

「あら、魔理沙じゃない。見てたの？」

「見てくれて言ったのはアリスじゃないか」

「そうだけど、正直見てくれるとは思わなかったわ」

「信用ないなあ」

などと会話をし、お互いにくすくすと笑い合う。2人の出会いは春雪異変の時でその際には戦った時……といっても霊夢が蹂躪し、魔理沙は落とされたアリスを流石に傷だらけのまま放置するものなんなので介抱していただけである。その際に彼女が魔導書を一冊ちよろまかしていることを、アリスは知らない。

そうして少し会話をした後、魔理沙は1つ質問をした。

「なあアリス」

「なに？」

「あたしのこと好きか？」

「はあ!？」

いきなり何を言い出すんだとばかりに声をあげるアリス。飲み物を飲んでいたらパチコリーと同じように吹き出していたことだろう。そして、その頭の中では質問の意図を予想する思考が渦巻いている。

もしや、そういう感情を自分に対して抱いているのか？ と考えるも魔理沙の表情は至つて普通、普段から浮かべている笑みと何も変わらないように見える。魔法の森にある変なキノコでも食べたのだろうかと考えてみるが、幻想郷一キノコに詳しい彼女がそのような失敗をするとは考えにくい。

もしや惚れ葉の類でも気づかない内に飲まされていたのか？ とも考えるがアリスが魔理沙に最後に会ったのは人形劇の日程を伝えた5日前、それも彼女の自宅の入り口前で日程を伝えた程度。何かを飲まされたということはありえない。

そうして彼女が出した結論は、ただの友人としての好意の確認だった。

「……ええ、魔理沙のことは友人として好きよ。それがどうかしたの？」

「いや、特に深い意味はないよ。あたしもアリスのことは好きだぜ」

その後は2人で昼食を共にし、そのまま別れた。アリスの「願う関係にはまだまだ遠いなあ」という呟きは、飛び去ってすっかり小さくなってしまった魔理沙には聞こえない

かった。

更に次の日、魔理沙は冥界にある西行寺の屋敷で妖夢と共に昼食をとっていた。珍しく西行寺 幽々子の姿がないのは、八雲 紫の屋敷に遊びに行っているからだという。

「やっぱ妖夢の作る飯は美味いな！」

「あ、ありがとうございます……」

本当に美味しそうに食べる魔理沙の姿を、妖夢は嬉しそうに眺める。妖夢にとつて彼女は意中の人だ。その人が自分の料理を食べて美味しいと言ってくれているのだから嬉しくないはずがなかった。

不意に、魔理沙の手が止まった。急にどうしたのだろうか？ と妖夢も手を止めて魔理沙の方を見たとき、魔理沙はさらっとこんなことを聞いてきた。

「なあ妖夢」

「なんですか？ 魔理沙さん」

「あたしのこと好きか？」

「……はいっ!？」

食べる手を止めていてよかったと妖夢は思わずにはいられない。食べながら聞いていたら、とても恥ずかしいことになったであろうことは簡単に予測できるから。少なく

とも、意中の相手に見せられるような状態ではなくなってしまう。

その未来をなんとか回避することに成功した妖夢は、魔理沙の質問の意図を考える。彼女の質問は、自分のこと好きか？ これだけ。自分のこと「が」という質問だったなら、彼女は自分の気持ちに気づいているということになる。が、自分のこと「は」という質問なら、友人や親しい者に聞くような軽いものになる。どちらも抜けているのはわざとか、それとも彼女の性格ゆえか。

魔理沙の表情は至って普通、普段と変わらない笑みを浮かべている。その表情から少し落胆しつつ、妖夢は軽い方だと思った。

「えっと……魔理沙さんのことは好きですよ？ その……友人として」

「そっか。あたしも妖夢のことは好きだけ。友人としてな」

にひひっ、と子供のように笑う魔理沙を見て顔が赤くなることを自覚しながら、妖夢は昼食を再開する。

いつになれば自分の想いを伝えることができ、望んだ関係になれるのか……そんなことを思いながら。

「なあ鈴仙」

「はい？」

「あたしのこと好きか？」

「はい!？」

妖夢と会った同日、魔理沙は偶然にも人里で置き薬の集金をしている鈴仙と出会った。これ幸いとばかりに魔理沙は鈴仙に同行し、4件ほど回った時に4回目となる質問を投げかけた。当然、いきなりそのようなことを聞かれた鈴仙は驚く。思わずその場で飛び上がってしまうくらい盛大に。

そして他の3人と同じく、その質問の意図を考える。鈴仙自身、魔法使い2人と同じくらいか、もしくは訳の分からない思考回路をしている主の相手をしている半人半霊以上の思考力を持っている。師が師なのでそれは当然なのだが。

その思考力と今までの魔理沙の行動や言動から考え付いた意図は、いつもの悪ふざけか冗談という結論に至った。

「んーつと、好きですよ」

「友達として？」

「はい」

「そっか。あたしも鈴仙のことは好きだぜ。友達として」

無論、鈴仙が抱いている「好き」とは本来なら異性となる関係に必要なものなのだが。故に彼女が魔理沙の返答を聞いて残念そうに苦笑を浮かべるのは仕方のないこと

だろう。

ただ、その日の集金が終わるまで魔理沙がずっと一緒だったのは彼女にとって嬉しいことだった。

次の日、魔理沙がやってきたのは妖怪の山の頂上にある守矢神社。その目的は、当然ながら早苗に先の4人と同じ質問をするためである。なぜ魔理沙がこのような行動に出るのか。それは、今までの魔理沙に対する彼女達の行動の真実を確認するため。

彼女たちは魔理沙に対して、他の存在よりも好意的過ぎる。恋の魔法使いを自称する魔理沙は、その行動の理由が「彼女たちは自分に恋している」と、誰かに聞かれれば自意識過剰だと言われかねない理由であると判断したのだ。そして、確認すべき最後の人物が今、魔理沙の目の前に箒を持って立っていた。

「あ、魔理沙さん。おはようございます」

「ああ、おはよう早苗。なあ、早苗。お前に聞きたいことがあるんだ」

「なんですか?」

「あたしのこと好きか?」

「好きですよ?」

いきなりの魔理沙の質問に対して、早苗はあっさりと、特に驚いた様子もなく答えた。

魔理沙がじつと彼女を見てみるも、その表情は至って普段と変わらない穏やかな笑みを浮かべている。

こうして即答されてしまえば、それはどういう意味で？ とは聞きづらい。しかしそれをやってのけるのが白黒魔法使いである。そこに痺れもしなければ憧れもしない。

「それは友達として？」

「ライクかラブならライクですね。私としてはラブでも……」

早苗の返答に困ったのは魔理沙。後半の部分は聞こえていないが、そもそも「らいくって何？」という心情だ。

魔理沙とてラブという言葉も意味も知っているがライクという言葉は聞いたことがなかった。ただ、早苗の言い方とラブの前に出てきた言葉という点から友人かそれに近い言葉ということは予想できたのは幸いか。

「ん、そっか。あたしも早苗のことは好きだぜ」

「それはどういう意味ですか？」

「勿論、らいくさ」

お互いになつこりと笑い、しばらく談笑した後、魔理沙は去っていった。その後姿を、早苗はどこか熱のこもった視線で見送るのだった。

そんな視線など露知らず、魔理沙は空を飛びながら今までの問答から自分の考え、及

びその答えを導き出す。

「うん、あたしの勘違いだな。流石に女の子同士っていうのは幻想郷でも非常識だよな！」

神は言っている……常識は幻想郷では捨てるものと。少女たちの恋路は、まだまだこれからである。

「なあ霊夢。あたしのこと好きか？」

「嫌い」

「即答!?! ひ、氷狐は？」

「うーあー♪」

「痛い！ ちよ、霊夢!?! なんで叩くんだ!?!」

「うるさい！ 嫉妬の霊弾で滅しろ!!」

【崇り神の見た夢 《たたりがみのみたゆめ》】

洩矢 諏訪子は誰かに頭を撫でられる感触を感じながら目覚めた。ゆつくりと開く視界に写ったのは、自らが着ているものと同じ白い寝巻き、住んでいる神社の見慣れた縁側。

まだ少し眠っている頭で顔を動かし、視線を彼女の感覚で左へと向ける。その先に見えるのは、愛しい青色。

「……………うー……………おはようひ……………」

「うー、すー……」

諏訪子の髪を撫でながら微笑んでいる氷狐がそこにいた。

段々覚醒してきた頭で、諏訪子は今の状況はどういうことなのかと考える。時間帯は、朝か昼前。寝すぎたのか早いお昼寝なのかは判断できないが、氷狐に膝枕をされた状態で目覚めたのは心地よい。

一番の疑問は、腹部の重み。ちらりと目を向けてみれば、そこにあるのはほっこりと膨らんでいる自身の腹。何があつたと一瞬疑問に思ったものの、すぐにこの中に新たな

生命が宿っているのだと理解する。なれば、これは誰との子か？

「言わせないでよ恥ずかしい」

「う？」

「あーうー、気にしないで」

「うー」

こくりと頷いた彼を見て、諏訪子は満足そうに笑った。早い話、宿った生命の片親は氷狐なのだ。そうなった経歴は、まあぶつちやければこのカエル神の夜這いである。そうしていたした結果がこの腹である。

最初こそ憤りを顔にしていた霊夢や紫、八意 永琳たちであつたが、流星に子を宿されてはぐうの音も出ない。降ろせなどと残酷なことも言えず、最終的に氷狐本人が理解できぬままに責任を取ることとなった。

新たな生活は、かつて諏訪子が土地神として在った古代と同じ彼との生活。そこに八坂 神奈子と早苗も加われれば、ある意味で古代の生活そのままである。それが、諏訪子にとって何よりも嬉しかった。

「今日はいいい天気だねえ」

「あーうー」

ぼんやりと、縁側から見える空を見上げる小さな影2つ。昼食を取るには少し早く、

朝食は既に取ってしまったている。記憶を辿れば、神奈子は伊吹 萃香と飲みに行っているらしいし……朝から飲むなよとは無論言っている。聞いている様子はなかった。早苗は信仰を得る為に人里へ、ついでに買い物や魔理沙に会いに行っている……明らかに後者が本命である。分かっているが突っ込まなかった。

つまり、今は2人きり。しかも膝枕をされ、頭を撫でられ、涼しく心地良い風が2人の体を撫でる。

「なんて甘美なシチュエーション……っ！」

「うっ？」

「うーあー、気にしないで」

「うー」

思わず声に出してガッツポーズをする崇り神が1柱。キョトンとした子狐のなんと愛らしいことか。そう思いつつ、諏訪子は膨らんだ腹を撫でる。

膨らみの度合いからして、おおよそ10ヶ月と言ったところだろうか。時折生きていると知らせるように腹を蹴る振動があることが、生命の息吹を感じさせる。生命を生み出すことが出来るとは、まるで神様みたいだ。あ、神だった、などと脳内で1人漫才を繰り広げる。

かつて生んだ娘とは違う、本当の意味での彼とだけの子。娘が生まれた時は当然嬉し

かつたが、今ある命を生み、彼とともに育むことが出来たすれば、それはどれほど幸せなことだろうか、彼女は思う。その幸せな未来は、もうすぐそこまで近づいている。

気がついた時には諏訪子が見ている景色が変わっていた。先ほどまで空を見上げていたのだが、縁側という場所こそ変わらないものの、今見ているのは自身の膝を枕に眠る青い髪と、その青に抱きしめられている自身と同じ金の髪。その金の髪には、青と同じ獣の耳が生えていた。

一瞬の疑問の後、この金が自身と彼との子なのだと思い出す。この子を産んでから、もう3年ほど経っているのだ。

ゆつくりと、諏訪子はさらさらとした金の髪を撫でる。あどけない寝顔は、両親譲りのものだろう。髪色は間違はなく自分のもので、獣耳は言わずもがな彼からの遺伝。神と妖怪の間に生まれた愛し子。生まれた当初は、やはり色々と大変だったと、彼女は思いつ返す。

夜泣きは、それほど煩くはなかった。というのも泣き声が人間とは違うし、そもそも獣に近かったのかか細い鳴き声しか上げなかったからだ。しかし、当然ながら部屋は同じなので寝ている時に鳴かれれば煩わしく感じることも多々あった。それも経験済みなのでそれほど苦ではなかったが。

問題だったのは、この子自身ではなく神奈子の存在だった。早い話、親バカだった。親ではないがそれしか言い様がないくらい猫可愛がりしていたのだ。酷い時は一日中手放さないくらいだ。無論、諏訪子と氷狐、早苗に矯正されたので今はそれほどでもない。何をしたのかは言えない。

今ではこうして彼より少し小さいくらいにまで大きくなり、親子仲良く昼寝を楽しんでいる。寝る子は育つと言うが、もしも彼よりも背が高くなったら彼はどういう反応をするのだろうか。諏訪子はそれが楽しみで仕方がない。

「すわ……?」

「あ、おきた?」

「うー……」

何も変わらない彼が変わったことと言えば、こうしてちゃんと名前を呼んでくれるようになったことだと諏訪子は思う。子育てをしながら呼び方を矯正してきた甲斐があったというものだ。と言っても、その他はあまり変わらないが。

少し眠そうに目を擦りながら起き上がった彼は、抱きしめていた我が子の頭を自分の代わりに諏訪子の膝の上に乗せる。その光景を、諏訪子は幸せそうな顔で見ている。

穏やかな、それでいて心地の良いゆっくりと流れていく時間。それは、この世界で最も得難く、同時に最も身近な時間。故に尊く、故に心地良く。

「ねえ氷狐」

「うっ？」

「わたしね……今すつごく」

故に、人はそれを幸福と呼ぶのだ。

「幸せなんだ」

もぞもぞと、膝の上の愛し子が体を起こす。寝ぼけ眼で親の顔を交互に見る姿の愛らしさは、間違ひなく父親譲りのものだろう。そんな愛し子は数秒両親の顔を見つめ……につこりと笑みを浮かべる。それだけで、2人の顔に笑顔が宿るのは当然のことだろう。

「まあま」

「はうっ!!」

何かを撃ち抜かれた音がした。声を上げた相手は無い胸を抑えながらうずくまっている。傷はかなり深いようだ。色々と台無しである。

「ばあば」

「うー♪」

そんな妻に対し、夫はにっこりと笑いながら我が子を抱きしめる。頭を撫でられる金の神の子は嬉しそうに抱きしめ返し、甘えるように頭を父に擦り付ける。

隣で震えながらうずくまっている母を不思議そうに見ながらも、両親を見ながら愛し子が一言。

「だいすき♪」

「という夢を見たんだ」

「台無しですよ諏訪子様」

「ところで早苗」

「話を逸らさないで下さい」

「叔父と叔母、どっちが欲しい?」

「弟と妹じゃなくて!?!」

【遙か遠き記憶 《はるかとおききおく》】

ゆつくりと、視界が黒から色取り取りの世界へと変わる。その青い瞳に映るのは、樹木の緑と茶に果実の赤。そして、暗くも明るい夜空。

むくりと、目を開けた小さな存在は起き上がる。自分が今いる場所はどこのかを判断するべくきよろきよろと辺りを見回すが、分かったのは森の中という大雑把な現状。それはいつものことなのか、存在は特に何をするでもなく立ち上がり、実っている赤い果実を手にかじる。

瑞々しく、程よい酸味と甘味のあるそれは一般的に言うリンゴという木の実に酷似している。が、存在はその果実の名を知らない。知る必要もない。知っているのは、その果実がとても美味しいものであり、自身の好物であるということだけだ。

今日は何をしようかと、存在は考える。この森にいるのは自身を除けば、獣としか言えないような無い存在や俗に言う妖怪といった存在くらいである。襲われたことは無い。出会うのは、皆危険の無い存在ばかりだ。まるで誰かが守っているかのように、何かを選別しているかのように、この存在は危険な目にあつたことがなかった。

そして、存在はその何か、誰かをぼんやりと、本能的な部分で理解し、それを愛していた。それを愛だという名の感情だとは知らず、理解もしていなくても。存在は愛し方を理解し、自身の周りの全てを愛している。

何か、誰かとは即ち、世界。世界から何よりも愛された存在。そして世界を愛した存在。いつの頃からか、その存在は世界から神に等しい能力を与えられた。我が子を守るように、恋人に贈るように。それが、遙か未来でその存在を傷つけるとも知らずに。

彼の存在の日常は至って不変だ。起きる、食べる、遊ぶ、食べる、遊ぶ、食べる、たまに水浴び、寝る、起きる。そういつたことを飽きることも無くひたすら繰り返し、ただただ日常を謳歌する。与えられた能力のせいで成長することもなく、時に一人で、時に友人と共に日々を過ごした。

この存在がいつ、どうやって生まれたのかは誰も知らない。いきなりそこに現れたと言うモノがいれば、自分よりも前にいたというモノもいる。分かっているのは、彼の存在が妖怪という存在であり、何かしらの獣が元になっているということだけ。

獣が元というだけあって、彼の存在には知性や知識と言ったモノはない。眠くなったら寝る。目が覚めたら起きる。お腹がすいたら食べる。体を動かしたいから遊ぶ。そんな本能だけで日々生きていた。

そんな存在がある日、1つのことに興味を持った。それは、彼の存在が住む森の近くにある不思議な森とは違う場所。遙か未来で広がる“町”という場所を偶然見つけた彼の存在は、それに興味を持ち、たびたび入り込んでいた。

そこは、彼の存在にとつて別世界と呼ぶべき場所だった。見知らぬ存在、見知らぬ物体、見知らぬ様々なモノ。好奇心旺盛な彼の存在が夢中になるのは仕方ないというものだろう。しかし、見知らぬ場所なだけあつて危険もあつた。

彼の存在とよく似た見知らぬ存在は、彼の存在を見つける度に奇妙な筒や獣の爪のよう鋭い物……後に銃や刃物と呼ばれるものを用いて襲い掛かつてきたことは一度や二度ではない。しかし、好意的に接してくる存在もいたのだ。そういった存在から知識を、言葉を教えてもらう日々が、次なる存在の日常となつた。残念ながら言葉は“あーや”“うー”などしか口に出来なかつたが。

そんな日常が数10年も過ぎた頃に、彼の存在に転機が訪れる。いつものように町に入り込み、いつものようにそこに住む存在……人間に気を付けながら町中を歩き回つた。

そして、たまに同じくらいの大きさの人間と共に遊ぶ公園と呼ばれる場所で1人で遊んでいた時、その人間……少女は現れた。

「ねえねえ」

「うー？」

「あなた、かわったおみみをしてるのね」

「あーうー」

「うーん……なにいつてるのかわかんない。ねえ、あなたのおなまえはなあに？ わたしはね……」

不意に、頭を撫でられる感覚を感じながら、氷狐は目覚めた。その瞳に最初に映ったのは、先ほどまで一緒にいた少女……ではなく、その少女がそのまま大人になったような女性。なったような、ではなく紛れもなく本人であるのは、今は氷狐と女性……永琳のみであるが。

「おはよう氷狐」

「あーうー、×ー×」

「あらあら……その名前で呼んでくれるのは嬉しいけど、今の名前は永琳よ」

「うー、えーり」

「よろしい」

氷狐が呟いたのは、かつて少女だった時の永琳の名前だ。現代では発音できず、聞き取れもしないそれは、遙か古代を生きた月人にしか伝わらない。それほど昔の名前を覚

えていることが、永琳にとってはとても嬉しい。

永琳は、氷狐がどんな夢を見ていたかを知らない。きつと、今の発言も寝ぼけているからだと思つたことだろう。まだ少し眠そうな愛しい存在を、彼女は優しく抱きしめた。

今までのことは夢であり、同時に過去に起きた事実である。しかし、その事実を知る者は……恐らく、世界しかない。

しかしそんな夢など関係なく、氷狐は彼女を抱きしめ返した。そして、自身を愛しく思い、自身にとつても愛しい存在の名を呟く。今の彼が抱く想いを、心の底からの本心で。

「えーり」

「なあに？」

「あーう♪」

—だいすき—

「永琳、入るわよ……つて何この血だまり!? うどんげ! ちょっときてー!!」

「なんですか姫様……師匠!? どうしまし……ああ、そういうことですか」

「何に納得したの!?! ん? 何を指差して……ああ、なるほど」

「わかりましたか?」

「ええ、わかったわ。だからもう行きましょう。心配して損したわ」

「ですね」

「えーり? えーりー?」

(だいすきだいすきだいすきだいすき……)

子狐放送記

「さあ始まりました、子狐放送記！ 先陣を切るのは当然この私、射命丸 文と？」

「紅魔館の門番、紅 美鈴です！」

「このお話は全てが会話文で構成されていますので、いつもはつちやけながらキャラ崩壊しまくっている私たちがそれ以上になります！ いろんな意味で！」

「こうやっていつもとは違う子狐幻想記をお送りします。本編に出てきているみんながそれなりに壊れながら頂いた質問に答えるそうなのでお楽しみに！」

「それでは子狐放送記、始めます!!」

「さて、まずはこの私、紅魔館党首であり、優雅且つ華麗な」

「この私、紅魔館のメイド長、十六夜 咲夜とこちらにおられるレミリア・スカーレットお嬢様が、皆様から寄せられた質問にお答えしたいと思います」

「さくや。いま。わたしのせりふにかぶせ」

「それでは質問にいきましょう」

「しゃくや？ きいてる？ ねえ」

—どうやって氷狐みたいなキャラが生まれたのか？—

「ほらお嬢様！」

「ほらって……こほんっ。氷狐というキャラは、実は最近考えたものではなくかなり前……今が2013年だから約6年ほど前には既に考え付いていたキャラだそうよ。当時の作者は私たちがでる東方というゲームの存在を知らなかったから、最初は全く別の作品のキャラとして使っていたよね」

「別の作品とは、使っていたとはどういう意味でしょうか？」

「○キャンプで今でも連載してる○リーチのなり茶サークルのオリジナル○魄刀として使っていたらしいわ。因みに“なり茶”というのはなりきりチャットの略ね。どういったものかは自分で調べたほうが詳しい詳細が出てくるわ。因みに、大体どのサークルでも○魄刀の擬人化というのははやってきたから、今の氷狐の容姿は昔とほとんど変わっていないよね」

「流石お嬢様です。噛むこともなくスラスラと言えるなんて、徹夜して必死に練習し

た甲斐がありましたね！」

「なぜそれを知ってるの咲夜!? 我慢して一時的にフランと部屋を離してまで内緒で練習してたのに!？」

「メイド長として当然のことをしたまでです。因みに、氷狐が生まれた切欠は○らいあんぐるハー○3というゲームに出てくる久遠という妖狐の画像を見つけたのが切欠らしいです」

「だからわたしのせりふー!!」

「氷狐の元ネタというかモデルってあるの?」

「この質問にお答えするのは、私こと犬走 椀と」

「フラワーマスターの風見 幽香が答えるわ」

「出ましたよフラワーマスター。そんな外の世界でよく聞くちゅーにな肩書きをよく恥ずかしげもなく言えますね」

「これは私が自分で付けたんじゃないやなくていつの間にか言われてたのよ。私の話を読み

返しなさい」

「どうせ読み返すなら私も出ている妹紅のお話もよろしくお願ひします。さて、質問の方ですが……先ほど紅魔館の主従が言っていた“久遠”というキャラが元ネタと言えば元ネタだそうです。元々は違うキャラの元ネタだったのですが、このキャラから発展してできたのが氷狐なので元ネタであつてますよね」

「作者が考えた狐キャラは氷狐を合わせて5種類ほどいるらしいわ……どれだけ狐が好きなのよ。因みに、オスは氷狐だけで他はメスだそうよ。因みに、昔の氷狐は今とは違つて普通に喋っていたし戦闘もこなしていたらしいわ。今では考えられないわね」

「ところで、らじおとはこんな感じなのでしょうかね？」

「さあ？」

—続編は書くのか?—

「この質問に答えるのは私たちだよ！」

「名前を言えよ。私こと藤原 妹紅とこいつ、蓬莱山 輝夜が答えるよ」

「早速答えるわね……未定よ!!」

「……うん、そうとしか言えないよな。この子狐幻想記という作品の続編は、まだ分からない。全く違う作品を書くかも知れないし、このまま続編を書くかもしれない。ただ、書くとすれば大分やりやすいだろうなあ、というのは作者の言葉だ」

「楽なら書けばいいじゃない。どうせ暇なんでしょ?」

「輝夜と一緒にするなって。作者は私たちみたいに不老不死じゃないし、外の世界は何かと忙しいらしいから」

「外の世界つてめんどくさいのね……それに比べて幻想郷はいいわよ? 試験もなんにもないし」

「寺小屋（がっこう）はあるけどな」

—エンディングは最初から考えていたのか—

「これは私達が答えるね」

「名前を言わなきゃわからんだろ。答えるのは神の八坂 神奈子と」

「鬼の伊吹 萃香さ。えんでいんぐは……実は最初是最悪な形で終わったり、3つの

話を書こうとしたり、全く別の終わり方だったりと色々悩んでいたみたいだね」

「具体的な終わり方としては……消えた氷狐の残り滓をこの鬼が集めた後に早苗が能力を使つて蘇らせたり、賢者が命と引き換えにしたり」

「永琳の奴が暴れて幻想郷が荒れ果てたり、霊夢が廃人同然になつてたり」

「諏訪子がキレて幻想郷の大地を崩壊させたり、結局氷狐は戻らないけどみんな悲しみを乗り越えてそのまま過ごしていたりと、色々考えていたみたいだね。結果として選んだのは無難な奴だったみたいだが」

「まあその場の思いつきで話の辻褄を合わせながら書いてるような奴だしね。ぷろつと？ を書いたことないみたいだし」

「小説執筆（これだけ）は頑張つたと誇れると言つてるくらいだし、面白いと言つてくれている人も沢山いるんだ、それはなるべく言つてやるな」

「あ、い、よ」

—さて、ここからどうしよう？—

「質問と言えば質問だけど、これって作者からの質問？」

「現在進行形で悩んでるからね。らじおなんてやったことないし、会話分だけの文章に違和感感じてるんだしね」

「尚、この質問に答えざるを得ないのは私ことメディスン・メランコリーと」

「さいきよーのあたぃ、チルノと」

「橙と？」

「フランドール・スカーレットだよ！ 因みに、最初の台詞は私とメディスンだよ」

「ところで、この質問にどう答える？」

「あたぃにいい考えがある」

「なんですか？」

「作者を凍らせる！」

「「待て、どうしてそうなった」」

「作者が凍れば考える必要はないでしょ？ 手は止まるけど」

「心臓も止まるわ！」

「それ採用！ ただし、私が殺る！」

「フラン!!? やるのッやッがおかしくなかった!?!」

「氷狐への逆光源氏計画を進めさせてくれない作者なんて……きゅつとしてドカーン

「！」

「ビシヤアアア!!」

「作者さああん!?!」

「ああ、画面が真っ赤に……黙禱」

「神は言っている……」

「チャレンジ精神は認めるけど、これのどこがラジオ?」

「諏訪子様、もう少しオブラートに……」

「いい? 早苗。ラジオというのはね、わたし達が見えず、わたし達が見えない向こう側の皆さんに言葉だけで楽しんで貰えるようにしないといけないの。そもそも文章だけでラジオは成立しないんだよ!?! 音楽も音声加工もなしで楽しんで貰えるほどラジオは甘くないんだよ!?!」

「それを言ってしまうとこのお話自体が成立しなくなりますよ……というか、なぜそんなにも熱いんですか諏訪子様」

「という訳で突発企画！ 早苗に叔父さんと叔母さん、どっちが欲しいか答えて貰います」

「本当に突発ですね!? しかもそのネタまだ引つ張るんですか!?!」

「早苗の将来に関わることだよ!?!」

「なんでですか?」

「答えないと早苗が神社にいらなくなるよ」

「絶縁!?! そ、それは答えないと駄目ですね……でもなんで叔父さんと叔母さんなんですか?」

「言わせないでよ恥ずかしい」

「すみません、恥ずかしがる要素が見当たりません。では……お」

「はい、それでは次の人にバトンタッチだよ!」

「自分から聞いという言わせてくれない!?!」

「もう好きにしてくださいー」

「諦めの文ね。所詮は作者、これが限界なのね……」

「好きにしてっつてどうすればいいのよ」

「こーやって喋っつていけばいいのでしょうか？」

「多分、そういうことでしょうね」

「……まあ、自己紹介くらいはしましょうか。上から喋った順に、私ことパチュリー・

ノーレッジ、アリス・マーガレット、魂魄 妖夢、うどんげよ」

「マーガトロイド!!」

「鈴仙・優曇華院・イナバです!!」

「私だけ普通に呼んでくださったのは喜ぶべきか、それとも面白みもないと思われる

いるということなのでしょう……」

「ていうか、私達がそろっつているのに魔理沙がいないとはどういう見かしら?」

「それに出番があつてもいつも似たようなものになるしね」

「そもそも出番自体あまり……」

「他の名前すら出ていないキャラよりはマシなのでは?」

「それもそうね。そーなのかーとか」

「河童に烏天狗とか」

「大きな妖精とか夜雀とか」

「蛭の妖怪とか幸せを呼ぶ兎妖怪とか」

「……うん、まだマシよね私たち」

「[[全く]]」

——不満をぶつちやけよう——

「いきなりですか……不満を言わせていただきますのは私、八雲 藍と」

「小悪魔です。こあ、と呼んでください」

「まあ不満を言えと言われても、私の不満は紫様のことだけです」

「本当にぶつちやけた!？」

「家事はできないしない、冬は冬眠、式神使いは荒いし、何かあれば、昔の藍はあんなに可愛かったのに」とぼやく始末……私がこんな風になったのは紫様が家ではぐうたらだからだと何度怒鳴り散らしたことか」

「あ、あはは……お疲れ様です」

「次はあなたですよこあさん。存分に不満をどうぞ」

「不満ですか……これといって特にはないんですが」

「それはありえませんか」

「断言された!?!」

「あなたにもあるはずですよ。出番が少ない、主の〇〇が嫌だ、自分視点の話が欲しいなどなぞー」

「うーん、そうですね……ああ、1つだけあります」

「ではその不満をどうぞ」

「なかなか氷狐君が遊びに来てくれないのは不満です。また今度お菓子と一緒に食べましょうね♪」

「……ハア。次、行ってみましょう」

「氷狐君に聞く!　もしもお泊りしなければならなくなったら誰の家にお泊りする?」

「……ここで本命の質問キタアアア!!」

「うー……」

「ちよつとあなたたち自重しなさい。氷狐が怯えてるぞ」

「う……ごめんなさいね氷狐」

「あーう」

「では氷狐にも許してもらえたとところで……この質問に答える、というか実行するのは私たちよ」

「自己紹介をしなさい。今喋ったのが博霊 霊夢。私が八雲 紫」

「八意 永琳と」

「上白沢 慧音だ」

「いや、私等もいるのに終わるなよ。霧雨 魔理沙と」

「ひー♪」

「では早速氷狐に聞くわよ。と言っても、私の神社という答えは決まってるでしょうけど」

「賢者の家がありえないこともね。この質問はお泊りしたいところはどこか？ とい
うもの。今住んでる八雲家は必然的に除外されるわ。それと、寝言は寝ながら言いな
さい巫女」

「ん？ だったら何故賢者はこちらに回されたんだ？」

「他に一緒に出来る存在が居なかったからでしょう。友達少ないし」

「あんたにだけは言われたくないわよ永琳」

「何ですって？」

「あーうー……めっ！」

「おーい、氷狐がお怒りだぞー」

「すまなかつた氷狐。喧嘩っ早い彼女たちを許してやってくれ」

「何を一人だけ関係ない振りをしとるか半獣」

「このままでは罅が明かないわ……」

「そうね、さっさと聞いてしましましょう。というか聞きたいわ」

「あんたらのせいで遅れてるんじゃないが！」

「さて氷狐。もしも誰かの家に泊まらなければならなくなったら、誰の家に泊まりに

行く？」

「うー……」

「だから自重しろってお前ら。目をぎらつかせるなそれ以上近づくな氷狐が怯える。

半径85センチはマスタースパークが届く距離だぞ」

「で、氷狐。答えは？」

「無視か」

「うー……まーさー！」

「「なん……だど？」」「」

「わ、私の家？ なんぞ？」

「あーうー、うーあーうー」

「……誰か通訳」

「……魔理沙の家に行つたことがないからですつて」

「あーうー♪」

——そろそろ終われ——

「命令じゃないですか」

「いやまあ、会話文だけでよくここまで持ちましたねえ」

「もはやらじお、と言つていいのかわからないけれどね」

「……というわけで、子狐放送記の最後を飾るのは私たち。」

四季映姫・ヤマザナドゥ

と」

「小野塚 小町と」

「西行寺 幽々子よ」

「私と小町はともかく、なぜあなたと一緒なんですか？」

「私の出番が最初のお話以外ろくになかったからじゃないかしら？ その死神さんと一緒に」

「余計なお世話だわ！」

「だったら余計に疑問です。なぜ出番があなたよりも多かった私が……ん？ いや、あなたというよりも自己の視点すらなかった小町が居ることのほうが不思議ですね」

「映姫サマ!？」

「酷い主ね」

「あなたにだけは言われたくありませんよ。それから、私と小町は主従ではなく上司と部下です」

「惚れそうになつたくせに」

「黙りなさい大食漢」

「こんな美人に漢なんて」

「それはもういいです」

「あーつと……それでは、子狐放送記はここまで！ 次回の子狐幻想記を」

「「よろしくお願いしますー!」」

「この放送は、ハーメルンの提供でお送りしましたー

「ところで、作者は大丈夫なのかしら?」

「画面が真っ赤なんで分かりませんが、大丈夫じゃないですか?」

「映姫サマー、作者っぽい幽霊がいるんですがどうしますか?」

「捨て置きなさい」

子狐日常記

思考を現実にする程度の能力。少し前に、幻想郷どころか世界にいるほぼ全ての存在を消滅させた恐るべき能力。思考次第ではほぼ何でもできる能力があったのも、今は過去の話。

その能力の持ち主である子狐の妖怪、氷狐は「愛し愛される程度の能力」という元から持っていた能力によってその存在を新たに形作り、変わらぬ日々を送っている。新たに形作るとは言っても、その姿や在り方は以前となんら変わらない。

これは、「思考を現実にする程度の能力」を失った氷狐が過ごしていく「これからの日常」を記す……ただ、それだけのお話。

ゆつくりと、氷狐は瞼を開いた。その先に見えるのは、すっかり見慣れた和風の寝室と綺麗な長い金髪の美女の寝顔。男ならその美しい寝顔に色々と思うことはあるかもしれないが、生憎と彼は劣情を抱えたりはしない。なぜなら見た目も中身も子供だけ

ら。

むくりと上半身を起こした氷狐は眠そうに目を擦り、布団から出れば部屋からも出る。その際に金髪の美女……八雲 紫に掛け布団を掛け直すことも忘れない。

向かう先は台所。そこには、既に起きていた八雲 藍の姿がある。

「あーう、らん」

「おはよう氷狐。いつも早起きだな」

少し肌蹴た寝巻きを着ながら眠そうにしていると、いうなんとも愛らしい姿を微笑ましく思いながら、藍は朝食を作る手を止めて朝の挨拶を交わす。その後は桶に汲んであった水を使って氷狐の顔を洗ってやり、すつきりと意識を覚醒させる。すつかり目が覚めた氷狐は藍の寝室に行き、まだ眠っているであろう橙を起こしに行く。案の定寝ていた橙をやんわりと起こし、手を繋いでいつものように居間へと向かう。

居間には、既に朝食の準備がしてあった。いつの間にか起きたのか、普段着に着替えた紫が上座に座り、藍は氷狐が連れてきた橙を連れて台所へと向かった。その間に氷狐はいつもの位置へと座り、笑みを浮かべる紫と朝の挨拶を交わす。

「おはよう氷狐。橙を起こしてくれてありがとうね」

「あーう、ゆーり。うーあーうー♪」

台所に行っていた2人が戻ってくれば、いつものように始まる食事。おかわりだの醬

油取ってだのうーだのにやーだの言葉が飛び交い、笑顔溢れる食卓は人間の家族となんら変わらぬ。人外であろうがなかるうが、愛する者と取る食事が美味しくない筈が、楽しくない筈がないのだ。

そして、この光景はこれからも続いていくことだろう。それは、彼らが家族である故に。

紫のスキマによつて妖怪の森にやってきた氷狐は、そこで待つていた犬走 椀と手を繋いで山の中を歩いていた。空を飛ぶよりも地を歩くほうが、果実の匂いや食材そのものを見つけやすいからである。

手が届かない所に生っている木の実は椀に取ってもらい、自分で採れるモノは自分で採るのが氷狐のスタイル。山菜際の発見速度と見つける嗅覚で彼の右に出るものはないが、採れるかどうかは別なのだ。

「もみじ、あーうー」

「ん？ ……ああ、見つけた。少し待つてくれ」

早速果実を発見したものの、その位置は巨木の遥か上の枝。無論下にも生っている

が、椀は目もくれずに飛び上がり、氷狐が指差した物を採って降りてくる。彼が選ぶのは程よく熟成した美味しいもののみであり、成長段階のものは決して採らないのだ。

小1時間もすれば大量までは行かないまでも売するには充分な量が集まった。尚、集まった山菜や果実は八雲家から持ってきた藍作の背負うタイプのカゴの中に入っている。

時間もいい頃になり、氷狐と椀は人里へと向かう。その際は彼女が氷狐を抱きかかえながら飛んでいくのだが、椀はこの時間が一番好きだったりする。

「氷狐。怖くない怖くない」

「うー、うー」

少し震えている体を抱きしめ、飛んでる最中はあやすように声を掛け続ける椀。今まで語ったことはなかったが、彼は高所恐怖症である。それでも飛ぶのは、時間の都合なので仕方ない。真面目に山を歩けば昼を越えてしまう。

非常に不謹慎ではあるが、椀はこうして氷狐と触れ合える時間が大好きなのだ。異性のそれではないが、紫やその他の他の存在に比べれば会える時間や触れ合える時間は規則的。朝のこの時間だけなのだから仕方ない。

人里に着けば、椀は仕事の時間なので山に帰ってしまった。その背に向かって手を振った後、氷狐はいつもの八百屋へと足を運ぶ。採ってきた物を売るためだ。

「あーうー」

「氷狐じゃないか。いらっしやい」

「もうー!」

「妹紅だつてば」

八百屋にいたのはいつもの店主ではなく、藤原 妹紅。なぜ彼女がここにいるのかと言えば、以前に彼女が店を手伝ったことを切欠にたまに手伝うようになったからである。その結果として、彼女が開いている屋台にも客が増えたとかなんとか。

資金を得た氷狐はまっすぐ甘味処へ。体を動かした後に食べる、食後のデザートとして食べる好物の甘味……彼のみならず大半の存在にとって至福のひとつとなるだろう。

「あや、氷狐じゃないですか」

「おはよう、氷狐」

「あや、ゆーか!」

向かった先にいたのは射命丸 文と風見 幽香の2人。組み合わせとしては珍しいかもしれないが、文は甘味処の取材で、幽香は甘味を食べによくこの場所に訪れるため、出会うことは多い。最初は幽香を怖がっていた文だが、そうして出会う回数を増やしていく内に恐怖が薄れていつているようだ。

2人の手にあるのは、ここ最近人気となつてきているかすていら。幽香の隣にある皿には3色団子も置いてある。相変わらず3色が好きらしい。

「氷狐も一緒にどうかしら？」

「うー♪ あーう、あーうー」

「はいはい、みたらしと3色団子を1つずつですね」

商品を頼まれたであろう店員が店の奥に消え、少しして2種類の団子を持ってくる。尚、この間に文は袋に包まれたかすていらを持ってこの場から離れている。向かう先は紅魔館。理由は……言わずもがなである。

幽香と共に美味しそうに3色団子を頬張る氷狐……そんな彼に近づく白黒の影が1つ。その影は氷狐がみたらし団子に手を伸ばした瞬間、その団子を素早く奪い盗った。

「いただきます」

「!? まーさー! あーうー!」

「あなたも懲りないわね」

無論、その影とは白黒魔法使いこと霧雨 魔理沙である。幾度となく氷狐から団子を奪い、その度に色々とお仕置きされているにも関わらず彼女はこうして団子を奪う。何が彼女を駆り立てるのだろうか。フラワーマスターも呆れ顔である。

いつもならこの辺りで素敵な楽園の巫女がやってくるのだが、今回はその気配がない。これ幸いと魔理沙は奪った団子を口へと……。

「返します。返しますからその危ないものを降ろして下さいませんか」

「よろしい」

運ぶ前に彼女の頭に矢を突き付けることで止めたのは八意 永琳。その表情こそ笑っているが、額には青筋がある。すぐに返さなければ魔理沙の頭はスプラッタなことになっていたに違いない。

「えーりー！」

「おはよう氷狐。その白黒。次に私の前で同じことをやったら……剥がすわよ」

「何を!？」

後に魔理沙は語る……あれは本気の日だったと。

魔理沙、幽香と別れた氷狐は永琳と共に人里の中を歩いてきた。その理由は、永琳が行っている置き薬の集金に同行しているからである。本来ならば、彼女の助手である鈴仙・優曇華院・イナバが行っているのだが、稀にこうして永琳自身が出ることもある。顔も知らない医者から薬を貰う存在はそうそういない。

そんな理由もあり、今日は永琳自身が集金に来ていた。もしかしたら氷狐に会えるかも、などという下心はあるに決まっている。実際に会えているので内心狂喜乱舞していることだろう。

「はい、お大事に……ここで最後よ。ありがとう氷狐」

「うーん」

そんな時間も、もう終わってしまった。回るべき家屋は全て回りきった。ならば永遠亭に戻らねばならない。しかし、もつと氷狐と一緒にいたい。だが、永遠亭にいる姫の世話を助手に任せっきりなのはいけない。

そんな考えがぐるぐると脳内で渦巻くが、そんなことをしている内に氷狐は永琳に手を振つてその場から離れてしまっている。そのことに彼女が気づき、自分の失態を嘆くまで……後半刻。

永琳と別れた氷狐がやってきたのは博麗神社。その理由は当然、そこにいる少女と会うため。

長い階段を登りきれば、視界に入る鳥居と神社まで伸びる石畳。その上で箒を使って掃除をしている紅白の巫女服に身を包んだ長い黒髪の少女の姿。少女も氷狐に気づいたようで、箒に向いていた視線が彼に向けられる。

少女は少しだけ頬を赤らめ、にこりと笑みを浮かべる。氷狐は以前とは少し違う少女の笑みに気づくも、何が違うのかは分からない。が、彼も同じように笑みを浮かべた。それは、互いが互いを想っているが故に。

「いらつしゃい、氷狐」

「あーう、れーむ」

という感じで前とは少し変わった挨拶を交わしたところで、2人の行動が劇的に変わるものでもない。一緒にお昼を食べるのは以前と変わらない。変わったといえば、以前は少女……博麗 霊夢が用意していたのだが今は2人で作っているくらい。その際、意外にも手際が良かった氷狐の姿を見て霊夢が少しびっくりしていたことは彼女の記憶に新しい。

食後のお茶を飲んだ後、2人は人里へと出かける。これはいつもという訳ではなく、その時によって行く理由も違うが、今回は単純にお買い物ものである。博麗神社は物資の減りが激しいのだ。主に白黒とか胡散臭い妖怪とか鬼の居候とかのせいで。

食材やら米やら日用品やらを買った霊夢の両手には重そうな買い物カゴ。それに対し、氷狐はリングが1つと肩に担いだ米俵が1俵。重そうではないところを見るに流石は妖怪というところだが、体の大きさに合っていないのでよろよろと覚束ない足取りである。

そんなこんなで神社に戻ってくる頃には夕方の手前くらいになっていた。今日一日がほぼ買い物で終わってしまったことに霊夢が嘆く……なんてことはなく、むしろずっと一緒に居られたことを嬉しく思っていた。

「あーうー、れーむ」

「お疲れ様氷狐」

「うー♪ あーうー」

「……？」

労いの言葉を互いに投げた後、氷狐は手にしたリングを右手で持ち、左手の爪を鋭く伸ばす。少年の見た目でも狐、爪や牙くらいはあるのだ。その鋭く伸ばした爪をどうするのか……それは、スパツと切られたリングの姿を見た霊夢には分かった。同時に、懐かしい記憶を思い出す。

それは、霊夢が彼と出会って本当に間もない頃。おまけで貰ったリングを彼に渡し、そして彼が能力を使って半分こした。うまくいかなかったのか、今手にある半分になったリングはその記憶ほど綺麗ではないが……それでいい。この手の物が、彼の「思考を現実にする程度の能力」がなくなっているということを示しているのだから。

それでいて。

「うー！」

「……ありがとね、氷狐」

「うー♪」

彼が何も変わっていないことも示しているのだから。

すっかり日も暮れた時間に、紫は氷狐を迎えにやつてきた。当然、霊夢は彼女を強く睨みつける。何しにきやがった、と言わんばかりの眼差しで。

「氷狐ー帰るわよー」

「うー!」

そんな視線など知らないとはかりに、紫は氷狐を催促する。彼も霊夢から離れ、紫に向かっていく。そのことを霊夢が少し寂しく思っていると、何を思ったのか彼は反転、霊夢に向かつて飛びついた。

「つと……氷狐?」

「れーむ!」

「なあに?」

ちゅ、と幼さを感じさせる音と感触が右の頬から霊夢の頭へと響く。突然の出来事に彼女の頭は真つ白になり、口をあんぐりと開けた紫の間抜け顔もどこか遠くに感じる。

いま、じぶんは、なにをされた。理解は遅く、未だ棒立ち。いつの間にか離れた氷狐と覚醒した紫がこの場にはいないことにも気付かないほど、彼女は混乱している。

ただ、それを理解した時には霊夢は何とも言えない幸福感に包まれていた。顔は熱

く、火が噴きそうなほど。それ以上に、今まで感じたことのない幸福感が心地よかった。今日は、良い夢が見れそうだ。それは、変わらない日常の中の、少し変わった出来事に出合った素敵な楽園の巫女が抱いた思い。

「ねえ氷狐。あんなこと、誰に教わったの？」

「う？ すーこ、ふらん！」

「ああ、そう……」

「っ!？」

「どうしました？ 諏訪子（妹）様」

「な、なんか背筋に寒気が……」